
no rain... no rainbow...

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

n o r a i n . . . n o r a i n b o w . . .

【Nコード】

N5993T

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

石垣島にうりずんの季節がやってきた。
突然、目の前に現れたその少女は……
15年モノの片恋の相手によく似ていた。

夢だ夢

ピンポン！ピンポン！ピンポン！

未だ夢の中に居るのに、どこかで呼び鈴が鳴っていた。

ピンポピンポピンポピンポピンポピンポピンポ！

未だ夢の中に居たいのに、呼び鈴が連打されていた。

「うるせえなあ、誰だよ。ふざけんな！！」

忙しかった春休みがもう直ぐ終わる。

そんな平日だった。

日本列島の南西の隅っこにある石垣島では海開きも3月の中旬に行なわれ。

もう4月だというのに窓の外を見ると冷たい雨が降っていて少し肌寒かった。

「また、今日は寒いな……」

少し暖かくなり間違えて冬ごもりから目覚めた熊の様に、のっそりとベッドから這い出してTシャツにトランクス姿で玄関に向う。

今にも人を殺しそうな不機嫌の権化の様な寝起き顔で玄関を開けると、大抵のセールスや勧誘しに来た人間は顔を引き攣らせてパンフレットなどを手渡しておずおずと帰って行く。

しかし、ドアを開けてそこに居たのは……

栗毛色の髪の毛をツインテールの様に2つに縛り。

白いTシャツを着てピンク系のチェックのオーバーオールを穿いて、大きなバッグを持っている。

見覚えのある人懐こさそうな笑顔……

ではなく、今にもナイフを取り出しそうな顔をした少女が俺の顔を睨みつけている。

液体窒素で瞬間冷凍されてしまった金魚の様に、一瞬で何もかもがぶっ飛んでフリーズする。

そして、水に戻されて解凍してゆっくり泳ぎ出す金魚みたいに鈍い思考が動き出した。

『俺はまだ寝ているのか？ 確かに寝起きは悪いが……これは夢なのか？』

『ありえねえ！ 夢だ夢！ もう一度、寝よう』

徐に錆びて立て付けが悪くなった古い鉄製のマンションのドアを閉めた。

夢じゃ

寝起きて回転数が上がらない頭で思考を繰り返す。
繰り返しはするが理解の範疇をとくに超えていた。

仕方なくベッドの横に投げ捨ててあつたリーバイスの501を穿いて、溜息交じりの一息をついてドアを開けると彼女は微動だにせずに立っていた。

『夢じゃないみたいだな……』

寝起きの鈍っている壊れかけの脳みそも、目の前にいるのがあの彼女であるはずが無い事は理解できた。

「俺に何の用だ？」

「……………」

俺の顔を睨みつけた少女は無言のままに何かを俺の目の前に突き出した。

突き出されたものを受け取るとそれは数枚の写真だった。

「……………」

今度は俺が無言になる番だった。

抜けるような青い空には真つ白な雲が浮かび湖面の様に静かな珊瑚礁の海をバックにして、大きな白いタンクトップに G パンのシヨートパンツを穿いて小麦色に日焼けした満面の笑顔の彼女の写真だった。

「岡谷隆史さんですよおかやたかふみね」

「そうだが、何の用だ？」

「私は大羽美緒おおはみおです。大羽……………」

「真帆まほの娘さんなのかな？」

少女は硬い表情のまま何も言わずにただ頷いた。

「やっぱり、ママを知っているんですね」

「知らないと言えば、自分に嘘を付いていることになるが」

大羽真帆は15年前に別れた彼女の名前だった。

「真帆の娘が俺に何の用なんだ？」

「自分の父親を探しているんです」

「父親を探している？ 母親に直接聞けば良いだろう」

「教えてくれなかった。それに今はママが何処にいるのか判らない」

ボーとした感覚が消えて、一気に頭の回転数が上がり完全に覚醒する。

色々な事が頭の中を駆け巡り今の状況を把握していく。

真帆は未婚のままでの少女を産んで育ててきたと言う事なのか？
今は何処にいるのか判らないと言うのは、また海外の島にでもいるのだろうか？

そんな事を壊れかけのパソコン並みの頭で考えていると『クチュン』と可愛らしいくしゃみの音が聞こえ、少女を見ると僅かに体を震わせていた。

こんな最果ての島まで来たのに無下に追い返すわけにも行かず、とりあえず話だけでも思った。

「それじゃ、どこか他で少し話をしよう」

俺の提案に少女もとい大羽美緒は首を大きく横に振った。

「嫌だと言われてもな」

振り返り部屋の中を見渡すと、そこにはお世辞にも綺麗だとは言いがたい男の独り暮らしの部屋があった。

「仕方が無い、部屋を片付けるからしばらく玄関で待っていてくれ」
美緒の持っているバッグを受け取り玄関に置きドアを閉めて待たせる事にする。

内地程ではないにしろ寒空の外で待たせるより幾分ましだろう、直ぐに部屋の片づけを始める。

どう見ても中学生が高校生にしか見えない少女を男の独り暮らしの部屋にと思われるかもしれないが、俺にはそんな趣味はない。

ましてや美帆の写真を見せられ、それ以上に彼女と良く似た顔つきの少女の言葉に嘘が無い事がはっきりと感じられた。

夢のよう

殆ど使われていない部屋には大きめの円卓があり、新聞やDMそれに通販の雑誌が散乱している。

とりあえず一纏めにして古新聞入れの為に買ってあった籠に放り込み、藤のランドリーバケットに入っている洗濯物をベランダに置いてある全自動洗濯機に投げ込んだ。

洋服ダンス代わりの押入れに付けてあるダークブラウンのウッドブラインドを降ろして、簡単に掃除機で部屋を掃除しはじめる。

「綺麗な部屋じゃないが入ってくれ」

美緒に声を掛けるが入ってくる気配が感じられなかった。玄関を見ると怪訝そうな顔で玄関のあるキッチンを見回している。怪しいと言えば怪しいのだろう。

玄関の上には手作りの簡単なラックがあり、土佐銚や古い水中銃に持ち手が木でできているガサミ獲りに使っている銚などがあり。

玄関を入って直ぐ横にあるバス&トイレのドアの横にある壁にはリール付きの釣竿が数本、これまたパイン材で作ったラックに掛けられている。

恐らく彼女が一番気になるのは部屋の真ん中にある作り付けのガラス棚の中にある。

数十はくだらないガンブラなのかも知れない。

そしてその棚の横の柱には専用のホルダーが取り付けられてロード用のバイク（自転車）が掛けられていた。

「どうした、そこじゃ話が出来ないだろう。それとも怪しすぎて部屋に入るのが嫌になったか？」

再び美緒に声を掛けると大きなバックを持ち上げて部屋に入ってきた。

「適当に座ってくれ」

美緒がバックを置いて座るのを見て、徐にキッチンの冷蔵庫を開ける。

ものの見事に空っぽの古い型の3ドア冷蔵庫に飲み物などと言う物は入ってなかった。

「下で何か飲み物を買って来るから待っててくれ」

返事も聞かず自分の部屋の机代わりに使っている押入れのパソコンの横にある小銭を掴んでポケットに流し込んで部屋を出た。

自分の部屋のある3階から小走りで階段をおりて、マンションの直ぐ横にある自販機で紅茶を2本買い階段をゆっくり上がる。

「しかし、何で俺の所に着たんだ？ まさか……夢のような事あるわけ無いか」

独り言を呟きながら、心の中の棘が頭の中を過ぎった。

「オタク」

部屋に戻り美緒の前に缶の紅茶を置くなり彼女が発した言葉だった。寢室の襖を見ると閉めた筈なのに数十センチ開いている。

「まあ、否定はしないよ」

寢室兼俺専用の部屋にある大きなダブルベッドの枕元の上には本棚が作っており、そこには数十冊のコミックが綺麗に並んでいる。

あのガンブラの数だけでも『オタク』と言えるレベルなのだろう。

しかし、普段から自分はオタクだと公言しているので今更言われてもなんとも思わなかった。

美緒の対面に座り、単刀直入に直球で話を始める。

「それで、俺に何を聞きたいんだ。もう15年も昔の話だ忘れている事の方が多いかもしれないぞ」

「別に聞きたい事があって来たわけじゃない」

「それじゃ、何しに来たんだ」

「言っただろ。父親を探しに来たって」

心のどこかに引っかかる一点を掠めた。

「今、何歳なんだ？」

「14歳。7月生まれ」

心のどこかに引っかかる一点を挟った。
夢のような……話かもしれない……

夢なら

『14歳。7月生まれ』

確かに計算ではそうかもしれない……

「何故、俺のところに来たのかな？」

「家にあつた古いアルバムを見ていたらこの写真が出てきた。それで爺ちゃんにここは何処かと聞いたら、お前が生まれる前に石垣島のホテルでバイトをしていた時の写真だろうって」

「それで石垣島までわざわざやって来たつと。でも、よくここが判つたね。あいつが15年も経っているのに俺の住所が書いてある物を持っているとは思わないけど」

俺の言葉に美緒が僅かに反応をするが目を逸らして不機嫌そうにベランダの窓の方を見た。

「もしかして、富崎のホテルに行ったのかな？」

「……………」

YesでもNoでもなく、美緒は何も答えなかった。

あのホテルに行けば俺の事も多少判るだろう、何故なら俺が仕事をしていた時から変らず勤め上げている旧知のスタッフが今も働いているのだから。

そのスタッフに運良く出会えば普通に教えてくれるだろう。

それも昔働いていたスタッフの子どもが訪ねて来たのなら大喜びで教えてくれるがここで疑問が一つだけ。

それならば、俺の所に連絡があつても良いはずだ。

連絡先が判らなければ当時のマネージャーだった師匠と呼んでも可笑しくないくらいに加納さんに聞けば一発で判るだろう。

もし、俺が引っ越しをしていたらどうしたのだろうか？

諦めて東京に帰ったのだろうか？

どう見ても大人と一緒に来たようには見えないし、14歳といえば中学2年生位だろう。

「これからどうするつもりなのかな？ 俺から話を聞いたら東京に帰るのかな？」

何も言わず美緒は首を大きく横に振った。

「他の誰かと一緒に来た様には見えないんだけど、ホテルや民宿だつて14歳の女の子を独りだけでは宿泊させてくれないだろ」

俺の質問には相変わらず何も答えずに、大きなバックからA4サイズの茶封筒を取り出してテーブルの上に置いた。

仕方なくテーブルの上に置かれた茶封筒を手に取り中を見ると数枚の書類らしき物が入っている。

それを取り出して見た瞬間、俺は再び瞬間冷凍された金魚になった。
『夢なら……醒めてくれ……』

茶封筒に入っていたのは転出届けと転校に必要な数枚の届出用紙だった。

そして届出には母親である真帆の署名捺印がされており、ごく丁寧に委任状から真帆の免許証のコピーまで用意されている。

石垣市役所に届け出れば何も問題なく受理されるように完璧に準備が整っている。

俺は完膚無きままに叩きのめされた様に届出とにらめっこしたまま、しばし呆然としてしまった。

夢から現

どれだけ我を失っていたのだろう。

深呼吸をして心の乱れ騙すように静かに話しかけた。

「これはどう言う事なのかな？ 説明してもらえないかな？」

美緒は何も言わず素っ気無い態度を続けている。

「きちんと事情を説明してくれないと俺にはどうする事も出来ないのだが。この転出届はお母さんが取りに行ったのかな？」

美緒はただ首を横に振った。

たしか真帆の両親は健在のはずだそんな事が頭に浮かんできた。

「それじゃ、お爺さんかお婆さんが取りに行ったんだね」

「ママが石垣島の話ばかりするから我儘を言つて無理矢理……」

「このまま、東京に帰りなさい。俺の連絡先を教えるから」

「嫌だ！ 帰らない！」

美緒が始めて言葉にした意思表示だった。

「君は未成年で14歳という中学生だろ」

「ママが昔付き合っていた彼氏の所にも行った『俺には関係ない！』と取り合ってくれなかった。石垣島で付き合っていた男に決まってるって」

確立が鰻登りに上がっていくと共に、俺の温度は急速に下がっていく。

正直、当然な気持ちだと思う。

降って湧いたように昔付き合っていた彼女の子どもと言う少女が現れ、父親を探していると言う。

その上に転出届けや転校の為に必要な書類も完璧に整え、一度も来た事が無いであろう日本の南西の端にある島に独りで来たのだから。

「それで、俺が父親かもしれないと独りでこんな島まで来たと？」

腑に落ちない話だが君がここに居ると言う事だけは真実だ。DNA鑑定でもしてはつきりさせるのが望なのかな？」

唾液などで調べる父子のDNA鑑定なら3万程度から出来ると聞いた事がある。

瞬時に真帆の血液型を思いだそうとしたがはつきりと思い出せなかった。

「違う。ママが楽しそうに話していたこの島で暮らしたい」

「父親を探しに来たんじゃないのか？」

俺の質問に美緒は答えずに唇をかみ締めて俯いてしまった。

夢から現に引き戻された瞬間だった。

現実

「はあ、俺にどうしろと？」

考える猶予も余地も無い。

これだけの準備をしてきたという事は、それなりの覚悟を決めてきたのだろう。

それにしてもだ。

母親である真帆は放任主義なのか？

祖父母は何を考えて……

グルグルとカオス状態の頭の中をかき混ぜる。

彼女の言う事を鵜呑みにする訳にもいかず。

とりあえず、美緒に聞いて彼女にとっては祖父母である真帆の両親に連絡を試してみた。

その結果が冒頭の溜息交じりの諦め台詞である。

『どうかお願いします』って……

確かに遙か昔に一度だけ会って挨拶を交わした事があるが、そんな男に孫を預けて良いものなのか？

真帆本人とは全く連絡が取れないらしい。

昔から自由気ままに海外の島々に遊びに行っていたのを思い出した。今は何処に居るんだ一体？

セブ・パラオ・バリ・タヒチ・フィジー・ハワイ・ロタ……

考えれば考えるほどテンションが下がっていく。

美緒の顔をみれば、どこ吹く風なのか不機嫌なのか。

部屋の中を見渡している。八方塞はこの事を言うのだろうか。

追い込み漁で逃げ場の無い網に追い込まれたグルクンの気持ちがこの時は良く判った。

それとも『まな板の上の鯉』なのか？

まな板の上の鯉だって本当は暴れまくる、それを板前さんが側線器

と言う敏感な器官を包丁の裏で撫でると鯉が失神しておとなしくまな板の上の鯉になるらしい。

俺にとって真帆の両親の言葉がそれだった。

鯉の様に失神しているうちに身包み剥がれる訳にもいかず、壊れかけのパソコンみたいな脳みそを何とか起動させた。

『動かしようの無い。現実にも目を向けよう……』

大きく一息ついて、美緒の目を直視した。

「帰る気はないんだな。この島には他に知り合いも居ないのだろうから、暮らすなら俺と一緒にという事になるが構わないんだな」

美緒がどこまでも澄んだ瞳で真っ直ぐに俺の濁りかけた目をみて大きく頷いた。

狐か狸に化かされた方がまだマシかも知れない。

腑に落ちない事だらけだが、何時間話していても何も動かない。

それならば俺が動くしかないのだ、取り急ぎ役所関係の手続きだろう。

短い春休みは間もなく終わる。

義務教育の美緒を学校に行かせない訳には行かないからだ。

「その書類を持って出かけるぞ」

美緒に声を掛けてから寝室に向かう。

パソコンデスク代わりにしている押入れから印鑑を探し出し、ポケットに財布を突っ込んで携帯と鍵を持って玄関に向った。

現実

今日は何回溜息をついただろう。

役所と言うのは書類さえ完備されていれば、こつもすんなり認めてしまふものなのだろうかと言う事をまざまざと見せ付けられ実感してしまった。

『現実には穴ばかりなのか？』

お役人様に言われるままに教育委員会の学務課に出す書類を受け取り、その足で窓口の役人様に指示される間もなく俺の足は奥にある保健福祉部健康保健課と言う舌を噛みそうな所に行き。

国民健康保険被保険者証と言うこれまた舌を噛みそうな簡単に言えば保健手帳と新しい住民票を出して手続きを済ませた。

面倒な事に石垣では一箇所です足りる手続きなど殆ど出来ないのは昔から判りきっていた。

「同居人の子？」

転入手続きを終えて受け取った住民票を見た美緒の言葉だった。

「何か不満でも？ 真帆と結婚した訳じゃないのだから当然だろ」

「ふゝん、始めてみた」

「まあ、それが正直な感想だろうな」

ここでまた一つ溜息を……

溜息をつくときと幸せが逃げていくと言うがどの位逃げていったのだろうか。

『確か教育委員会は隣にある消防署の裏か』

そんな事を考えながら歩いて移動した方が得策と歩き出す。

「どこに行くんだ？ 駐車場はあっちだろ」

「学校の手続きはここじゃ出来ないんだ」

教育委員会でもすんなり手続きは済んだ。

少し怪訝そうな顔をされ『美緒の母親はどうしたのか』聞かれたが引越しの手続きで遅れて石垣島に来ると告げた。

まあ、嘘を付いた事になるのだが大人の嘘と言う事でよしとする。

「二中かあ……」

「どうかしたのか？」

「別に」

指定された中学校は思っていた通り石垣市立第二中学校だった校区から考えれば当たり前の事なのだが、とりあえず手続きだけを先に済ませるために学校に向かった。

転校の手続きが終わる頃には冷たい雨も上がり石垣島らしい太陽が顔をだし、暖かい風が拭き始めていた。

現代っ子

学校の手続きが終わると昼過ぎになっていた。

雨も上がり太陽も顔を出した。

『とりあえず昼飯か？』そんな事が頭に浮かんだ。

「昼飯は何が食べたいんだ？ 何か食べたい物があれば言ってくれ」
美緒の好き嫌いが判らないので本人に直接聞いてみた。

どこか適当に食事する所に連れて行けば良いのだが、とりあえず美緒の希望を聞いてみる。

「パンが良い」

「パ、パン？ 現代っ子だなあ」

「駄目なら何でも良い」

「まあ、構わないさ」

パン屋ね、瞬時に壊れかけのパソコン頭が検索を開始し数件ヒットする。

その中で近場でお勧めのパン屋が2件ヒットした。

「それじゃ、パンでも買いに行こうか」

シルバーとワインレッドのツートンカラーのパジェロミニに乗り込んで検索でヒットしたパン屋に向う。

一旦、栈橋通りに出て南に下り、4号線を西に向かい南に下る一方通行の道を走る。

左手に『やきむぎや』と書かれた木の小さな看板が見えてきた。

まだ、営業中のような車を店の前に止めて店に入る。

「いらっしやい。あら？ お久しぶりね」

店内に入るなりお喋り好きな女性のオーナーさんが声を掛けてきた。

「お久しぶりです。最近は人気みたいですね」

「うふふ、お陰様で」

この店は午前11：00時頃オープンしてパンが無くなりしだいク

ローズしてしまうのだ。

他愛ないお喋りをしてレーズンパンやバジルを使った人気のパンを数点購入する。

美緒は何も喋らずに店内をキョロキョロと見渡していた。

そして、とりあえずもう一軒に向う。

その店は、730交差点を東に向かい。

ここ数年で乱立したホテルの裏手の方にあつた。

丁度、これから向うサザンゲートブリッジが店から良く見えた。

「パンドウミー？」

「ここはクロワッサン生地のパンが美味しいんだ。好きな物を選びなさい」

「ふう〜ん」

素っ気無い返事をして美緒が店内に入って行つた。

ここでも美緒がチョイスしたパンを買い、飲み物を購入すべく近くのココストアーつまり石垣島のコンビニに向う。

「さんぴん茶？ ウッチン茶？ スコール？ マブヤー？ シー…

…クワサーソーダ？」

「ジャスミンティーに生姜の仲間のお茶。ヨーグルト風味の炭酸系。沖縄の仮面ライダーに沖縄特有の柑橘類」

物珍しそうにドリンクのショーケースを美緒が覗き込んでいた。

「今はとりあえず飲み物を選んでくれないか？」

「う、うん。じゃ、あつ！ Gokuriの真夏のパイんだ！！」

ココをでてサザンゲートブリッジに向かい。

橋を渡った所にある人工島の公園の防波堤に腰をかけて、海を見ながらパンを頼張る。

時々、こうして海を見ながら食事するのが結構お気に入りだったりする俺だった。

美緒が三分の一程に千切りながら色々なパンを食べていく、その残りを俺が胃袋に放り込む。

しばらくするとどこからとも無く野良猫が現れ始めた。

この人工島の野良猫は野良でありながら人にかなり慣れている。

人工島故に人間は独りも住んでおらず餌は人間の弁当の食べ残しや餌を時々与えに来る人に頼っている為だろう。

「あつ、猫だ！」

そう言い残して美緒は木のテーブルとベンチの所で猫に食べ残しのパンを与えて猫と遊んでいた。

「さて、これからどうするか……」

とりあえず美緒の寢床を確保しなければならない、物置代わりにしている洋間にはクーラーが付いている。

必要な物と要らない物を整理して処分するかなさそうだった。

まあ、この際だ。元々不要な物を処分して身軽になろうとしていて躊躇していた所だったので丁度良い機会かもしれない。

現実問題

石垣市内でも大型店舗に入るサンエーに向かい、美緒用の寝具を購入して車の後ろに積み込む。

その足で近くにあるリサイクルショップに立ち寄り、店に入るなり店員に声をかけた。

「パイプベッドとハンガーラックが欲しいのだけど」

「ベッドなんて別に要らない」

「ベッドの方が石垣じゃ良いんだよ。湿気が籠らないからな」

美緒を強引に納得させ、店員に案内され実物の物を確認して即決で買い求める。

これも内地とは違いほかと見比べてなんて事をしてしていると直ぐに他の誰かに買われてしまうからだ。

パジェロミニに取り付けているキャリアーに強引にパイプベッドとハンガーラックを縛り付けて持ち帰る。

店員が不安そうな顔をしていたがそんな事はいつこうに構わない。

多少の事なら警察も多めに見てくれるだろう、荷崩れなどを起こさない限り。

マンションに着くなり、俺は掃き溜めもとい物置になっていた洋間の片づけを始めた。

段ボールに入っていた酒類は6畳の居間代わりの押入れに置いてあるカラーボックスに綺麗に並べる。

そして、DIYに使う工具類は俺の部屋の物入れにしてある場所に片付けるべく部屋に運ぶ。

溜まったCDや書籍などもとりあえず部屋へ、大きなクーラーボックスやシュノーケルのセットなども運び出した。

残るは錆び付いているが十分以上に使用に耐えるスチールラックが3台と手作りの大きな目の折りたたみテーブルに昔々大量に育ててい

たクワガタやカブトムシのケースなどが多量に段ボールに詰め込まれていた。

「こいつらをどうするか、確かあれに……」

使用頻度が最低ラインの洋間について低い居間に置いてある放り込んだばかりの古新聞入れの籠を漁る。

「あつた！」

俺が見つけたのは『ガラパ』と言う石垣島を元気にすると言うフリーペーパーだった。

「確か、この中に」

何でも屋カリサイクルショップの何でも買いますの広告を見つけて携帯で連絡をする。

すると運良く今からマンションまで来てくれるとの事だった。

「ふう、これでひとまずどうにかなりそうだな」

「なあ、何かする事は無いのか？」

「今は別に無いよ」

俺の言葉に美緒は不思議そうな顔をしながら家の中を見て周っていた。

しばらくするとチャイムが鳴り業者がやってきて不要な物を見積もっていく。

今すぐに伺いますと言って直ぐに来た、この業者は案外信頼できるかもしれないと思ってしまった。

昔、クーラーの取り付け工事を石垣市内では有名な電気店に頼んだ時に『午前中に伺います』と言われて電気屋がやって来たのが11時50分過ぎだった事があった。

確かにお昼を回っていないのだから午前中には変わらないのだが、仕事に遅刻していく羽目にあつたことがあつたからだ。

直ぐに見積もりが終わり金額を伝えられた、引き取り料などを引いてプラスマイナスゼロに近かったが良しとした。

元々、誰かに無料であげてしまおうと考えていた物だし他のゴミゴミとしたものまで処分してくれると言うので喜んで引き取ってもらった。

業者が運び出した後で綺麗に掃除と雑巾掛けをしてクーラーが動かすか確認をし、パイプベッドやハンガーラックを組み立てて何とか美緒の寝る場所を確保する事が出来た。

「これで一応、現実問題としては何とかクリアーできたかな」

「へえ」

美緒が意味ありげに俺の顔を見上げていた。

今現在

「晩飯でも食いに行こう」

美緒が持つてきた荷物を片付け終わる頃には、東京から比べると1時間ほど遅い日が暮れてすっかり暗くなっていた。

「作らないのか？」

「面倒臭い、それに今日は疲れたし酒も飲みたいからな」

軽くシャワーを浴びて汗を流してから出かける。

「そんな格好で食事に行くのか？」

「そんな格好？」

美緒に言われて改めて自分の格好を見る。

ジーパンにTシャツに素足でゾウリなのだが……

「おかしいか？」

「食事に行くんだろ」

「まあ、気取る必要がある場所なんて石垣島には存在しないよ。俺が気にしないだけかもしれないが、これから行く店は馴染みの店だから裸じゃない限り何も言わないさ。下手すれば裸でもパンツさえ穿いていればOKかもしれないかな」

「ふうん」

マンションの前の緩い坂道を徒歩で上がり、4号線を西に向う。

大川のココストアーを越えて石垣牛専門店のいしなぎ屋の横の暗く細い脇道を上がっていく。

「また、看板も出してないのかよ」

心配になりメールをすると『開いてるよ』の返信が返って来た。

「ちーす！」

看板は出ていないが店の電気はついていて営業はしている様だった。ドアを開けて店の中に入ると俺の後ろに居る美緒を見て、背が高く20年来の戦友でありこの店のオーナー坂上瑞穂さかうえみずほが

口をパクパクさせて固まっていた。

「お、岡谷。そ、その子は……」

「あいつの娘だよ。父親を探しに来たんだと」

「父親ってまさか……」

「さあ？」

俺が両方の掌を上に向けて肩をすばめてアメリカ人ちっくな『sh rug』と呼ばれるボディランゲージをすると、軽くウエーブのかかったセミショートの髪を揺らしながら瑞穂みずほが腹を抱えて大笑いをし始めた。

「笑うな!!」

確かに笑える話なのだろう、瑞穂には少し前に真帆の写真を見せた事がある。

その真帆と良く似た少女を連れて俺が店に現れたのだから。

「なあ、ここはなんだ？」

美緒が怪訝そうな顔をして俺のTシャツの裾を引っ張った。

「とりあえず座ろう。ここは『マッドティーパーティー』って言うイタリアンのお店だよ、あいつとは古い知り合いなんだ」

席に着くなり白ワインをグラスで注文して半部くらい煽るように喉に流し込んだ。

「なあ、何でも聞かないんだ？」

「それじゃ逆に聞くが、何を聞けば良いんだ？ 今現在、真帆はどこに居るかも判らないんだろ。それに根掘り葉掘り過去の事を聞けば話してくれるのか？ 俺は過去の事が知りたくない訳じゃないが、今はこれからの事を話すほうが建設的だと思うんだが。とりあえず食事が先だ、何が食べたい？ なんだか聞いてばかりだな。それじゃこうしよう、パスタだがクリーム系が良いかオイル系のピリ辛かトマト系か？」

「それじゃ、クリーム系で」

「美緒は嫌いな食べ物はないのか？」

「基本的に大丈夫」

「それじゃ、クリーム系とトマト系で。他に食べたい物があれば適当に注文してくれ」

「うん！ 私にも白ワイン！ グラスで！！」

「却下！！ 未成年はここの美味しい水で十分だ」

「ぶう！！」

現を

瑞穂がパスタをテーブルまで運んでくれて、取り皿も用意してくれた。

用意してくれた取り皿に取り分けると、美緒の顔から緊張が解けて美味しそうにパスタを頬張り始めた。

「それにしても流石に親子ね。良く似ているわね」

「ママの事を知っているのか？」

「写真で見せてもらったただけだね。凄く可愛い子だと思ったわ」
美緒が瑞穂に話しかけられて俺と瑞穂の顔を交互に訝しげに見た。

「頼むからあまり余計な事を吹き込まないでくれよ。これからの生活に支障をきたすから」

「はあ？ これからの生活につて岡谷あんたまさか……」

「そのまさかだ。このお嬢様はご丁寧にも転出届けと転校に必要な書類を完璧にそろえて俺の所に來た訳」

「で？ 仕方なく一緒に暮らすと？」

「いけませんか？ 詰め将棋でいきなり詰められちゃったんだから仕方が無いだろ」

「馬鹿だね」

「はい、馬鹿で十分です」

すると美緒が不機嫌そうな声で口を挟んできた。

「仲が良いんだな」

「はあ？ 瑞穂と？ まあ、付き合いは長いからな。親友と言うか戦友と言った方が良いかな。昔から2人で良く酒を飲んだし、恋愛感情は全く無いぞ」

「Ohanaだもんね」

「Ohana？」

「ハワイの言葉で家族とか気の置けない仲間と言う意味よ。ね、岡谷」

「ふうん」

それからしばらくは美緒は何も喋らずに頼んだ料理を食べていた。食事も済んで美緒は食後にデザートを出してもらいアイステイーを飲んでいる、俺は何杯目かになる白ワインを口にしていた。

「それじゃ、これからの事を話しようか」

「これからの事？」

「そうだ、こんな言い方は語弊があるかも知れないがお互いによく知らない者同士が一緒に暮らすんだ。最低限のルールを決めておく」

「そうだな」

「基本的に俺が使っている物は自由に使って構わない。パソコンやカメラその他の物もな、ただし大切に使って欲しい。俺の生活は下の中と言ったところだ、壊れても直したり買い換えたりは直ぐには出来ないからな」

「判った」

「それと自分の事は自分で出来るな。俺が家に居る時は食事の用意はするが夜も仕事が入る時の方が多いから、少しは料理出来るんだろ」

「ちよつとだけだけど出来る」

「そうか、判った。それから必要な物があれば言ってくれ、島で手に入らなければネットで探すからな」

「はい」

初めて美緒の真剣な表情をした返事を聞いた気がした。

「そうだ、婆ちゃん達に石垣で暮らせるようになったって電話してくる」

そう言つて美緒は携帯を持って店の外に出て行つた。

美緒が店を出て行くのを確認してから瑞穂が心配そうな顔をして話しかけてきた。

付き合いが長く俺の裏表まで知っている瑞穂だからなのだろう。

「ねえ、岡谷。大丈夫なの？」

「何がだよ、ちゃんと真帆の娘だったぞ。転出届に記載されていた前の住所は実家の住所みたいだったけどな」

「そうじゃなくて騙されているとか」

「俺が？ 別に構わないさ」

「本当に馬鹿なんだね、そのうちにきつと痛い目に遇うから」

「騙されているのならそれで良いじゃないか」

「あんたってDMなんだ」

「違うかな自分にSって言われたことがある。万が一、怒りで理性の箍が外れたらその時はどうなるか俺にも判らない。自分に向いていた物が外に向いた時はどうなる事か」

瑞穂が呆れ顔で溜息をついた。

「岡谷の場合はマジで怖そう。犯罪者だけにはならないでね、それと自虐も駄目だからね。まあ、誰の心にも鬼は住んでいるんだけどさ」

「お、鬼って何ですか？」

怖い話でもしていると思ったのか美緒が俺と瑞穂の顔を伺いながら店に戻って来た。

「美緒ちゃんを泣かせたら私が鬼になって岡谷を成敗するって事よ。岡谷なら色々経験豊富だから安心だけどね」

「け、経験豊富？」

「あのな、瑞穂。そう言う誤解を招くような事を言うなと釘を刺したはずだけどな」

「あら？ 余計な事を吹き込むなとは言われたけど誤解を招くような事を言うなとは言われて無いけど」

楽しそうに笑いながら空いた食器を片付けていた。

「冗談も程ほどにしてくれ。そうだ瑞穂、美緒が飯を食べに来たら悪いが後払いで俺が支払うから」

「まあ、岡谷の頼みならしょうがないか。貸しは倍返しでね」

「了解」

「なあ、ここに食べに来てても良いのか？」

「ここなら安心だからな」

そんな話を話していると店のドアが開き、女性客が入ってくるなり俺に話しかけてきた。

「お！ お久しぶり？ あれ？ 今日は独りじゃないんだ」

「連れが居たら変ですか？」

「いや、珍しいなって……この可愛いらしい女の子誰なの？」

「岡谷の娘さん」

「瑞穂ちゃん！ 嘘でしょ？」

「あんな、瑞穂。いい加減にしろよ」

「良いじゃない M E I ちゃんなら」

俺が溜息を付くと美緒が訪ねてきた時の様な冷たい視線で俺の顔を睨みつけていた。

「彼女は瑞穂の友達だ。それと俺のネット友達の友達でもある」

「そのネットの友達も女なのか？」

「女性だが問題でも？」

「なんでお前の周りには女ばかりなんだ」

「男の知り合いも居るけれどそう言えば仕事があるからあまり会わないな」

「いいじゃん、ハーレムみたいだね。岡谷」

「あんな、瑞穂。いい加減にしてくれ」

それっきり美緒は一言も喋らなくなってしまった。

少しやりすぎたのを反省したのか帰り際に瑞穂が両手を合わせて申し訳なさそうにしていた。

マッドティーパーティーを出て家路についていると瑞穂からメールが届いた。

『本当に馬鹿だね。あんまり現を抜かしていると辛くなるのは岡谷

だよ。辛くなったら酒でも飲もう！
『

驚かずに

突然、俺の前に前触れも無く15年前に別れた彼女の娘・美緒が現れた翌朝。

俺は慌しく仕事に行く準備に追われていた。

「クソ！ もう少し早く起きればよかった」

「私の所為じゃないからな」

「ガキじゃ有るまいし美緒の所為になんてするか」

美緒にはとりあえず石垣島タウンガイドを渡した。

もちろん地図にはマンションの場所や住所、それに近くにある店舗を大まかに書いてある。

「すまないが朝飯と昼飯は適当に済ませてくれ。これに必要な物があつたら買うんだ。いいな」

「まるで子ども扱いだな」

「あのな、あまり時間が無いのに屁理屈を言つて困らせないでくれ。大人じゃないのは確かなんだ。だけどガキ扱いしているわけじゃないだろ」

「ふん」

一万円札を財布から取り出して渡すと、美緒が口を尖らせてそっぽを向いた。

「それと、これが俺の連絡先と仕事先の住所と電話番号だ。何かあつたら必ず連絡するんだぞ」

店の名刺を美緒に渡す。

「そんなに美緒が心配なのか？」

「当たり前だろ。お前に何かあつたらあいつにどう顔向けするんだ」

「それはママが気になるって言う事か？」

「あのな、何度も言わすなよ、今一番問題なのは時間が無いって事なんだ。屁理屈を言うな。もし、美緒に何かあつたらこんなクソみたいな俺の命ならいつでも差し出してやるよ」

「馬鹿だな」

「馬鹿で上等！」

そう言い切って俺はマンションを飛び出して階段を駆け下りた。

仕事先は市内から10分位の名蔵湾沿いにあるカフェ&レストラン『ニライ・カナイ』で、俺はホール兼キッチンの仕事をしている。ランチタイムが14時に終わりお客が引け俺は掃除の係りで、ホルのアルバイトの女の子2人が片付けと夜の準備に取り掛かっていた。

由梨香はしっかり者でお姉さんタイプの女の子で少しぼつちやりしている、もう1人の美穂里^{みほり}はおとなしく気が弱い妹タイプの女の子だ。

名蔵湾に面した『ニライ・カナイ』の大きな窓からは、次々と色が変わる海と竹富島が一望できた。

「また、チーフがモップを持ったまま海を見てるよ。ミポ」

「そうだね。毎日見てて飽きないのかなあ？」

「チーフが海を見ている時の目って凄く哀しそうで遠くを見てるみたいだね」

その時、入り口の自動ドアが開く音がした。

「あつ、スイッチを切るのを忘れてた。お客さんかな」

由梨香ゆりかが入り口の自動ドアに小走りで近づくと白いTシャツに花柄のショート丈のキャミサロペット姿の女の子が立っていた。

「ゴメンなさい。ランチは終わっちゃったんだけど」

「あの、おか……た……」

「誰かに用事かな？」

女の子は少し困った様にモジモジしながら深呼吸をして由梨香に伝えた。

「パパいますか？」

「パパあ？」

素っ頓狂な由梨香の声に美穂里が驚いて2人が顔を見合わせ、2人

の頭上にクエスチョンマークが大量生産されていた。

この時間に『ニライ・カナイ』に居る男は2人だけだった。

1人はキッチン波照間。

波照間は女好きだが女気がなく独身だし、年齢25の若輩者にこんな娘が居るわけも無く。

そして、チーフの岡谷はバツイチで子どもが3人居るが3人とも高校をとうに卒業しているはずで、由梨香の目の前にいるのは中学生にしか見えないとても可愛らしい女の子だった。

女の子は背伸びをして由梨香の肩越しに店内を見渡していた。不意に美穂里の後ろから声がした。

「おい、何やっているんだ？ 賄いの時間……美緒？」

「ち、チーフ？ 今なんて？」

由梨香が目をまん丸にして声を上げると美穂里が由梨香に隠れるように後ろにくっ付いた。

「美緒、こんな所まで何しに来たんだ？」

「相手の事を知る事は、これから一緒に暮らしていく上で必要だろ」

「い、一緒に？ 暮らす？」

由梨香と美穂里が酸欠状態の金魚みたいに口をパクパクさせていた。「こんな所までやって来るとは。仕方が無い、賄いでも食べていくか？」

「うん」

美緒が落ち着いた船のキャビンの様な店内を見回しながら頷いた。

「テル！ 賄い一人分追加だ！ ユーカとミホは何をそんなに度肝を抜かれた様な顔をしているんだ？ 賄いの時間だぞ」

「チーフ！ これが驚かずに……もう良いです。なんだかお腹が空いたのとダブルパンチで体から力が抜けました。ねえ、ミポ。ミポ？」

美穂里は魂が抜けてしまったかの様に口を半開きにして、まるで東京タワーの蝋人形館にある毛利衛さんと向井千秋さんの蝋人形のように微動だにせず固まっていた。

驚いちや

由香里、美穂里、波照間、そして俺と美緒の5人でレストランのテーブルで賄いを食べている。

美緒は何も気にせずに美味しそうに賄いのカレーライスを頬張っていた。

「チーフ、岡谷チーフ」

「何だ、ユーク。チーフだけで判る」

「そうじゃなくて本当にチーフの娘さんなんですか？」

「多分な」

「多分なつて、そんないい加減な」

「昔、昔に別れた元彼女の娘だ」

由香里、美穂里、波照間の3人が顔を見合わせていた。

「一緒に暮らすつて……」

「面倒臭いな。昨日、俺の家に押しかけて来たんだ、父親を探しに。それでしばらく石垣島で一緒に暮らす事になったんだ。以上」

「以上つて」

「自己紹介でもなんでもして飯を食え、飯を」

早々と食事を済ませて食後のコーヒーに手をつけて美緒を見ると俺の顔を睨みつけていた。

恐らく面倒臭いと言う言葉に反応したのだろう。

「なんだ？ 俺の顔に何か付いているのか？」

「別に、そんな格好で仕事しているんだ」

「ここはレストランだからな」

俺の格好は真っ白なスタンドカラーのシャツに黒いズボンに革靴、そして長いサロンを腰に巻いて、髪の毛はジェルで後ろに綺麗に流していた。

「そつだ、自己紹介をしようよ」

美緒の俺に対する態度で雰囲気は固くなりかけて由梨香が仕方なく仕切り始めた。

「俺が一番号！俺は波照間建次。はてるまたてつく建設の建に次って書いて『たてつく』って読むんだ。テルって皆から呼ばれているから宜しく」

見るからにヤンチャそうな日焼けして浅黒い島の海人と言う感じの青年だ。

「私は小浜由梨香。こはまゆりか皆からユーカって呼ばれているの歳は23だよ」
由梨香はぼっちゃりした感じでセミロングのウェーブがかかった髪を後ろで一つに纏めていた。

「わ、私は黒島美穂里です。くろしまみほり皆からは何故かミポとかミポミポって呼ばれています」

小動物を思わせるような感じで髪の毛は可愛いショートヘアだった。

「自己紹介くらい自分でしろよ」

「うるさいな、判ってるよ。私は大羽美緒14歳。春から石垣二中に通う中学3年生です」

「へえ、美緒ちゃんって今度受験生なんだ。どこから来たの？」

お姉ちゃんタイプの由梨香が質問をしていく。

「東京から」

「1人で？」

「うん」

「怖くなかった？」

「あんまり、もし見つからなければ直ぐに帰って来いってママが言ってたから」

「ふうん、そうなんだ。それでチーフが見つかったからここで暮らすの？」

「う、うん」

由梨香に質問され美緒が少しずつ静かになり表情に影が差してきた。
「あんまり苛めるなよ。俺ですら美緒の事はよく知らないんだからな」

「でも、チーフに隠し子が居たなんてね。驚いちゃった」

「あのな、隠し子って人聞きの悪い」

「人聞きの悪い事をしたのはどこの誰だ」

美緒の言葉に隆史の顔が一瞬で曇った。

「そうだな、探さなかった俺が悪いんだ。言い訳や言い逃れは一切しないよ」

「えっ？」

俺の言葉に一番驚いたのは美緒だった。

「ねえ、ねえ。美緒ちゃん。チーフの第一印象は？」

「小浜さん……」

「もう、ユーカで良いよ。島では苗字じゃなくて下の名前や愛称で呼ぶんだよ。仕事中は怒られるけどね」

「うーん。だらしくって部屋が汚くってオタクかな？」

「オタク？」

「うん。ガンブラ、アニメに漫画。それにネットオタク」

「そうそう、チーフは俺らが知らないような情報も知ってるよな。なんだっけこの間の、あれオリコンの」

「えっと『放課後ティータイム』でしょ」

「そうそう」

美緒は会話についていけずにポカンとしていた。

「放課後？ ティータイムって何？」

「ほら、美緒ちゃんだって知らないんだぜ。俺らが判るわけないじゃない」

テルが自慢げに胸を張った。

「威張れる事じゃないでしょ。テルは普通の事も知らないんだから。それで何だっけ」

「もう、2人とも直ぐに脱線するんだから。『放課後ティータイム』でしょ、オリコンの1位と2位で新聞に載ってた。あのねなんかアニメの中のバンドの名前で声優さん達がグループとしてCDを出してるんだって」

美穂里が初対面の美緒が居るにも係わらず緊張もせず会話に入っていた。

「うわあ、アニオタ丸出し」

「でもユーカ、チーフは他の事にも詳しいんだよね。私達が質問しても大体即答してくれるもんね」

「そうなんだ、でもチーフは自分でオタクだってカミングアウトしているからね。それに色々な事を知っていて凄いなと思うよ。厳しいけど凄く優しいし仕事はきちんとしているし」

「優しいのは誰にでもでしょ」

「そうかなあ、誰にでも優しく出来るって凄い事じゃない？ それに優しいだけじゃなくちゃんと駄目な事は駄目って言ってくれるもん」

「後ね、チーフは見ていないようでちゃんと見てってくれるの色々な事を。そして優しく手助けしてくれる。怒ると凄く怖いけどね」

珍しく声のトーンを上げて美穂里がフォローを入れてくる。

「そうだね、ミポ。あんたがこうして働けるのはチーフのお陰だもんね」

「うん」

驚いて

「何の密談中なのかな？　おや？　あなたは？」

長い黒髪を一つに纏め紺色のスーツ姿の見た目はバリバリキャリアウーマンぽい、あまり背の高くない野崎オーナーが出勤して声を掛けてきた。

「あつ、オーナー。おはようございます。この子はチーフの隠し子の美緒ちゃんです」

「隠し子？　おい岡谷、面白そうな話じゃない。今すぐに事務所に」「へいへい、判りました」

渋々、飲みかけのコーヒークップを持ったまま立ち上がると野崎が指でテーブルを強く指差した。
仕方なくカップをテーブルに戻して奥にある事務所に向った。

「おいおい、ユーカ。お前が余計なことを言うから事情説明と言う名の詰問だぞあれじゃ」

「大丈夫だよ、テル。オーナーとチーフの仲だよ」

「本当にユーカは馬鹿だよな。言葉を選べよ」

「テルに馬鹿呼ばわりされたくないよ」

「もう、2人とも止めて。美緒さんが困惑してるでしょ」

美穂里に制された由梨香は波照間が言おうとする事を美緒の顔をみて理解した。

「あつ、ゴメン。そう言う意味じゃないんだよ」

「たく、どう言う意味だよ。じゃ」

「テルは黙ってる！　オーナーとチーフは仕事上の付き合いが長いからね、仲間って感じかな」

「でも、あいつの周りには女の人ばかり」

「う、うゝん。そうだな確かにそうかも。それにチーフの知り合いからチーフとなら結婚しても良いって言う女の人居るって聞いた

事がある」

「あちゃ、ユーカいい加減にしるよ」

「あつ、ゴメン……また余計な事言っちゃった」

波照間が渋い顔をして額に手を当てて、由梨香はシユンとして肩を窄めて下を向いてしまった。

「大丈夫だよ、あいつがそう言う人間だって良く判ったから」

「駄目！ そんな風に決め付けちゃ絶対に駄目！」

美穂里が声を荒げて立ち上がった。

由梨香と波照間は突然の事に驚いて呆気にとられて美穂里の顔を見上げていた。

「な、なんなんだよミポ。いきなり」

「だって、哀しいよ。美緒さんはチーフに会ったばかりでしょ、それなのにチーフの一面だけをみてそう言う人だなんて」

「もう、美穂里がそんなに感情を表に出すなんてびっくりしちゃった。私からもそんな風にチーフを見て欲しくないなあ。チーフは奥さんと別れてからずーと独りだよ。確かに優しいから誤解を受けるような事や好意を持たれる事はあるけど、誰か特定の人と付き合うような事はしないみたい。理由は教えてくれないけど」

「本当に？」

「本当だよ。本心じゃないと思うけど『面倒臭い』とか『独りが気軽に良い』とか言ってはいるけど寂しいはず無いと思うもん。ねえ」

「う、うん」

「はあ」

美穂里と波照間が互いに目配せをして敬遠しあっていた。

「他に何かあるんですか？」

「時々だけど、海を見ながら考え事って言うか遠い所を見ているっていうか」

「凄く冷めた目って言えば良いのかな、哀しそうな目をしている時があるの」

「そうなんだ。色々と教えてくれてありがとう、しばらくは石垣島

に居るつもりだから宜しくお願いします」

美緒が改まって姿勢を正して3人に頭を下げた。

「本当に？ それじゃ今度一緒に遊ぼうよ！」

「そうだなイチヤリバチヨーデーだな」

「イチヤ？ 何ですか？」

「一度会えばみんな兄弟の様なものって言う沖縄の言葉だよ。俺が島の言葉を教えてあげるよ」

「ええ、テルの言葉はヒンガーとかヤナーとか汚い言葉ばかりじゃない」

「ひでえなあ。俺だって綺麗な言葉くらい知ってるよ、使わないだけだ」

「使わないじゃなくて使えないの間違いじゃないの？」

「ただ、使う時がないだけで」

テルとユーカの掛け合いをミポが楽しそうに見ていた。

そんな3人を見ながら美緒はなんだか楽しくなり自然に笑顔になっていた。

驚愕

「面白そうな事になったじゃん、岡谷」

事務所からオーナーと一緒にホールに戻った。

オーナーは子どもの様にキラキラとした悪戯っ子みたいな瞳をして、一方の俺はげんなりした顔をしていた。

「余計な事を一切しないで下さいね」

「余計な事？ こんな面白そうな事に首を突っ込むなど？ 私と岡谷の仲で」

「だから釘を刺しているんです」

「無理」

「まるで子どもですね」

「うふふ、ワクワクするな」

「子どもじゃなくてその笑い顔は悪魔に見えます」

オーナーは全く聞く耳は持っていないようだった。

すると、オーナーとのやり取りを美緒が睨みつけるように見ていた。

「美緒、ここまで何で来たんだ？ タクシーか？」

「自転車を買った」

「一万でか？」

「生活していくのに必要なお金はママから貰ってきている」

「あまり無駄遣いするなよ」

「私はそんなガキじゃない！」

「判ったから、そんなにムキになるな。とりあえず美緒はマンションに戻るんだな」

「ふん！ 言われなくても判ってる」

俺と美緒のやり取りをオーナーとスタッフ全員が楽しそうに、にやけながら見ていた。

「俺と美緒は見世物じゃないんだ。勘弁してくれ」

「なんだか2人とも良く似てる」

「似てない！」

美緒と声が被ってしまう。

「ぴったりじゃない。そうだ岡谷、これはオーナー命令よ。この時期にしか見られない石垣島の蜚の事をお客さんに教えたいの、だから調べて報告しなさい。それと蜚が安全に見られる場所を探してくる事。良いわね」

「はあ？ 仕事はどうするんですか？」

「もう、春休みも終わりだからそんなに忙しくはならないわよ」

「オーナーがそんなに良いのか？ だから……」

「うるさいわね。ガタガタ言っていないで動く、言われたら直ぐに行動に移しなさい！」

野崎オーナーが俺の尻を叩き飛ばした。

「美緒はマンションに戻ってくれ、俺は仕事だ」

「岡谷、何を寝ぼけた事言ってるの？ 一旦あんたも帰りなさい」

「はあ？ まさか……」

「そのまさかよ、ちゃんと可愛い娘さんに石垣島の素晴らしさを教えるのがこれからのあんたの仕事でしょう。それにクソが付くくらいクソ真面目なあんたが居たら楽しい相談も出来ないじゃない」

オーナーの野崎女史がこの上なく楽しそうに笑いながらサムズアップして3人のスタッフに目配せをすると、3人のスタッフが面白そうにオーナーと同じ様にサムズアップしていた。

「パワハラだなまるで。帰るぞ美緒」

「う、うん」

怖いくらいのチームワークの良さに美緒は驚愕と困惑の表情を隠せずにオーナーとスタッフ達のチームパワーに押されていた。

オーナーと3人の最強タッグチームにはどんな正攻法も奇策も全く歯が立つ訳が無く、渋々と『ニライ・カナイ』を後にすることになった。

駐車場に出ると美緒がオレンジ色の可愛らしい折りたたみ自転車を押してきた。

「ふ〜ん」

「な、なんだよ」

「いや、良いセンスしているなと思って」

「当たり前だ。東京生まれの東京育ちの都会っ子だぞ」

美緒が買った自転車はタイヤもシートもフレームもオレンジ色で他の部分のブラックがアクセントになっているかなり良いセンスにっている自転車だった。

「へえ、アルミのツインチューブのフレームでVブレーキにシマノ製の6段変速機、そしてグリップシフトか。軽そうで扱い易そうだな」

「うはあ、オタク丸出しだな。自転車にも詳しいのかよ？」

「まあ、パンク修理なんかは子どもの頃から自分でやっていたからな」

「へえ〜凄いな」

「慣れだよ、慣れ。ドッペルギャンガーの2××シリーズかな」

「な、なんでそんなに詳しいんだ」

「この会社のアウトドア用品に興味があって調べた事があるんだ。その時に目に付いたのがこの鮮やかなオレンジの自転車だっただけの事だ。昔からオレンジ色は大好きなんでな」

「そうなのか」

「ああ、それじゃ折りたたんで車に積んでとりあえず帰ろう。帰ってからネットで調べもないといけないからな」

驚いた振り

一旦、マンションに戻りネットで情報を収集する。

そしてSNS（ソーシャル ネットワーキングサービス）の最大手を使って情報を提供してもらった。

「ミクまでやっているのか？」

「まあ、暇つぶしかな。他にはブログとホームページも持っているが」

「考えられないな、40越したおっさんのする事じゃない」

「悪かったな。40越してて、好きで年取った訳じゃないんだ。それにこれでも若く見られるほうなんだぞ」

「確かにとうに40を越しているとは思えないけどな」

「棘がある言い方するな、まったく」

店の掃除を終わらせて賄いを食べてからマンションに戻ってきたのが16時過ぎだったので情報を集めていると日が傾いてきて18時を回ろうとしていた。

「軽くシャワーを浴びてくるが美緒はどうするんだ？」

「私は帰って来てからで良い」

「了解した」

居間代わりの部屋の押入れのブラインドを上げて、着替えを出していると思議そうな顔をして声を掛けてきた。

「風呂上りに裸で出てきたら驚いた振りしてぶっ飛ばしてやろうと思ったけれど、着替えを準備していくんだな」

「そんな事だろうと思ったよ。美緒がいなければトランクスとTシャツだけで普段は部屋に居るよ。まあ瑞穂の言葉を借りれば経験豊富なんだよ」

「私くらの年頃の女の子との生活に慣れているって事なのか？」

「まあな」

「なんでだ？」

「俺が結婚していた事は知っているんだろ。当然、子どもが居た事も」

「何となくママから聞いた事がある」

「そう言うことだ」

軽くシャワーを浴びてTシャツからカットシャツに着替えて出かける準備をする。

黒いショルダーバッグを肩に掛けて美緒に声を掛けた。

「美緒、出掛けるぞ」

「判った。なんだそのバッグ？」

「ああ、一応カメラを持って行こうと思ってな」

「へえ、吉田カバンのポーターのラウンドじゃん。良いセンスしてるじゃん」

「ネットオタクだからな。情報通なんだよ」

車に乗り市街地を抜けてバンナ方面へと車を走らせる。

「なあ、あれがバンナの展望台なのか？」

「右手に見える山の上にあるのが展望台だよ。これから向うのは反対側の天文台がある万勢岳だ」

「天文台なんかあるんだな」

「石垣島は北回歸線に近い北緯24度に位置していて、ジェット気流の影響が少なく大気が安定していて内地では見られない南十字星などの星を観測する事が出来るかららしいぞ」

「へえ、博学なんだな」

「お客さんに色々島の事を聞かれるからな。少しでも知っておかないと困るだろ」

「なあ、聞いて良いか。何で奥さんと別れたんだ」

「別れた理由なんて人に話すような事じゃないだろ、相手が居るんだから。まあ、あいつが話すのなら構わないけどな」

「そうなのか」

「そうだ」

バナナの入り口を少し過ぎて左折して万勢岳への一方通行の道をゆつくり進む。

万勢岳にも展望台があり遊具があつて遊べるが展望台へとは進まずに天文台に向かい、展望台と天文台の中間辺りの道が広がっている所に車を止める。

「車から降りて防虫スプレーで虫除けをしておくんだ」

ダッシュボードから防虫スプレーを取り出して美緒に渡すと、体にまんべんなく吹き付けていた。

自分の体にも吹き付けて少し坂を下ると山側が少し開けた所にでた。

「まだ、少し時間が早いかな」

「何時から見れるんだ？」

「日没後から1時間ぐらいの間が一番多く飛ぶかな。今なら7時過ぎから8時くらいだな」

「ふゝん」

しばらく待っていると辺りが暗くなってきた。

「あつ、光つてる」

その光りは内地の蛍とは違いフワツという感じではなくどちらかと言うと間隔が短いチカチカに似ている光り方だった。

「なんだか緑っぽい光りだな」

「ヤエヤマボタルやヤエヤマヒメボタルって呼ばれている5ミリ程度の小さな蛍なんだ」

「オスもメスも光るのか？」

「メスは羽根が退化して飛べないので枯葉の下に居るから人目につかないんだ」

「ふゝん」

段々暗くなるにつれ蛍の数が増えてくる。

近くの茂みの中で光り出したものが山の中まで光だしフワフワと光りの粒子が飛び始める。

「うわあゝ」

美緒が驚嘆の声を上げた。

山全体に光りの粒子が浮遊し始めた。

まるで山全体が星空のように光り輝きその光りがゆらゆらと動いているのだ。

「こんなの始めてみた、凄い。ママも見た事があるのかなあ？」

「どうだろうな、俺は一緒に見に来たことは無いな」

「なんで？」

「なんでって聞かれてもな、昔の事だし」

「過去の話なのか？ ママは」

美緒のピンポイントで射抜くレーザービームの様な言葉が俺の深い所を貫いて痛みが走った。

「過去か、そうかもな。でも、美緒は過去じゃないだろing現在進行形だ」

「ママにも見せてあげたいな」

「今度は美緒が連れてきてやればいいさ」

「そうだな、甲斐性なしじゃ無理だもんな」

「さすが真帆の娘だ。しっかりしているし男を見る目があるな」

「本当に馬鹿だな」

「何度も言わせるなよ。俺は馬鹿なんだ」

「バーカ！」

美緒があっかんべーをしてプイッと踵を返して車に向って歩き出した。

学生生活

毎日、同じ事の繰り返しだった。

朝起きて仕事に行き、帰ってきてシャワーを浴びて寝る。

そんな変らず繰り返しされるリズムが美緒が現れてから変り始めた。

それは単調なリズムがいきなりオーケストラになる位の変化の仕方だった。

そして、短かくあまりにも濃厚な春休みが終わり。

美緒の石垣島での学生生活が始まった。

物事を何でもはつきり言う美緒はクラスメイト達と中々馴染めないようだったが、しばらくすると落ち着いてきたように感じていた。

そしてもう直ぐゴールデンウィークと言う観光地にとってプレトツプシーズンとも言うべき書入れ時がやってこようとしていた。

その朝は美緒の醸し出す不穏な空気から始まった。

白いブラウスに紺のチェックの短めのスカートに黒いハイソックスという。

美緒が中学2年まで通っていた東京の中学校の制服を着て、仏頂面をして五穀米入りのご飯が盛られた茶碗を箸で突つついていた。

「朝ばらから何を不機嫌そうにブツブツ言っているんだ？」

「うるさいなあ、関係ないだろ」

「関係なくはないだろ、朝飯が気に入らないのか？」

「違う！」

「いい加減にしろ！ 言いたい事があるのならはっきり言え！ 判ってくれているなんて思つてると大怪我するぞ。言葉にして伝えないと人間なんて理解しあえないんだ」

初めて美緒を叱った気がした。

すると美緒が口を噤んで奥歯を噛み締めて俺の顔を睨み付け渋々口を開いた。

「壊れた」

「はあ？ 何が壊れたんだ？」

「ママに買ってもらったダイバーウォッチ。お気に入りで大切にしていたのに」

「電池切れじゃないのか？」

「違う、石垣に来る前に交換したばかりだもん！」

「見せてみる」

「う、うん」

渋々美緒が俺の前に文字盤がオレンジでステンレス製のダイバーズウォッチを差し出した。

手にとつて見ると確かに止まっている。

ボタンやリユーズを動かしてみるが時計は動き出さなかった。

「修理に出すしかないな。俺が修理に出しておいてやるから」

「時計が無いと困る」

「携帯があるだろ」

「授業中はカバンの中に入れておかないと没収される」

「しょうがないな、俺の腕時計でもしばらく使っておけ」

「不便じゃないのか？」

「店では時計はしないからな」

「何で？」

「調理の仕事もするからな。それにサービスをするのに時計なんて邪魔なだけだ」

美緒に自分のクロノグラフのダイバーズウォッチを腕からはずして渡すと、美緒は腕に嵌めてブラブラさせていた。

「大きい」

「仕方がないだろ男物なんだから。美緒の時計が直るまでだ、我慢しろ。そう言えば店の方に荷物が届いていたぞ、何か買ったのか？」

「荷物？ あっ！ なんでここに届かないんだ」

「元々、俺は独り暮らしだから『ニライ・カナイ』に届けてもらった方が楽なんだ。自宅が不在の時は店に届けてもらっているんだよ」

美緒が俺の手から小さな小包を奪い取るようにして包みを開けて中を確認していた。

何かアクセサリーか何かを買ったんだろうと思い出勤する準備を始めようとした。

「これを着けて」

「なんだいきなり？ 指輪？」

美緒が取り出したのはサージカルステンレスの綺麗なブルーのスラントラインが入っている指輪だった。

「何で指輪なんだ？ ご丁寧に石まで入って文字まで刻印されているぞ」

「ジルコニアだ。それと文字は『Conquers all love』全ての愛を手に入れるって意味だ」

「俺に対する嫌味か？」

「文句を言わずに着ける」

「あんな、飲食業は基本アクセサリーは禁止なんだよ」

「結婚指輪モノなのか？」

「まあ、結婚指輪なら問題ないが……って何で？ 俺が結婚指輪をしなきゃいけないんだ！ 一応バツイチだけど俺は独身だぞ」

「虫除け？ 魔除け？」

美緒は腕組みをしながら惚けた顔をしている。

「それにこれは結婚指輪じゃないだろ」

「これが良いんだよ。それじゃパソコンのところに引っ掛けてある指輪を着けて仕事に行くか？」

「冗談はよしてくれ。なんで処分に困っている結婚指輪をしなきゃいけないんだ」

「やっぱり、結婚指輪だったんだ」

「まあ、そうだな。あいつとは式も挙げてないし記念撮影もしていないからな。唯一の証だった物だ」

「ふーん、何で指輪だけだったんだ？」

「あいつには3人の子どもが……止め止めこの話は終わりだ。仕事

に遅刻する」

「言いかけた事を引つ込めるな」

「朝から変な話ばかりさせるな。気分が悪い」

俺が立ち上がるうとするのと美緒が俺の腕を掴んで顰めっ面をして俺の顔を見た。

「判った、判りました。着ければいいんだろ」

「左の薬指だぞ」

「なんでこうなるかなあ」

俺が渋々指輪を左の薬指につけていると美緒が自分の右手の薬指に同じ指輪を着けていた。

「美緒、まさかペアリングじゃないよな」

「いけないか？ これで美緒の下僕決定だな」

「冗談じゃない」

俺が指輪を外そうとすると美緒が俺の目の前に握り拳を突き出した。

「殴るぞ、お前の周りには女が多すぎる」

「ただの友達とただの知り合いだ」

美緒が頬を膨らませてあからさまに不穏な空気を噴出させた。

「判った、着けておけば良いんだな」

外しかけた指輪を嵌めなおして美緒の目の前に拳を突き出して確認させマンションを飛び出した。

学校は

遅刻ギリギリで『ニライ・カナイ』に滑り込むように出勤して、慌しくランチタイムの準備を開始した。

キッチンに顔を出すと波照間がのんびりと仕込みをしている。

「あつ、チーフ。おはようございます」

「おはよう。そんな調子で間に合うのか？」

「大丈夫すよ、春休み明けで暇になってきてるんですよ仕込みも考えながらしてますから」

「そうか、急ぎの仕込があれば声を掛けろよ」

「ういす」

ホールでは由梨香と美穂里の2人がテーブルを拭いたり水の準備と軽く掃き掃除をしているのが見えた。

「おはよう」

「おはようございます」

「おはようございまーす」

2人の元気な挨拶が帰ってきた。

「チーフ！ 朝からそんな疲れた顔をしないで下さい。ただでさえ不景気なのに不景気過ぎます」

「相変わらず元気だなユーカは」

「元気だけが取柄ですから」

「美穂里も元気か？」

「はい」

「元気そうだな、とりあえず」

「えへへ…… あつ！ 指！ 指！」

美穂里が照れ隠しのような笑い声を上げ、髪の毛を掻き揚げた俺の左手を指差して声のトーンを上げた。

「どうしたの？ ミポ」

「あれ、あれ」

美穂里は必死にボキャブラリーが足りないのをボディーランゲージで表現しようと必死に指差していた。

「ああ！ バツイチなのに左手の薬指にリングしてる！ これが不景気面の原因だあ」

「ユー力、不景気面は酷くないか？ 魔除けだそうだ」

「女除けね」

どこからともなく声がして湧き出た様に野崎オーナーが現れた。

「相変わらず神出鬼没だな」

「岡谷、神出鬼没って私を何だと思っているの？ 神？ それとも

……」

「鬼か……あ、たたたた」

オーナーが俺の口元を掴み上げた。

「この口が悪いのね。この口が」

「鬼！」

「彼女も心配なんじゃないの、あんたは女なら誰にでも見境無く優しいから」

「女限定なのか？ それも見境無くって、それじゃまるで俺は盛りをついた雄猫か？」

「それじゃ、何回誤解されたり言い寄られたりしたら気が済むの？ 雄猫の方がましかも」

「はいはい、判りました。女除けに指輪は仕事中也外しません」

「流石よね、岡谷には出来過ぎよね。勿体無いくらいだわ、あの子」溜息をついて着替えに行こうとするとオーナーが話を続け出した。

「そう言えば岡谷、美緒ちゃんだっけあんたの娘さん。学校は慣れたの？」

「まだだろうな。美緒は物事をはっきり言うからな。秋香の時もそうだったけれど受け入れてもらえるまで少し時間がかかるだろう」
「それは、イジメに遭っているって事なの？」

「近いだろうな、多分」

「多分って、心配じゃないの？」

「俺に何が出来るんだ？ 相談でもしてくれればアドバイスくらいは出来るけどな」

野崎オーナーが腕を組んで唇を少し引き攣らせて考えている。

「オーナーその唇を引き攣らせる癖は止めたほうが良いぞ」

「仕方ないでしょ。自然に出るんだから、それよりどうする気なの？」

「静観に決まっているだろ親がしゃしゃり出るとろくな事無いからな」

「何かあつてからじゃ遅いのよ」

「俺は美緒を信じるよ。何かあつた時は全力で守る」

「現を抜かしてる訳じゃないのね」

「当たり前だろ、人を育てるんだぞ。花や草木を育てるのは訳が違うだろ」

「まあ、岡谷は経験者だから少しは安心したわ。なんだか父親の顔になつてる」

「からかうのは止めてくれ。着替えてくる」

そう言い残して俺は更衣室に向った。

学校から

その日のランチが終わり掃除を済ませ、少し長めの休憩時間に賄いを食べてお喋りをしていると店の電話が鳴った。

「私が出ます。予約かなあ、この時期に珍しいな」

由梨香がスツと立ち上がって入り口の近くのキャッシャーカウンタ―に向った。

しばらくすると由梨香の神妙な声がした。

「ち、チーフ。二中の先生から電話です」

「はあ？ 学校から？ 俺に？ 美緒の奴なにかやらかしたかな」電話に出ると美緒の担任からだった。内容を要約すると美緒がトラブルを起こして相手が怪我をしたとの事だった。

そして相手の母親が学校に怒鳴り込んで来ているらしかった。

その為に保護者である俺に話をしに来て欲しいと言われてしまったのだ。

とりあえず野崎オーナーには携帯で店を抜ける事と何時に帰れるか判らない事を告げる。

すると直ぐに出勤するからと野崎に言われた。野崎が出勤するのを待っている訳にもいかず。

学校に向かう事にした。

「ユーカ、話が済んだら俺から連絡するとオーナーに伝えてくれ。いいな」

「はい」

「それとテル。悪いがお前のFTRを貸してくれ、車よりバイクの方が早いからな」

「良いすよ、メットはバイクにあるんで」

「それじゃ借りるぞ」

テルからバイクの鍵を受け取り、店の駐車場に向かった。

駐車場に向かうと雨に当たらないようにテルの黒いFTRが停め
ありジェットタイプの黒とシルバーのヘルメットがバイクに繋が
れていた。

「あいつは彼女も居ないのに何でメットが2つなんだ？」

黒いヘルメットを被りエンジンを掛けると綺麗に拭け上がった。

「いつ聞いてもデカイ排気音だな」

テルは昔から車やバイク弄りが好きでこのFTRもかなりカスタ
イズされていた。

うだうだしている時間は無いので仕事着のままバイクに跨り、無
駄に甲高い排気音と共に学校に向った

学校に

『ニライ・カナイ』から美緒の通う二中までは10分くらいで着く事が出来た。

校門の横にある駐車場にバイクを停めると、あまりの排気音の煩さに校舎からこつちを見ている何人かの人の姿が目に入った。

気にせずに校門に向い学校の敷地に入ると、昇降口から体つきが見るからに体育会系の男の先生らしき人物が出てきた。

「学校に何か御用かな？ 部外者は立ち入り禁止なのだが」
あからさまに上から目線で言われる。

「学校から連絡があつて呼び出された3年の大羽美緒の保護者なんですけど」

「3年の大羽だ？」

「今年の4月に東京の中学から転校してきた大羽美緒の保護者です」
そう告げると男の先生は俺の姿を下から上に、上から下へと怪訝そうな顔をしながら目線を動かした。

部外者に対してはこんな扱いなのかも知れないと思ったが、今は美緒がどこに居るのかも判らないし校舎の中に入った事が無いので、とりあえずこの先生らしき男に取り次いで貰うなりするしか手立てが無かった。

「担任の名前は？ クラスは？」

「聞いてないので知らないですね。ここの3年生なのは確かです」

「ちよつと待つてなさい」

あきらかに俺より若く見える先生は俺の方が年下だと確信している様な応対の仕方だった。

しばらくすると先生らしき男が再び現れて会議室の様な所に案内された。

「失礼します」

ノックをしてから部屋の引き戸を開けると正面に校長と担任らしき女の先生が座っていて、その横に同級生の女の子とその母親が座っている。

そして美緒は同級生と母親の対面に座らされていた。

「大羽美緒の保護者の岡谷隆史です」

「こちらへどうぞ」

電話をくれた担任の先生に促されて美緒の横に座ろうとして、美緒と目が会うと美緒が唇を噛み締めて体を硬直させているのが判った。「事情を説明していただませんか？ 何があったんですか？」

校長と担任らしき先生が口を開こうとした瞬間、同級生の母親が怒鳴り飛ばしてきた。

「この子が私の大事な玲華ちゃんに怪我をさせたのよ！ 中学3年の受験の大事な時に何て事をしてくれたのよ、この責任はきちんと取っていただきますからね！」

「もちろんです。美緒が起こした事は保護者である私の責任ですから」

母親は怒り心頭でまともに話が出来る状態には見えなかった。

こちらが感情的になってしまったら話しにならないのであくまで冷静に対処した。

美緒の横に腰を降ろすと校長先生が母親を宥め賺した。

「まあまあ、お母様も興奮なさらずに冷静に話し合いを……」

「冷静で居られる訳無いじゃない！ 玲華ちゃんが」

「先生。事情を説明して頂けませんか？ その上で双方の話を聞いて判断したいので」

興奮している母親の言葉を遮るように話し始めると、母親がもの凄いい形相で俺の顔を睨み付けた。

「こんななどの馬の骨かも判らない保護者じゃなくて母親を呼びなさい、どうせ娘がこんなじゃ母親もろくでもないでしょうけどね」その言葉を聞いた瞬間、美緒が握り拳に力を込めて立ち上がろうとするのを俺が腕を掴んで止めさせる。

美緒が悔しそうな顔をして泣きそうになるのを堪えながら俺を見た。
「申し訳ないが少し静かにして頂けませんか？ 私は話をしに学校まで来ているんです。先生、私に判るように説明をお願い致します」担任の先生から何が起きたのか説明を受ける。

先生の話では一部始終を見ていたわけではなく他の生徒に呼ばれて教室に駆けつけると、2人がもみ合うように喧嘩をしていて美緒が突き放した時に相手の生徒が尻餅をつき、その時に手首を怪我した様だった。

「それで喧嘩の原因はなんですか？」

「それが良く判らないのです。2人とも何も話さないのです」

「怪我をしたのは玲華ちゃんだからこの子が悪いに決まっているじゃないの！ 大体、父親でもない男に娘を預ける母親がどうかしているのよ。まともじゃないに決まっている！」

俺の横で美緒が小さな体を震わせて涙を必死に堪えていた。

自分が起こした事で母親の真帆が侮辱されるのが悔しくて堪らないのだろう。

「なんでこんな事になったのかな？ 原因を君の口からも聞きたいのだけど」

俺はあえて美緒ではなく相手の女の子の目を真っ直ぐに見て聞いてみる。

すると相手の子は気まずそうに軽く唇を噛んで俺から視線を外した。それを見た瞬間に美緒が原因で起きた事じゃないと確信した。

そして美緒に何か変わった事が無いかと美緒を見ると、今朝俺が貸したはずのクロノグラフの腕時計をしていなかった。

「美緒、俺が今朝貸した腕時計はどうしたんだ？」

俺の言葉に美緒と相手の同級生の体がビクンと反応した。

「持っていない訳ないだろ、出すんだ」

美緒が震えている手をスカートのポケットに入れて時計を取り出して目の前の机に置いた。

時計はガラスが粉々に割れていて時を刻むのを完全に止めてしまっ

ていた。

「何で今朝貸したばかりの時計がこんな事になっているんだ？」

「今はそんな時計なんてどうでもいいことでしょ！ 玲華ちゃんの怪我のほうか！」

「少し黙っていてもらえませんか？ 先生の説明では軽い捻挫だと言っていたじゃないですか。今は何でもこうなってしまったのかその原因が知りたいのです。知った上で美緒に非があるならば責任は私が全て取ります。私には美緒が理由も無く人を傷付ける様な事をすると信じられないんです」

「理由があれば人を傷付けて良いとでも？ だから……」

「これ以上、美緒の母親を侮辱する事は私が許しませんよ！ なんなら出る所に出ましようか？ これ以上問題を大きくしたら娘さんの進学に響くと思います。それでも良いんですね」

強めの口調で言い放ち母親の顔を凝視した。

「私は何もしていないのに壊された。床に投げつけられて……」

美緒が涙声の様な苦しそうな声を搾り出した。

「そ、そうなの？ 玲華ちゃん？」

母親が娘に問い質すと娘が小さく頷いた。

「なんですか、時計の1個や2個。それも日本製の時計じゃない、それくらいいくらでも弁償しますわ」

「その言葉に嘘は無いですね」

「ええ、もちろんよ」

母親が鼻息も荒く言い放った。

それを見てから静かに話し始める。

「まあ、日本のセイコーの腕時計ですからね。セイコーの腕時計でクレドールと言うのを知っていますか？」

「そんな事知るわけないでしょ。関係ない話をしないで下さい」

母親の言葉を見捨てて話を続ける。

「そのクレドールシリーズの中で一番高い時計は1500万するんです。日本の時計も捨てたもんじゃないですよね」

「……………」

俺の言葉に母親の顔から血の気が引いていくのが見てとれた。

一気に畳み掛ける。

「この時計は私の大切な人からの頂いた物なので値段は知らないんですよ。でも、これはチタン製のクロノグラフですからね高いものだとして100万弱から数十万円くらいですかね。それに数年前に頂いたので今じゃ手に入らないかも知れないですよ」

「……………」

母親の顔がすっかり青ざめて最初の勢いは借りてきた猫の様に勢いを引っ込めてしまった。

「それでは話を戻しましょう。治療費諸々の請求を私にして頂けますか？ その上で正式に謝罪に伺いますので、その時に直せるようでしたら修理代を駄目な場合は同等の物と同じ代金を……」

「あ、あの、玲華ちゃんの怪我はそんなにたいした事が無いので治療費は結構です。そうだ忘れていたわ。これから急いで祖母の所に行かなければならないのでこれで失礼します」

こちらが話し終わらないうちに急に落ち着きが無くなった母親がいきなり席を立ち、娘を叱り飛ばしながら部屋を出て行ってしまった。残された俺達は呆気に取りられて見送るしか出来なかった。

しばらく間が開き担任の先生が声をかけてきた。

「あの、岡谷さんてもしかしたら西崎さん達の？」

「父親と言うより保護者でしたね」

「金子先生は岡谷さんをご存知なのですか？」

「はい、校長先生。実は岡谷さんにはお会いした事は無いんですが、卒業生の秋香さん春介くん茉冬さんの育ての」

「ほう、そうでしたか。皆さん良い子ばかりで」

「先生、その話はまた別の日に。これから美緒を宜しくお願い致します」

「そうですね」

学校を後に

相手の母親が尻尾を巻いて逃げ出し、学校側も何もお咎めなしで決着がつく頃には日が少し傾き始めていた。

とりあえず学校を後にする。

「もうこんな時間か」

「ごめんなさい」

学校の昇降口を出た所で美緒が立ち止まって謝ってきた。

「それは何に対してなんだ？ 俺か？ 時計か？」

「両方だよ、あんなに高い物だって知らなかったんだ」

「あれはブラフだよ」

「ブラフ？」

「確かにセイコーには1500万や数十万する腕時計もあるけれど、あの時計は俺の母親と妹からの誕生日プレゼントにもらった物だよ。俺の家は庶民中の庶民だからなそんな高い物が買える訳が無いだろ」

「それでも、大切な誕生日プレゼントを私が……」

美緒が今にも泣き出しそうな顔をしてしよげ返っていた。

「いつまでそんな顔をしているつもりだ？」

「だって……」

「しょうがない奴だな、あの黒いバイクの所で少し待ってる」

美緒を先に歩かせて俺は『ニライ・カナイ』の野崎オーナーに電話をして掻い摘んで事情を説明した。

「オーナー、悪いがもう少し遅れる」

「まあ、仕方が無い。なるべく早く戻って来るように」

「判った」

駐車場に停めてあった美緒が待っているバイクに向かい、バイクからヘルメットを外してシルバーのヘルメットを美緒に渡した。

「行くぞ」

「えっ？」

「えっ？　じゃなくってヘルメットを被ってくれ」

「う、うん」

美緒が訳も判らずにヘルメットを被った。

バイクに跨りエンジンをかけてタンデムステップを降ろしてシートを叩くと、美緒がよじ登るようにして後ろに座った。

「美緒、パンツ見えちゃうぞ」

「馬鹿！　見えないもん」

「出すぞ、しっかり掴まっているよ」

「う、うん」

美緒の手が俺の腰に回るのを確かめてからバイクを出す。

マンションとはまったく正反対の方向に向ってバイクを走らせ学校を後にする。

信号で止まると美緒が背中を叩いて話しかけてきた。

「なあ、どこに行くんだ？」

「なんだって、良く聞こえないな」

「どこに行くんだよ！」

「ツーリングだ」

「ツーリング？」

「少し流しに行くだけだよ」

信号が青になりバイクを走らせた。

蛭を見に行った万勢岳とバナナ岳の間を抜けて峠を過ぎて下り坂を流していく。

しばらくすると右手に石垣島の精糖工場が見えてきた。

再び信号で止まると美緒がしゃくり上げているのに気がついた。

「泣いているのか？」

「泣いてなんかない！」

美緒が俺の肩甲骨の辺りを力任せに叩いた。

「そうか、それなら良いんだ。飛ばすから振り落とされないように」

しがみ付いているよ」

美緒に声をかけ信号がブルーになりアクセルを思いっきり開けた。前輪が持ち上がりそうになるのを力で押さえ込んだ。

元名蔵を抜けて石垣やいま村を過ぎると正面に名蔵湾が見えてくる。海に突き当たり右折して海沿いの県道79号線をかなりの速度で飛ばした。

名蔵湾が後ろへと飛んで行き川平方面にむけてバイクを進める。

川平の集落が見えてきて速度を落とし川平郵便局の前を左に曲がり進むとロータリーが見えてくる。

底地ビーチ方面ではなく石崎方面にバイクを走らせ、シーサイドホテルを過ぎて直ぐの農道にバイクを入れると美緒の手に力が入った。「道が荒れているからしつかり掴まっておけよ」

草木が両サイドから生い茂っている未舗装の道を突き進む。

俺が体を起こすと美緒が俺の体に隠れるように小さくなった。

しばらく草木を体で受けながら走ると開けた場所に出て道が行き止まりになり、バイクを停めてエンジンを切った。

学ばない

バイクから美緒を降ろしてスタンドを立てて、バイクから降りヘルメットを外して歩き出した。

「ここはどこだ？」

美緒が後ろから質問してきた。

「行けば判るよ」

「なあ、その……」

「まだ、何か言い足りないのか？」

立ち止まり振り向かずに美緒に聞いた。

「時計弁償するから」

「いい加減にしろよ。子どもが親の物を壊したから弁償させる親がどこに居る？」

「でも、岡谷さんは……」

「俺は何だ」

「その、だから」

「ただの保護者か？ 美緒は石垣島に何をしに来たんだ？ 何故、俺のところに来たんだ？」

「それは父親を探しに……可能性が高いのは……だから。それに」

「そうだったな。真帆が楽しそうに話すくらい楽しそうなの島で暮らしたいだったな」

「うん」

美緒の返事がフェードアウトしそうになっていた。

「楽しく暮らせると思っていたのに学校ではイジメにあって借りた時計は壊されて、相手には怪我をさせてしまっただけで落ち込んでいると」

「イジメなんて」

「無かった訳じゃないだろ」

「何でそんな事」

「言わないのに判ったか？ 俺は経験豊富なんだそうだ」

「また、それか」

「もう、この話はお終いにしよう」

美緒は何も言わずに動く気配を感じられなかった。

「まだ、なにか不満でも？」

「何で怒らないんだ？」

「怒られたいのか？ 俺は嬉しかったけどな」

「嬉しかった？ 何で」

「俺の時計を壊された事に腹を立てて同級生に向っていったんだろ。弾みで相手が怪我をしまったけどな」

「それは、ただ人の物を壊したから」

美緒の言葉が尻すばみになっていく。

「時計なんて大量生産されているんだ買い換えれば済む事じゃないか。そんな事で俺は美緒との関係がぎくしゃくするのが嫌なんだ。」

美緒だって楽しく過ごしたいんだろ、まあ、生きていれば楽しくない事だってあるけどな」

「本当に時計は良いのか？」

「しつこいぞ、何か？ 俺が時計の方が大事だと思っているとでも？」

「それは……」

「時計の換えなんていくらでもあるだろう。でもな、美緒はこの広い世界でたった1人しか居ないんだ。俺の側に居る間は俺が全責任を負う、そして全力でお前を守ってやる。それでいいな」

「……うん」

美緒が俺の背中にこつんと額を押し付けて声を殺して泣いていた。

「泣きたい時には思いっきり泣いて、楽しい時には心の底から笑え」
声を上げて美緒が泣き始めた。

抱きしめてやる事も出来ずに、ただ背中を貸してやるのが精一杯だった。

「泣き止んだか？」

しばらくして美緒に声を掛ける。

「泣いてないもん」

美緒が鼻を吸りながら答えるといきなり走り出した。

「危ないぞ」

俺の言葉も聞かずに砂の小道を駆け上がり立ち止まった。

「海だ、綺麗……」

「俺の一番のお気に入りビーチだからな」

美緒の目の前には日が傾いているとはいえ、太陽の光りを浴びて世界中の色とりどりの青を集めたようにキラキラと光り輝く、えも言えないグラデーションの海と真つ白い砂浜が広がっていた。

「凄い！ こんな海始めてみた！」

美緒が波打ち際まで白い砂のビーチを一気に駆け下りて振り返った。

「パパ！ 早く早く。凄いよ！」

「パパか……」

先ほどまで泣いていたとは思えない満面の笑顔は母親の真帆にそっくりだった。

心の奥底でちくりと痛みが走った。

「なあ」

「好きにしろ」

美緒の側まで歩いていくと美緒が海を指差して何か言いたそうに声を掛けてきた。

「本当に良いのか？」

「好きにしろと言ったはずだ。転んでびしょ濡れだけは勘弁してくれ」

「うん！」

海にも負けないくらいに輝いた瞳を大きく見開いて、ローファアを脱ぎ黒いハイソックスを脱ぎ捨て海に駆け出した。

「気持ち良い！」

美緒が歓喜の声を上げている。

俺は美緒のローファアにクルンと丸まって砂浜の上に投げられてい

る靴下を入れて、近くの流木に腰を降ろした。

「パパ、ありがとう。それとこれからもよろしくね」

紺色のチェックのスカートが翻り美緒が振り向き様にそう言った。

「こちらこそ、やまんぐうは程ほどに頼むぞ」

「やまんぐう？」

「これからは少し島の言葉も学ばないとな。やまんぐうはお転婆と言う意味だ」

「それは、却下！　こんな楽しい島で、はしやがずにいられないもん」

店に戻るとオーナーが鬼の形相で仁王立ちしていて、テルは泥と草塗れになったFTRをみて『お、俺のフィナ・T・ラナリーが……』と訳の判らない名前を叫びながら泣きくずれた。

そんな美緒と俺との距離が少しだけ縮まった一日がやっと終わろうとしていた。

変化

慌しく嵐の様なゴールデンウィークが過ぎていった。

美緒は不機嫌な顔で俺の顔を睨みつけていた。

「パパの馬鹿！ どこにも連れて行ってくれないんだから」

「海には何回行っただろ」

「夕方からじゃ詰まんない。綺麗なお魚さんを見たい」

「石崎にも居るだろう」

「そうじゃなくって。ああ、もう良いもん。仕事ばかりしてれば良いよ。美緒はグレてやる」

美緒の言うとおりゴールデンウィーク中はあまり美緒を構ってやれなかった、それはただでさえ忙しいのに俺が仕事を一つ増やしてしまった事に起因した。

「なんで、夜から他の仕事に行くの？」

「仕方が無いだろ、どうしてもって頼まれたんだから」

「もしかしてこれからも続けるの？」

「そうだな、やり始めてしまった事だからな」

「ぶうゝ美緒を放つたらかしで」

美緒が剥れて頬を膨らませた。

学校での喧嘩やイジメうんぬんがなんとか落ち着いてから美緒に変化が見られ。

俺の事を少しは？ 認めてくれている様に感じた。

学校の方は腕時計事件の相手がイジメなどの首謀者だったらしく鳴りを潜めてしまい、友達も沢山できて休みの度に遊びに出かけている。

そして、時々俺が海に連れて行くので美緒は少しだけ日焼けして健康的になっていた。

「それじゃ、今度の休みに晴れたら潜りたなら潜りに連れて行ってやるから」

「本当に？ やった！ 約束だからな」

約束どおり美緒と休日 に車で米原キャンプ場のビーチに来ていた。

「うわぁ、ここのビーチも綺麗だな。でも人が多いな」

「ここは観光客や地元の人がよく来るビーチだからな」

「やっぱり、日が高い時間の海は色が違うな」

「紫外線も強いからな。日焼け止めをちゃんと塗るんだぞ」

「判ってるよ。でもかなり黒くなってきちゃったな」

砂浜に穴を掘り使い古しのパラソルを立てて石で固定して、パラソルの下に荷物を置き水着に着替える。

着替えると言っても家で水着に着替えているので着ている洋服を脱ぐだけなのだが。

「じゃーん、新しい水着だよ」

美緒が水着になって俺の前に立った。

その水着は何回か海に行った時のワンピースではなくピンク色の可愛らしいストライプのビキニだった。

「どう？ 可愛い？ 似合ってる？」

「良いんじゃないか」

「もう、もう少し言い方が無いかなあ」

良く似合っていた。

真帆に似たのだろう中学生にしては発育が良くスタイルの良い美緒の姿を恥ずかしくってまともに見れなかったと言うのが正直な所だった。

「つまんないの」

「あのな、どこの親が娘の水着姿をみて喜ぶか？」

「ああ、一応娘だって認めるんだ」

「帰るぞ」

「駄目！ せっかく来たのに」

「それじゃ、準備をしてくいれ」

「うん」

美緒が急いで日焼け止めを体に塗り始めた。

俺はメッシュバッグから2人分のシュノーケルの道具を取り出していた。

「パパ、背中、背中が塗れない」

「自分で何とかしろ」

「届かないんだもん！」

「はいはい」

美緒の肩と背中にまんべんなく日焼け止めを塗る。

「美緒の体って色っぽい？」

「バーカ、中学生がそんな事を言うもんじゃない。行くぞ」

そう言って頭を小突くと 母親似の小悪魔な様な笑顔で美緒が答えた。

「うん！」

リーフの内側の穏やかな海の中にある大きな造礁珊瑚の上を歩いてリーフに向う。

今日は風が穏やかで外海も波が静かだった。

リーフに近づくとも目の覚めるような青い海が広がっていた。

「なあ、深いのか？」

「まあ、深いって言えば深いかな。怖いのか？」

「少しだけ」

「ダイビングとかした事が無いのか？」

「うん」

「浮き輪でも取って来るか？」

「いらない」

「あんな、怖いのなら」

「大丈夫だよ、パパが居るもん！」

怖さを紛らわせるかのように美緒が強い口調で言った。

「海は体の力を抜けば沈む事は無いからな」

そう言いながら、リーフのエッジがスロープのようになってる所を探す。

美緒にフィンとマスク&シュノーケルとグローブを着けさせて、俺
が先に海に入って自分の準備をする。

「ほら、ゆっくりで良いからおいで」

「う、うん」

くるくると変わる

恐る恐る美緒が海に入ろうとしているが、途中で躊躇い気味に動きを止めた。

「怖くないって言ったのは嘘か？」

「嘘じゃないもん！」

美緒が目を瞑って海に飛び込み、慌てて俺に抱きついてきた。

「慌てるな、慌てる事が海じゃ一番危険なんだ」

「仕方が無いじゃん。初めてなんだから」

「判ったから落ち着いてくれ」

「う、うん」

美緒が俺の首に回している腕に力が入る。

安心するように腰に手を回して体を安定させてやると美緒の腕から力が抜けた。

「それじゃ、手を繋いでやるからゆっくり体を離すんだ」

「うん」

美緒が少しずつ体を離して俺の手を握り締めた。

「顔をつけて海の中を見てご覧」

そつと美緒が海の中を覗き込むように顔をつけた。

「……………」

「美緒？」

「……………」

「どうした？」

美緒が目をまん丸にしてパクパクと口を開いたり閉じたりしている。驚きのあまり声も出せないようだった。

「少し、泳ぐぞ」

美緒は何も言わずに思いつきり頷いた。

手を繋いだままリーフがドロップオフしている珊瑚の崖を右手に見

ながらフィンをゆっくり漕ぎ泳ぎ出した。

カラフルなベラやチョウチョウオ、それにイラブチャーの群れ。コガネシマアジだろうか黄と黒の縞模様の魚の群れが目の前を泳いでいく。

美緒に集中しながら進んでいくと少し淵のようになった底が見えない深い場所に出る、すると美緒が掴んでいる手に力が入った。

手でOKサインを出して意思を確認すると恐々と手で同じ様にOKサインをだした。

それを見て泳ぎ始めると太陽が雲の間から顔を出したのだろう、どこまで青い世界に真上から無数の光りのシャワーが射した。

美緒が繋いでいる手を引っ張り光りのシャワーを指差している。

美緒に伝わるように大きく頷くとクルクルと変る美緒の嬉しそうな顔がマスク越しからでも良く判った。

しばらく泳いでビーチに戻ってきてても美緒の興奮は覚めやらずだった。

「凄い綺麗だね！ あんなに綺麗だ何て思わなかったよ！」

「そうか、良かったな」

「ねえ、パパはこの海が一番好き？ 石崎？」

「そうだな、のんびりするなら石崎かな。離島の海や石垣では御神崎の海も人が入ってないから綺麗だぞ」

「それじゃ、全部！ 全部見たい！」

「ん？ 少しずつな」

「本当？ 約束だよ」

「ああ、時間が許す限り連れて行ってやるよ」

「パパ、泳いだらお腹が空いてきた」

「それじゃ、パンでも買いに行くか？」

「パン？ 賛成！ パン大好き！」

パラソルを畳んで敷物を石で飛ばないようにしてから車で近くのパン屋に向った。

米原から川平方面に向けてしばらく走ると、道路脇に見落としてしまいそうな小さな木の看板が見えてくる。

「トミーのパンやさん？」

道路脇の未舗装の少し急な下り坂を降りると青い海をバックにした白い小さな可愛い建物が見えてくきた。

店の近くまで来るとパンの焼ける香ばしい匂いがしてくる。

「ここはフランスパン生地のパンが美味いんだ」

「早く行こう！」

店に入るなり美緒は興味津々の輝く瞳でパンを物色していく。

「うわ、どれも美味しそう。チーズに玉子にツナ、それにこのベーコンエピも気になるなあ」

「食べられるだけにしろよ」

目移りしている美緒を制しながら俺は店のおばさんに声を掛けた。

「カレーパンはこれからですか？」

「うーん、もう直ぐ焼き上がるよ」

おばさんの声に美緒が鋭く反応した。

「もう少し待ってからにする」

しばらくすると香ばしい匂いと共に熱々のパンが焼きあがってきた。

「これがカレーパンでこっちが紅芋のアンパンね」

「うわあ、美味しそう！」

「食べてみたいのを買って良いぞ」

「本当に？」

美緒がパンを選んでいく。

「カレーと紅芋とチーズにエピにタマゴ！」

「それじゃこれで」

会計をするためにキャメル色の皮のベルトポーチから財布を取り出すと美緒が覗き込むようにポーチを見ていた。

も、変わるのかな

「行こうか」

「うん」

満足げな顔で美緒が頷き、車で来た道を走る。

「髪の毛がベタベタだあ」

「それじゃ、水浴びでもしてから昼飯にしよう」

「水浴び？」

トミーのぱんから少し走った所にある小さな橋の手前で車を道路脇に停めた。

車から降りると水音が聞こえてくる。

「水の音がする」

「この下に荒川の滝って言う小さな滝があるんだ」

道を渡り欄干の脇の小道を降りていくと岩場になっていてその先に小さな滝つぼがあり3メートル程の落差の滝から止め処なく水が落ちていた。

大きな岩から滑らないように気をつけながら滝に近づき水に足をつけた。

「まだ、冷たいな」

「本当に？ ひゃ！ 冷たい」

海で泳いで日に焼けた体にはとても冷たく感じる、少しずつ体を慣らしながら水に入り思い切って泳ぎ出し滝に打たれると火照った体が一気にクールダウンした。

「気持ち良い！」

「冷たくない？」

「冷たいから気持ち良いんじゃないか」

「それじゃ、美緒も。ひゃ！」

美緒が恐る恐る水に入り滝つぼを歩き出した。

「美緒はシカバーだな」

「しかばー？」

「怖がりって意味だよ」

「怖くないもん、冷たいだけだもん！」

そう言いながら美緒が水を手でかけてきた。

「やったな！ ほれ！」

「冷たいよ！ パパのバーカ！ でも気持ち良いね。凄く静かだし」

「夏場の休日は島の子ども達でいっぱいだよ」

「へえ、そうなんだ」

「昔はこの滝つぼは俺でも背が届かないくらいだったのに台風で岩場が崩れて浅くなってしまったんだ」

「ふうん、そんなに深かったんだ。パパが石垣島にきた時と今とどう変ったの？」

「そうだな、人が増えて車が増えて便利にはなったけどどうなんだろう。昔の方が良かったのかも知れないな」

「そうかなあ」

「流石に冷えてきたから出よう」

腕を擦りながら滝つぼから上がる。

大きな岩に登り美緒に手を差し出すと躊躇いながら手を掴んだ。

「それ！」

片手で美緒を引っ張り挙げる。

「美緒は軽いな」

「ママとどっちが軽いと思う？」

突然の美緒の質問に戸惑うが笑って誤魔化した。

「さあ、真帆にこんな事をしたかなんて忘れたよ」

「石垣島が変わるようにパパも変わるのかな？」

「そりや変わるさ、年を取って白髪になって。でも変わらないところもあるかな」

「どこが変わらないの？」

「内緒だよ」

「ずるい教えてよ！」

「目には見えないからな」
「判んないよ！」

変わらないな

米原キャンプ場のビーチに戻り、パラソルを広げて買ってきたパンを食べる。

美緒はカレーパンに挑もうとしていた。

「辛いぞ」

「辛いのが平気だもん」

「激辛だ……」

俺が言う間もなく美緒はカレーパンに噛り付いていた。

「ん？……んん！」

一口噛んだパンを手に掴んだまま美緒は百面相をしながら首を横に振っていた。

「どうした？ ほら、出して」

「ん！ んん！」

そして顎を引いたと思った瞬間にゴクリと俺まで聞こえるような音がした。

「ひい！ かりやい！ じゅーちゅー！」

ペットボトルの紅茶を渡すと慌てながら口の中を漱ぐ様に喉を鳴らしながら飲んでいった。

「ふう〜辛かった。はい、パパに上げる」

「さんきゅ」

美緒からカレーパンを受け取り普通に食べ始める。

不思議そうな顔をして美緒が首を傾げていた。

「辛くないの？」

「辛いよ、でも大丈夫だ。辛い物は嫌いじゃないからな」

「ちえ、美緒はタマゴパンにしよう」

美緒はつまらなそうに紙袋からタマゴパンを取り出して大きな口をあけて頬張った。

「喰った喰った、久しぶりに食べた」

「えっ？ 時々食べてるんじゃないの？」

「そんなに米原には来ないからな」

「どこに行くの？」

「魚を突きに行く時は石崎が多いかな。風が強い時なんか米原のビーチでお姉ちゃんを見ながら……」

「オヤジ！」

美緒が怖い顔をして俺を睨みつけた。

「別に取って喰ったりしないよ、ただ何も考えずに小説を読んだりしてたかな」

「海で？」

「そう、ただ小説に集中して。波の音と風の音と」

「ふうん。そうだ、皮のビーチを見せて」

「これか？」

本皮のベルトビーチを美緒に渡すと、品定めをするような真剣な顔つきでビーチを見て手で触っていた。

「なあ、何でも使って良いって……」

「それは使わせないぞ」

「ええ、何で？」

「あのな、それは手縫いの本皮なんだ。使い込んでいくうちに味が出てくるんだ、やっと最近馴染んできたばかりだからな」

「嘘つき！ 何でも俺の物は自由に使って良いって言ったのに！」
頬を膨らませて口を尖らせ、精一杯の抗議の気持ちを美緒が表していた。

「これが良いのか？」

「うん！ だって凄く良い感じなんだもん」

「それじゃ、帰ったら美緒用に注文してやるよ」

「本当に？」

「ああ、ついでだ。他に欲しい物があれば考えておけよ」

「うん、約束だからね。破るなよ」

「破らないよ。約束は守るためにあるんだ」

「大人じゃん」

「大人をからかって面白いか？」

「だって、パパって時々子どもみたいな時があるって言うか、パパくらいの歳なら普通はオジサンじゃん。だけどパパはオジサンに見えないもん」

「この島に居るからかもしれないな」

「ふうん」

美緒が澄ました顔で空を仰いで、何かを閃いたのか急に声を上げた。

「パパ、帰ろう！ 帰ってネットでお買い物が見たい」

「はあ？ もう少しゆっくりしていこう。ネットは逃げないからな」
「そうか、それじゃ泳ごう！」

美緒が急に立ち上がって俺の手を引っ張った。

「ねえ、もっとシュノーケルを教えて。潜る事も出来るんでしょ」

「そうだな。でも、気を付けないとどんな遊びでも危険だからな。」

特に海や山などの自然相手は要注意だぞ」

「だから、パパに教えてもらうの。パパは上手なんでしょ」

「判ったからそんなに急かすなよ。あわ……」

「慌てるのが一番危険なんでしょ」

「変らないな……」

「何と？」

「いや、なんでもない。それじゃ講習会だ」

「うん！」

『変らないな』に続く言葉を掻き消して美緒にせがまれてシュノーケリングを教える事になった。

瑞穂の言葉が身に染みる。

心の奥底で鈍い痛みを感じた。

蛙の子は蛙なのか美緒はあつという間に潜る事まで体で覚えてしま

ったようだった。

俺の方がもう良いだろと根を上げるまで何度でも反復練習をしていた。

日が傾き風が心地よくなってきた。

波の音を聞いているとなんだか眠くなってきた。

眠気を吹き飛ばすように大きく伸びをした。

「そろそろ帰るぞ」

「うん、気持ち良いね」

「美緒は凄いな、さすが真帆の娘だな」

「えっ、何が？」

「覚えが早いって事かな」

「なんでママの娘だとなの？」

「真帆はサーファーだったんだろ」

「えっ！ 本当に？」

美緒が驚いた顔をして俺の顔をポカンと見上げていた。

「知らなかったのか？ サーフィンやボディーボードが好きで内地でやっていたらしいぞ。だからかな飲み込みが早いのは」

「そうかな」

「海が好きなんだろ」

「うん、大好き。理由は判らないけど、海の側にいると凄く落ち着く」

「真帆も海が大好きなんじゃないかな？」

「そうだね、海外の南の島にはよく行ってたみたい」

「バリにハワイ、サイパンにロタか……」

水平線に視線を投げて静かに目を閉じた。

「どうしたの、パパ」

「ちよつと、疲れたかな」

「ねえ、パパは海は好き？」

「好きだよ、だから石垣島に居るんじゃないか。海が俺の恋人かな、でっかくて優しく包んでくれて。怒った時は荒れ狂って怖いけどな」

「それって、パパじゃん」

「ん？ 何か言ったか？」

「なんでもない、帰ろうパパ」

「そうだな」

も、変わったな

マンションに戻り俺の部屋でパソコンに向う、楽天を開き本皮のベルトポーチを注文しようとしていた。

「美緒、色は何色が良いんだ？」

「パパのは何色なの？」

「キャメルだ」

「同じの」

「大きさは？ S・M・Lとあるぞ」

「……………」

返事がないので振り返ると俺のベッドの上でポーチから人の財布をだして、自分の財布と携帯を入れていた。

「何してるんだ？」

「パパと同じ大きさが良い」

「そう言うことか」

どうやらポーチに自分の財布と携帯が入るか確かめていたらしい。

「他に欲しい物はあるのか？」

「うん、ジーンズが欲しい。パパと同じ奴」

「はあ？ あんな……………」

嫌な予感と言うかあまりにもストレート過ぎて目を細めて再び振り返った。

「何よ、そんな目で見る事無いでしょ。約束したもんね、や・く・そ・く」

とりあえずポーチを注文してジーンズを探し始める。

「パパのジーンズってリーバイスだね」

「そうだリーバイスの501オリジナルボタンフライ」

「定番中の定番だよな」

「昔はスリムとか穿いていたけど20年以上501かな」

「す、凄い」

「ただ、面倒だろ他に探すのが」

「直ぐに面倒臭いんだから」

楽天の中を検索していく、そしてリーバイスのレディースを見つけ
た。

「美緒、501のレディースモデルがあるけど」

「どれどれ」

美緒が後ろから俺の肩越しに顔を出した。

「近いぞ、美緒」

「嫌なの？」

「そうじゃなくて……暑い」

「馬鹿」

「サイズは？」

「うん、22インチかな」

「裾上げはどうするんだ？」

美緒がいきなりマウスに置いた俺の手の上に手を重ねてマウスを動かした。

「これ！」

「はぁ、これで良いんだな。枚数は2枚と」

注文画面に移しパスワードを打ち込んで後は注文確定するだけのところ
で少し躊躇した。

「えい！ 注文完了！」

美緒がマウスを左クリックした。

「まあ、良いか。買い物に行くぞ。何が食べたい」

「うつんと……パスタが良いかな」

「好きだなパスタ。飽きないか？」

「飽きないもん！」

「それじゃ、そのマイバッグを持ってくれ」

「これ？」

車の鍵と携帯を持って椅子から立ち上がり美緒に言うと、美緒が汚い物でも摘むように青いキャンパス地のバッグを摘みあげた。

「ああ！『Rag Panttry』の春夏新作のキャンパスバッグ！それもママが欲しがってて買えなかったブルー！な、何でパパが持つてるの？」

「ネットで気に入って買ったんだが、それがどうしたんだ？」

「湘南で凄い人気があって……パパって流行り物好きなんだ」

「あんな、俺は気に入った物しか買わないよ。どこの流行り物好きが20年以上501なんだ？」

「へえーそうなんだ」

美緒が目を細めて俺の顔を軽蔑する様な目で見た。

「くだらない事を言ってるって晩飯作らないぞ」

「いじわる！」

美緒は鼻歌を歌いながら車のバックミラーに下げてあった3体のロコペリの内のスカイブルーとピンクの2体をご機嫌で指に引っ掛けてクルクル回しながら歩いている。

「なあ、パパ。この変な人形は何？　パパのポーターのバッグにも付いてるよね」

「ロコペリって言うて元はココペリっと言うネイティブインディアンの精霊の一種で豊穡や子宝、そして幸運を笛を吹きながら呼び寄せるって言われているんだ。そのココペリがハワイに伝わってロコペリになったんだ」

「色には何か意味があるの？」

「スカイブルーは秘めた力をパープルは安らぎでピンクは愛情、グリーンは……華やかさだったかな」

「それじゃ、美緒はパパとお揃いのスカイブルーとピンクが良いな！　良いんでしょ貰って」

「どうぞ、ご自由に」

「えへへ、嬉しいな」

「美緒も変ったな。明るく元気になった」

「石垣島のお陰かな、後はパ……なんでもない」

「変な奴だな」

「良いの良いの、気にしない」

美緒を連れて車で直ぐの『タウンプラザかねひで』に買い物に来ていた。

「岡谷のお兄ちゃん！」

かねひでの中をカートを押しながら買い物をしていると不意に名前を呼ばれた。

声のする方を見ると喜色満面の女の子が1歳半くらいの赤ん坊を抱っこして手を振っていた。

「久しぶり！ 元気してた？」

「元気だったぞ」

「あれ？ その娘は誰？」

口コペリを指で回してご機嫌だった美緒が小さくなり、俺の後ろで隠れる様になっていた。

「秋香あきか達の妹になるかな」

「はあ？ 妹って……まさか岡谷のお兄ちゃんの子どもなの？ こんな大きな女の子が居たなんて…… と言う事なの？」

秋香の笑顔が驚愕に変わりそして疑念になっていく。

「昔、付き合っていた彼女の娘だよ。父親を探しに石垣に来たんだ」

「でも、なんで岡谷のお兄ちゃんの所に居るの？ それに秋香達の妹って、もしかして」

「無きにしも非ずっというか可能性は高確率かな」

「で？」

秋香が俺の目を真っ直ぐに見つめてきた。

「そんな怖い目で見えるな、夏実と知り合う前の話だよ」

「そうなんだ、始めまして新城秋香あらしろあきかです。この子は娘の美夕みゆうです」

秋香が俺の後ろを覗き込むようにして美緒に自己紹介をした。

美緒は不安げな目で俺を見上げていた。

仕方なく手を取って俺の横に引っ張り出した。

「長女の秋香と孫の美夕だ、こいつは……」

「始めまして大羽美緒です。パパじゃない、岡谷さんの所にお世話になってます。歳は14歳です」

俺が紹介しようとする和美緒が強張った顔で自己紹介をして頭を下げた。

「あれ？ 今、パパって言わなかった」

「そ、その。あの」

秋香が美緒の顔を覗き込むように顔を近づけると美緒がシドロモドロになった。

「うふふ、可愛いんだ。美緒ちゃんか宜しくね、仲良くしようね」

「えっ？」

「だって妹なんですよ。今度、私の妹の茉冬まふゆを紹介するね。弟の春介しゅんすけは内地に居るから紹介できないけどね」

「は、はい」

「それじゃ、岡谷のお兄ちゃん。今度、皆でご飯でも食べに行こうね」

「そうだな」

秋香が美夕を抱いて手を振りながら笑顔で歩いて旦那の居る方に歩いていった。

美緒を見ると呆気にとられて放心状態になっていた。

「何を惚けているんだ」

「だ、だっていきなりパパの娘さんに会うなんて思ってもみなかったんだもん。それに孫まで居るなんて……でも、あれ？ 秋香さんって何歳なの？ それに岡谷のお兄ちゃんって」

「秋香は24かな」

秋香の年齢を聞いた瞬間に美緒の頭の中は？マークで溢れ返ってしまっただった。

「秋香も春介も菜冬も夏実の子どもだよ。俺とは血の繋がりは無いよ」

「えっ？ えええええ！」

美緒の叫び声が店内に響き、周りの買い物客が何事かとこっちを見た。

俺はそ知らぬ振りをしてカートを押して歩き始めた。

「パパ！ 待ってよ！」

何か変だなあ（美緒視点）

その朝はキッチンから漂ってくる美味しそうな匂いと、トントンとリズミカルな包丁の音で目が覚めた。

枕元に置いてある携帯のアラームはまだ鳴らない。

という事はまだ寝ていられる時間なのだけど、美味しそうな匂いが私のお腹の虫を叩き起こしたみたい。

キッチンに行くとパパがジーンズにストライプ柄のシャツの裾をダラリと出した格好で料理をしていた。

「パパ、おはよー」

「おはよう」

「ん？」

何か変だなあ、パパの寝起きが悪いのは毎日の事なんだけれど……今日はいつになく声が低くって怒っている様な顔をしていた。

「パパ、朝から何を作って……」

パパの手元を見て私は固まった。

小ぶりの２段重ねが出来るお弁当箱に綺麗にお弁当を詰めているところだった。

「お弁当だあ……なんで？」

「今日は弁当の日なんじゃないのか？ 美緒」

「えっ？ あっ！ ……………」

パパがいつになく低い声で言った、実は今日は月に何回かあるお弁当の日だった。

今まではパパに言い出せずに買い弁と石垣島では言うんだけど。

朝、近くのお店でお弁当の変わりになる物を買ってから学校に行っていた。

「パパ、怒ってる？」

「さあな」

「怒ってるじゃん、ゴメンなさい」

「何で美緒が謝るんだ？」

「だって、パパは働いてるから悪いと思って……」

「言い出せなかったと？　それで金子先生からメールが来て初めて俺は月に何回か弁当の日がある事を知ったと？」

「せ、先生からメール？」

「そうだ、何かあつたら連絡をもらえるように、この間アドレスを教えておいたんだ」

「う、嘘。本当にゴメンなさい、これからはちゃんと言うから」

「ほら、出来たぞ。自分で包んで持っていけ」

「ありがとう」

パパはぶつきら棒にそう言うつと自分の部屋に行ってしまった。

用意されていた朝食を食べてマンションを飛び出した。

「もう、あんなに怒らなくても良いじゃんか！　パパの馬鹿！」

ひとり言を呟きながら学校に向った。

マンションから学校までは歩いても10分もかからない距離だった。学校に近づくに連れて制服姿の生徒が増えてきた。

黒いズボンに半そでの白いシャツを着て学校指定のワインレッドのバックを背負っている男の子、女の子は水色と言えば良いのだろう。か爽やかな色合いのセーラー服の夏服で学校指定のバッグを持った。り背負って歩いている。

「美緒！　おはよー！」

「おはよー　泉美^{いずみ}」

「あれ？　今日はなんだか元気が無いなあ」

「そんな事ないよ」

泉美は石垣島で一番最初に出来た友達なの、玲華との喧嘩の後でクラスを牛耳っていた玲華が鳴りを潜めて最初に話しかけて来てくれたのが泉美だったの。

「あれ？　美緒は今日は買い弁じゃないの？」

「う、うん。あのね、パパが……」

「ほほう、また噂のパパですか？」

泉美が腕組みをしながら勝手に納得して頷いている。

「ん、もう。そんなんじゃないもん。今日はパパがお弁当を作ってくれたの」

「えっ？ あのお嬢様のモンスターママを退治したパパお手製のお弁当なの？」

「う、うん」

「よし！ じっくりと拝見させてもらうからね。もちろん味見もね。急がないと遅刻だよ！」

「待ってよ」

泉美は楽しそうに校門をくぐり昇降口に駆けて行っちゃった。

私も急がなきゃ。

「うは、早く、早く、美緒！」

お昼休みになると泉美が真っ先に私の机まで飛んできて、自分のお弁当は開けずにお箸を持って待ち構えていた。

「もう、そんなに急かさないですよ」

「もしかして、ドカ弁だったりして」

「違うもん、2段重ねのお弁当箱だもん」

バッグからお弁当が入っているライム色の巾着を取り出すと、泉美が不思議な顔をして聞いてきた。

「美緒？ その可愛いライムグリーンのアーガイル柄のお弁当箱セツトって美緒が選んだの？」

「えっ？ 違うけど」

「はあ？ だって美緒のパパって美緒が石垣島に来るまで独り暮らしだったんでしょ。それも40過ぎのオジサンでしょ。おかしくない？」

「そうかな、仕事場の女の子に借りたのかも」

「ふうん、まあ良いや。それではオープン……」

泉美が勝手に人のお弁当箱の蓋を開けて固まっている。

「い、泉美？ どうしたの？」

「す、凄い！ 美味しそう！」

泉美に言われて初めてお弁当を見て驚いちゃった。

玉子焼きにコーンが乗ってるシュウマイにウィンナー、それに人参の炒め物に青梗菜か小松菜のおひたしかなあ。

色とりどりのおかずが綺麗に詰められていて、ご飯はいつもの五穀米のご飯に梅干が入ってた。

「それじゃ、玉子焼き。ゲット！」

泉美が玉子焼きを口に放り込んで目を大きく見開いて首を横に振って涙目になっていた。

「どうしたの？ 美味しくないの？」

「美味うま過ぎ！ 普通の厚焼き玉子じゃなくてフワフワのだし巻き玉子だ！ 次はシュウマイ、ゲット！ う、嘘、なんだかクリームコロッケみたい。本当に美緒のお父さんが作ったの？」

「う、うん。朝起きたら殆ど出来てたよ」

「凄すぎる、人参シリシリにこれは中華ぽいから青梗菜のナムルって言うのかな。どれも美味しい、それに野菜がいっぱいのご飯が五穀米？ 美緒の健康を凄く考えてくれてるんだね」

「そうかな、お家じゃ毎日だよ。五穀米とか黒紫米とか」

腕組みをしてフンフンと頷きながら泉美が私の話を聞いて感慨深く溜息をつく、徐に私のステンレスボトルを開けて蓋にお茶を注いだ。

「ん？ 何？ このお茶」

泉美が一口飲んで考え込んでいた。

「もしかして……ハイビスカスティー？ あのビタミンいっぱいなの？ 美肌に効果がある？ で、美緒はニキビが減ってお肌がスベスベになって」

「そう言えば最近便秘しないかも。お家でもこれかハト麦茶だし」

「ハト麦？ これはこれはご丁寧に美肌になる為のお茶じゃん。そりゃ、こんだけバランスのとれた食事をしていれば当然でしょ」

「東京に居た時はママの仕事が忙しくてコンビニだったからなあ」
「羨ましいなあ。オジサンでもこれだけ料理が上手だったら」

泉美が言う『オジサン』がちよつと気になって聞いてみた。

「へえ？ オジサンと言えはお腹が出てて少し髪の毛が薄くなつてたり禿げてたりじゃん」

「えっ？ パパはお腹なんて出てないよ、髪の毛も少し白髪があるけどフサフサで禿げなんかじゃないもん」

「はあ？ 美緒。本当に？ ポロシャツにスラックスのゴルフスタイルでオジサン臭いんじゃないの？」

泉美の言葉に少しだけパパを馬鹿にされているみたいでムカつとした。

「違うもん！ 背なんか180センチもあつて普段はTシャツでリバイスの501を穿いててだらしないけど、仕事中は格好良いんだから」

「180センチ、背高！ チビで禿でデブじゃないんだ。で、仕事中は格好良い？」

「そうだよ、真つ白のシャツをバシつて着てて黒いズボンに長い黒いエプロンをして。髪の毛は後ろに流してて」

「ふうん、そんなに格好良いんだ。今度紹介してよね」

「えっ、う、うん。良いよ。もちろん」

ど、どうしよう。勢いで紹介するって言っちゃった、あんなだしらない普通のパパなんか紹介できないよ。

それに、パパになんて言えば良いんだろ。

とりあえず保留って事で……

泉美の舌は本当に正直だったみたい、パパのお弁当はどれも私好みで凄く美味しかった。

お家に帰ってからお弁当箱を洗って、もちろん完食だよ。

で、パパにまたお願いしますって頼んじやった。

今度はどんなお弁当なんだろう楽しみだな。

でもね、ちよつと複雑だなママの言いつけも守らなきゃいけないし

ね。
悩み多き年頃の乙女って少し古いかなあ
……

SS・誰が変

「その変態野郎！ 何を悦に浸ってるんだ？」
瑞穂の会心の一撃だった。

俺は何も反論せずにパスタを頬張り、白ワインが注がれているグラスを呷った。

「ねえ、美緒ちゃん。そのＴシャツって……」

「パパのヘインズの白Ｔシャツだよ。ぶかぶかだけど可愛いでしょ」

「可愛いけれど……だけどさあ、変じゃない？」

「なんで？ 女の子が男モノを着たら変なの？」

「そうじゃなくって、恋人同士とかなら判る気がするけど」

「親子じゃ変かな？ やっぱり」

美緒が不満げにＴシャツの肩を両手で摘み上げた。

万が一、２人の会話に近づこうものなら蟻地獄に堕ちた獲物の様に色々なモノを浴びせられて切り刻まれてしまうに違いなかった。

パスタの皿とグラスに集中する。

「それに、そのジーパンに革のポーチって岡谷とお揃いでしょ」

「うん、パパに頼んで買ってもらったの。リーバイスのレディース501とキャメル色の革のベルトポーチだよ。でね、ベルトはパパのお勧めで使い回しが良いからってメツシュのデザインレザーベルトの茶色だよ。可愛いでしょ、にひひ！」

美緒が破顔一笑して立ち上がりＴシャツを捲り上げて瑞穂にベルトを見せていた。

「岡谷は何も言う事無いの？ このど変態！」

瑞穂の一撃にも無反応を貫き通す。

「瑞穂さん、パパって昔から変らないの？」

「基本的に変わらないわね。昔のままかなあ、昔の写真でも見せてもらったら」

瑞穂が余計な事を言い出した。気付かれないように一瞥する。

「余計な事を言いやがってっと思ってるんでしょ、岡谷」
「ばれ様の様だった……」

「それじゃ、今度見せてもらおうかなあ？」

美緒が俺の顔を覗き込む、手に持ったフォークを美緒の顔の前に突き出すと美緒が仰け反った。

「あぶ！ まだ、恋もした事が無い乙女の顔に傷が付いたらどうするのよ！ パパのバーカ！」

「人が飯を食っているのに覗き込むからだ」

「絶対にアルバムを探し出してやる」

「パソコンが置いてある上の天袋に入ってるよ。赤ん坊の時からのが全部な」

「え、本当に見ても良いの？」

「美緒に隠さないといけない物なんて俺は持ち合わせてないよ」
「本当かしら」

瑞穂が腕組みをしながら訝しそうな目をして言い放った。

「家宅捜査でも何でもしてみろ。もし、そんな物が出てきたらなんでも言う事を聞いてやる」

「たいした自信ね。まあ岡谷ならありうるか」

「隠そうと思うからいけないんだ、本当に隠したい物は頭の中に入れておけば良いんだよ。誰にも見られないし知られる事もないだろ」

「うわあ、なんだかパパが黒い」

「まあ、岡谷が一番黒いかもね」

「み、瑞穂さんまで」

美緒が信じられないって顔をしていた。

「話は変わるけど美緒ちゃんは今岡谷と同じ格好って嫌じゃないの？」

「え？ どうして？ 親子でお揃いって良くない？ それにパパが持つてる物って凄く可愛いしセンスも良い感じだと思っけど」

「確かにね、狙ってるって感じじゃないんだろっけど」

「狙ってる？」

「女の子受けする物を結構持つてるでしょ？」

「う、うん。それが目的なのパパ？」

美緒が少し不安そうないかがわしい人でも見るような目をしている。
「あのな、美緒が俺の所に来た時の部屋の状態で女の子を誘えるか？」

「うう、あれじゃ無理かも」

「そんなに酷かったの？」

「ゴミ部屋ほどじゃないけど、洗濯物は取り込んで投げたままだし新聞は散乱してるし、台所なんてもう……。今は綺麗だけどね、私が片付けて掃除もしてるから」

「ちゃんとしなさいよ。岡谷パパ！」

「面倒臭い、我慢できなくなれば片付けるよ。昔からそうしてきたんだ」

「我慢てあんたね」

呆れ顔で瑞穂が首を振っている。

美緒は冷めかけたパスタを大急ぎで頬張っていた。

残りが少ないグラスを飲み干してグラスを掲げて瑞穂に催促をする。
瑞穂が『はいはい』と言う顔をしてワインボトルを持って来てグラスに注ぎ始めた。

「もしかして、岡谷って女の子にプレゼントをする時も凄く凝っていたりするんでしょ」

「さあな」

「パパが女の子にプレゼント？」

「そうそう、昔はね誕生日とか送別会の飲み会なんかをスタッフでしてたの。その時も必ず花束とか買って来てたもんね」

「へえ、そんな事をしてたんだ。それじゃパパが特別な人にあげるプレゼントって……」

「気になるよね、美緒ちゃん」

「うん！」

美緒が俺の顔を覗き込み凝視する。

瑞穂はボトルをカウンターに置きっぱなしにして俺の顔を伺っていた。

「な、なんなんだ。2人とも」

「知りたいなあ、パパ」

「隠さないといけない物なんて岡谷には無いんですよ」

「無いぞ、だからってベラベラ喋ると思ってるのか？」

「「思う！」」

2人は微動だにしないで俺の顔に穴が開くんじゃないかと思うくらい見ている、まるで心の中を見透かされているんじゃないかとさえ思えた。

「黙秘権を……」

美緒が俺の顔を睨みつけるように目の前にフォークを突き出した。

「危ないって言ったのは美緒だぞ。それに」

「それに何？ もう、恋も結婚もしたんでしょ。顔に傷が付いたって気にしないでしょ」

「あのなそんな事を、真面目な顔をして言うもんじゃないだろ」

「誰にプレゼントをあげたの？」

「はあ？ まだ何も話してないだろうが」

美緒の瞳が真っ直ぐに俺をロックオンしている。

「ご丁寧に腰に両手を当てる……」

美緒がこうなってしまうたら神様でも尻尾を巻いて逃げ出すはずだ。仕方なく溜息をついて前置きをしてから口を開いた。

「昔々の話だぞ、いいな」

「うん！」

興味津々とした顔つきになりテーブルに頬杖を付いて美緒の瞳が爛々と輝き出した。

「良くブーゲンビリアを使っていたかな」

「ブーゲンビリアってあの綺麗なピンク色の？」

「そうだ、あの花の様に見える綺麗なピンクの所を乾燥させて緩衝材代わりに使うんだよ」

「カンショウザイ？」

「プレゼントが壊れないようにペーパーパッキングって言う細く切った紙とかが入ってるだろう」

「うわぁ、箱を開けるとピンク色のブーゲンビリアからプレゼントが出てくるの？ 色が変わったらしらないの？」

「しばらくは変わらないよ」

「キザ過ぎない、ロマンチスト岡谷」

瑞穂が感心したような顔をしているがどこことなく軽蔑まじりの声だった。

「昔々の話だつて断つただろうが」

「それじゃキザついでにどんな物を誰に送ったの？」

「あのな……」

話を終わらそうとして美緒の顔を見るとキラキラとした瞳で俺を見ている。

「余計な事ばかり言いやがって」

「早く早く、パパ」

「表皮が付いたままの丸太をくりぬいて綺麗にニスを塗った物を箱代わりにして、小さなシャコ貝にアクセサリーを入れてかな」

「誰に送ったの？」

「里美だったかな美幸だったかな、昔の事だからな忘れたよ」

「ママじゃないんだ」

「さぁ、真帆だったかもな」

「ふうん」

「私もそんなロマンチックなプレゼント欲しいなあ」

美緒の反応はなんだか微妙な気がしたが、瑞穂がこれ以上余計な事を言わないように切り捨てた。

「誰が2度とあんな恥ずかしいプレゼントを送るか、若気の至りだよ」

「やっぱり岡谷はオープンな変態なんだ」

「誰が変態だ！」

「パパ!」「岡谷!」

知らず知らずの内に蟻地獄に引きずりこまれて切り刻まれて料理され肴にされていたのは俺だった。

女は怖い……

今のまま

ゴールデンウィークが終わり石垣島は本格的な梅雨の時期に突入していた。

梅雨と言っても内地の梅雨のようにシトシトと長雨が続くのではなく、ザッと降り晴れ間が出る事が多いが不安定で梅雨前線の気分次第と言った所なのだろう。

今日は美緒も俺も休みだと言うのに雨模様でパツとしない天気だった。

「なあ、パパ！ 退屈だよ」

「市立図書館でも行くか？」

「ええ、どこどこ？」

「図書館だよ。暑くもなく寒くもなく丁度良い空調で寝るにはもってこいだぞ。なにより静かだしな」

ベッドの上でゴロゴロしている俺をベッド脇の椅子に座りながら美緒が蹴りつけた。

「痛っ！ 最近遠慮が無いな」

「バーカ、いつまで寝てるんだよ」

「今、何時だ？」

「もう、お昼前だよ」

「それじゃ、着替えるか。着替えるから出て行け」

「なんで？」

「意味わかんねえ事言っなよ。き・が・え・る・の」

「着替えれば」

「はいはい」

薄手の綿麻のズボンを脱いで、ジーンズに履き替えて風呂場に向かい顔を洗う。

鏡を見ると盛大に寝癖がついているので手に水をつけてとりあえず

撫で付けた。

「飯でも食いに行くか」

部屋に戻り美緒に声をかけると有り得ないと言う顔をして俺を見上げていた。

「その頭で出掛けるの？」

「いけないか？」

「信じられない、美緒が恥ずかしいからここに座れ」

溜息を付きながら美緒の指示通り美緒が腰掛けていた椅子に座ると、美緒がブラシで俺の髪の毛を漉きだした。

「本当に仕事中和ギャップがあり過ぎ。もう少し家でもきちんとしてよね」

「家に居る時ぐらい好きにさせてくれよ」

「しょうがないなあ、美緒が来る前はどんな生活してたの？」

「男の独り暮らしなんて同じ様なもんだろ。ゴミを溜めて部屋は散らかり放題で」

「でも、美緒が始めて来た時はそんなに汚くなかったじゃん」

「まあ、我慢の限界が来て一応片付けたからな」

「パパの髪の毛ってなんでこんななの？ 寝癖が直らないよ」

「昔から一度付いた寝癖はなかなか直らないんだ」

仕方なく風呂場に向かい洗面所で頭から水をかぶり、タオルで拭いてブラシで髪を撫で付けながら部屋に戻った。

「これで良いだろ」

「えっ、あ、う、うん」

美緒と目が会うと一瞬だけ何かに驚いて目を逸らした。

「変な奴だな」

「ちよっと、パパの顔に驚いただけだよ」

「毎日、見てるだろ」

「そうやって髪の毛を上げると……」

「いけてるか？ 瑞穂なんかには岡谷はいけてるって言われるけれど。どうも信じられなくてな」

「パパは、今のままでいいの！」

車で東海岸沿いの国道390号線を北上する。

「うわ、ツタヤがある。それに大きなスーパーがいっぱい」

「そう言えばこの辺りにはまだ連れて来た事がないな」

「この辺じゃなくて石垣島も案内してくれた事無いじゃんか」

「そうだな、それじゃ今日は天気が悪いけど東海岸沿いをドライブだ」

真栄里・大浜・磯辺・宮良・白保と抜けて車を走らせていると美緒が首をかしげながら聞いてきた。

「なあ、何で今日はカセットじゃないんだ？」

「最近、調子が悪くてな。それに遠出する時は携帯を繋いで音楽を聴く方が多いかな。携帯にはお気に入りの歌が入っているからな」

「ふうん、どんな歌が入っているの？」

「小田和正・今井美樹・supercell・Miss・Mondayと……」

「と？」

「アニソン？」

「はあ？ アニメの歌？ オタク！」

「オタクなんだからしょうがないだろ」

「それじゃ、今流れているあまり聴いた事の無い曲も？」

「これは、『supercell』の『さよならメモリーズ』でアニソンではないけど次の『君の知らない物語』がアニメのエンディングで同じグループだな」

「まあ、良いや。アニメっぽくないから」

「そりゃそうだ。最近のアニソンは有名なアーティストの曲を使ったりしているからな。でも俺が見るのは殆どが深夜アニメで子ども向けには作られてないんだよ。だから美緒が聞いたことの無い曲は殆どアニソンだと思うぞ」

「本当に好きなんだな」

「まあ、暇つぶしに見ていて嵌ったって感じかな」

「暇つぶし？」

「そうだ、冬場は海に行くわけでもなく。俺はあまり飲みに行く方でもないからな」

「友達と遊ぶとか？」

「その友達が居ないんだよ。若い頃は遊んでいたけどな歳を重ねると結婚して家庭をもつと家庭中心になるからな」

「ふゝん」

納得したのかしていないのか良く判らないが、美緒は親指を口に当てて何かを考えているようだった。

今日日

「パパも結婚して家庭を持つて家庭中心になつたのか？」

「そうだな、家庭中心というより必死だったかな。出来るだけの事はしてやりたかったからな。仕事をして学校の行事にはなるべく顔をだして、大変だったけど楽しかったかな」

「そうなのか？　じゃなんで」

「別れたのか？　理由は何でだろうな知らない間に離れていて埋められないものが出来ていたからかな」

「埋められないもの？」

「そうとしか言い様がないんだと思う」

美緒が再び考え込んでしばらくして質問を変えてきた。

「それじゃ、何で結婚しようと思ったんだ？　相手には3人の子どもがいたんだろ」

「居たよ。秋香が小5、春介が小3、茉冬はまだ幼稚園だったな知り合つた時は」

「信じられない、普通じゃないだろ」

「それじゃ、美緒に聞くが普通ってなんだ？　好きな人が出来て結婚して子どもが出来てか？」

「うん、それが普通だと思う」

今度は俺が言葉を選びながら考え込んだ。

「好きになつた人に子どもが居ただけの話だよ。それに真帆だつて好きな人の子どもだから美緒を産んだんじゃないのかな」

「そうかな、それじゃ何でママは本当のパパを教えてくれないんだろ」

「それは真帆本人のみぞ知るだな。無理矢理聞くのは酷つてもんだぞ」

「そうだねって、何でパパがそんな事言うのさ。パパかも知れないんだよ、知りたくないの？　もしそうだとしたらママが好きなのは」

「そこまでだ。人の気持ちは流れる雲の様に移ろい変わるもんだからな」

「本当にパパはそう思ってるの？」

「まあ、今日日変らない奴なんてよっぽどの馬鹿か本当の愚図だな」

「パパには変らない物があるって言ったじゃん！」

美緒が唇を噛み締めて俺の事を見ている。

「変らない物か……変えられなかったものなのかもしれないな」

「それって誰かの事を想い続けてるって事なの？」

「黙秘権を行使します。これ以上は弁護士を通してくださいなつか。俺は馬鹿で愚図の上に屑なんだよ」

「もう、直ぐにはぐらかすんだから。パパのケチ！　へそ曲がり！

おたんこなす！」

「おお、新空港建設地が見えてきたぞ！」

「えっ、あつ。またパパにやられた！」

美緒がキョロキョロと辺りを見渡す、綺麗な出来立ての道をひた走る。

今回だけ

美緒は助手席でパツとしない天気島の風景を眺めている。

俺の過去の話を聞いてから口数が少なくなり、何を話しかけても生返事だった。

海沿いの道を走り続ける、窓の外を見るとくすんだ鉛色の様な空と空の色を写しこんだ海がどこまでも広がっていた。

正面に玉取崎の展望台が視界に入ってきた。

この天気では綺麗な眺望が望めるはずも無く展望台には向わずに目的地に向う。

玉取崎の麓の左手に黄色い可愛らしい平屋建てのお店が見えてきた。三叉路を左折してお店の裏にある駐車場に車を停める。

「着いたぞ、美緒」

「うん」

「元気が無いな、まあ腹がいっぱいになれば元気になるだろ」

「……………」

お店の庭を通り店のドアを開けると石田さん夫妻が出迎えてくれた。

「いらつしゃい、久しぶりだね」

「ご無沙汰してます。石田さん。色々と忙しくって」

小柄な奥さんが笑顔で話しかけてきた。

「色々はその子だな」

「まあ、色々と」

背が高く痩せ型で日焼けした旦那さんが美緒の顔を見ていた。窓際のカウンターの席に腰を落ち着かせる。

「メニューはこの黒板に書いてあるから」

「美緒は何が食べたいんだ？」

美緒が直ぐ目の前に掛けてある黒板に目をやった。

「ここのお勧めはなんなの？ パパ」

「「パパ?!」」

力の抜けた美緒の言葉に石田さん夫妻が驚いて声を上げた。

「岡谷君? パパってどう言うパパなの?」

「まさか、援交じゃ」

「勘弁してくださいよ。俺にはそんな趣味も援助するような金も無いですよ」

「で、でもパパって……まさか」

「隠し子ですか? まあ、当たらずといえども遠からずですかね。」

昔の彼女の娘で父親を探しに俺の所に来てしまったんです。名前は
大羽美緒です、宜しくお願いしますね」

「いやいや、驚いちゃった」

「でも、岡谷君のところは相変わらず凄いな」

感心しているんだか呆れているんだか判らないが、石田夫妻はお互い顔を見合わせて頷くような首を振るような感じていた。

俺は俺であと何回同じ様な説明をしなければいけないのかそんな事を考えていた。

すると突然でカウンターを叩いて美緒が声を上げた。

「お腹が空いた!」

「ゴメン、ゴメン。そんなに怒るなよ。久しぶりなんだから挨拶ぐらいさせてくれ」

「どうせ、美緒は隠し子ですよ、ふん! もう帰る!」

美緒が怒りだして立ち上がった店の出口に向おうとした。

「まあまあ、落ち着いて。僕らも突然の事で驚いてしまってゴメンね」

「ゴメンさいね、ゆっくりしていつてくれないかなあ」

石田夫妻が美緒を宥めるように言い聞かせてくれた。

「すまなかった、美緒。美緒の気持ちも考えずに隠し子なんて言つて、2度と隠し子なんて言わないから許してくれこのとおりだ」

美緒が怒り出すのは当然なのかもしれない、父親が誰だか判らない

子どもが受けるであろう差別を気付いてやれなかった。

完全に俺自身の失態だった。

立ち上がって最敬礼に見えるくらい頭を下げる、すると美緒と石田夫妻が驚いたような顔をしていた。

「ほら、岡谷君も謝っているし。ね」

「しょうがないなあ、今回だけだよ。許すのは」

渋々、美緒が椅子に座ってくれた。

それを見て俺も椅子に腰を降ろした。

俺の一押しの石垣牛のシチューを2つ注文して、美緒の顔を伺う。

「なに？ 美緒の顔に何か付いてるの？」

「悪かったなと思って」

「もう良いよ、ちゃんと謝ってくれたし。そうだ、『はんなとーら』ってお店の名前に何か意味が有るの？」

「この地方の方言でたしか夫婦って意味じゃなかったかな」

「そうなんだ」

石田さんの奥さんが料理を運んでくれた。

「はい、お待ちどうさま。今日は天気はいまいちだけど、ゆっくりしていったね」

カウンターに置かれた大きなお皿から良い匂いが立ち込めていた。

「石垣牛の頬肉を使ったシチューになります」

「いただきます」

美緒が籠に入れてあった木のスプーンを取り出して頬肉を口に運んだ。

表情がコロコロと変った。

「ん！ おいひい！ パパ、凄くおいひいよ」

「美緒、食べるか喋るかどっちかにしろよ」

「だって、だって。メチャ、美味しいんだもん！」

「美味しければ、こんな遠くまで連れて来ないよ」

「ねえ、ねえ、このシチューに入ってる白いの何？」

「ゆし豆腐って言って型に入れて固める前の豆腐と冬瓜と人参それ

にオクラだな」

「ふうん、ゆし豆腐って言うんだ。フワフワで美味しいね」
美緒が顔をほころばせて笑った。

「はい、黒紫米のご飯にアーサー汁。特別にサラダのサービスね」

「すいません、なんだか気を使わせてしまつて」

「気にしない気にしない、笑顔が一番でしょ」

「そうですね」

黒紫米のご飯を見て、美緒が何か言いたげな顔をしていた。

「どうしたんだ？」

「ご飯が白くない」

「あのな、栄養たっぷりなんだぞ。ポルフェノールやアントシアニンがたっぷり鉄分やビタミンも摂れるんだぞ」

「あら？ 苦手なの？」

石田さんの奥さんが少し心配そうに聞いてきた。

「う、ううん、家でも五穀米とかだから……」

「へえ、岡谷君って体に気を使っているんだ」

「まあ、ちよつと入院騒ぎなんか起こしたもんで」

「は・た・ら・き過ぎなのよ、岡谷君は」

「実家の家訓は働かざる者喰うべからずですから」

「もう、本当に真面目なんだから」

「あー美味しかった。ご馳走様でした」

美緒が満足げにお腹を擦っていた。

そこに奥さんがシャーベットを持ってきてくれた。

「はい、これ食べて。シークワアーサーのシャーベット。岡谷君はアイスコーヒーで良いわね」

「ありがとうございます」

「シーク？ ワアー？ サー？」

「はい、岡谷君！ 教えてあげてね」

「前に教えなかったか？ 沖縄特有の柑橘系の果物でミカンの原種に近いもんだよ。飲み物にもデザートにも料理にも使える優れもの

だ。沖縄方言でシーが酸っぱい物、クワァーサーが食べ物で酸っぱい食べ物って言う意味だよ」

「良く出来ました」

「お腹いっぱいじゃないのか？」

「女の子はデザートは別腹だもんね」

「うん！ 美緒は若いから」

「悪かったなオジサンで」

「あ、パパが拗ねた。可愛い」

「大人をからかうな」

石田さん達が温かい眼差しで俺と美緒を見ていてくれた。

「しかし、岡谷君のあんな真面目な顔を始めてみたよ」

「まいったな、俺って普段はどんな顔をしているんですか？」

「どんなって、なあ」

「疲れた顔しか見たこと無いものねえ」

「勘弁してくださいよ」

「ふふふ、でも真面目な話。本気なんですよ」

「大真面目で本気じゃなきゃ、子育てなんて出来ないじゃないですか」

「そうだったね。3人も育て上げたんだもんね」

「まあ、親が無くても子は育つとも言いますけどね」

「親は子の鏡よ。良い意味でも悪い意味でも」

「そうですね」

美緒が真面目な顔をしながら俺と石田さん達の話の話を聞いていた。

「パパはどんな親だったんだ？」

「俺か？ さあな、良い親か悪い親か決めるのは子どもだからな。

俺は悪い親だったかもな」

「なんでそんな事を言うんだ」

「家庭を捨てたのは俺だからだよ」

「えっ……」

「なんてな、嘘だよ」

「もう、本当につかみ所が無いんだから！ フラフラしておちやられて俺が言くと美緒が頬を膨らませて怒り出した。石田さん夫妻は笑っているが複雑な表情をしていた。

『今日は』

『はんなとーら』まで来た道をひたすら走り続ける。

カーステレオからは俺のお気に入りのMiss Mondayの曲が流れていた。

「パパ、石田さん達とはどういう知り合いなんだ？」

「前の仕事先のオーナーの親戚だよ。俺の事を気にかけてくれる人たちだよ」

「前のつてどんな仕事してたの？ 今まで」

「ホテルでサービスの仕事が多かったな。フサキに軽井沢に宮平、そうそう初めて石垣に来た時は全日空ホテルでバイトしてたんだ。それにイタリアンのワインバーの調理だろコンビニの深夜番もした事あるし居酒屋の雇われ店長に他の居酒屋で火口と揚げをしていた事もあるな」

「本当にフラフラと色んな仕事をしてるんだな」

「内地に居た時も色んな仕事をしたぞ。高校卒業して直ぐにケーキ屋に4年勤めて、アクセサリー関係の営業のアシスタントだろ。それから石垣島に来て、戻ってきてから派遣に登録してテレビ局の大道具をしてたりファッショニングの製造や日産の期間従業員をしてから石垣島に移って来たのかな」

「凄いだね」

「ただ飽きばいだけだよ。趣味と一緒にだ、何でも広く浅くだから長続きしない」

「判ってるのに駄目なのか？」

「性分かな。直ぐに上司や会社と衝突して、堪え性がないんだよ」
「そうなのかなあ」

美緒が来る時と同じ様に何かを考え込んだ。

「ねえ、パパつてもしかして好きな事に対してはストレートじゃないの？」

「皆そうだろ」

「そうじゃなくって、パパは真っ直ぐ過ぎるんだよ」

「へそは信じられないぐらい曲がりきってるけどな」

「ああ、自覚はあるんだ」

「歳を取ると腹の中が黒くなって来るんだよ」

「うわあ、聞きたくないよ！ そんな話、パパのイメージが」

「美緒の頭の中のパパのイメージってどんななんだよ」

「え、えーとね。いつも仕事みたいにビシっとしているパパかな？ 仕事も家事も女の扱いも超一流で完璧なの」

「無理、聞いてるだけで息苦しいぞ。仕事だけで十分だろ、それに家事だってそこそこなしているだろ」

「えー、あんなにだらしないのに？ 片付けも出来ないくせに」

「悪いとは思ってるんだぞ。それに女の扱いが上手ければ苦労しないよ」

「それは、何となくユーカさん達の話から判る気がする。誰にでも優しいんだもんね」

「まあ、そう言うことにしておいてくれ」

毎回、不思議に思う事がある。

遠出した時の帰りの時間が短く感じるのは何故なんだろう。

もう直ぐ白保の集落の入り口にさしかかろうとしていた。

「そうだ、少し寄り道するぞ」

「えっ？ どこに？」

「知り合いのお店だ、美緒も気に入ると思うけどな」

白保の集落を過ぎて宮良の特別支援学校の先でスピードを落として小さな看板が出ている民家の庭先に車を入れる。

「ishigaki...yururu...?」

奥まで進むと白いガレージの入り口にラタンの暖簾が風に揺れていた。

車を店の前に停めて店に入る。

「こんにちは！」

「あら、おじい。いらっしやい……今日は女の子連れなんだ」

「『今日は』を強調してません？」

「だって、この間はたしかお友達の年上の女性と一緒にだったでしょ」

「まあ、否定はしませんけど。俺の娘ですよ」

「む、娘さんのの？ どこにおじいの血が流れてるの？ 凄く可愛い子じゃない」

「それでも俺の娘ですよ」

「だから、今回は安全運転なのね」

「いつもは違いますか？ 安全運転しているつもりなんですけど」

「うーん、少し荒いかな」

「すいませんでした、以後気をつけます」

そんな話をしていると美緒は鼻歌交じりで、俺達の会話には聞こえている筈なのに無関心な振りをしてに綺麗な碧いガラス達を眺めていた。

「美緒、欲しい物があれば言えよ」

「うん」

俺の方を向かずにガラスを見ながら返事をした。

「ねえ、おじい。本当に娘さんのの？」

小声で a y a m e さんが聞いてきた。

「昔の彼女の子ともなんです。父親を探す為に来たんです、ここまで」

「それじゃ」

「調べた訳じゃないですけど、多分」

「そうなんだ、おじいも大変だね」

「楽しいですよ」

「それなら良いけど」

美緒を見るとピアスやネックレスを手にとって光りに翳しながら眺めていた。

「良い子そうじゃない」

「俺の娘が良い子じゃ無い訳が無いじゃないですか」

「たいした自信なこと」

美緒に近づき声をかけた。

「綺麗だろ」

「うん、でもピアスの穴なんて開けてないし。ネックレスはね」

「それじゃ、携帯のストラップはどうだ。こんな感じで」

俺の携帯を美緒の目の前に出すとストラップに触ってまじまじと見ていた。

「ここで買ったのかあ。前から気にはなっていたんだけどさあ。それじゃこれにしようかな」

美緒が手に取ったのは雫型の綺麗なグラデーシヨンのガラスで可愛く揺れていた。

『ishigaki...yururu...』からの帰り道はのんびりゆつくりと走った。

「なあ、あの人も友達なのか？」

「知り合いだよ。ブログであの店を知って何度か足を運んだ事があるんだ。お互いにハンドルネームしか知らないよ」

「『おじい』がパパのハンドルネームなのか？」

「そうだ、前に仕事をしていた居酒屋がスタッフをニッケネームで呼び合う店だったんだ。その店で一番年上だったから『おじい』って付けたんだ」

「えっ、自分で付けたのか？」

「そうだよ、いけないか？ 結婚もして子どもが居ればオジサン!! おじいだろ」

「ブログね、こんど見ちゃお」

「美緒が見ても面白くないぞ」

「それは見る人が決めるんですーだ」

今年の

今年の梅雨は晴れの日が少ないような気がしていた。

雨が降らなければそれはそれで島では水不足に悩まされ困った事になってしまうのだけど。

雨の所為なのか美緒がイライラしていた。

「ああ、もう何で雨ばかりなの。嫌になちゃう、気は滅入るし」

「何を梅雨に八つ当たりしてるんだ。もう直ぐ梅雨も終わるよ」

「そんな事、パパに判るわけ無いじゃない！ 馬鹿じゃないの？」

「今度は俺に八つ当たりか？ もしかして美緒お前」

「変な事を勘ぐらないでよね。私だって女の子なんだから失礼ですよ！」

「悪かった、ゴメンな」

「もう、謝らないでよ……」

数日後にはハーリーが行われようとしていた。

年に一度の海人（漁師）の盛大なお祭りだ。

八重山の各地で行われるが中でも浜崎町の石垣漁港で行われる『大海洋祭マントピア八重山』と合同で行われる、石垣市爬龍船競漕大会『海神祭』が一番盛大だ。

そして、ハーリーの鐘が鳴れば梅雨が明けると言われるくらいハーリーが終わると沖縄に夏本番がやってくる。

『海神祭』の前日くらいから美緒が体調不良を訴え始めていた。

「美緒、辛いなら学校を休んだらどうだ？」

「平気だよ、このくらいいつもの事だし」

「そうなのか？」

「それに、明日は朝からハーリーの応援にクラスで行くんだから」

「そうだったな、楽しみにしていたもんな」

「うん、いつてきまーす」

「気をつけていくんだぞ」

「はい」

石垣市爬龍船競漕大会『海神祭』では中学校対抗や職域と呼ばれる会社やお店で参加する団体ハーリーに女性だけのマドンナレースなどが行われる。

そして海人（漁師）による御願ハーリーで始まり東1組・東2組・中西合同と地区別の海人が転覆ハーリーやメの上がりハーリーで順位を競う。

年に一度の盛大なお祭り&レースな訳で応援する方にも力が入り、島のオバーもあらん限りの声を上げ太鼓を打ち鳴らして応援する一大イベントだった。

美緒達も学校の代表として応援に行く事になっていた。

初めての『海神祭』を美緒はとても楽しみにしていた。

しかし、美緒は体調不良を理由に学校を早退して帰ってきていた。

メールで連絡があったが大丈夫と本人が言っているので、俺はいつもどおり店で仕事を終わらせて片づけと翌日の準備をしていた。

「チーフ、美緒ちゃん元気ですか？ たまにはお店にも連れて来てくださいよ」

「まあ、元気かな。ユーカ、美緒の連絡先を教えるから一緒に遊べば良いだろ」

「それは、駄目です。メルアドとナンバーは直接本人と交換するのがルールです。ね、ミポ」

「うん、そうだね」

「そうか、あいつ今日は具合が悪くて学校を早退して家で寝てるよ」

「ええ！ 具合悪いのに独りぼっちなんですか？ 信じられない、

チーフの人でなし！ 鬼！」

「それじゃ聞くが誰が働いて俺と美緒に飯を食わせてもらえるんだ？」

「それはそうだけど」

「それじゃ、後は任せたぞ。俺はこれで帰るからな。オーナーに鍵を閉めてもらえよ」

「はい、なんだやつぱり心配なんじゃん」

「当たり前だろが。それじゃお先」

「「お疲れ様でした！」」

由梨香と美穂里に見送られて店を後にしてマンションに急いだ。

マンションのドアを開けると美緒がパジャマ姿で居間で丸くなっていた。

「美緒、大丈夫なのか？」

「うん、お腹が痛いだけ」

「薬は？」

「切れちゃった。それに買い物に行きたい」

「そんなに痛いんじゃないや無理だろ、メモをしる俺が買い物に行つて来るから」

「で、でもパパじゃ……」

「それじゃ、美緒が行けるのか？」

「無理かも……」

「それに急ぐんだろ」

「えっ、う、うん」

美緒にメモを書かせて近くのマックスバリュー平真店に向う。

そして軽く食べれる物と飲み物を籠に入れてメモに書かれているものを籠に放り込んでいく、怪訝そうな顔で見られるが俺は全く気にしなかった。

そして店内の薬屋で店員お勧めの鎮痛剤を購入してマンションに戻った。

「美緒、買って来たぞ」

「ほ、本当に？」

美緒の前にマイバッグを置くと紙袋を取り出して慌てて風呂場兼ト

イレに向った。

「ギリギリセーフかも」

「そんなに辛いならもつと早く連絡しろ。喰い物を買ってきたから少し食べて薬を飲むんだ」

薬とジュースと菓子パンを取り出して美緒に渡した。

「あ、いつもの薬だ。何で判ったの？」

「店員に聞いたんだ。一番効く奴をよこせって」

「でも、パパは恥ずかしくないの？ こういう物って女の子しか必要ないじゃんか」

「恥ずかしがる必要は無いだろ、俺くらいの歳なら結婚していて当たり前だ。嫁さんが具合が悪ければ旦那が買い物に行くもんだろ。」

それに高校の頃、スーパーの日用品売り場でバイトをしてたからな」

「そうなんだ、ありがとう」

「薬は飲んだのか？」

「うん、少ししたら楽になると思う」

「それじゃ、部屋でゆっくりするんだな」

「う、うん」

美緒が不安そうな顔をして俺の顔を見上げて戸惑った様な表情を浮かべた。

「まだ、何か言いたい事があるのか？」

「う……でも、無理だよな。もう部屋で寝るね」

「言いたい事があるのなら、はっきり言えよ。そこで少し待っておけ、シャワーを浴びてくる。出てくるまでそこを動くなよ。良いな」

「パパ……」

美緒の言葉を遮るように着替えを準備して風呂場に向かいシャワーを浴びる。

シャワーを浴び終わって美緒の食べ残しのパンを食べていた。

「パパ、もう寝るね」

「待ってろって言わなかったか？」

「でも……」

立ち上がり洗面所で歯を磨き部屋に戻り徐に美緒を抱き上げた。

「パパ？ 何をするの？」

「あのな、不安なら不安だと言え。具合が悪いんだろ」

「そうだけど、いつもの事だから」

美緒を俺のベッドの奥つまり窓際に寝かせると美緒が困った顔をした。

「なんだ、その顔は？ 嫌なのか？」

「嫌じゃないけどさあ、良いの？ 本当に」

「あのな、真帆と居る時はどうしてたんだ？ 真帆と一緒に寝てたんじゃないのか？」

「な、なんで判るの？」

「美緒の顔に書いてある。誰かの側に居たって。今までもこんなだったのか？」

「こんなって？」

「生理不順で生理痛が酷いんだろ？」

「えっ、知ってたの？」

「あのな、俺はその辺のガキじゃないんだ。付き合ってきた女だつて何人も居るんだ、それに結婚経験者だぞ。美緒がここに来て丁度2ヶ月半だ、普通なら2回はあってもおかしくない話だろ。そんな事も判らない男は猿の雄と一緒にだ」

「ゴメンなさい」

「謝るな、寝るぞ。明日早いんだろ」

「うん」

美緒から少し離れて美緒に背を向けて横になると美緒が話しかけてきた。

「なんで、パパのベッドはダブルサイズなの？ もしかして」

「もしか何てねえよ、体がデカイからシングルじゃ狭いんだよ」

「もう、なんだか口調が怖い。怒ってるの？」

「怒ってないよ、寝るぞ」

「うん、ありがとう。パパの匂いがして落ち着いた」

「加齢臭か？」

「違う！ っ少しだけ男の人の匂いがするだけだよ」

「当たり前だ、これで女の匂いがしたらそれはそれで問題だろ」

「明日からは美緒の匂いがするけどね」

「バーカ、娘の匂いがしたってなんて事ないだろ」

「うん、おやすみ」

とりあえず今は

翌日、目を覚ますと目の前に美緒の頭があった。

「美緒、体調はどうだ？」

「う、うん……ん？　なんでパパが……あっそうかパパと一緒に眠ったんだ」

眠たそうな目を擦りながら美緒が寝ぼけ眼のまま答えた。

「少し、離れてくれないか？」

「え？　あつ！　ゴメン。寝ると何かにしがみ付く癖があつて」

「抱き癖があるのか。しょうがないな」

「直らないんだもん」

「癖じゃ仕方が無いだろ」

美緒が体を起こすと直ぐにベッドの上にへたりこんだ。

「まだ、駄目なのか？」

「う、うん。昨日よりはましだけど。パパ今何時なの？」

「まだ、学校までは時間がある」

枕元に置いてある携帯で時間を確認して、カーテンを開けると太陽が朝から元気に輝いていた。

美緒の質問に答えながら起き上がり台所に向う。

大きな目のタオルを濡らして固めに絞りラップを巻いて2分程レンジでチンする。

チンした熱々のタオルを持って部屋に戻った。

「美緒、腹を出せ」

「えっ？　パパ何を？」

「時間があるって言うっても限られてるんだ早くしろ」

「変な事しないよね」

「するか！　早くしないと身包み剥ぐぞ」

美緒が恥ずかしそうにおへそをだした。

チンしたタオルを熱くない程度まで温度を調整して美緒の腹の上に

置いた。

「蒸しタオルだ、温かい」

「自分でへその下の辺りをゆっくりマツサージしろ」

「こう？」

美緒が蒸しタオルの上から4本の指でゆっくりマツサージを始める。それを見て美緒の足を掴んだ。

「パパ、言ってから掴んでよ怖いよ」

「動くな、怒るぞ」

「だって」

有無を言わずに膝の内側と外側のツボをゆっくりと親指で揉み解すように指圧する。

「あれ？ 気持ち良いかも」

しばらく続けて今度は踝の内側の指数本上と踝の下側も同じ様に指圧した。

「うわあ、体がポカポカしてきた。気持ち良いよ、パパ。なんでパパはこんな事を知っているの？」

「夏実が同じだったんだよ。それで思い出しただけだな」

「ふーん、それが経験が豊富って事なんだね」

「まあ、色々とな」

これ以上突っ込んだ話をして俺が答えないのを知ってか、美緒が話を変えてきた。

「ねえ、パパもハーリーに出た事があるの？」

「あるぞ。最初は行きつけの飲み屋のマスターが祭り好きで何回か引っ張り出されて、ホテルで仕事してた時も経験者だからって半分強制的にメンバーに入れられてたな。白保のハーリーにも出た事があるな、舵取りの海人が酔っ払ってて大変だったんだぞ」

「えっ？ ハーリーって一箇所だけじゃないの？」

「八重山では6箇所かな。石垣では石垣・白保・伊原間、与那国の久部良、小浜の細崎、西表の白浜。旧暦の5月4日はユツカヌヒ」

と言われて1年で一番の厄日だとされているんだ。だから旧暦の5月4日にハーリーをして厄払いと豊漁を願い、海の神様に一年の健康と豊漁、そして航海の安全を祈願するお祭りなんだ。沖縄各地の漁港で行われてるよ」

「ふうん、そうだったんだ」

美緒が一頻り感心していた。

枕元の携帯を取り携帯を開いて画面を見ながらメールをする。

すると美緒が不思議そうな顔をして見ていた。

「こんな朝早くから誰にメールしているの？」

「担任の金子先生だよ。一番最初の御願ハーリーは10時頃からだろ、遅刻する事と直接会場に連れて行く事、体調が戻らなければ早退する事をメールしているんだ」

「ええ、大丈夫だよ」

「口答えするな」

「もう、心配性なんだから」

美緒が頬を膨らませながらゆっくりと起き上がった。

「どこに行くんだ？」

「もう、レディーに対して失礼でしょ。トイレです！」

「ついでにシャワーでも浴びて準備しろよ」

「ふんだ！ 言われなくても判ってます！ アッカンベーだ！」

「うわあ、人がいっぱい居る。凄いお祭みたい」

浜崎町の石垣漁港内の駐車場に車を停めて青空に映える白いテントが連なった会場に向かう。

平日だと言うのに団体ハーリーやマドンナハーリーの応援に来ている人や、観光客や島人にナイチャーで会場内はごった返していた。

「しかし、暑くなりそうだな」

空を見上げると元気な太陽が150%増しで頭上で笑っていた。

「あっ！ 美緒！」

「泉美！ ゴメン遅れた」

クラスでお揃いのＴシャツを着た女の子が美緒を見つけて手を振っている、美緒がクラスメイトの方に駆け出した。

「美緒、おはよー。体調は良いの？」

「う、うん。まだ、ちょっと。でもパパが色々としてくれたから」

「……パパってあの人？」

美緒を取り囲むようにしている女の子の１人が俺の方を見て何かを言っていた。

「別に今日は美緒が嫌がる様な服装はしてはいないはずだが……」

少し不安になり自分の格好を確認してしまった。

黒のコンバースにいつもの５０１、そして黒の半袖カットソーにストライプのシャツを羽織ってオレンジの少し派手なキャップを被っている。

俺の方を見ていた女の子が急に俺に向って走ってきてお辞儀をした。

「私、美緒さんのクラスメイトの玉城泉美たましろいずみです。パパさんですよ、いつも美緒さんに仲良くさせていたんでいます」
「あ、うん。美緒の親代わりの岡谷です。これからも美緒を宜しくね」

「は、はい！」

キャップを外して頭を下げると嬉しそうにして走り去って行った。

「やった！ 美緒のパパに挨拶しちゃった！」

そんな声が聞こえてきた。

俺が美緒に目配せをして移動しようとするとうと美緒が声をかけてきた。

「パパ！ どこに？」

返事の変わりに黒のポーターからデジイチを取り出し、親指と小指を立てて顔の横に当てて電話のジェスチャーをする、写真を撮っているから何かあれば電話しろと。

「うん、判った。後でね」

通じたのを確認してから美緒達と別の方向に歩き出した。

「美緒、本当にパパなの？ 違う意味のパパだったりして」

「もう、怒るよ本当に。パパは絶対に援交なんてしない人だもん」

「でも、オジサンじゃないのは確かだね」

「本当に泉美は疑い深いんだから」

「年上の彼氏でも通るかもね」

「そんな訳……無いじゃん……」

私が少しトーンダウンすると泉美が突っ込んできた。

「あれ？もしかしてパパじゃなければ本気とか？」

「違うよ、そんなんじゃないけど……」

本当は揺れていたママの言いつけを守らないといけないのだけど、心の片隅に本当に……って言う気持ちが芽生えはじめていたのは確かだった。

『とりあえず今は楽しんじゃおう！』

これが私の本当の気持ちかも。

「こら！勝手な行動は……あら美緒ちゃんが来たのね。そろそろ応援の準備をしなさい！」

金子先生の声で一斉に皆と一緒に走り出した。

雨が

『海神祭』^{ハルマ}も終わり石垣島にも夏が来ようとしていた。

その晩は呼び出されて『居酒屋 瑚南』の手伝いをしに来ている。店に来た後に振り出した雨は激しさを増していった。

「お待たせしました。生になります」

「注文いいかな？」

「はい、ありがとうございます」

注文を受けてカウンターの大将に尚斗なおとにオーダーを通す。

尚斗は元嫁の夏実の弟で夏実と知り合う前からの付き合いだった。

「しかし、雨が酷くなって来たなあ」

「岡谷さんはチャリだよ。大丈夫なん？」

「まあ、夕立みたいなもんだから帰る頃には上がるだろ」

そんな予想と裏腹に雨の勢いは止まらずゴロゴロと雷までなり始めた。

それと同じくして美緒からメールが届き始めた。

『何時ごろ終わるの？』

『11時過ぎ』

仕事なので簡単に返信をする。

『もう少し早く帰って来れないの？』

『仕事中だ』

携帯を徐に後ろのポケットに突っ込んだ。

「本当に困った奴だなあ」

「あれ？ 噂の美緒ちゃん？」

「あんな、尚斗。仕事、仕事」

予約のお客さんが落ち着く頃になると外は滝の様な雨で客足も鈍くなっている。

おまけに稲光が駆け抜け抜け雷鳴が轟き始めた。

「そろそろ、梅雨明けだな」

「そうだね、夏本番だ」

そんな話を尚斗としてしていると閃光と共に腹の底まで響き渡るような炸裂音に似た雷鳴が轟き、『瑚南』がある美崎町が暗闇に飲み込まれた。

「おいおい、近いんじゃないか？」

「雷が完璧に落ちたね」

慌てずに店に置いてあるロウソクを小皿に立ててテーブルやカウンターに運ぶ、しばらくしても電気が点く気配が無かった。

予約のお客さんは地元の人で慣れたもので何一つ文句を言わなかった。

まあ、文句を言われても雷が落ちたのならどうしようも無いのだが。尚斗が沖縄電力に電話をするが問い合わせが殺到しているのか中々繋がらなかった。

「駄目なのか？」

「あ、うん。全然、繋がらない」

「これじゃ、商売上がったりだな。尚斗、悪いが後は大丈夫だよな」

「あつ、心配なんじゃん。やっぱり」

「お先！」

尚斗の人を冷やかす様な笑顔がロウソクの炎で揺れている、そんな尚斗を無視して店を飛び出した。

滝の様な雨が情け容赦なく俺と自転車に叩きつける。

稲光の青白い紫色の様な閃光が走り、内地では考えられない様な空を劈く様な雷鳴が轟く。

叩きつける様な雨音と雷鳴以外の音は全て掻き消されてしまっている。

マンションに何とかたどり着く頃には、『瑚南』のオリジナルTシャツのままナイトダイビングをしてきたのかと思うくらいずぶ濡れになり体中から雨水が滴り落ちていた。

とりあえず、ドアの外でＴシャツの裾を絞るがその程度ではどうにもならなかった。

ドアを開けようとした瞬間、凄まじい閃光と雷鳴が走り思わず首を引っ込めてしまった。

「今のは凄いな……」

とりあえず自転車をラックに引っ掛けてライトを外して美緒の部屋をノックするが返事が無かった。

「開けるぞ」

そう言いながらドアを開けて部屋の中をライトで照らすが美緒の姿がなかった。

「あいつ、どこに行っただ？」

居間に掛けてあるバスタオルで頭を拭いていると俺の部屋から声がした。

「ぱ、パパなの？」

ベッドをライトで照らすがベッドにも居ない。

するとパソコンデスク代わりにしている押入れの下段からタオルケットに包まった何かがゴソゴソと這い出してきた。

「ふふふ、美緒。お前何をしているんだ？」

「だって、雷怖いんだもん。小さい頃はいつもお家で一人で留守番してたから……」

小さな子ども美緒が真っ暗な部屋で独りぼっちで雷に怯える姿が頭の中に浮かんできた。

心の深いところが締め付けられる様な痛みを感じる。

「しょうがない奴だな。着替えてくるから待ってろ」

俺が言い終わるか終わらないかのタイミングで閃光が走り雷が鳴った。

「嫌あ！ 怖いよ！」

びしょ濡れの俺に美緒が飛びついてきた。

「濡れるだろ。離れるんだ」

首を大きく横に振りながら小さな女の子の様に小さく体を震わせて

泣いていた。

「大丈夫だから、なあ。着替えるだけだから」

美緒の体を引き剥がして手を繋ぐ、そして着替えを暗闇の中で何とか用意して風呂場に向った。

「ここに座って待つてゐるんだ。直ぐに着替えてくるから」

何も言わずに震えながら美緒が小さく頷いた。

流石に雨水のシャワーでは気持ちが悪く、軽くシャワーで体を流して着替えを済ませる。

美緒を連れて部屋に戻る。

連れてと言うより風呂場から出てきた瞬間にＴシャツの裾を掴まれて美緒は絶対に離そうとしなかった。

「しかし、暑いな……」

停電でクーラーも動かず、仕方なく窓を少し開けると涼しい風が吹き込んできた。

真っ暗なベッドの上で壁に寄りかかっている、美緒は俺の足をマクラ代わりに泣き疲れた子どもの様に寝息を立てている。

雨音と遠ざかる雷の音だけが聞こえる世界。

美緒の前髪を指ではらうと暗がりの中に、ぼんやりと真帆に良く似た顔が浮かび上がる。

「一卵性母娘だなまるで」

心の奥で消し炭が燻る様にチリチリと何かが締め付けた。

の雨って・その1

石垣島地方が梅雨明けをした。

連日、信じられないような太陽が照りつけ。

青空には大きな綿菓子のような雲が大量生産されている。

そんな夜、俺は尚斗の緊急招集により『居酒屋 瑚南』で仕事をしていた。

「尚。予約は何時なんだ？」

「7時頃かな」

「相変わらず、曖昧だな」

仕事を始める時間と予約の時間は殆ど同じ時間だった。

急に仕事に行く事になったと美緒に告げると妙に素っ気無い態度だったのが気になるが、今は仕事に集中していた。

ドアが開く音がして声を掛ける。

「いらっしやい……ませ？」

勢い良く元気に声を掛けたがその声が尻すばみになり疑問系に変わった。

振り返りカウンターに冷ややかな視線を送ると尚斗が両手を顔の前で合わせて申し訳なさそうな顔をしていた。

瑚南オリジナルのTシャツを着て501&漁サンに黒いショートカフエエプロンを着けた俺の顔を怪訝そうな顔で見ている美緒が入り口に立っていた。

美緒の後ろには夏実が何食わぬ涼しい顔をして、秋香は美夕を抱っこしながら笑顔で手を振っている。

殿しんがりには茉冬が不機嫌そうな顔で俺の事を睨みつけていた。

『ヤラレタ』それが正直な気持ちだった。

尚斗を責めても仕方が無い、夏実に尚斗が逆らえる訳が無いのだから。

「予約のお客で良いんだな、尚斗？ 座敷の方へどうぞ」

この状況下では腹を括るしかなかった、それ以前に俺にはオタオタ動揺する理由など微塵も無かった。

秋香から夏実へ、そして夏実から尚斗か尚斗から夏実へと美緒の事が伝わった事が容易に想像がついた。

夏実と秋香は生ビールを茉冬はサンピン茶、そして美緒はオレンジジュースを頼み。

飲み物が揃うと乾杯をしていた。

「それじゃ、乾杯しようか。乾杯！」

秋香の音頭で宴会がスタートした。

「それぞれ、食べたい物をじゃんじゃん注文しなさいね。岡谷君の奢りだから」

「はいはい、お好きなように」

夏実が遠慮なくそんな冗談とも本気ともつかない事を言っている。

「もう、茉冬はいつまでそんな顔をしているの？ いい加減にしなさいよね」

秋香が不機嫌そうな茉冬を睨めると美緒が気まずそうに茉冬に話しかけた。

「茉冬さんはそんなに岡谷さんの事が……」

「俺が家庭を捨てたんだから仕方が無いだろ。許してもらおう何て思ってないよ」

「そ、そんなあ」

「気にしちや駄目だよ、美緒ちゃん。本当に茉冬は子どもなんだから」

「子どもで良いもん。ふんだ！」

そんなやり取りを夏実は気にもしないでジョッキに口をつけていた。料理の注文を受けて調理場に入る。

調理場から座敷の様子は伺えなかったが、気にしないで調理の手伝いを始める。

「まだ、茉冬はお母さんと岡谷のお兄ちゃんが別れた事を根に持ってるの？ 小さい頃は外ではお父さんって呼んでたくせに」

「良いじゃんか、子どもだったんだから。今はそんな事無いからね」

「でも、岡谷のお兄ちゃんと一緒だった時間の方がお父さんより長いんだよ。茉冬の場合は」

なんだかこの場所に居て良いのか不安で堪らなかった。

パパの事を色々と聞きたかったけれどそんな事を言い出せるような雰囲気じゃなかった。

「ほら、茉冬の所為で美緒ちゃんが困った顔をしているじゃん。妹が可哀想でしょ」

「妹？」

茉冬さんが不思議そうな顔で秋香さんの顔を見ていた。

「そうだよ、だって美緒ちゃんはお兄ちゃんの子どもかもしれないんだよ。それにもう岡谷のお兄ちゃんは美緒ちゃんの事を本当の娘だって認めてるんだよ。そうじゃなきゃ『パパ』なんて恥ずかしがって絶対に呼ばせないはずじゃん。だから美緒ちゃんは私達の妹なの」

「ええ、それって……」

茉冬さんより私の方が秋香さんの言葉に驚いてしまった。

「それはそうかもね岡谷君はそんな所があるからね。誰にでもそんな呼ばせ方はしないかもね」

「そうなんですか？ 夏実さん。でも、家庭を捨てたって……」

「本当に相変わらず思いつきでポンポン言うから駄目なのよ。ちょうど良い時期だったのかもね。春介が進学するかもしれないと言われた時に、奨学金の事で籍を抜いて欲しいって言ったら二つ返事で了承してくれたの。本当に良いのか確認したら紙切れ一枚で春介が学校に行けるのならそれで良いって言ってたわ」

「紙切れ一枚？」

「そう、離婚届の事よ」

夏実さんの話に正直驚いてしまった。

そんな事で簡単に籍を抜いたりするものなのかな。

「それだけで別れたんですか？」

「別れたのはその後でかな」

「それじゃ、何で結婚したんですか？ パパと」

あまりにも素っ気無い夏実さんの言葉と態度に私は少し腹を立てた。すると夏実さんが秋香さんと茉冬さんの顔を見渡しながら話し始めた。

「もう、15年位前になるのかなあ。ママが危篤の知らせを受けて石垣島に逃げ帰ってきて、ママの葬儀なんかを全て取り仕切ってもう内地には帰らないつもりで石垣島に居ようと思ったの」

「逃げ帰ってきた？」

「そう、DVでね」

夏実さんがあつさりとした顔で凄い事を話している。

ドメステックバイオレンスなんて私の周りでは有り得ない話だった。「それで、尚斗の紹介で飲み屋で働く事になったの。内地でも夜の仕事をしていたから、その方が割が良いしね。そこで岡谷君と知り合ったの、そのマスターが家族ぐるみの付き合いが好きな人でね。

マスターの家族と従業員の家族、それに極親しいお客さんと日曜日にバナナ公園に行ったりして良く遊んだりしてたの。そのお客さんが岡谷君ともう1人三鷹君。私と岡谷君と三鷹君は同じ年で楽しかったなあ。皆で飲みに行ったりして」

秋香さんと茉冬さんは少し神妙な顔で夏実さんの話を聞いていた。

「それで、付き合い始めたんですか？」

「そうね、ちょうど今頃の時期だったかな。もう直ぐ夏休みが始まるうとしていた時に旦那に言われたの。とりあえず子ども達を自分の所によこせて。どうするか迷っているうちに旦那が片道分のチケットを送ってきて行かせない訳にはいかなくなってね」

「行かせたんですか？ そんな人の所に」

「そんな人か。それでもこの子達の一応は父親だからね」

「ゴメンなさい」

「気にしないで良いの。あの時は不安でしうがなかった。子ども達がもう戻ってこないかもしれない、もう2度と会えないかもしれないって思うと押し潰されそうだった。そんな時に側に居たのが岡谷君だった、岡谷君もその時はかなり荒れていたんだと思う。多分、美緒ちゃんのママと別れたのがその頃じゃないのかな」

「えっ、ママと」

「だって美緒ちゃんは14歳でしょ。そう考えるのが普通じゃないの？」

「そうですね。パパも辛い思いをしてたんだ」

「あのね、人は誰にでも辛い事や苦しい事があるんだよ。そして誰かに寄りかかりたい時もね、そしてお互いが同じような気持ちだったらどうなると思う？」

「私なら受け入れちゃうかも」

「そんな事があつたんだ。知らなかった」

秋香さんがしんみりとした顔つきで夏実さんの顔を見た。

「だって、誰にも話してないもの。知っているのは岡谷君だけかな」それから夏実さんは包み隠さず色んな事を話してくれた。

旦那から脅された時もパパは動じなかった事。

急にアパートから出て行かなければいけない事態になり秋香さんや茉冬さんに春介さんがやつと慣れた学校を移るのが嫌だと言った時に、ウチに来ておくとパパが言つて一緒に住み始めた事。

離婚するのに2年近くを費やしたけれど何も言わずにいてくれたと夏実さんが話してくれた。

「一緒に暮らす前に私の親代わりの叔母さんと叔父さんの所に挨拶に行ってくれた。そして親父にはなれないけれど必ず守るって言ってくれたかなあ」

「夏実さんのパパは？」

「高校の時にね。だからあまり頼れる所が無いんだよね。でね、岡谷君の両親と一緒に住んでいるのがばれちゃって、ちようど離婚し

てから半年が過ぎた頃だったから籍だけ入れようって。岡谷君の両親に石垣島まで来てもらって皆で顔合わせして」

「反対されなかったんですか？」

「呆れられてたのかも。3人の子持ちと結婚するって言ったら普通は猛反対されるよね。その辺の事は岡谷君しか判らない」

するとパパが調理場から料理を運んできた。

「妹がクツション代わりにってくれたんだよ。お袋にばれた時に妹が隠しきれずに話したんだ、妹には手紙のやり取りで全て打ち明けていたからね。多分、親父達とどうしたら良いか話し合いをしたんだろ、その場に俺が居たら血の雨が降ってたかもしれないけどな」

「血の雨って……パパ」

「お袋は瞬間湯沸かし器で激情型だからな」

「お母さん譲りなんだ岡谷君の性格って」

「まあ、良いじゃないか。それでも食べてくれ、特別メニューだ」

パパがだし巻き玉子を持ってきてくれた。いつもと違って綺麗な黄緑色のものが入っていた。

の雨って・その2

「なんだろうこの黄緑色の？」

「アーサーだよ。沖縄産岩海苔って言うのかな」

恐る恐る一口食べると少し塩味が強い気がするけれど、海の香りが口の中に広がってフワフワで凄く美味しかった。

「うわぁ、いつものより美味しい！」

「どれどれ、なかなか美味しいじゃない」

「本当だ。フワフワで凄く美味しい、それに甘くないし」

夏実さんと秋香さんが美味しそうに頬張っている、茉冬さんもまんざらじゃない顔をして食べていた。

「でも、岡谷のお兄ちゃん。秋香達と居た時は作ってくれた事ないよね」

「少し前に居酒屋で散々作らされたんだよ」

「なぁんだ、そうなんだ」

私達が美味しそうに食べていると『ゴクリ』と唾を飲み込むような音が店内に響いた気がする。

「岡谷さん、ゴメン」

カウンターから夏実さんの弟さんが手を合わせてパパを見ていた。

「はぁ？ 尚、これをお客さんに作れと？ あのな、しょうがないなぁ」

そう言ってパパは困った様な顔をして調理場に行ってしまった。

「相変わらず甘いんだから」

「でも、どうして別れちゃったんですか？」

「ここまで来たら話すしかないのかなぁ。これは私が思った事と感じた事で私の主観だからね」

そう前置きをして夏実さんが話し始めた。

「始めの頃はお互い一生懸命だったけど、落ち着いてくると見えな

いモノが見えてくるの。それは嫉の仕方だったり育った環境の違いだったり。何度も衝突を繰り返したけどあまり歩み寄れなかったのが本当かな。今は悪かったと思ってるの面と向って『育った環境が違っんだし子ども達の性格は出来上がってしまったるんだから、普段から話もしないのに頭ごなしに言わないで』って言うてしまった事があって、それから岡谷君は何も言わなくなってしまうたの。後から友達に言われて気付いたんだけど『夏実は岡谷君と子ども達の橋渡しをしてあげたのか』って聞かれた時に何も言えなくなっちゃって」

「しょうがないよ、お母さんも働いていたんだし」

「それは言い訳にしかないでしょ。それに岡谷君はなんとか子ども達の輪に入ろうとしてたって春介が言ってたから」

「いっぱい色んな事をしてもらったよね、茉冬。誕生日にはどんなケーキが良いか聞いてくれて絵を描いて渡すと同じ物を作ってくれたり」

「サンタさんの手紙もだね」

「茉冬さん、サンタさんの手紙ってなに？」

「茉冬さんがモジモジしながら話し始めた。」

「あのね、クリスマス前にポストに必ず入ってるの。茉冬ちゃんの良い子にしていたからプレゼントをあげます。欲しい物を手紙に書いてお母さんに渡してね、お母さんがサンタさんに手紙を出してくれるはずだからって。それで手紙を書くところとちゃんとクリスマスにそれが届くの」

「うふふ、だから3人とも小学校の高学年まで本当にサンタが居るって信じてたの信じられないでしょ。美夕にもサンタさんの手紙を絶対に私が出すんだ」

秋香さんが美夕ちゃんを優しく見つめながらとても嬉しそうに話してくれた。

「クリスマスパーティーもね、お菓子の家を作ってくれたり」

「夏休みには毎年キャンプに行ってたよね。海でいっぱい遊んでくれ

たし」

茉冬さんも笑顔で話している、楽しそうに思い出話を聞かせてくれた。

「これは、お兄ちゃんには内緒だよ。3人ともお兄ちゃんの事はお父さんだっと思ってるのは、恥ずかしくって『お父さん』って改まって呼べないし。お母さんと結婚する前から岡谷のお兄ちゃんって呼んでたからね」

「それで、岡谷のお兄ちゃんなんだ」

内緒話をしながら皆でパパに判らないように笑いあった。

「少し、話が脱線しちゃったね。美緒ちゃんが知りたがって居る事を私なりに話してあげる」

夏実さんの目が少しだけ真剣になった。

「確かに色々あったけれど岡谷君には感謝しているの。だって今があるのは岡谷君による所が大きいから。岡谷君は岡谷君なりに一生懸命にやってくれたと思う、でもね時々ふと思う時があったの。本当は大好きだった人と家庭をもってこんな風にしたかったんじゃないのかなあって。そんな事を考えていると岡谷君の中に他の人がいる気がして……」

「でも、夏実さんの事が好きになって」

「言った筈よ、最初はお互いにつて。だから余計なのかもしれない、一生懸命になっっている岡谷君を見ているとなんだか哀しいような寂しいような気がして。それでも離れる事が出来なくて、知らない間に2人の間には見えない溝が出来てしまっていたの。今、思う事はもっといっぱい話し合うべきだったかなって、一度出来てしまった溝は埋めることが出来なかった。夫婦関係も少なくなって、すれ違いが増えて段々と離れてしまっていた。喧嘩する度に出て行こうとする私を止めてくれた、でも、限界だったのかもね。秋香の手が離れて春介の就職が内地に決まって。まあ、茉冬はまだ高校生だったからあまり良い感情は持っていないみたいだけど」

「当たり前でしょ」

「でもね、会うたびに茉冬は元気なのかって聞いてくれるんだよ」

「心配して当然じゃない！」

茉冬さんの声のトーンが一気に上がった。

「当然なのかな？　茉冬も親になってみると少しずつだけとお母さんや岡谷のお兄ちゃんが言っていた事が判つてくると思うよ。世の中には実の親子でも殺し合いをする時代にだよ、血の繋がっていない子どもを自分の子だって胸を張って言ってくれるんだよ、岡谷のお兄ちゃんは」

「秋香、誰から聞いたのそんな事を」

「お母さん、前にバイト先に岡谷のお兄ちゃんを良く知ってる人が居てその人から聞いたの。それにお母さんとお兄ちゃんは私が荒れている時に大人になってから判れば良いんだって見守ってくれたでしょ」

「私の娘なんだから当たり前でしょ。そこは岡谷君と意見が一致していたのが唯一の救いかな」

「ええ、秋香さんが荒れていたんですか？」

私が驚いて聞くと秋香さんが照れ笑いをしながら話してくれた。

「反抗期の延長かな。家出に補導が数回、それにお酒と鎮痛剤を飲んで自暴自棄になってリストカットも1回だけ」

「信じられないんですけど……」

「もう、済んだ事でしょ。それに岡谷君だって秋香がそう思ってたっているのが一番嬉しいんじゃないのかな。ねえ、その岡谷君？　夏実さんが調理場の入り口に目をやると他のお客さんに呼ばれてパパが出てきた。」

「親の言う事なんて、親になってから身に染みるもんなんだよ。生ですネ今お持ちします」

パパが上手に生ビールをジョッキに注いでいる。

「岡谷君も身に染みる事があったんだ」

「まあな、自分の子どもでさえ育てるのが大変なのがお袋の口癖だったからな」

「で、他人の子どもを育てた感想は？」

「久しぶりに俺を本気で怒らせたいのか？ 夏実？」

それだけを言うとパパはカウンターのお客さんに生ビールを出している。

「自分の子どもでさえ大変なのにか、本当にそうだね。親になってみないと判らない事が多いんだよね」

「秋香、最初から親なんて人間はいないんだよ。子どもの成長と共に親になっていくんだ。子どもが親にしてくれるんだよ」

「そうだね、私もこれからなのかなあ」

「精々苦労して立派な母親になってくれよ。それと茉冬も早く彼氏でも見つけて結婚しちゃえよ」

「ふんだ、大きなお世話です！」

夏実さんや秋香さんそれに夏実さんの弟さんまでカウンターから顔を出して大笑いした。

茉冬さんがむきになってパパの事を叩いていた。

そんな光景を見ていると血が繋がっていないくても本当の家族なんだと思っただ。

たとえ別れたとしても積み重ねて来たものは掛替えの無いものなんだと。

ママの言いつけなんてどうでもよくなってしまった。

私もパパと色んな時間を積み重ねたいと思っちゃったんだ。

の雨って・その後

パパの仕事が終わる時間まで待つて、パパと一緒に歩いて帰ったの。途中でココストアー（石垣島にはコンビニはココストアーしかないの）に寄り道をして、パパは缶コーヒーを私はマブヤードリンク（シークワサー味）を買って。

「夏実さんにいっぱい聞いちゃった。別れた理由とか」

「そうか、お互いの問題だからな。夏実はいつだって自分には子どもが居るからって後ろ向きだったからな。それをどうする事も出来なかったのが残念かな」

「でも、感謝してるって言うてたよ」

「感謝されるような事は何もしてないよ。当たり前的事をしてきただけだ」

「本当にパパは凄いのか凄くないのか判らないよね」

「どこにでも転がってるだろ、こんな男は」

無性に腹が立つてきた、自分の事を卑下し続けるパパの態度に。

そして秋香ネーネや茉冬ネーネが楽しそうに思い出を話す顔が頭に浮かんできた。

「そんな事を言うパパは大嫌い！　パパはこの広い世界の中でパパ1人なんだから！」

悔しくて涙が溢れてきた。

やつと美緒がパパと色んな時間を積み重ねようって決めたのに……

「泣く事は無いだろ、帰るぞ」

そう言いながらパパが私の頭をクシャって優しく撫でて掌をヒラヒラさせながら歩き出した。

「ずるい！　嬉しい癖に、へそ曲がりの天邪鬼！」

パパのお尻を思いつきり蹴り上げて走り出した。

「暗いんだから走ると危ないぞ」

そんな事を言いながら嬉しそうな顔をしてパパが早足になって追い

かけてきた。

なんだかそれがとても嬉しかった。

『ママ、ゴメンね。期待に添えそうにないや
心の中で舌を出してママに謝っちゃた。』

雨が降らなくて・その1

『7月11日はランチのみの営業とさせていただきます。 ニライ・カナイ店長』

出勤するとそんな張り紙が入り口に張られていた。

「おはようー」

「あ、チーフ。おはよう御座います」

由梨香が元気良く挨拶をしてきた。

「ユーカ、あの表の張り紙はなんなんだ？」

「さあ、オーナーですよ。貼ってたのは」

「今度は何をやる気だ……」

そこで一つだけ思い当たる事がある頭に浮かんできたが敢えて言葉にしなかった。

「ユーカ、美穂里は？」

「オーナーと出掛けました。そう言えば今日は」

「それ以上は言わないでくれ、ユーカ。目眩がしてきた帰って良いか？」

「もう、チーフまで。私とテルの2人でランチを開けろって言うんですか？」

由梨香が頬を膨らませて腕組みをしていた。

「冗談だよ、準備が出来たら開けてくれ」

「はい」

いつもより忙しくランチタイムが駆け抜けて行った。

「今日は流石に疲れたな。美穂里が1人居ないだけでこんなに違うもんなんだな」

「チーフ、後ろでオーナーが怖い顔をしていますよ」

「知るか！ 野崎は居ても居なくても一緒だろうが」

「ん！ んん！」

後ろから咳払いが聞こえるが一切無視をした。

「大体な、営業時間が終わった頃に『雨が降らなくて良かったわ、これでビールが美味しく飲める』なんていいながら店を放り出す経営者がどこに居るんだ？」

「ここに居るだろうが？ ああん？ 岡谷、テメエ私に意見するのか？」

「するわ、どこの経営者がビールが飲みたいが為に夜の営業を休むんだ？」

「だ・か・ら、ここに居るだろう。岡谷の目は節穴か？」

「野崎と話をしていると頭痛が痛くなってくる。もう、仕事は終わりなんだろ帰るからな」

タイムカードを押して更衣室に向い、着替えを済ませて出てくると

野崎が仁王立ちをして待ち構えていた。

「岡谷、美緒ちゃんの携帯を教えろ」

「はいはい、畏まりました。女王様」

メモに殴り書きをして投げつける様に渡す。

ヒトロクマルマル

「16:00に新栄公園の正面ゲートに集合。判ったな岡谷軍曹」

「誰が軍曹だ？」

「小浜大将と黒島中将もこれは命令だ。判ったな」

「やった！ チーフより階級が上だ」

「あのなら、突っ込みどころが違うだろうが」

由梨香と美穂里が敬礼をして楽しそうに笑っていた。

「それじゃ、解散！」

「それじゃ、着替えて『オリオンビールフェスタ』に出撃だ！」

由梨香の言う通り今日はオリオンビールフェスタだった。

俺の嫌な予感が的中した。

帰りしなに浴衣着用だの言われたが、全て無視して髪を切りにいくから時間通りには行かない事を一応告げておいた。

16:00を少し過ぎてから待ち合わせ場所に向う。

行く気は無かったが美緒の連絡先を聞いたという事は美緒を連れ出しているのだろう。

実際問題として、美緒はマンションには居なかった。

『オリオンビルフェスタ』正面ゲートの前は人だかりが出来ていた。

その中心は数人の浴衣姿の女の子のグループだった。

オフホワイトの地に、牡丹風の花やバラ、桜の花が、モノトーンやグレー、赤紫の濃淡で描かれている上品な浴衣に淡い紫の帯をして髪のをアップにしている野崎が最初に目に入ってきた。

野崎の横では由梨香がネイビーブルーに大柄の薔薇が描かれている浴衣にワインレッドの帯を締めてお姉さんばく、美穂里はエンジに牡丹が描かれた浴衣に薄紫とピンクの2色使いの帯を締めている。

そして反対側に美緒が白地に可愛らしい淡い花薬玉が描かれている浴衣に花柄をあしらった薄い水色の帯を締めていた。

「目立ちすぎだろうが」

そんなひとり言を呟いていると美緒の声が聞こえてきた。

「ああ、パパ！ 髪の手切ったんだ。それにその格好は？」

美緒の声に驚いた周りの男どもの視線が俺に向ってきた。

睨みつけるように一瞥をくれるとモーゼの奇跡の様に海の代わりに人だかりが割れて俺の前に道が出来た。

「本当に岡谷が機嫌悪い時はガラが悪いよな、まるでヤ○ザだな」

「誰が、ヤの付くお仕事だって？」

「そのまんまの格好だろうが」

浴衣など持ち合わせていないので本藍染めの作務衣を着てきたのだ、髪は暑かったので短くしただけの事だった。

「やっぱり髪の手短くしちゃったんだ」

「でも、チーフは似合うよね短いのも」

「もう、ミポはチーフ鼻屑だからね」

袖に手を入れて腕組みをしている俺の腕に、知らない間に美緒が腕

を組んで俺を嬉しそうな顔をして見上げていた。

「なんだ？ 嬉しそうに」

「だって、約束の時間になっても来ないから。パパが来ないと思っ
たんだもん」

「あのな、この祭りはお酒の祭りだから保護者が居ないと未成年は
入れないんだよ。それに俺は約束なんかした覚えは無い」

「ええ、本当に？ 知らなかった」

「美緒を餌みたいに使いやがって」

「釣られたのはどのどいつだか？」

野崎がせせら笑いをしながら抜かしやがった。

「帰る」

「駄目！ お祭りが観たいよパパ！」

踵を返そうとした俺を美緒が無理矢理引きとめた。

「本当に野崎は腹黒だな」

「岡谷には敵わないけどね」

ここまできてウダウダしていても仕方が無いので入り口で年齢確認
や持ち物の検査を受けて会場に入った。

まだ、日が高いにも係わらず沢山の人間が会場には動いていた。

「それで、どこに行けば良いのかな？」

「どこって、何で？ パパ」

「あのな、浴衣を着て地面に座って観るのか？」

「え、でも野崎さんが行けば何とかなるって」

「なるわけないだろう、知り合いを頼るにしてもこんなに人が居る
んだぞ。それに自分達の場所取りで精一杯だよ」

「そんなあ」

「おい、オーナー。どうするんだ？」

野崎に声を掛けると背伸びをしながら何かを探していた。

野崎の側では由梨香と美穂里が同じ様に辺りを伺っていた。

「誰も居ないわね」

「見つかるわけ無いだろうが！ 毎回同じ事を繰り返しがって、少しは学習しろ。行き当りばかりで上手くいくか！」

「煩いわね、そんな事判らないじゃない」

「それじゃこの状況をどうするんだ？」

「グダグダ文句を言う暇があつたら岡谷も知り合いを探しなさいよ！」

呆れてモノを言うのも嫌になつて携帯を取り出して歩き始めた。

「美緒、由梨香、美穂里。こんな段取りの悪い奴を放っておいて行くぞ」

「え、パパ。待つてよ」

「チーフ！待つてくださいよ」

「置いていかないで！」

雨が降らなくて・その2

パパがどんどん歩いて行っちゃって付いていくのが大変だった。

やっと舞台の反対側まできて止まってくれたの、すると携帯で誰かに電話をし始めたの。

「おい、テル。今どこら辺に居るんだ？」

「テルさん？」

すると、会場の真ん中よりすこし舞台寄りの場所で、黒っぽい甚平を来た男の人が大きく手を振りながら飛び跳ねているのが見えた。

「チーフ……歩くの速いよ、やっと追いついた。ミポは大丈夫？」

「無理かも、喉が渴いて気持ち悪い」

「大丈夫？ ミポさん。もう、パパたら。浴衣で歩くの大変なんだからね」

「俺に文句を言うのなら野神に言え。テルが待ちくたびれてるから行くぞ」

ゆっくりと歩いている様に見えるんだけど大股で歩くから付いていくのがやっとだった。

でも、大きな背中を見つめながら歩くのは嫌じゃなかった。

テルさんが立っている場所に着くと青いシートが広げられていて、そこからは舞台が良く見える所だった。

「ウヒヨ！ 美緒ちゃんの浴衣姿は超・可愛いすね」

「もう、恥ずかしいよ。テルさん大声で叫ばないでよ」

波照間の大声で周りの視線が集まり美緒がちっこい体をさらに小さくした。

「くう！ その恥じらいがまた堪らないす。チーフに感謝感激すよ」

「えっ、テルテルなんでチーフに感謝感激なのよ？」

ユーカさんが不服そうな顔をしながらテルさんに声を掛けた。

「仕事中に言われたんだよ。美緒の浴衣姿が見たいなら、終わった

ら先にながっていいから一番良い場所をとっておけ。必ずブルーシートを2重にして場所取りをしておけよって」

「もしかして、それで速攻で片付けもしないで帰ったんだ」

「良いだろ別に、チーフ命令なんだから。それに一等地でライブが観られるんだぞ、文句言われる筋合いは無いもんね」

しばらくすると舞台上で琉球國祭り太鼓八重山支部の演舞が始まった。テルさんが皆の飲み物を買って来てくれた、もちろんお金はパパが出してくれた。

「美緒ちゃんサンピン茶で良いかな？」

「うん、ありがとう。テルさん」

「お願いだから、もう1回言ってくれる？」

「ありがとう、テルさん」

「テル、いい加減にしないとチーフに怒られるよ」

「怒られないよ、チーフ公認だから」

「はあ？」

ユーカさんが驚いた顔をしてパパの顔を見ていた。

「でも、パシリじゃん」

「ミポ、美緒ちゃんの浴衣姿が見ただけで俺はパシリでもなんでもする！」

ミポさんは呆れた顔をしてビールを少しずつ飲んでいる。

「パパ、野崎さんは？」

「そのうち見つけて合流するだろ。つまみでも適当に買ってくるから」

パパがそう言って立ち上がるとテルさんが自分から動き出した。

「俺が買って来ます。適当に良いんですね」

「悪いな、頼んだぞ。それじゃこれで」

パパがお金を出すとお金を掴んだと思ったらもの凄い勢いでテルさんが走り出した。

黒地に龍が描かれている甚平が人ごみに突入して行った。

「気をつけていけよ」

パパの声なんか聞こえてないと思う……

少しするとテルさんが戻って来た、手には2つの白いビニールの手提げ袋と反対の手には野崎さんの手を掴みながら。

「チーフ、落としモノを拾って来たんすけど」

「そんな役立たずはその辺に捨てておけ」

「なんで、岡谷はテルに準備させてるって言わないの？ 酷くない？」

「行き当たりばったりで何とかなるなんて俺は考えないんでな」

「本当に腹黒なんだから」

「用意周到って言うてくれ、美緒を餌にした罰だ」

「悔しいけど、もう良いわ！ 今日騒ぐわよ！」

「「「イエー！！」」」

コーカさんにテルさん、それにミポさんまで片手を突き上げて叫んでいた。

野崎さんの知り合いやパパの友達が飲み物や食べ物をつぱい差し入れてくれた。

彩風さんのライブが始まり、そして池田卓さんのライブになって取りはBENIさんのスペシャルライブで最高潮に盛り上がり膝立ちで皆ノリまくっている。

野崎さんは酔っ払って立ち上がって踊り出す始末だった。

でも、パパは何も言わずに皆を嬉しそうに優しい目でビールを片手に見ていてくれた。

ライブが終わって司会が最後のトークをしている頃。

パパの後に付いて綺麗な赤瓦の市立図書館の少し先から港の方に向かい、コンテナが沢山積み上げられている間を抜けて突堤の先に来ていた。

そこからは離島ターミナルが良く見えて気持ち良い風が吹き抜けていた。

「マジで、雨が降らなくて良かったすね」
テルさんが空を見上げる。

釣られて空を見ると星がいっぱい出ていた。

「ミポ、気持ち良いね。酔って火照った顔に風が当たる」

「うん、こんな場所。始めてだね、ユーカ」

「しかし、岡谷は穴場に詳しいな」

パパは無言で突堤のアルミの柵に腕をつけて夜の海を見ている。

三者三様色んな事を言っていると会場からカウントダウンが風に乘って聞こえてきた。

「3……2……1……ゼロ！」

すると風切り音が聞こえたかと思った瞬間。

頭の真上で大輪の打ち上げ花火の花びらが広がリズドンとお腹に炸裂音が響いた。

「ひやあ！ 怖いよ」

思わずパパにしがみ付いてしまった。

「花火だよ、花火」

夜空を見上げると内地の花火大会ほど華やかじゃないけれど、頭の真上で大きく広がる大輪の打ち上げ花火は迫力満点だった。

「凄い！ 綺麗！」

とても幻想的な世界に見えた、穏やかな海面にも花火が写り込んでいる。

短い時間だったけれど東京に居たら絶対に見れない打ち上げ花火だと思っし、今まで見てきたどの花火大会より輝いて見えた。

でも、そんな花火より気になる事が一つだけあった。

パパを見ると楽しそうにしている様に見える。

パパの瞳はいつもとても優しい。

けれど時折、打ち上げ花火に照らされて浮かび上がるパパの顔にはどことなく深い淋しさが宿っているのを感じてしまった。

もうすぐ誕生日・1

「はぁ〜 どうしようかなあ」

「どうしたの？ 美緒ちゃん。溜息なんてついて口に合わなかった？」

「違うの！ 瑞穂さんのパスタは凄く美味しいよ」

私は慌てて首を大きく振った。

少し考え事をしていて知らない間にひとり言を言ってたみたい。

今晚はご飯を作る元気が無くって『マッドティーパーティー』に1人でパスタを食べに来ていたの。

「何か悩み事があるのなら、お姉さんが聞いちゃおうかなあ。お姉さんと言うよりおばさんか、岡谷と同じ年だもんね」

「そうなんだ、でも瑞穂さんも凄く若く見えますよ」

「お世辞なんか言っても何も出ないぞ。デザートをつけちゃおう！」

「うふふ、デザートが出てきちゃった。あのね、瑞穂さん」

「なあに」

瑞穂さんが私の顔を覗き込んだ。

「もう直ぐ誕生日なの私。でね週末に誕生日パーティーをお家でしようと思うんだけど、最近パパが忙しくって」

「話し出しづらい？」

「そうじゃなくって、パパに頼むと無理しそうだから」

「心配なんだ、岡谷の事が」

「う、うん」

「よし！ ここはお姉さんが一肌脱ごう。人数は何人ぐらいなの？」
腕まくりをして瑞穂さんが優しく微笑みかけてくれた。

「美緒を入れて4人かな」

私が指折り数えていると、瑞穂さんがパンと手を叩いた。

「決定！ うちでパーティーをしよう！」

「ええ、良いの？」

「もちろん、貸切には出来ないけれど簡単なお料理なら作ってあげる」

「本当に？ やった！」

思わずフォークを持ったまま飛び跳ねちゃった。

だって凄く、凄く嬉しかったんだもん。

という訳で夏休み前の週末の日曜日に『マッドティーパーティー』で美緒の誕生日パーティーが開かれる事になったんだ。

あまり遅くなると友達の親が心配するからって瑞穂さんがいつもより早くお店を開けてくれたの。

もちろん、美緒もたくさんお手伝いしたんだから。

「こんばんわ、ココだよね」

お店のドアが開いて大親友の泉美が顔をだした。

「泉美！ いらっしやい」

「凄い、なんか大人って感じで緊張しちゃったよ。ほら、皆も入ろう」

泉美に呼ばれて眼鏡っ子の菜月なつきとちょっと大人びた朋美ともみがお店に入ってきた。

「本当だ、美緒の言うとおり凄く可愛いお店だね」

「そうでしょ、美緒のお気に入りのお店だもん。紹介するね。パパのお友達でこのお店のオーナーの瑞穂さん」

「よろしくね」

瑞穂さんが優しい笑顔で挨拶をしてくれた。

「私は玉城泉美たましろいずみです」

Tシャツにフリルのスカートを穿いた泉美がトップバッターで挨拶をした。

「あの、砂川菜月すながわなつきです」

「もう、なっちゃんは何を緊張してるの？」

「ええ、だって……」

可愛らしいデニムの半パンのコンビネゾンにピンクのＴシャツを着てメガネを掛けたなっちゃんが照れていた。

「私は仲里朋美なかざともみです」

最後に大人っぽい白のチュニックにスリムのジーンズを穿いた朋ちゃんが挨拶してくれた。

「でも、高そうなお店だな」

店の中を見渡していた朋ちゃんがポツリと呟いた

「そんな事は無いと思うよ、朋ちゃん。でも、お金払った事無いや」

「「「ええ！」「」」

3人が驚いて顔を見合わせていた。

「ち、違うの。パパがちゃんと後から払ってくれてるの。ね、瑞穂さん」

「そうね、ちゃんと貰ってるわよ。さあ、座って座って」

「「「はい」「」」

テーブルの上には美味しそうな料理がいっぱい並べられているんだ。生ハムを使ったサラダに豚肉の香草焼きでしょ、それにミールバイツと言う沖縄の魚のカルパッチョにもちろんパスタも。

トマトのパスタとカルボナーラの2種類も瑞穂さんが作ってくれたんだ。

「じゃーん、バースデーケーキだよ」

4人が椅子に座ると瑞穂さんが楕円形の大きなお皿に乗ったケーキをテーブルの真ん中に置いてくれた。

「うわあ！ 凄いケーキが2つもあるよ、美緒」

泉美が大きな声を上げて、なっちゃんは目を白黒させている。

朋ちゃんはじつくりとケーキを観察していた。

1つのケーキは苺のスライスが綺麗に周りに貼り付けられているケーキで、もう片方のケーキはフルーツがいっぱいデコレーションされた生クリームのケーキにお誕生日おめでとうのプレートが乗っかっていた。

「それじゃ、ローソクを15本立てて始めようか」
「うん」

瑞穂さんが細長いローソクを2つのケーキに刺して火をつけてくれた。

「Happy Birthday to you, Happy Birthday to you」

「Happy Birthday, dear 美緒ちゃん! Happy Birthday to you」

皆が歌をうたってくれて私が願いを込めてロウソクの火を吹き消し
すと拍手をしてくれた。

「ありがとう! 凄く嬉しいなあ。瑞穂さん、こんな凄いケーキ作
ってくれて感謝感激だよ」

「それは岡谷に言わないとね」

「ええ? このケーキってパパが作ったの?」

これには流石に朋ちゃんもびっくりしていた。

泉美となっちゃんの2人は気絶してるのって言うくらい驚いて氷み
たいに固まっていた。

「岡谷のケーキは美味しいからね。絶品だと思うよ」

「信じられない、パパがケーキまで作れるなんて」

「あれ? 聞いてないの? 岡谷は東京でケーキ屋で働いていた事
があるくらいケーキを作るのが好きなんだよ」

「それは聞いたことがあるけれど、こんなケーキを作れるなんて…
…そう言えば秋香さん達が」

「美緒、お腹ペコペコだよ。早く食べようよ」

「賛成!」

美味しそうなご馳走を目の前にした泉美が我慢できなくなってフォ
ークを手に持っている、朋ちゃんとなっちゃんも泉美に負けじとフ
ォークを握り締めていた。

私の話なんて耳に入っていないみたいだった。

「…」
「…」
「…」
「…」

声を合わせて手を合わせる。

そして、皆が一番先に手を出したのは……ケーキだった。

「うふふ、やっぱりそうなるか」

「えっ？」

瑞穂さんが楽しそうに笑いながらフンフンと頷いていた。

「前に、シャンパンパーティーをした時に岡谷がケーキを差し入れてくれたの、その時に集まった全員が真っ先にケーキに手を出した事があるの」

「うわ、同じだ」

「切り分けようか？」

瑞穂さんがそう言うってくれたけれどテーブルを見ると、時既に遅しで3人が思い思いにフォークで掬って口に運んでいた。

「ん！ プリンだ！」

口の周りに生クリームを付けて、普段は大人しいなっちゃんが珍しく声を上た。

「プリン？」

「そう、このケーキの中ってプリンなの。凄く美味しいよ」

朋ちゃんと泉美が一斉に生クリームケーキを頬張った。

「ん！ ん〜ん」

「ん？ んん！」

2人の顔が蕩けそうになっている。

苺のケーキは甘さ控えめで苺の香りとヨーグルトの酸味が絶妙なバランスで、生クリームの方は大きなプリン・ア・ラ・モードのスペシャルバージョンだった。

それに瑞穂さんの料理はいつ食べても美味しくって4人とも至福の時に包まれて、気がつくのと動くのが苦しいくらいお腹がパンパンになっていた。

もうすぐ誕生日・2

「それじゃ、順番が少し変だけど私達3人からの誕生日プレゼント」
朋ちゃん代表で可愛いリボンがついた小さめの生成りのトートバッグをくれた。

中を見ると可愛いステーションナリーグッズがいっぱい入っていた。

「わあ、可愛い！ ありがとう。大事に使っね」

「それじゃ、これは私から」

「えっ！ 瑞穂さんからも？」

「美緒ちゃんにとって石垣島で初めての誕生日だもんね」

そう言っつてシンプルなストライプの紙袋をくれたの。

「開けても良い？」

「どうぞ」

紙袋を開けるとピンク色のキャップが入っていた。

つばの部分がチェック柄でつばにハトメで穴が三つ開けられている。そして大きなピースマークのワッペンがついていて使い込まれた様なダメージ感が凄く良い感じだった。

「うわあ！ 凄い格好良い！ どう？ クール？」

キャップを被って見せると泉美達が大きく頷いていた。

「瑞穂さん、本当にありがとう。なんだか嬉しすぎて涙が出そうだよ」

「泣くのはまだ早いな、こっちは岡谷から渡してくれて預かったプレゼント」

「パパから？」

瑞穂さんがカウンターの奥から持ってきてくれたのは凄く古い感じのするワインの木箱だった。

「瑞穂さん、これって？」

「ワインかもね。美緒ちゃんの生まれ年は良いワインが沢山あるか

ら」

「ワインなんて貰っても困っちゃうじゃん。でも、高そうな箱だなあ」

慎重に瑞穂さんから受け取ると泉美と朋ちゃんがテーブルの上を片付けてくれた。

静かにテーブルの上に木箱を置いてリボンを外した。

「なんか、ドキドキするね。美緒のパパのプレゼントってなんだろう」

「やっぱり、ワインなのかなあ」

「でも、きつと素敵な物だよ。だってあんなに美味しいケーキを作る人だもん」

泉美が体を乗り出して、なっちゃんと朋ちゃんは立ち上がって箱を覗き込んでいる。

木箱の蓋をゆっくり開けるとモシヤと音がして、沢山のピンク色の何かが箱から溢れ出した。

「朋ちゃん。何これ？ これって……」

「うわ、綺麗！ 泉美、ブーゲンビリアの花だよこれ全部」

「あれ？ 美緒ちゃんどうしたの？」

私はなっちゃんが不思議そうに言うとおり泣き出していた。座ったままで箱に手を置いたまま、ただただ嬉しくて。

「岡谷にやられたわね」

「うゝ パパのいじわりゆう」

「はいはい、もう泣かないの」

瑞穂さんがタオルで優しく顔を拭いてくれた。

「なあんだ、嬉し泣きか。驚いたよ、美緒」

「ゴメン、泉美」

「それで、プレゼントは何なの？ 花びらじゃないよね」

「朋ちゃんも気になる？ 美緒ちゃん早く」

「もう、なっちゃんまで、そんなに急かさないでよ」

ブーゲンビリアの花びらを少し取り出すと綺麗な真っ白な二枚貝の

貝殻がぴつたりと合わさって2つ出てきた。

「瑞穂さん、この貝は何？」

「ヒレジャコみたい、シャコ貝だよ」

1つの貝を取り出して中を開けるとアジアチックなシルバーの籠に入ってる鈴みたいなのが出てきた。

耳元で鳴らすとシャランって凄く澄んだ音色がした。

「バリ島のガムランボールね。ドリームボールとも言って『願いが叶う』とか『邪気を払う』って言われてて、岡谷が好きで携帯に付けてるでしょ」

「えっ、気づかなかったけど。それに赤い石がついてるよ」

「ルビーじゃない、美緒ちゃんの誕生石の」

「うわぁ、パパらしいや」

「うふふ、そうね」

そして二つ目の貝を開けて私はしばらく動けなくなってしまった。

「美緒、どうしたの？」

「ねえ、大丈夫？」

「う、うん」

泉美となつちゃんが心配して声を掛けてきてくれた。

朋ちゃんが私が手に持ったまま開いた貝殻の中を覗き込んだ。

「何が入っているのかな？ うわぁ！ 凄い素敵じゃん、美緒」

「「見せて、見せて」」

泉美となつちゃんにせがまれて掌に載せて皆の前に差し出した。

「凄いね、朋。ブルートパースかな？」

「泉美、アクアマリンじゃない。まるで石垣の海みたいじゃない」

「上に付いてるのって、もしかしてダイヤモンド？」

それはネックレスだった。

雫の形をした大粒のアクアマリンにダイヤモンドが上にあしらわれていて、多分18Kのホワイトゴールドだと思うんだけど……

「瑞穂さん、こんな高そうな物。私……」

「貰っておきなさい、美緒ちゃん。岡谷の気持ちなんだから」

「でも……」

困って瑞穂さんの顔を見るとそんな風に言われてしまった。

「凄いね、美緒のパパって」

「えっ？ 何が凄いの？ 泉美」

「だって普通は中学生の子どもにこんな物くないよ」

「でも、それが普通じゃん！」

「もう、美緒は何も判ってないなあ」

「朋ちゃんまで」

「あのね、美緒ちゃん。美緒ちゃんのパパは美緒ちゃんを子ども扱いしない人だって言う事だよ」

「えっ……」

「ナツの言うとおり。美緒はまだ大人じゃないけれど1人の人間として見てくれてるんじゃないの？」

「朋ちゃん、それって」

「良かったね」

「うん！」

それから、いっぱいお喋りをした瑞穂さんの子どもの事やパパの事、そしてもう直ぐやってくる夏休みの事を。

石垣島に来て私の人生が大きく変ったんだと思う。

だって東京にも友達に居たけれどこんなに楽しい時間を共有した事なんて無かったから。

それに今までで一番素敵な誕生日を迎えられた事が凄く嬉しかった。これも全部パパのお陰なんだと思う、だって私を受け入れてくれなかったらこんなに素敵な時間を過ごせなかったんだから。

生まれて初めての秘

とつても素敵なバースデーパーティーがあつた翌週の夜。

私はパパに連れられて宮良つて言う集落にやって来ていたの。

パパの様子からすると野崎さんに何かを言われて私をここに連れてきたみたい。

それと、明日は学校を休めつて言われちゃった。

不思議だなパパは仕事の事になると凄く真面目だから、学校を休めなんて絶対に言わない人だと思つてたのにな。

でも、いつもの理由で休めば先生もズル休みだとは思わないだろうな。

それと不思議な事がもう1つ。

あんなに酷かつた生理痛もあり酷くならなくつて今回はちゃんと来たんだよ、何でなんだろう？

これもパパのお陰なのかなあ。

「ねえ、パパ。こんな夜に何があるの？」

「宮良の豊年祭だよ。宮良の豊年祭は独特なんだ」

「どんな風に独特なの？ 豊年祭って何？」

「百聞は一見にしかずだ、ほんの一瞬だから見逃すなよ。後でちゃんと説明してやる」

パパがそう言うのと直ぐにどこからか着物みたいなのを着てる男の人が大勢で走つて来た。

そして、目の前を何か意味の判らない事を言いながら通り過ぎる。

その男の人の中に草ボウボウで赤いのと黒いお面か何かを被った物が居る、凄い殺気だった感じでとても怖くつてパパの手を握り締めちゃった。

あつという間に近くのお家の庭に入つて行つてしまつて、庭の中で踊りか何かをしているみたい沖縄独特の音楽だけが聞こえてきて中

の様子は良く判らなかつた。

「パパ、今のつて何なの？ 凄く怖かつたよ」

「あれが『アカマタ クロマタ』 って呼ばれている来訪神だよ」

「神様なの？」

「そう、五穀豊穰を齎すもたら神様なんだ。各家を回つて家の庭で踊りが踊られるんだ」

「ふうん、それじゃ写メろうよ」

「そんな事したら殺されちゃうぞ」

「ええ、いつの時代の話なのさ」

「今はどうか判らないけれど昔は写真に撮つた人が行方不明になつて袋叩きにあつたなんて話があるくらいなんだ。記録に残しても写真やスケッチしても駄目、それに録音なんてもつてのほか。秘祭中の秘祭なんだよ」

「秘祭つて、宮良だけなの？」

「新城島（パナリ島）に小浜島でも同じ『アカマタ クロマタ』の豊年祭が行われてるよ。それと西表の古見が発祥とされていて古見ではアカマタ クロマタの他にシロマタつて言う神様が登場するんだ」

「どこも秘密のお祭りなの？」

「そう、だから詳しい事は何も判らないんだ。昔、パナリの豊年祭を題材にした小説を都知事さんが書いて大騒ぎになつたつて言う話を聞いたことがあるな。たしか映画化されたはずだぞ」

「へえ、そんな事もあつたんだ」

「多分、都知事は八重山には来れないだろうな」

「生まれて初めて秘密のお祭りなんて見たよ。怖かつたけどなんだかドキドキした」

「そつか、そう感じられただけでも良しとするか。美緒の体にも南の島の血が流れているのかもな。明日は四ヶ字の豊年祭だ、帰ろうか」

「うん！」

翌日、美緒は学校を休んだ（ズル休み）と言えば本人が怒るだろう、豊年祭を見せたくて休ませたが正しい。

朝、少しだけゆっくり寝ていると遠くから鐘の音と太鼓の音が聞こえてきた。

「パパ、おはよー」

「おはよう、眠そうだな」

「いろいろと女の子は忙しいの。そう言えばお囃子が聞こえる気がするんだけど」

「豊年祭の道ジュネーだよ。今日は石垣・新川・登野城・大川の4つの字が合同で行う八重山地方最大の豊年祭なんだ。字の御嶽からメイン会場の真乙姥御嶽まで旗頭を持って鉦や太鼓を打ち鳴らしながら練り歩くんだ。それを道ジュネーって言うんだよ」

「それじゃ、もう始まつてるの？ 早く見に行こうよ」

「もう少しゆっくりで……仕方が無いな。朝飯ぐらいちゃんと食べるよ」

「うん！」

美緒の瞳が輝いてワクワクモードになっていた。

もう誰にも止められないだろうと思いとりあえず朝飯に手をつける。もの凄い勢いで美緒が朝飯を食べて、速攻で準備し始めた。

「その格好で行くのか？」

「だって、パパはいつもの格好なんですよ」

「まあ、あの組み合わせ以外に普段着なんて持ち合わせてないからな」

美緒の格好はタイトな白いＴシャツに501にベルトポーチをつけて瑞穂から貰ったキャップを被り部屋から飛び出してきた。

「ヘソ丸出しで風引くなよ」

「若いから大丈夫です！ ぶうーだ」

頬を膨らませて顔を近づけてきた。

軽く往なして俺も準備を始める。

携帯で天気予報をチェックしてタオルを多めに、それとシャツを1枚とりあえずポーターに括り付けた。

マンションから南に下がり東に向うと鉦や太鼓の音が大きくなってくる、天川御嶽が見えてくると旗頭が出発する所だった。

「始まつてるじゃん。早く行こうよ」

「まだ、先は長いんだよ」

「あれ？ 岡谷さんに……真帆ちゃん？」

突然、筋道から声を掛けられた。見覚えのある女の人だった。

「高洲か？ 久しぶりだな」

「お久しぶりです、で……」

「ああ、こいつは真帆の娘の美緒だよ。事情があって俺が預かってるんだ」

少しふつくらとして歳を重ねているが高洲に間違いなかったようだ。

「パパ、この人は誰？ ママの友達なの？」

「うふふ、真帆ちゃんそっくりで驚いちゃった。そう言えば昔、岡谷さんは真帆ちゃんと2人で豊年祭を見に来てたよね」

「そんな事もあったな。美緒、この人は真帆や俺と一緒に働いていた事がある高洲さんだよ、今は結婚して苗字が変わったんだよな」

「ええ、金城になったの。子どもが待つてるからまた後からね」

「そうか、じゃな」

旧姓・高洲が筋道を実家の方に向って歩いて行くのを見て、家が天川御嶽の直ぐ近くだったのを思い出した。

「ねえ、パパ。ママと来た事があるの？」

「そうだな、あれはオンプールだったかムラプールだったか忘れたけどな」

「そうなんだ、ラブラブだったんだ」

「そうだったかな、そろそろ行かないと置いていかれるぞ」

「ああ、先は長いって言った癖に逃げた」

旗頭が進んでいった方に美緒の言葉が聞こえない振りをして歩き出

した。

生まれて初めての感

チャン チャン チャチャ チャン

トン トン トト トンと言う太鼓と鉦の音にあわせて男達の掛け声が上がリ、交代しながら旗頭を持ち上げて歩いている。

「サー サー サー サー！」

「サー サー サー サー！」

登野城の町内を練り歩き、四号線に出て西にある真乙姥御嶽に向う。

美緒は真乙姥御嶽の近くにある南星スーパーの前でへたり込んでいた。

「暑いよ、皆凄いなあ」

「若いんじゃないのか？」

「パパも平気なの？」

「あれ程、先が長いつて言ってるのにはしゃぎ過ぎだ」

「だって、早く見たかったんだもん」

「あのな、本番は3時過ぎからだぞ」

「ええ！ 嘘でしょ、まだまだ先じゃん」

「何か買つて来てやるからここで休憩だな」

南星スーパーの先からは通行止めになっているので、店の前の駐車場で一休みする事にした。

店内に入りスポーツドリンクとアイスを買って美緒に渡すと勢い良く齧り付いた。

「ふあ、冷たくって美味しい」

「しかし、今日は暑くなりそうだな」

店先の日陰から空を見上げると真つ白な雲が流れている。

そして太陽はまるで頭の直ぐ上にあるようだった。

「ねえ、パパ。何で今日は学校を休んでまでお祭りを見に来たの？」

「美緒の学力なら1日くらい直ぐに取り戻せるだろ、でも時間だけ

は巻き戻せないんだ。豊年祭は年に一度のお祭りだ、特に四ヶ字は一番盛大な豊年祭だからな」

「そうか、でも来年も再来年もあるんでしょ」

「来年の事なんてどうなるか判らないだろ、人間なんて数秒後の事すら判らないんだ。今が一番なんだよ」

「そうかな」

「そうだ、それに美緒が一番判ってる事なんじゃないのか？」

「えっ……」

美緒が少しだけ目を泳がせて何かを考え込むように黙ってしまった。

「そんな顔をしてると豊穰の神様に嫌われるぞ、そろそろ行くぞ」

「う、うん」

パパに連れられて真乙姥御嶽に向った。

道の脇に紅白の柱が何本も立てられていてその柱に旗頭が固定されているの。

一番上には極彩色豊かなか飾りが付いていてその下に幟のぼりみたいに旗が風に吹かれているの。

なんて言えばいいんだろう勇壮って言うのかな沢山の旗頭が青い空に映えていて凄く綺麗なんだ。

「パパ、あの飾りには意味があるの？」

「字や団体によって旗頭も旗文字も決められているみたいだぞ。詳しい事は俺にも判らないのだけれど、『請福』『慈雨』『五風十雨』『天恵豊』どれも太平の幸せや降雨、それに豊穰を願う言葉が書かれているんだ」

「重そうだな旗頭って」

「物によるけど50キロ近くあるからな」

「そんなに、重いのか？」

「倒さないように皆で協力して持っているんだよ、基本は持ち手と2本の綱持ちの呼吸が大切なんだ」

パパの説明を聞きながら人ごみを掻き分けて歩き出す。

御嶽の前の交差点はまるで渋谷のスクランブル交差点みたいに人でごった返していた。

やっと御嶽が見えるところまで来ると奉納か、何かが始まったみたいだった。

「パパ。始まったの？」

「そうだな、最初は旗頭・太鼓隊それに巻踊りの奉納だな。中でもムラプールの司る新川の奉納がメインなんだ。子ども達による記旗、五穀の種子籠、婦人による水主、長老のヤーラーヨー、婦人達のザイ、少年少女の稻摺、青年達の杵、鎌払と続く。これは古式に則ったもので、毎年同じように行われているんだ」

御嶽で、子ども達が真剣な顔をして奉納している。

それに続いて意味は良く判らないけれど色んな人達が次々に踊りを踊ったり演舞をしている。

見ている私の所まで神聖な空気に包まれて緊張しちゃった。

それが、終わると各字の奉納が始まるってパパが言ってたとおり旗頭や太鼓隊や巻踊りの奉納が始まった。

どの字も同じ物が無くて凄く見ていて楽しかった。

「少し、移動するぞ」

「え、うん」

パパに手を引かれて御嶽の前の道に何とか移ることができた。

しばらくすると沖縄風の言い方だと東から、沢山の男の人が担ぎ上げている戸板に乗って長い白い髭で黒い衣装をつけた人が、そして西からも宮司さんみたいな人が戸板に乗せられて現れたの。

「パパ、何が始まるの？」

「五穀の種子授けの儀だよ、髭を生やした黒い衣装が神様で白い衣装が御嶽の司だな。これが滞りなく終わると来年の豊作が約束されるんだ」

「ふうん、なんだか緊張しちゃうね」

凄く華やかなお祭りなのに緊張の糸はピンと張り詰めている、不思議

議な感覚だった。

それが終わると着物を着た女の人達が沢山集まってきた。大きな綱が手繰り寄せられて棒を差し込んで2つの綱を結び合わせている。

それが終わると一斉に両手を空に向けて何かを呼び込むようにしながら踊り始めた。

「パパ、何が始まったの？」

「女だけの綱引きの『アヒヤー綱』とガリーーと言う綱を無事に結び合わせた事を喜ぶ踊りだよ」

「なんだか、凄いな。今まで見てきたどのお祭りよりもなんて言うのかなあ、そう神聖な気がする」

「そうか、来て良かったな。ここまでで前半の山場は終わりだ。まだ少し移動するぞ」

「うん」

パパと移動を始めると周りの人も動き始める。

そして10本以上ある旗頭も移動を始めた。

御嶽から西側に200メートル位かな移動すると、そこにも旗頭用の柱が立てられていて旗頭がしっかりと固定された。

高校生や婦人会の舞踊が披露されると日がすっかり傾いて当たりは暗くなってきた。

すると段々周りのボルテージが上がってくる。

すっかり当りが暗くなると松明がたかれて東西から大勢の男の人が担ぎ上げる戸板に乗った2人の武者が現れた。

周りでは太鼓や鉦が打ち鳴らされる。

西の武者は鎌を持って、東の武者は長刀を持っている。戸板が勢い良く合わされると勇壮な戦いが演じられる。

見ている私まで手に汗をかいちゃった。

「パパ、あれは何て言うの」

「ツナ又ミンだよ。弁慶と義経なんて呼び方もされているかな」

「凄い迫力だね」

「まだまだ、クライマックスはこれからだ」

パパの言うとおりだった『ツナ又ミン』が終わると大蛇の様な太くて長い綱が2本準備されている。

綱の先は輪になっていて太い丸太が差し込まれる。

もの凄い勢いと熱気だった。

合図の爆竹が鳴り、人々のエネルギーが一気に噴出した。

東京の三社祭を見てもこんな感じにはなかった。

生まれて初めての感覚、何かが体からあふれ出るような。

血が騒ぐってこの事なんだと初めて知った。

島の人も観光客もナイチャーも入り乱れて一心不乱に綱を引っ張っている。

私も噴出したエネルギーに飲み込まれて無我夢中になって綱を引っ張っていた。

気が付くと、あっという間に西側の勝利で決着が付いていた。

「今年は西が勝ったからいい年になりそうだ」

パパが優しい瞳で見守っていてくれた。

気付かない間に私は汗びっしょりになっていた。

「本当にヤマングーだな」

「良いじゃん。生まれてはじめての経験なんだから」

「ほら、汗を拭いて。風邪を引くぞ」

パパがポーターのバッグからタオルを出して投げてくれた。

「本当に真帆の子どもなんだな」

「えっ？ どうして」

「いや、真帆が三社祭を熱く語っていたのを思い出したんだ」

「そうなんだ」

パパはなんだか嬉しそうにママの話をしてくれた。

それは初めての事だった。

でも、私の心がチクリと痛みを感じた。

お祭りが終わった後はどこと無く物悲しい。

ついさっきまであんなに熱気に包まれていた真乙姥御嶽の前を通り、オレンジ路の街灯に照らされた4号線を皆言葉少なく歩いて家に向っている。

「クチュン」

汗だくになった体が夜風に吹かれて少し冷えてきた、タオルで拭いたけど洋服が冷たく感じる。

すると頭に何かが被さってきた。

「それでも羽織っておけ」

それはパパの大きなシャツだった。袖を通すとお日様の匂いがする。

「えへへ、ありがとう。あれ？」

手にタオルと大綱引きの縄を握っていた。

多分、引つ張り過ぎて切れたんだと思う。

我ながらどれだけ熱中していたか気付くと少しだけ恥ずかしくなった。

「捨てるなよ、その縄は縁起物だからな。大事にするんだな」

「うん！」

ママに言われた事があった『あいつはママだからね、油断しちゃ駄目よ』って。

今の私はそんなパパの優しさに包まれている時間が大好きになっていた。

でも、パパは何であんな事を言っただろう『美緒が一番判ってる事』なんて……

生まれて初めて食

夏休みが始まり、最初の週末。

午前中から米原のビーチで汗だくになっていた。

「あの馬鹿は本当に思いつきで行動しやがって。人の迷惑なんて考えてるのか？」

「まあまあ、チーフ。悪気があってしている事じゃないんだから」

「テル、悪気が無ければ何をしてもいいのか？」

「諦めましようよ。美緒ちゃんは楽しそうなんだし」

荷物を運び終わった美緒は由梨香と美穂里と一緒に波打ち際で楽しそうに遊んでいた。

「で、あの馬鹿は？」

「頼んであった食材を持って後から合流って言ってましたよ」

「準備だけ俺達にさせて、楽しむつもりだな」

「さあ、どうなんでしょうね」

テルと2人でスクリーンタープを組み立てて、BBQのセッティングをタープの前でしていた。

事の起こりは美緒のバスデーパーティーの翌日だった。

「チーフ、美緒ちゃんのバスデーパーティーどうだったんですか？」

「はあ？ あのなユーカお前達と仕事をしてただろう」

「でも、イタリアンのお店でパーティーなんて素敵だな」

美穂里が蕩ける様な瞳で乙女チックになっていた。

そこに野崎オーナーが突然現れた。

「何の話をしているんだ？」

「出たな、野崎」

「あのな、岡谷。私は鬼でも幽霊でもないんだ、いい加減にしないとマジで殴るぞ」

「いつもはこの時間には居ないだろうが」

「今日は書類を取りに戻ってきたところなんだ。で、何の話だ？」
野崎オーナーが3人を見渡す、由梨香と美穂里は完璧に目が泳いでいる。

俺は俺で白を切ろうと腹に決めていた。

知られたら何を言い出すか判らないからだ。

3人が話さないと判ったのか野崎が標的を変えた。

「テル、何か変った事は無いか？」

「えっ、何ですか？ オーナー」

テルがキッチンから何も知らないままノコノコと現れた。

「だから、最近何か変った事がなかったかと聞いているんだ」

「……あつ！ 昨日、美緒ちゃ……あがつ！」

ユーカが持っていたモップがテルのゴーヤ（弁慶の泣き所）にクリンヒットした。

「さあ、掃除しなきゃ。テルは邪魔よ、どいてどいて」

「私も、窓拭きしよう」

ユーカがモップでテルを追いやる、テルは涙を浮かべながら調理場に戻っていった。

「ほっ、ほう」。私に知られたら拙い事があるみたいだな。由梨香に美穂里！

まるで瞬間移動したように野崎が由梨香と美穂里の肩にしっかりと手を回していた。

「べ、別に何も無いですよ。ねえ、ミポ」

「う、うん」

「それじゃ、ゆっくり事務所で話をしようか？ 御二人さん」

由梨香が助けを求める用に俺を見ていた、美穂里は今にも泣きそうな顔をしている。

これ以上は2人が耐えられないだろうと判断して口を開いた。

「昨日、美緒のバスディーパーティーが知り合いの店であったんだよ」

「はあ？ ワンス モアー プリーズ？ ミスター オカーヤ？」

「美緒の誕生会があつたんだ」

「で、岡谷。プレゼントは」

「やらない訳が無いだろう、俺の娘だぞ」

「娘ね、その大事な大事な娘の美緒ちゃんの誕生日を私に黙っていたと？」

「別に、言う必要は無いだろう。プライベートな事だ」

野崎の眉と口元がピクピクと引き攣り始めた。

嫌な予感と悪寒が走るが既に時遅しだった。

「今度の土日は臨時休業！ 全員、米原キャンプ場に集合！ 来ない奴は首！」

「あんな、野崎。夏休みだぞ」

「うるさい、うるさい！ オーナー命令だ。岡谷は上司に口答えした罰だ、食材の発注とキャンプの準備を言いつける。肉が不味かったら承知しないからな」

まるで駄々を捏ねる子どもだった、こうなってしまった野崎は手が付けられなかった。

訳が判らず泣いている赤ん坊の方がどれだけましか。

そこに騒ぎを聞きつけて仕込みを終わらせた波照間が現れた。

「何の話をしているんですか？ 俺だけ仲間ハズレにしないで下さいよ」

「波照間、今度の土日は米原で美緒ちゃんのバースデービーチパーティーだ。美緒ちゃんに会えるぞ」

「やった！ マジすか？ 俺、何でもしますから」

相も変わらず意味も訳も判らないままテルが1人ではしゃぎ回っていた。

「本当に、馬鹿なんだから」

「駄目駄目だね、テルテルは」

「へえ？ 俺？ 何で？ 悪者？」

「テルは何も悪くないよ、男手は俺とお前だけだから準備を手伝え

よ」

「はい！ 地獄の果てまでチーフについていきます。お父さんと」

「呼んだらシバくからな」

「……パパ？」

「シバく！」

そんな訳で準備を全て終わらせて、テルはユーカ・ミポ・美緒の三人と遊んでいる。

俺はサマーベッドに横になってのんびりしていた。

しかし、昼を回っても野崎は現れなかった。

「チーフ、オーナー遅いですね」

「そうだな、迷子にでもなったかな」

「まさかいくらなんでもそれは無いでしょ。米原キャンプ場が判らない人間なんて殆ど居ないですよ」

テルが遊び疲れたのか俺が寝ているサマーベッドの横に腰を降ろした。

「野崎だからな、ありえる」

「酷！」

「パパ、お腹が空いたよ」

美緒達もサマーベッドの所にやってきた。

遊び疲れて腹が減ったのだろう。

「仕方が無い、これで売店で何か買ってきて食べる。冷たい物ばかり食べるなよ海で体が冷えてるんだ腹壊すぞ」

そう言っつて美緒に財布を渡す。

「これで、買っつていいの？」

「それじゃ、自腹を切るか？」

美緒がブンブンと大きく首を振った。

「テルも一緒に行っつて何か買っつてもらえ」

「ええ、良いんすか？ 俺まで」

「たっぷりと野崎に請求するから構わないよ」

「レッツ　ゴー！」

美緒の掛け声とともに3人が美緒の後を付いていった。

「しかし、遅いな。あの馬鹿は」

少し海に入り体を冷やしてから横になり美緒が買ってきた爽○美茶のペットボトルに口をつける。

日が少し傾いてきたと言うのに野崎は未だ現れずだった。

「撤収するかな……」

そんな考えが頭に浮かぶ、するとビーチの入り口の方から野崎の声がした。

「遅れた、悪い。荷物を運ぶの手伝ってくれ」

テルがいち早く気付き走り出した。

B B Q台の炭に着火材に火をつけて放り込んでから野崎が持ってきた荷物を取りに向った。

「しかし、凄い量だな」

「良いの良いの気にしないの」

6人でどうしろと言うくらいの飲み物（酒や酒がメイン）や食べ物（つまみ&お菓子系）の量だった。

食材は俺が発注したのをそのまま持ってきたらしい。

野崎はご機嫌だった。

直ぐに食材を出してB B Qを始める事にする。

由梨香と美穂里は慣れた手つきでテーブルに紙皿や割り箸にコップなどを準備し始めた。

美緒は初めてなのでどうしたら良いのか判らずに俺の側で座っていた。

「美緒、今日のB B Qパーティーは野崎が全部持ってくれるんだぞお礼を言っておけよ」

「ええ、本当なの？　野崎さん有難う御座います」

美緒が立ち上がって野崎に頭を下げた。

「何にも気にしなくて良いの。美緒ちゃんの誕生日のお祝いだもん

お安い御用よ！ 今日は無礼講で騒ぎまくるわよ！」

「嬉しいな、皆に祝ってもらえて」

「そうだよな、皆にお祝いして欲しいよね。それをどこかの誰かさ
んは、まったく有り得ないんだから」

「はいはい、俺が悪いんです。申し訳御座いませんでした」

「あら、やけに素直ね。岡谷」

俺が白々しく頭を下げると目を細めて俺の事を野崎が見ていた。

「そんな目で人を見るな、待ちくたびれて腹が減っているんだ。と
つとと始めろ」

「言われなくても判ってます。それじゃ始めようか」

野崎の号令で各々が飲みたい飲み物を自分で選んだ。

美緒はジュースをユーカとミポは缶チューハイを、残りの3人はオ
リオンビールを手にしていた。

「それじゃ、美緒ちゃん。お誕生日おめでとう！ 乾杯！」

「「「おめでとう！」」」

「えへへ、ありがとう」

美緒が照れてモジモジしている、お腹も限界に近いだろうと思い大
きな発砲スチロールの箱から肉を取り出した。

「それじゃ、焼くぞ」

「待った！ 岡谷、物事には順番と言う物があってな」

「遅れた野崎がそれを言うか？」

「シヤラップ！ はい、美緒ちゃん誕生日おめでとう」

野崎が可愛い紙袋を取り出して美緒に渡した。

「ありがとうございます。開けて良いですか？」

「Yes！」

「うわあ、可愛い！」

それは南国の花柄の暖色系のホルターリボンの膝丈ワンピースだっ
た。

「私達3人から、おめでとう美緒ちゃん」

「ありがとう」

由梨香・美穂里・波照間の3人からは紅型の飾りが付いたヘアゴムややミンサー柄のシュシュだった。

「凄く可愛い。パパ付けて！」

美緒がバッグからブラシを取り出して俺の目の前に突き出して、シュシュを俺の手に押し付けて背を向けた。

「面倒臭いなあ」

そう言いながら美緒から受け取ったブラシを持ちシュシュを手首に通してヘアゴムを口に銜え、美緒の髪を漉きはじめる。

頭の上の方で髪を纏めて銜えていたゴムで髪を括り、シュシュを捻り2重にして髪の毛に通した。

「出来たぞ」

「パパ、ありがとう。ん？ 皆どうしたの？」

『ニライ・カナイ』の4人が固まったまま俺と美緒を凝視していた。

「変態！」

「早業！」

「凄い！」

「……」

野崎・由梨香・美穂里が声を上げてテルは固まったままだった。

「やかまさん！ 経験豊富なんだ俺は」

徐に炭が赤く燃えているBBQ台の網に肉を置いて焼き始める。

「ああ、チーフが照れてる」

「恥ずかしいんだ。ミポ、こんなチーフ始めてみた」

「うるさい、直ぐに肉が焼けるぞ」

これ以上突っ込まれるのが嫌で焼肉奉行に徹する。

美緒は俺の横で嬉しそうにしているだけだった。

すると、まだ半焼けの肉をテルが抓んで口に放り込んだ。

「うわあ、馬鹿テル。まだ焼けてないよ」

「牛肉だぞ、ユーカ。生でも平気なんだ、それに俺は血が滴る……」
肉を頬張りながら喋っていたテルが急に黙り込んだ。

「テル、どうしたの？ 気分が悪くなったんじゃって嫌だ、テルが

泣いてる」

「生まれて初めてこんな上手い肉食べたかも……」
テルが幸せそうな顔をして涙を流しながら肉を頬張っていた。

B B Qが始まると凄まじい肉の争奪戦が始まった。

「ユーカ！ それは私が育ててた肉だ！」

「ええ！ 無礼講なんですよね」

「テル！ 肉ばかり喰わないで野菜を喰え！」

まあ、争奪戦と言っても野崎・由梨香・波照間の3人なんだが……
大人しい美穂里と美緒には良い感じに焼けた肉を2人の紙皿に取り分けてやった。

「美味しいね、ミポさん」

「うん、凄く柔らかいよね。チーフこの肉って……」

「石垣牛だぞ、それも特上中の特上のA5クラスの肉だ。沢山食べるよ」

「「はい」」

俺の『石垣牛』の言葉に争奪戦を繰り広げていた3人が瞬時に反応した。

「石垣牛……」

「美味しいはずだ……」

「A5だあ？ 岡谷？ A5クラスと言えば超特上だぞ、こんな物どこから仕入れた？」

顔を引き攣らせていたのは野崎オーナーだった。

「知り合いの焼肉屋のオーナーに業者を紹介してもらったんだ。肉が不味かったら何をされるか判らないからな。ちなみにこのトント口は黒豚アグーだからな。それとこの活きの良い車海老はテルの叔父さんに頼んだが何か問題でも？」

テルが満面の笑顔でサムズアップしているが、野崎の顔はテルとは間逆の顔になっていた。

「いくらかかると思ってるんだ？」

「はあ？ お安い御用なんじゃないのか？ 野崎オーナー」

「また、岡谷にやられた……」

「オーナー？」

ユーカが心配そうに野崎の顔を覗き込んだ。

「生まれて初めて勝てたと思ったのに……ああ！ ム力つく！ こうなったら元を取るまでトコトン騒いで楽しむわよ！」

「……YEAH！……」

夏休み最初の週末で周りにもビーチパーティー&キャンプをしているグループがなんの騒ぎかと思うくらい大騒ぎになった。

筆頭はもちろん主催者の野崎だった。

ビーチパーティー&キャンプの夜は長い、タープの前では自然にダメージを与えないように焚き火台を使って火を焚いている。

焚き火の無いキャンプなんて海の無い石垣島のような物だ。

焚き火を囲んで皆がゆんたく（お喋り）をしていた、俺はサマーベツドを波打ち際まで運んで横になりながら竿を投げて釣りをしていた。

しばらくすると、足音が近づいてきた。

「ん？ 美緒か？」

「ええ、何で判るの？ 足音？」

「まあな、ユーカならもつと元気良く、ミポは静かに、テルなら勢い良く、野崎は音もなく」

「それじゃ、美緒は？」

「子猫の様に優しく軽やかに」

「じゃ、ママは？」

「……さあな」

「ぶうゝ 引つかかると思ったのに」

「俺に勝とうなんてまだまだ早いよ、素直に真っ直ぐに大人になつて欲しいな」

「……パパがそんな事を言うなんて思っても見なかった」

美緒がサマーベッドの縁に腰掛けた。少し体をずらすと俺の体に寄りかかってきた。

「重い？」

「美緒がか？ 軽すぎる」

「もう、本当かな」

美緒が話すのを止める。

打ち寄せる波の音と風の戦ぐ音、それにさお先の鈴が風に吹かれて小さく鳴っている。

空には星が煌いて、人工の音がしない世界。優しい自然に包まれた。

生まれて初めて死

翌朝は日の出と共に目が覚める、朝日が体に突き刺す。女性陣はスクリーンタープのなかでゆっくり寝ている。男2人は外でサマーベッドで一晩過ごした。

「暑い……」

ビーチに日が差し始めると同時に体から汗が噴出した。Tシャツを脱ぎ捨てて海に飛び込む、冷たい海の水がとても気持ち良かった。

軽くシャワーを浴びて残り火のBBQ台に炭を足す。

テルは暑さにもめげず寝ていた、あれだけ飲めば当分起きないだろう。

フライパンを網に載せ目玉焼きを人数分焼き始める。

「パパ、おはー」

「まだ、寝ぼけてるな」

「うう、だってお喋りが楽しくって……」

「まあ、良さ。それも楽しみのうちだ。顔でも洗って来い」

「うん！」

朝飯を食べて思い思いに時間を過ごす。

由梨香と美穂里はブラブラとビーチを歩いてビーチコーミングをしている。

美緒は水着に着替えて野崎から貰ったワンピースを着てはしゃいでいる、それを見たテルはけたたましい音を撒き散らしながらバイクでどこかに行ってしまった。

野神は二日酔いの頭を抱えながら座り込んでいた。

「岡谷、熱いコーヒーが飲みたい」

「うぎ、自分で入れろ。インスタントだけだな」

「岡谷あゝ お願いだからあゝ」

「面倒臭いな、自業自得だろうが」

朝飯にインスタントのスープを飲むために沸かした残りのお湯とインスタントコーヒーをカップに入れて野崎に渡した。

「ありがとう……」

「パパって、本当に優しいんだね」

「あんな、美緒。野崎が不機嫌なままで良いのか？」

「うわあ、それはちょっと……」

「みるたんまで、ひろくない？」

「野崎さん呂律回ってないし……」

ビーチコーミングをしていたユーカとミポが笑顔で戻って来た、思惑通りのものが拾えたのだろう。

そこにつばの広い麦藁帽子を手にしてテルも戻って来た。

この朝っぱらどこの店で買ってきたのだから、恐らく近くにある知り合いの店でも叩き起こしたのだろう。

「美緒ちゃん、これは俺から誕生日プレゼント」

「ええ？ でも、3人からは」

「ああ、あれは3人でって俺はお金を出したただだから選んだのはユーカとミポだし。だからこれは俺から」

「ありがとう」

美緒が嬉しそうに麦藁帽子を被ってその場でターンして見せた。

「くう、メチャ！ 可愛いす」

「あ、あれって……ミポ……」

「あわわ、あわわ。な、夏海 杏だあ！ La Promessa
の！」

テルは1人で体をくねらせて悦に入っている、そして由梨香と美穂里が美緒を指差して大騒ぎをしていた。

「ユーカさん、ミポさん？ どうしたの？ 夏海 杏って誰？ ラ・プロメって何？」

可哀相な俺がそこには居た。

女に取り囲まれて質問攻めという詰問にあっている……

「チーフ、モデルは美緒ちゃんのお母さんですか？」

「絶対そうだよ、美緒ちゃんと良く似てるんですか？ チーフ」

「岡谷、白状しろさもないと……」

「白状しないとどうなるんだ野崎」

「うわあ、チーフの顔怖い」

テルは回りは眼中に無いのか美緒ばかりを見ている、その美緒は訳が判らず？マークを生産し続けていた。

立ち上がりフライパンを手にとって野崎を睨みつけたまま近くにあった手ごろな石でフライパンの底を思いっきり叩いた。

「あ、頭に響く！ それは八つ当たりだろう。もう駄目だ横になる」
フラフラとタープに歩いていき二日酔いの野崎が倒れこんだ。

「一丁あがり」

「あはは、み、ミポ。チーフはしつこい人嫌いだったよね」

「う、うん。そ、そうだね」

俺の顔を伺って由梨香と美穂里が退散しようとしていた。

「ねえねえ、夏海 杏って誰なの？ それにラ・何とかって何？」

「あ、あのね、美緒ちゃん。今は聞かないほうが良いかも」

「ええ、ユーカさん教えてよ」

由梨香と美穂里が顔を見合わせてから俺の顔を見ていたが、俺は気にしないでサマーベッドに横になったまま目を閉じて狸寝入りを決め込んだ。

すると由梨香が俺の事を気にしながら小声で話し始めた。

「美緒ちゃんはチーフのホームページを見たこと無いの？」

「えっ？ ユーカさん？ 無いよ、ホームページを持ってるのは知ってるよ。ブログは見たことあるけど」

「それじゃ、チーフが小説を書いているの知らないんだ」

「ええ！ パパが小説を？ ミポさん本当なの？」

「うん。その中でチーフ自身をモデルにした様な小説がいくつかあって、それに出てくるヒロインが同じ感じの女の子なの」

「どんな女の子なの？」

「イメージ的に美緒ちゃんそのものかな、小柄で髪の毛が長くて可愛い感じの女の子」

「そうなんだ」

美緒が少しだけ淋しそうな複雑な表情をするとユーカが話題を変えてきた。

「そう言えばチーフからの何をプレゼントしてらったの？」

「え？ これだよ」

美緒が携帯につけているガムランボールをユーカに見るとユーカが不思議そうな顔をしている。

「ガムランボールでしょこれ。これだけなの？」

「でも、チーフならもつと凄いモノを美緒ちゃんにプレゼントすると思うけどなあ」

「そうだよな、ミポ。チーフは美緒ちゃんに骨抜きだもんね」

「そ、そんな事無いよ。パパはしっかりしてるもん。それに……」

「それに、何？ 美緒ちゃん」

美緒が渋々バッグに大切にいれてあったネックレスを取り出した。

「こ、これが本命なの？」

「うわあ、凄い綺麗。アクアマリンでしょ、これ。でも、こんなに濃い色のアクアマリンなんて初めて！」

ジュエリー関係に目が無い野崎が由梨香と美穂里の声を聞いてタープから這い出してきた。

「どれどれ、ちよつと良いかな……？ ま、まさかサントマリア？」

「オーナー、サントマリアって？」

野崎が二日酔いの頭を擦りながら答えた。

「ブラジルのサントマリア地方で発見されたアクアマリン・サントマリアは深い青が魅力で、今は枯渇して希少価値が付いて高価で取引されているの」

「そ、そんな高いんですか？」

「本当にサントマリア地方の物だとこのサイズのネックレスで10

万以上かな」

「アフリカーナだよ」

美緒が驚いて声を上げるより早く俺が答えた。

「アフリカーナ？」

「サンタマリア・アフリカーナ。アフリカで見つかったサンタマリアと同じ深みのある青いアクアマリンが見つかったんだ。でもこちら希少には変わりないかな」

「パパ……」

美緒が心配そうに声をかけるが返事は無かった。

「まあ、岡谷がちゃんと美緒ちゃんを見ているということだな」

「そうだね」

「私もそう思う」

野崎の言葉に由梨香と美穂里が妙に納得している。

美緒はなんだか複雑な気持ちだった。

昼飯を食べて若い4人は午後は海で遊んでいた。

俺は相変わらずサマーベッドで横になりヘッドフォンで音楽を聴いていた。

野崎も何とか復活して着慣れない水着になり上着を羽織ってタオルに包まって、サマーベッドの下の方で海を見ていた。

テルが海から上がってくるのが見えた、飛ばしすぎて疲れたのだろう。

しばらくすると由梨香と美穂里もビーチに上がって座っていた。

何気なく海を見ると胸まで浸かり、両手を広げながら海の中を歩いてビーチに向ってくる美緒の姿が見えた。

美緒が俺を見て手を振った瞬間何かを踏み外したようにバランスを崩し、吸い込まれるように海に吞まれた。

波打ち際にいた波照間が立ち上がる。

由梨香と美穂里、それに野崎が振り返り何かを叫んでいるが俺の耳には届かない。

ヘッドフォンが宙を舞う。

サマーベッドを蹴り上げて気が付くと走り出していた。

飛び込もうとしているテルの横をすり抜け、海に飛び込む。

サマーベッドが砂浜に叩きつけられる音がした。

美緒を抱き上げて波打ち際まで来ると、もの凄い力で俺の首にしがみ付いて火が付いたように泣いていた。

一時は騒然としたが美緒が無事だと判ると周りで遊んでいた人達は平静を取り戻していた。

「良かった、何も無くて」

「俺が付いてて何かあったら困るだろうが、ユーカ」

「でも、チーフ。凄かったすね、まるで加速装置でも装備しているんじゃないですか？」

「あんな、テル。俺は普通のどこにでも居る人間だ」

「いいや、化け物並みのスピードだったわね」

普段、鬼や幽霊と言われている仕返しなのだろう野崎が笑いながら言い放った。

「ほら、泣き止んで。水でも呑んだか？」

「らつて、凄くおそろいて怖かったんらもん……ううう」

美緒が首を振りながら答えた。

「少し、タープの下で休もうな」

「う、うん」

美緒をお姫様抱っこをしてタープまで連れて行き静かにマットの上に降ろしてグジュグジュの顔をタオルで拭いてやると、少し落ち着きを取り戻してしゃくり上げるだけになっていた。

「ほら、岡谷も足を何とかしろ」

野崎に言われて足をみるとサンゴで傷付けたのだろう血がダラダラと流れていた。

「チーフ、大丈夫ですか？」

美穂里が心配そうにタオルで足の血を拭きとってくれた。

「大丈夫だよ、ありがとうな。サンゴに引っ掛けただけだよ」

「パパ、らいじょうぶ？」

「あんな自分の心配をしる」

「美緒はもうらいじょうぶらもん」

「そうか、それなら良いんだ」

深く息を付いて後ろに倒れ込む、胸を押さえて少し顔を顰めると美緒が顔を覗き込んだ。

「パパ？ どうしたの？ ねえ、パパ！」

「あつ……何でもない、直ぐに治るから」

「治るからつて、へえ？」

俺の肩に置いた手を胸に当てて、直ぐに美緒が耳を俺の心臓がある位置に当てた。

「な、何？ これ、な、なんでも無い訳ないでしょ！」

「ふふふ、まるで『恋^{こいかけ}』みたいだな」

「本当だ、もうやだ。チーフ格好悪い」

「私もびっくりです」

「えっ？ ユーカさん？ ミボさんまで？」

「治まったか？」

美緒が不安で心配そうな顔をしているのに、何事も無かったかの様に野崎が声をかけてきた。

「よし！」

気合一発で立ち上がると美緒が不思議そうな顔をして皆を見上げていた。

「パパ？ 体は平気なの？」

心配そうな顔で美緒が立ち上がった。

「直ぐに治るつて言っただろうが、そんなに心配なら触ってみろ」

「う、うん」

美緒が立ち上がり恐る恐る俺の胸に手を当てた。

「治ってる。何で？」

「軽い発作みたいなものだよ」

「発作って……」

「完全右脚ブロックって言う軽度の異常が心臓にあるんだ、以上なんてな」

「もう、こんな時に冗談なんて言わないで！」

美緒の頭に手やると美緒がもの凄い勢いで払い除けた、そして真面目な顔をして俺の顔を睨みつけていた。

溜息をひとつ付いて美緒の目を真っ直ぐに見た。

「悪かったよ、体の事を黙っていて。最近は動悸も起こらなかったんで何も言わなかったんだ。時々起こる動悸と軽い貧血と目眩以外は何も問題ないから」

「治らないの？」

「一生治らないと医者に告知されているし自分でも調べた。ただフルマラソンみたいな過激な運動をしなければ普段の生活に支障はないよ」

「一生治らないって……」

睨みつけていた美緒の顔がまたクシクシユになりかけた。

再び美緒の頭に手をやると今度は抵抗しなかった、優しく頭を撫でてやる。

「そんなに心配するな。俺は死神に愛されているんだ、ちょっとした事であの世なんて事にはならないよ」

「他に隠している事は無いの？」

「他に？ 若い頃に交通事故で左足を潰してる事くらいかな」

俺の左足には大きな傷跡が三箇所残っていた、大腿部、膝頭、ひかがみにそれぞれ10センチ以上の傷が残っていた。

「本当に大丈夫なんですよ」

「心配のし過ぎは体に毒だぞ」

「もう、パパのバーカ。パパに言われたくないもん」

「それだけ、元気ならもう平気だな」

「うん！」

その夜はなんだか怖くて一人で眠る事が出来なかった。

我が俤を言つてパパのベッドにもぐりこんだの。

生まれて初めて死というモノを垣間見た気がするんだもん。

それは自分自身と少し苦しそうにしているパパを見た時に死んでしまっんじゃないかと思った。

本当に怖かったこんな感覚は2度と味わいたくないと願ったの。

パパへの優しさ

『海神祭り（ハーリー）』

『パパの前の家族との出会い』

『オリオンビールフェスタ』

『美緒の誕生日』

『宮良と四ヶ字の豊年祭』

『ビーチパーティー&キャンプ』

初めての体験ばかりが次々と波の様に打ち寄せて凄く楽しかったんだけど、パパの体も心配なんだ。

心配するなって言われても気になっちゃうんだもん。

と言う訳で、久しぶりにパパと2人でお家でのんびり休日をエンジョイしているの。

私は夏休みだから課題をこなせば長い長いお休みなんだけどね。

そうそう、パパのホームページの小説はパパが仕事に行っている間に全部読んじゃった。

面白いかと言われると微妙かも、本人も自己満足の世界だからってあまり気にしていないみたい。

それでも、気になるお話があったんだけどパパには聞けなかった。

昼は少しだけ海に行って帰ってきてからはお家でご飯を食べて、夜はクーラーが効いているパパの部屋でベッドの上に寝転んで私はゴロゴロしてたの。

パパはパソコンに向って何かを書いているのかなあ？

「パパ、この本は何の本？」

ベッドの枕元に明らかに毛色の違う本が2冊置かれてたの。

マンガ本やライトノベルよりは遥かに高そうな本だった。

「どの本だ？」

「枕元に置いてある本だよ」

「見れば判るだろう」

「見て良いの？」

「何度も同じ事を言わすなよ、美緒に見られたら拙い物なんて置いてないよ」

「そうじゃなくってなんだか上等な本だから」

「タイトルどおり宇宙と空に関する本だ」

「うわぁ、綺麗な写真がいっぱい」

私が声を上げててもパパはさして気にならないのかいつもの事だと思っ
ているのか、PCに熱中して振り向きもしないで話をしていた。
『空の名前』はそのタイトルどおり空や雲、雨や雪、それに風なん
かの地方による呼び方なんかが解説付きで書いてあって写真がいっ
ぱいで判りやすかった。

もう一冊の『宙ノ名前』は月や星の事、それに四季それぞれの星座
の事がこと細かく書かれていてこの本にも写真がいっぱいで凄く綺
麗な本だった。

「うわ、高い本なんだね」

「写真が沢山載っている本は高いんだよ」

「両方ともパパが自分で買ったの？」

「『そのなまえ』は俺が買ったんだ」

「ぶう、両方『そのなまえ』じゃん字は違うけど」

「雲や雨の方だよ」

「え、それじゃ星の方は」

「もらい物」

「誰に？」

「さぁ？」

会話が尻すぼみになっていく、パパの馬鹿。

パパは私の方に振り向きもせずにパソコンのキーを叩いてマウスを
動かしている。

少しだけ力チンと来た。

椅子の背もたれを脚で……

「気分転換でもするか。コーヒーを買いに行くけどついでは無いかな？」

「えっ、何？ ココストアーに行くの？」

びっくりして脚を引っ込めちゃった。

「何をしようとしていたのかな、この可愛らしいあんよで」

パパが私の足の指を抓んで軽く揺さぶった。

「パパ、アイスが食べたい。ホームランバーのチョコチップいちご味ね」

「了承した」

そう言っただけでパパが買い物に行っちゃった。

ああ、びっくりした。

パパは勘が良いのか鈍いのか良くわかんない、もしかして……猫を被っていたりして……黒！

そんな事を考えていると空の本が面白くって集中し始めちゃった。

しばらくして不意にパソコンの液晶に目を移すと綺麗な海に女の子が立っている画面が……

「ああっ！ 今のって」

ベッドから飛び降りてパソコンの画面を覗き込むけど違う画面になっていた。

マウスを動かすとどこかの桟橋の写真になっちゃった。

そこにパパがココストアーから帰ってきたの。

「何してるんだ？」

「ご、ゴメン。勝手に触って」

「別に保存するから構わなよ。ほら、アイス」

「ありがとう、じゃない！ パパ、今、画面にママの写真が！」

パパからアイスを受け取ってパソコンの画面を指差した。

「何を訳の判らない事を言ってるんだ？」

「あのね、急に画面が変わって」

「ああ、スクリーンセーバーの事か？ 気に入った海や花の写真な

んかをスライドショーにしてあるからな」

「その中にママの写真があるでしょう」

「はあ？ 真帆の？ あったかな？ あったとしても昔の写真をパソコンに取り込んでも綺麗には見れないだろ。それにホルダーには100枚近い画像が取り込んであるからな」

「うっ、そうか。ママが島に居た頃はデジカメなんて無いんだもんね」

「携帯すら無かったからな」

携帯の無い世界なんて想像も付かなかったけれど、ほんの少し前まではそれが当たり前だったんだろうな。

「それじゃ、どうやってママと連絡を取っていたの？」

「手紙かな？」

「その手紙はあるの？」

「さあ」

「もう、パパは『さあ』ばかりで……もしかして隠してるのか」

「何が言いたいんだ？ 美緒は」

パパにダイレクトに聞かれると少し戸惑ってしまった、私が困惑の表情を浮かべるとパパから話を切り出してきた。

「言いたい事があるならはっきり言えと言ったはずだぞ」

「それじゃ聞くけどパパには恋人とか好きな人は居ないの？」

「また、ストレートな話だな」

「パパがはつきり聞けって言っただんじゃなか」

「居るように見えるか？」

「うわっ、そう言われてみると微妙かも。それじゃ、ママの写真を見せて」

「判ったよ」

パパが椅子をどかして天袋をあけてポケットアルバムを何冊も取り出してベッドの上に置いてくれた。

「パパ、怒ってる？」

「そんな事で怒らないよ」

「ゴメン、ママの事思い出すのが嫌なの？」

「あのな、真帆の事を思い出すのが嫌だったら美緒をここに住ませたりすると思うのか？」

「うう、そうだよな。美緒はママの子どもだもんね。嫌でも思い出すよね」

「嫌じゃないって言うてるだろう、ただ……」

そこでパパは黙り込んでしまった。

怒っているのかなと思って聞いてみただけなのに、パパのあまり触れられたくない所を触ってしまったみたいだった。

そして、少しだけ考えてからパパが話し始めた。

「ただ、思い出なんて言う物は楽しい思い出ばかりじゃないだろう。一度蓋を開けてしまうと閉めるのが大変な時もあるんだよ。美緒も色々な事を経験して大人になれば判るだろう」

「まだ、美緒が子どもだって事なの？」

「違うな美緒にも判る時がくるさ」

再びパパは何かを考えていた、表情から固さがとれていつもの穏やかな優しい瞳になっている。

「美緒が石垣島に来て3ヶ月が経つんだな」

「うん」

「もう、良い頃だろう。真帆と俺との事で聞きたい事があれば聞いしてくれ、答えられる範囲内でしか答えられないけどな」

「えっ、う、うん」

パパにいきなりそんな事を言われて戸惑ってしまった。

知りたいことは沢山あるけれどどう聞いていいのか判らなかった。あれもこれもと考えているうちに頭の中がグチャグチャになっていってしまう。

でも、パパは美緒の考えが纏まるまで優しい目をして待っていてくれた。

「それじゃパパとママはどこで知り合ったの？」

「石垣島のホテルだよ。真帆がアルバイトをしにやってきてかな」

「それじゃ、告ったのはどっちから？」

「俺は告白とか苦手なんだよ。一緒に海に行ったり仕事を教えたりしているうちにな」

少し以外だった、ユーカさんなんかの話だと好意を持ってる女の人とかが多そうだったから。

パパは見る目が無いのかなあ、ママにはゴメンだけど。

「ママと楽しかった？」

「楽しかったよ。若かったし、まあ若いって言っても30前だったけどね」

「何で別れちゃったの？」

「自然消滅かな、真帆が内地に帰ってしまつて。俺が馬鹿だったんだろうな」

「後悔してるんだ別れた事」

「そうかもしれないな、俺にとっては理想の女の子だったからね」

「えっ……」

なんだか良く判らなくなつてきちゃった。

理想の女の子だったって……

「それじゃ、なんで探さなかったの？」

「何もしなかった訳じゃないんだ、でも判るのは住所くらいだったかな。携帯も無くインターネット元年なんていわれてた時代だからね」

「電話は？」

「時々掛かつてきたかな」

「そうなんだ」

「真帆は内地に帰ってから直ぐに海外の島に良く遊びに行つてたからね。それに真帆は内地に帰つてからも何回か石垣島には来てみたいからね」

「みたいって……それじゃ」

「俺の所には連絡なんて来なかったよ。真帆の気持ちが離れてしまつたのか、俺に対する優しさだったのかもな」

パパの表情は変わらないままだった、どこか遠くを見ているように見えるけれど優しい目で美緒を真っ直ぐに見ながら話してくれている。「パパへの優しさって……なんだか寂しいな。苦しかったんじゃないの?」

「当時はね。でも今は思い出の一部だよ」

ここまで聞いたら全部聞いてみたくなつた。パパの色々な事を。

「あのさあ、ママの事じゃないんだけど。ママ以外にも付き合っていた人って居たんでしょ」

「居たよ片手で余るくらいだけどね。美緒は何で別れたまで知りたいんだろ。若さ、俺の馬鹿さが殆どかな。もう1歩踏み込めなかったり、考えが足りなかったり」

「夏実さんと結婚したのはママの所為なの?」

「夏実から何を聞いたのか知らないけれど、誰かの所為で結婚なんかするもんじゃないだろ。違うかな」

「まだ、美緒には少し難しいかも」

「そうかもな」

私は逃げ出した、パパの深いところを知るのが怖かった。知ってしまったら一緒に居られなくなるような気がして。躊躇い気味にしているとパパから話し出してくれた。

「その『宙ノ名前』とベッドの脇にある魚型の間接照明は真帆からの誕生日プレゼントだよ」

「ええ、ママからのプレゼントなの? さあって答えたくせに」

「話すべきか迷っていたんだよ。未練がましいだらいつまでも持っているなんて」

「それじゃ、なんで処分しなかったの?」

「星が大好きだから、海や魚が大好きだから……かな」

それってママがパパの事を良く判ってるってことじゃないと言おうとして言葉を飲み込んだ。

なんだか言っちゃいけない気がしたの。
だから話を変えてみた。

「ねえ、パパ。パパが書いてる小説ってパパとママがモデルなの？」
「俺がモデルって言うのはあるかな、モデルと言うより経験してきた事をベースにしている話はあるかな。バツイチだったり子どもや孫が居たり」

「あのさ、『恋^{こいかけ}×』ってパパとママのお話でしょ。完全右脚ブロックの話も出てくるし」

「経験をベースにしていると言っただろ」

「ユーカさんとミポさんが言ってたのヒロインの女の子のイメージが私に似てるって、髪が長くて小柄で可愛らしいって。という事はモデルはママなんでしょ」

「真帆が俺の理想に近い女の子なら似ていてもおかしくはないだろ」

「それはそうだけど……」

なんだか上手く丸め込められた気がする。

少しずるい気がした。

「それじゃ、パパの理想の女の子ってどんな女の子なの？」

「俺より背が低くってジーンズの似合う女の子だよ」

「うう、ずるいよ。アバウト過ぎ！」

だってそうでしょ、パパの身長は180だよ。

殆どの女の子がそうじゃん、それにジーンズが似合うって……

スタイルが良いって事なの？

「質問タイム終了です」

「ああ、もう1つだけ。お願いだから」

もう、本当に気まぐれって言うかアバウトなんだから。

でもね、私のお願いは聞いてくれる気がする。

それはパパが優し過ぎるほど優しい人だから。

「仕方が無い奴だな」

「えへへ、今書いてる小説のストーリーが知りたい」

「主人公が自分に残された時間が少ない事を知り、忘れられない別れた恋人を探す旅にでる話だな」

「で、見つかるの？」

「彼女との思い出がある場所を巡りながら探していくうちに南の島に居るらしいと知り、島に向うが彼女は昔の記憶を事故で全て失っていた。そして彼女を手助けする男と一緒に暮らしていた。2人が再会したことで彼女に変化が起こり揺れ動く2人の男」

「うわぁ、なんだか凄いかも。それで最後はどうなるの？ まだ決まってるの？」

「ラストは彼女が記憶を取り戻すんだ」

「で、元彼とハッピーエンドなんだ！」

「彼女の記憶が戻った時には主人公にはもう時間が残されていなかったって言う話になるかな」

胸の奥がキュンって締め付けられた気がした。

『恋×』も昔別れた2人が再会する話だった。

どうしてパパがモデルになっている小説は……

「題名はなんていうの？」

「『雨虹』だよ」

「雨虹？」

「ハワイの諺の『no rain・no rainbow』から付けたんだ。意味は雨が降らなければ虹は出ない」

「確かに雨が降らないと虹は出ないけど」

「もう少し意識すると泣いた後は笑顔になれる」

我慢の限界だった。

どうしてそんなに哀しい話を自分をモデルに書くのか判らなかった。

「全然、ハッピーエンドじゃないじゃんか！」

「昔話じゃないんだ。未永く幸せでしたなんて、それに何が幸せかなんて感覚の違いだろ」

パパの言う事は良く判る、何かが引っかかったまるで喉に刺さった魚の小骨の様に。

何年も経ってから別れた彼女に再会する話……

『恋×』は再会を果たして結婚までするのに、直ぐに彼女がそして主人公も後を追うように死んでしまう。

『虹雨』も記憶が戻ったのに彼に残された時間が……

「パパはハッピーエンドなんて信じてないんだね」

「好きだぞ、ハッピーエンド。めでたしめでたしで良いんじゃないのか？」

「それじゃ、リアルなパパのお話はどうなるの？」

「最後の最後に笑えればそれで良いじゃないか『楽しかった』って」

「パパの嘘つき、今が楽しい事が一番だって言ったくせに」

「楽しい事はいつまでも続かない、でも楽しいと思える時が一番だと言う意味なんだけどな」

パパの言っている事は良く理解できるでも、なんて言えば良いんだろうこの気持ち。

すつきりしないモヤモヤした物が残ってる。

最後の最後って死ぬ時って意味だよな、パパ。

「パパは今、楽しい？」

聞くのが凄く怖かった。

もし、楽しくない今までと変わらないって言われたらどうしよう。
私が島に来てパパが辛いと思っていたら。
ママにこんな事を聞いたなら本末転倒ねって怒られちゃうんだろうな。
ママ、ゴメンね。

「美緒は今、楽しいか？」

「何で私が質問したのに質問で返すの？」

パパがいきなり私と同じ事を私に聞いてきた。
ちよつとだけドッキリしちゃった、でも私の正直な気持ちを伝えたの。

「楽しいよ、だって色んな人と知り合えてお友達になれたんだもん、これもパパのお陰だと思ってるよ」

「そうか俺も楽しいよ、毎日が。夢だったんだ、自分の子どもと海に行ったり祭を見たり。喧嘩したり泣いて笑って楽しく暮らすのが……なんてな。楽しいのは嘘じゃないけどな」

嘘つき、パパがおちやらける時は本当の事を言っている時なんだか

ら……

本当の事……

それがパパの夢なの？

それを美緒達は……

「美緒？ どうしたんだ？ 急に泣き出して」

涙が溢れてきた。

嬉しい気持ちと辛い気持ちとゴメンなさいが混じった涙だった。

「ナチブサーだな、美緒は。その涙は嬉し泣きか？」

「パパが最後の最後なんて変な事を言うからでしょ！」

「悪かったよ、顔でも洗って来い。アルバムを見るんだろ」

「言われなくつても洗ってきます！ パパのバーカ」

照れ隠しでまたパパに馬鹿って言っちゃった。

パパの本当の気持ちは……

パパの幸せは……

どこにあるの？

そして、本当に馬鹿なのは……

パパへの優しさ・2

顔を洗って仕切りなおし。

パパのベッドの上でアルバムを広げる。

普段のパパはだらしが無いけれど本当は几帳面なんだと思う、どうしてだらしくしているのかは判らないけれど。

だってポケットアルバムは5冊が一纏めになっていてきちんと番号がふられているんだもん。

一冊目は『サンコーストにて』ってタイトルが付いているの。

そして撮影とか編集とか登場人物なんて書かれているの。

本当に昔から写真を撮るのが好きなのが良く判った。

今でも出掛ける時はデジイチを必ず持つてて沢山写真を撮ってくれる。

最初の3巻つまり15冊はパパが始めて石垣島に来たときのアルバムだった。

「うわぁ、若い！　パパ、これって何歳なの？」

「20年前」

「23歳くらい？」

「だな」

パパはまたPCに向ってあの切ない恋物語を書いている。

「でも、あんまり変ってないかも。この時の方が少し痩せて見えるけど」

「72キロくらいかな、今は10キロくらい肉が付いているからな」

「でも、今の方が良い感じかも」

パパは何も答えなかった。

カタカタとキーボードを叩く音が聞こえた。

写真には同じ人達が写っていて凄く楽しそうだった。

海で遊んでいる写真にバナナで遊んでいる写真、それにお酒を飲んでいる写真がいっぱいだった。

こんな楽しそうなら石垣島に嵌っちゃう気持ちが判るかも。
そしてアルバムの最後の方は石垣の写真じゃなかったの。

「ねえねえ、パパ。この写真はどこななの？」

「どれ」

パパが椅子を回転させてベッドの方を向いてくれた。

「それは地元の埼玉でバイトしてた時の仲間だよ。こいつら2人がバンドを組んでいてライブなんかをしてたんだよ。一緒に色んな事をして遊んだぞスキーに行ったり、バイト先で奥多摩にBBQしに行ったりな」

「ふうん、何のバイトをしてたの？」

「ファッショニングの製造だよ、18金とか9金とかの」

「へえー、そんなバイトしてたんだ」

アルバムに目を戻して次のページを捲るとパパの家族の写真が出てきた。

「こ、これってパパのパパとママと……」

「妹だろどう見ても」

「うわあ、パパってパパのママ似なんだ」

「どうだかな。妹と似ているって言う奴も居れば似てないって言う奴も居るからな。俺が石垣で暮らす前に日光に最後の家族旅行に行った時の写真だな」

「さ、最後って。そうか石垣に住んでたら家族旅行できないもんね」

「まあ、何回も両親と妹の家族で石垣に来ているけどな」

「そうなんだ」

再び次のアルバムを取り出して開いた。

「うわあ、何これ。呑んでる写真ばかり」

「10月の終わりに石垣に移ったからな。海にも行けず飲んだくれてるんだよ」

「へえ……」

そこで数枚の写真に目が留まった、小柄で髪が長くってジーンズが

似合う可愛い女の子とパパのツーショットの写真だった。

この女の子ってパパの理想に……

「パパ、この可愛い女の子は彼女だったの？」

PCの液晶画面の前にアルバムを突き出した。

「ああ、ペコちゃんか彼女だったのかな？」

「うわあ、微妙だな」

「凄く短期間のバイトの子だったからな」

「好きだったんでしょ」

「まあな」

直ぐに誤魔化すんだから。

少しアルバムを見ているとパパの妹さんが出てきた。

「あつ、パパの妹さんだ」

「妹が独身の時はホテル代が要らないからって毎年の様に来てたぞ」

「ふうん」

その後直ぐに1人の可愛らしい女の子の人が写真に沢山写っていた。

聞くまでも無くパパの彼女さんなんだろうなって言うのが良く判った。

「ねえ、パパ。この彼女とは何で別れちゃったの？」

「俺が踏み切れなかったから。石垣に来たばかりで生活も不安定で結婚なんて考えられなかったんだ」

パパが振り向き様に即答で答えたくれた。

少し驚いたけれど何となく判るような気がした。

そしてしばらくアルバムを捲っていると子ども連れの可愛い女の子の写真が出てきた。

「パパ、この子ども連れの人も付き合っていたの？」

「そんな事もあったな、俺がガキだったんで直ぐに振られたけどな」

「そ、そうなんだ」

その後のアルバムにはパパが住んでいるマンションで飲み会をしている写真なんかが出てきた。

綺麗に片付けられていてなんだかオシャレな感じな部屋になっている。

どうしてこんなだらしくなっちゃったんだろう、凄く不思議に思えた。

でも、写真に写っている人は皆が皆凄く楽しそうだった。

ビーチパーティーをしたり海に行ったり、歓迎会に送別会なんてタイトルも付いてて。

本当にパパが言ったとおりパパの格好はどの写真でも同じ様な格好だった。

そして、アルバムも残す所あと2巻になったいた。

「ああ、ママだ！」

凄く楽しそうに笑っているママの写真だった。

「パパ、これはどこのなの？」

「波照間かな、たぶん」

「本当だ日本最南端の碑だって。パパの顔変な顔。でも凄く綺麗な海だね」

「そうだな、波照間は別世界だからな」

ママが登場してからはママだけの写真になっていた。

チョコレートケーキを2人で持っている写真は、パパがケーキを作ったんだと思う。

だってM a h o S p e c i a l って書いてあるんだもん。

そして、その中には私が持ってきた写真もきちんとあったんだ。

最後の巻についてあれ？

番号が1冊にしかふられてなかった。

ラストナンバーは41だった。

「もしかして、これが豊年祭の写真なんだ。この猫ちゃん可愛いね」

「真帆が飼っていた猫だよ。ラグって言うんだ」

「ふうん。ママ、猫なんて飼ってたんだ」

「あれ？ 終わりかな」

その写真は石垣空港だと思う。

ママがサングラスをしてパパがその横でママの頭に手を置いているの。

そこでアルバムは終わっていた。

その数枚前のママの写真はどことなく哀しい様な影がある写真だった。

パパはどんな気持ちでこの写真を見てたんだろう、それと同時に1つの疑問が浮かんできた。

アルバムはあと4冊残っているのに写真が一枚も入っていなかった。

「パパ、夏実さん達とのアルバムは？」

「無いよ」

パパの素っ気無い言葉に息を呑んだ、無いってどう言う事なの。聞きたいけれどあまりに驚いてしまい声が出なかった。

「整理してないんだ。まとめて入れてあるよ、ここの引き出しに」

パパがPCデスク代わりにしている押入れの下にある書類ケースを指差した。

「殆ど焼き増ししてあいつらも持っていると思うけどな」

「それじゃ、パパの写真は？」

「殆ど無いかな、撮るのが俺の仕事だったからな」

「でもあるんでしょ」

「数枚ね」

どうして？

それが一番先に頭に浮かんできた。

あんなに写真を撮るのが好きなのに……

それは、直ぐに理解できる事だった。

でも、何も言えなかった。

一番辛かったのは多分パパだから。

5年であんなに沢山の写真があるのだから、3倍の15年も過ぎせばもっと沢山の写真があるはずなのに……

「見せてくれてありがとう」

「お礼を言われる様な事じゃないだろ」

「うん、そうだね。後で夏実さん達の写真も見せてね」

「適当に探して見てくれ」

「う、うん」

それ以上、何も言えなくって枕元に置いてあつたママがパパに送つた『宙ノ名前』を開いた。

『宙ノ名前』は月ノ章・夜ノ章・天ノ章・そして春夏秋冬ノ星ノ章に分かれていて、とても幻想的な月や星の写真が沢山載っていた。そして、パパがもの凄く大切にしているのが判った。

どこのページを捲つても折り目なんてひとつも付けられていなくつて、流石に白いページは少し黄ばんできてしまっているけれど15年も前の本だなんて信じられないくらい綺麗だった。

「うわあ、天の川だ綺麗だな。見てみたいな」

「美緒は見たこと無いのか？」

「えっ、だって東京じゃ……」

「そうだな、東京じゃ……あれ？」

「へえ？ 何？」

急に部屋中の電気が消えて真っ暗になっちゃった。

するとパパがカーテンを開けて外を見ていた。

「停電みたいだな。周りも真っ暗だ」

「え、嫌だよ。パパ、怖いよ」

「あのな……」

パパが何かを言うより早く、真っ暗の中でパパにしがみ付いていた。

「美緒は本当に怖がりなんだな。雷に暗闇か？ まるで」

「子どもだもん！ 美緒はまだ子どもなんだもん！」

だって、小さい時はいつも一人でお留守番で……

パパが優しく肩を抱いてくれた。あれ？

怖くないかもパパが側に居てくれるだけでこんなに安心できるんだ。「参ったな、しばらく点きそうにないな。仕方が無い電話を入れて

おくか」

「えっ？ パパ、どこに？」

するとパパが携帯を開いてアドレスからどこかに電話をし始めた。

「もう1人、暗いのが大嫌いな奴が居るんだよ」

パパは優しい声で

電話口からは女の子の泣き声が聞こえてくる。

パパは優しい声でどこかの女の子に何かを言い聞かせるように宥めていた。

「しょうがないな。美緒、出かけるぞ」

「ええ？ どこに？ 外は真っ暗だよ」

「家に居ても真っ暗だろ。それとも独りで留守番するか？」

「絶対に嫌！ 真っ暗の中で独りぼっちなんて考えたくも無いもん！」

パパの車に乗って真っ暗になった石垣の市内を走る。

赤色回転灯をつけた警察車両とすれ違った。

しばらく走ると3階建てのアパートの前に立っている2人の女の子の姿が車のライトに照らし出された。

「あれ？ ユーカさんとミボさんじゃないの？」

アパートの前に居たのは俯いている美穂里さんと美穂里さんに寄り添う由梨香さんだった。

「すみません、チーフ。こんな時間にミボが呼び出したりして」

「パパが電話してたのってミボさんだったんだ」

「えっ？ ミボが呼び出したんだと思ってた。美緒ちゃんそれじゃ……」

「電話をしたのはパパだよ。もう1人暗いのが大嫌いな奴が居るって」

車を降りるなりユーカさんが頭を深々と下げてきて驚いてしまった。暗いのが大嫌いってミボさんだったんだ。

「でも、助かりました。私がココに買い物に行ってる時に停電になって慌てて帰ってきたんです。そうしたらチーフが来てくれるって、ミボが」

「どうしてパパはミポさんに電話をしたの？」

「何となくだよ、ユーカが居れば平気だし、居なければこうして来るだけだ」

「本当に優しいんだ、パパって」

「美緒だって雷や暗闇が大嫌いだよ」

「だって、小さい時に一人で留守番してたから……」

「美穂里の場合も似たようなもんだよ」

私と似たようなものって何だろうって思ったけれど、パパが態々出向いて行くくらいだから何か理由があるんだと思うけれど人には言えない事もあるんだって知っているから何も聞けなかったの。

「それで、チーフ。これからどうするんですか？ ミポはもう落ち着いていますし」

「そうだな、夜の島でも楽しみに行くか？ 停電じゃないと楽しみない事もあるからな」

パパがそう言ってユーカさんとミポさんを車の後ろに乗せて車をだした。

市内は月明かりも無く全くの暗闇で時折すれ違う車のライトが凄く眩しく感じた。

車はバンナ公園の方に向かって走っていき峠を越えて元名蔵に向っている。

また海にでも行くのかなと思っていたら精糖工場を過ぎた当りで細い道に入って行った。

「パパ、なんだか怖いんだけど。この先に何かあるの？」

「いや、何も無いぞ」

「何も無いって……」

パパは私の声なんてお構いなしに細い道を進んでいく、段々道が悪くなつていく舗装はされているけれど所々舗装が剥げて穴が開いているように見える。

周りは民家なんて一軒も無くなって収穫が終わった田んぼか何かが

広がっている。

開いている窓からは蛙と鳥の鳴き声だけが不気味に聞こえている、そして車がやつとすれ違える位の橋を超えた先でパパが車を止めた。周りは凄く開けているけれど真つ暗でよく見えない、パパが車から一番に降りて後ろからいつも海で使っているサマーベッドを2つ取り出して車の前の方に広げて置いた。

「さあ、お嬢様方。どうぞこちらへ」

パパに促されて私が恐々と車から降りるとシートを倒してユーカさんとミポさんが手を繋いで降りてきた。

周りを見渡すと本当に何も無い、電柱すらなかった。

そして右手の山の方でオレンジ色の光りが不気味に見えた。

「パパ、あのオレンジの光りは何？ UFO？」

「UFO？ 違うよ美緒。あれは国立天文台のVERA石垣島観測所の電波望遠鏡だよ。停電でも非常用電源があるんだろ」

「ベラ観測所？」

「そう、岩手県の水沢局・鹿児島の入来局・小笠原の父島の小笠原局とここ石垣島にある口径20メートルのパラボラアンテナで4つの局のアンテナを組み合わせる事で直径2300kmの望遠鏡と同じ性能を発揮する事が出来るんだ。それを使って銀河系の3次元地図を作るプロジェクトがVERAだよ」

「ふうん、そうなんだ」

「そして銀河を横から見たのが、美緒の頭の上にある天の川だよ」
「ええ！」

パパに言われて慌てて宇宙そらを見上げて思わず息を呑んだ。

満天の星空なんて非じゃない位の生まれて始めて見た星の数だった。ユーカさんとミポさんは私より早く気付いて宇宙を見上げていた。

「上ばかり見ていたら首が疲れるだろ。サマーベッドで横になつて見たらどうかね」

「うん！」

いつの間に用意したのか洋服が汚れないようにサマーベッドの上に

は大きなビーチタオルが掛けられている。

ユーカさんとミポさんが一緒に横になって私は一人で横になると、パパは道路に直に座って私が横になっているサマーベッドに寄りかかった。

「凄い、まるでプラネタリウムみたい」

「あれが白鳥座のデネブそして鷲座のアルタイルと琴座のベガで夏の大三角は有名だから知っているだろ」

「うん、でも始めてみた……」

パパがペンライトの様なもので星を指しながら教えてくれた。

「丁度、旧暦の七夕だからな。織り姫と彦星は出会えたのかな」

「パパってもしかしてロマンチストなの？」

「そう言えばチーフは七夕には必ず笹を取ってきて短冊を飾りますよね」

「好きなんだよ星が、真冬でも時間があれば見に来るぞ。オリオン座に昴やシリウスが見れるからな。それに夜は暗いだけじゃ無いだろ、月が出ていれば色々な表情を見せてくれるし月が出ていない時は星達が光り輝いている。まあ天気次第だけどな」

それからパパが少しずつ色々な星座の説明をしてくれた。

本当にパパは夜も楽しむ事を知っていると思った。その反面、星を見に来る時はいつも独りなんだろうかなんて事が頭に浮かんでは消えた。

カシオペアに北極星、そして北斗七星・ペガサスに蠍座でしょ、ヤギ・水瓶座に射手座。

それからそれから乙女座のスピカ。

スピカは連星なんだってお家に帰たら『宙ノ名前』でもう一度調べてみよう。

また、パパに石垣島の楽しみを教えてもらっちゃった。

優し過ぎるんだよ、そんなに優しいと

星空を満喫して帰りの車の中は笑顔が絶えなかったの、ミポさんも私も少しだけ夜が怖くなくなっていたの。

石垣島なら天気さえ良ければ月明かりか星の明かりが見えるってパパが教えてくれたから。

バナナ公園の入り口に近づくとき街に明かりが戻っていたの。

「やった！ 停電が直ってる」

「当たり前だ、台風じゃあるまいし何時間も停電してたら大変なことになるだろう」

「それじゃ、台風の時って……」

「そうだな、酷い時は2〜3日って時があるかな」

「うわぁ、大変そう」

「でも、毎年台風はやってくるものだからな。来なければ来ないで海は綺麗にならないし雨が降らないと困るんだぞ」

「う、うう。それは困るけど微妙だな」

そんな事をパパと話しているとユーカさんが後ろからおねだりするみたいに話しかけてきたの。

「カラオケに行きたくない？ ミポ」

「えっ、そうだね。最近は行ってないもんね」

「……………」

パパは何も答えず前を向いて運転していたの。

「ねえ、美緒ちゃん。チーフの歌を聞いてみたくない？」

「ええ、パパのカラオケ？ 聞いてみたい！」

思わずユーカさんに乗せられて叫んじやった。

パパが答えなかったのは多分あんまりパパがカラオケ好きじゃないからだと思ったんだもん。

「チーフ……」

「あのな、連れて行って欲しいのならはつきり言えよ。割り勘だからな」

「……やったー！……」

オリオンビールフェスタが行われた新栄公園と美崎町の間にある駐車場に車を停めて、ユーカさんが速攻で車の中から予約を入れたカラオケボックスに向ったの。

時間は遅かったんだけど夏休みと言うことでパパが渋々OKを出してくれたんだよ。

カラオケボックスに着くと直ぐに部屋に案内されて、ドリンクを注文したんだ。

もちろん未成年の私が居るからソフトドリンクオンリーなんだけどもね。

ユーカさんが手際よく歌本やドリンクを皆に配ってくれるの、なんだか行った事は無いんだけど夜のお仕事をしている人みたいだった。

「流石だな、ユーカは」

「えへへ、今でも時々友達のお店を手伝ってるからね」

「ええ！　そ、それって夜のお仕事なの？」

「うん、時給も良いしね」

「凄い、大人なんだ」

「ただで酒も飲めるしな」

「えへへ、それが狙いだったりして。冗談はそのくらいにして歌おうよ、時間が勿体無いからね」

「うん」

どこまでが冗談なんだか判らなかつたけれど聞き流すことにしたの。今が楽しいからね、楽しまないと。

トップバッターはユーカさんだった、一青窈のハナミズキを凄くしつとりと上手に歌っているの。

あんまり上手で驚いちゃった、そしてミボさんには更に驚かされち

やった。

だって『残酷な天使のテーゼ』だよ、普段は大人しくって静かなミポさんからは想像できなかったんだもん。

「うわあ、ユーカさんもミポさんも凄く上手いんだ。驚いちゃった」

「石垣じゃ遊ぶ所が少ないからね。内地みたいに遊園地や動物園がある訳じゃないしね。遊ぶ所と言えば海か飲みに行くか、お酒が飲めない歳ならカラオケぐらいしかないからね」

「そうか、石垣ってそういう場所だよな。改めて言われると」

私は浜崎あゆみの歌を歌ったの東京に居る時にも時々はカラオケに行っていたけれど、お小遣いで行くからそんなに何回も行った事はなかったの。

「うわあ、美緒ちゃんはやっぱ可愛いね」

「うん、そうだね。それに歌上手いじゃんね」

「ええ、そんな事ないよ。あんまりカラオケに行かないから」

ユーカさんとミポさんに言われて照れちゃった。
それから皆で歌いまくったんだよ。

パパも少しだけ歌を聞かせてくれたの最初はチャゲ&飛鳥の『太陽と埃の中で』だったかな。

上手いって言うほどじゃないけれど普通よりは上だったかな、ユーカさんとミポさんはべた褒めだったけどね。

パパもその辺は判っているんだと思う。

ユーカさんはスローなナンバーをしつとりと、ミポさんは結構アツブテンポのアニソンが多いのかな。

パパは……なんだか少し悲しい恋の歌が多かったの。

「ほら、チーフも元気が出る歌にしましょうよ」

「あんな、ユーカ。人には向き不向きがあるんだぞ」

「そうだ、ミポ。あれあれ、練習してた『放課後ティータイム』は」

「まだ無理だよ。練習中だもん」

ま、まだなんだ。凄いなミポさんは一度だけどんな歌か聞かせてもらったけれどアップテンポなんて曲じゃなかったんだもん。

「それじゃ、チーフと」

「ふざけるな、舌を噛むわ!」

「ふふふ、パパって面白いんだ」

「でも、チーフと……」

ミボさんが何かを言いかけて止めるとパパが少し考えてからミボさんに話しかけた。

「仕方が無いな、美穂里。けいおんの1stの『Don't say lazy』ならなんとか」

パパが言い終わらないうちにユーカさんがリモコンを早打ちして入力していた。

凄いの一言だった……

パパの歌声は普段の声よりも少しだけキーが高くって、またそれがミボさんの声と凄く合っていてノリノリだったんだよ。

歌い終わった後のパパはヘタレ込んでいたけどね。

それからも皆で色んな歌を歌ったの、かなり時間が過ぎていてそろそろ終わりにしようってパパが言うとうーカさんが最後に一曲ずつて。

「それじゃ、早く曲を入れちゃえよ」

「チーフがトリですからね」

「はいはい」

皆で順番に歌って最後はパパだったの、その曲は福山さんの『桜坂』だったんだけど……

パパが歌っているのを聞いていると何故かアルバムの最後の写真が頭に浮かんできたの。

ママがサングラスをしていてその横でパパがママの頭に手を置いている写真が。

あれは別れの写真だと思う、パパはママが東京に帰って自然消滅って言ってたもん。

そして『桜坂』は別れた恋人を想い続ける歌……

それじゃ、パパもママの事を……

優し過ぎるんだよ、そんなに優しいと……涙が零れそうになった。

やっぱり、パパは優しい

パパに石垣島の色んな事を教えてもらって、凄く興味が湧いて来たの。

それでネットを使って色々な石垣島の事を調べているんだ。

もちろん、夏休みの課題もちゃんと終わらせたよ。

だって東京の学校の課題に比べたら簡単で少ないくらいなんだもん。でね、沖縄では旧盆にエイサーや石垣島ではアンガマーって言うものが行われるを知ったの。

見てみたいけれどパパは夏休みは忙しそうだし、休みの度に私をどこかに連れて行ってくれるの。

この間はママも行った事がある黒島で遊んできたんだよ、凄く楽しかった。

島は殆どが牧場で家なんか殆ど建ってなくて、仲本海岸でシュノーケルしたけどこの海より澄んでいて綺麗だった。

西の浜は凄く綺麗な砂浜が続いていて、伊古棧橋は昔使っていた棧橋で今は所々崩れているけれどそこから見る海も格別だったの。

それに黒島灯台は恋が成就する灯台なんだって、パパに理由を聞いたんだけど知らないって言われちゃった。

何でも島がハートの形をしているからハートアイランドって名付け、て黒島をアピールし始めた頃にそんな事を言い始めたんじゃないかって言ってたよ。

そして、ママとの思い出の浜なのかな。

美緒が持ってきたママの写真と同じ場所は今はもう無くなっていたの。

大きな防波堤が出来ていてパパが凄く寂しそうな顔をしていたけれど、変ってしまうのも仕方が無い事だって言ってた。

島の人の生活を守るのが防波堤だからって、なんだか私まで切なくなっちゃった。

パパに言われたこと『言いたい事があるのならはつきり言え』だからパパにお願いしてみようかな。

エイサーやアンガマがどうしても見てみたいんだもん。

「パパ、お盆で忙しい？」

「忙しいぞ、書き入れ時だからな」

「それじゃ、旧盆は？」

「夏休みだからな」

「うう、忙しいんだ」

「あいな、何が言いたいんだ？」

「あう、あのね。アンガマとかエイサーが見たいなって思ったただけなんだけど」

「野崎が最近何か企んでいると思ったら、もうそんな時期なんだな。先手を打ってやる」

そう言うパパがどこかに電話をし始めたの、パパは凄く丁寧な口調で相手の人がどこかの偉い人なんだろうなって思ったの。

一体どこの誰に電話してるんだろう。

「それじゃ、ウンケーの日の7時に登野城の金城さんの家に行けば良いんですね。ありがとうございます」

「パパ、どこに電話をしていたの？」

「うん？ 夏実の親代わりの大森の叔母さんの所だよ」

「ええ、夏実さんの叔母さんに何で？」

「大森は石垣でも結構有名な家だからな、アンガマを家の中で見せてもらえる所を手配してもらったんだ」

「私の為に？」

「大森の叔母さんも喜んでいたぞ。俺から電話して頼み事をしてくれた事を」

「何でなの？」

「叔母さん達も気にかけてくれているんだよ。夏実と別れた後でもな」

「そうなんだ」

「美緒が気にする事じゃないだろ。人と人との繋がりは大切にしないとな」

「うん！」

旧盆は、22・23・24の日程で行われて石垣島ではソーロンって言うんだって。

22日はウンケーって言って先祖の礼をお迎えする日で23日が中日になっていて、24日はウークイって言って玄関や門の所にお供えを置いてウチカビ（紙銭）と言う黄色いあのお金をお金を焼いて先祖の霊を来年も来てくださって送り出すんだってパパが教えてくれたの。

でね、22日のウンケーの日はちょうど日曜日でパパと一緒に登野城の町内を歩きながら少し早めにお家をでて歩いて頼んであったアングアを見せってくれるお家に向ったの。

しばらく歩いているとお囃子みたいな音が近づいてくるのが判ったから、少し小走りで音の方に向うと不思議な集団が歩いていて。

先頭には黒っぽい着物とグレーの着物を着た変った木彫りのお面を被っている2人が葉っぱの団扇みたいなものを持って歩いてくる。

その後ろには白地の浴衣を着て三線や太鼓を鳴らしながら歩いているんだけど、頭には山形の花笠みたいなのを被って手ぬぐいで顔を見えないようにして真っ黒なサングラスをかけているの。

「パパ、あれがアングアなの？」

「そうだよ、先頭にいるステテコ姿のがウシュマイ・お爺でお面が少し丸みがあるほうがンミー・お婆だぞ。手に持っているのはクバの葉の扇子だな」

「それじゃ、後ろにいっぱい居る不思議な格好の人たちは？」

「あれは花子と言ってウシュマイとンミーの子孫だよ、男でも女でもないらしいぞ」

「ふうん、そうなんだ。なんだかお盆って言うからもって落ち着い

た感じなのかなと思ったらお祭りみたいだね」

内地のお盆は凄くしめやかなものだった。

私が知っているのは婆ちゃんとか爺ちゃんがしていたことしか知らないのだけど、お供えをあげて茄子やキュウリでお馬さんを作って確か精霊馬しょうりょうばって言ってたっけ。

それと夏祭りのメインイベントの盆踊りは華やかで大好きだった。

パパに連れられて紹介してもらった金城さんのお家にやってきた、凄く大きな赤瓦の昔ながらの立派なお屋敷だったんだ。

「こんばんわ。始めまして大森さんに紹介してもらった岡谷ですけど。宜しくお願い致します」

「あい、大森さんとこの紹介の人ね。入って入って、じきに始まるサーネ」

「それじゃ、失礼します」

とても優しそうな人で安心しちゃった。

お座敷の隅に座らせてもらって待っていると、さっきの不思議な集団ぐん一行が現れたの。

するとウシユマイとンミーがお仏壇の前で手を合わせて裏声で何かを言っていたの。

「パパ、あれは何をやっているの？」

「ウートートーだよ、拜んでいるんだよ。先祖供養が一番大切な事だからね」

「何で裏声なの？」

「裏声しか発してはいけない決まりになっているんだ」

「ふうん、そうなんだ」

それから花子と呼ばれる男でも女でもない子孫達の踊りがあって、ウシユマイとンミーの踊りや唄が続いたの。

でも、全部方言で何を言っているのか良く判らないけれど凄く楽しそうだった。

「あれは、念仏踊りで無病息災や子孫繁栄そして豊作を祈って先祖

の霊に奉納しているんだ。花子達はこの世の者ではないので顔を判らない様に仮装しているんだよ」

「へえ、不思議だけど何だか面白くて楽しくってワクワクするね」そんな話を話していると花子の1人が確かにパパを見つけて手を振っているのが判った、するとパパも笑顔で手を小さく振り返っていた。

「パパ、誰だか判るの？」

「美緒には顔が見えるのか？」

「見えないよ」

「それじゃ、俺だつて一緒だよ。皆、登野城青年会の連中だからたぶん昔から知っている人だと思うぞ」

「思うぞつて、いい加減だな」

「顔は見えないけれど大体の見当はついているんだよ。昔の行きつけの飲み屋のマスターの娘さんだと思う。今は結婚して子どもも居るけれど青年会で頑張っているんだよ。確か旦那さんと知り合ったのも青年会のはずだから旦那さんもどこかに居るはずだな」

「そうだったんだ。パパつて以外に知り合いが多いんだね」

「まあ、20年近く石垣島に住んでいるからな」

ウシュマイとンミーを見るとストローを使って上手にビールや泡盛を飲んでいた。

本当にお面をつけたままで過ごすんだ。

一通り踊りや唄が終わるとウシュマイとンミーが円座になっている真ん中に立って何かを見物人達と話し始めた。

「パパ、今度は何が始まったの？」

「あの世とこの世の珍問答だよ、面白いぞ」

方言でしかも裏声で話しているから意味は良く判らないのだけど凄く面白かった。

すると、ウシュマイと目があった気がした瞬間、何かを言われた。

「ハンマヨ！ デージ チュラサンが居るさー」

「えっ？ 私？」

「ほら、美緒。何か聞いてご覧」

急にパパに言われても咄嗟に浮かんでこなかった。

ウシュマイもンミーも周りの人も優しい目をして私が質問をするのを待ってくれた。

「あの、お爺さんとお婆さんはどこから来たんですか？」

「アマアゝクマアゝ グシュー。あぬ世！」

ウシュマイとンミーがあっちこっちを指を差しながら最後に上を指差すと皆がクスクス笑っている。

多分、私がナイチャーだから方言が判らないと思っているんだと思う。

「それじゃ、何で来たんですか？」

「アイエナー！ JTAさーね！」

思わず噴出してお腹を抱えて笑ってしまった。

すると爆笑の渦に包み込まれた。

すると花子達が立ち上がりウシュマイとンミーが従えながらお屋敷を後にして次のお家に移動してしまった。

アンガマを見せてもらった金城さんにお礼をしてお屋敷を出ると1時間がとうに過ぎて8時を回っていたの。

「それじゃ、美崎町にエイサーでも見に行こうか」

「えっ、エイサーも見れるの？」

「運が良ければね」

パパの後について美崎町に向う。

美崎町は夏実さんの弟さんのお店『瑚南』があるところだった。

パパは夏休みになっても『瑚南』の仕事の手伝いをしていただけ今日はお休みをもらったみたい。

旧盆は観光客はそこそこ来るけれど地元の人は殆ど来ないらしいの、お盆で親戚回りをしたりで飲みに出ることは少ないんだって。

『瑚南』の尚さんとパパが何かを話していた、多分エイサーをする

時間を聞いてくれているんだと思うんだ。

「それじゃ、行こうか」

「うん」

美崎町は石垣で唯一の繁華街で飲み屋さんや居酒屋さんがいっぱい
の夜の街なんだ、昼間は閑散としているんだけど夏休みとあって人
が結構歩いているの。

中には少し酔っ払っている人も居て少しだけ怖かったけど、パパが
不意に手を差し出してくれたの。

「やっぱり、パパは優しいんだ」

「普通の事だろ親子なんだから」

「うん！」

パパに親子って言うてもらえるのが凄く嬉しかった、そしてちゃん
と美緒の事を見ていてくれて凄く安心出来るの。

少しだけ美崎町を歩いていると独特の衣装を着けた人たちが歩いて
いるの、頭に紫の布を巻いて赤い縁取りの黒い衣装に脚には裾が乱
れないようにする布が巻かれていて小さな太鼓と大きな太鼓を持っ
た人達だったの。

「パパ、あれがエイサーの衣装なの？」

「そうだな、色はそれぞれ団体によって違うけどな。頭にサージを
巻いて襦袢に打ち掛け、ズボンに脚絆にリストバンドが基本かな」

「へえ、頭に巻いている布ってサージって言うんだ。それじゃあの
小さな太鼓はなんて言うの？」

「パーランクーだよ。片面張りの太鼓で乾いた小気味の良い音がす
るんだ」

そんな事をパパと話していると一軒のお店の前でエイサー隊が立ち
止まって、綺麗に2列に整列をして代表の人がお店の人と何かを話
してから合図を出すと音楽が流れ始めたの。

すると一斉にエイサー隊が静かに頭を下げて一糸乱れずパーランク
ーや大太鼓を掛け声と共に舞いながら叩き始めた。

指笛が鳴り響き掛け声があがって凄く格好が良いの。

勇壮って言う言葉がぴったりかもしれない。

曲にあわせてクルクル回ったりしゃがんで太鼓を打ち鳴らしたり、撥捌きなんかバシって決まるとそれは綺麗で……

パパの手を離して一緒になって手拍子をして踊りの真似をしている自分に気がついたの。

少しだけ恥ずかしかったけれどパパも周りの人も全然気にしていなかった。

凄く沖縄の音楽が体に心地よかった、こんな感覚も生まれて初めてだった。

豊年祭の時もそうだったし今日もそうだったの、沖縄の音楽を聞いていると何でか判らないけれど凄くワクワクするんだ。

このままずっとパパと一緒に居たい、本当にパパの子になれば良いなんて思っちゃった。

でも、優しさは

石垣島に来てはじめての夏休みも終わっちゃった。

でも、まだまだ遊び足らなくて私は夏休みボケのままだったの。だって15年間生きてきて一番楽しい夏休みだったんだもん。

でね、夏休みの最後はユーカさんとミポさんの3人で西表島に泊りがけで遊びに行ったんだよ。

綺麗な離島ターミナルから安栄観光の高速船で35分で西表島の大原港に着いたの。

港に着くとレンタカー会社の人が『小浜由梨香様 御一行』って書いてあるボードを持って出迎えてくれたんだよ。

手続きを済ませてユーカさんの運転で西表島観光が始まったんだ。

ユーカさんのゆっくりのんびりの運転で天然記念物のサキシマスオウの木がある古見に向ったの、凄い木の根っこだったよ板根ばんこんって言う板状の根っこがうねっていて昔はサバニの舵に使ったんだって。

それと古見ってアカマタ・クロマタの発祥の地だよって言ったらユーカさんとミポさんが驚いてた。

その後で由布島に行って水牛車に乗って由布島に中を歩いて見たんだけど、完璧に観光地って感じだったの。

でも、海の上を水牛車で進んでいく写真を見たことがあるから凄く感動しちゃった。

それから星の砂の浜に行ってからお昼ご飯を食べて月ヶ浜でのんびりして。

今回は海で泳がなかったの。だってパパが居ないと怖いんだもん。ユーカさんとミポさんも判ってくれたし2人は島の人だから本当はあまり海で泳がないんだって。

白浜まで行ってから宿でゆっくりとしたんだよ。

散歩したりお土産を見たり、夕飯を食べてもまだ外は8時前だって言うのに明るかったんだ。

でね、暗くなつてからパパに教えてもらった場所に車で出かけたの。宿の直ぐ側だったんだけど小高いパイナップル畑の真ん中なんだけど、そこから見た星空はまた凄かったの星が降るってこういう事を言っただろうなっと感じ。

天の川が辛うじて判る位で他の星座は星が多すぎてよく判らない程だったんだよ。

宿に戻ってからパパに電話しようとしたの、そうしたらミポさんが私がかかるからって携帯を取り出して……

「ミポさん。今、何をしたの？」

「えっ？ チーフに電話をだよ」

だって凄い早業だったんだもん。

アドレスを開けてワンプッシュでパパに電話って、パパは岡谷だから普通はカーソルを移動させないといけないでしょ。

「うふふ、美緒ちゃん。ミポの携帯のアドレスの一番最初にはチーフが登録されているの」

「ええ？ だってパパは岡谷だから」

するとミポさんが携帯を開いてアドレスを見せてくれたの。

すると岡谷の前に『あああ』って打ち込まれてアドレスを開けるとパパの携帯番号が登録されていたの。

「なんでなの？」

「それはね」

ミポさんが『ニライ・カナイ』で働き出した時の事を話してくれたの。

「私が『ニライ・カナイ』でアルバイトをし始めた時には付き合っていて人が居たの、でもその人に問題があつてね」

「事の始まりは私がチーフに相談したんだよ」

「え、ユーカさんが？」

「うん、チーフに相談すると俺が預かるうって。それからしばらく

してだよ」

「そうだね、私が彼に仕事を休むように言われてお店に電話したらチーフが迎えに行くからって。凄く不安で怖かったんだよ。でもね……」

ミポさんが少しずつ話を聞かせてくれたの。

チーフの岡谷が美穂里のアパートに迎えに行くと美穂里の彼氏である男が出てきた。

男と言えいいのだろうか、顔つきはどこと無く大人びているがどう見てもチャライ感じが拭えず幼さが見えた。

「美穂里、話をしたいのだから良いかな？」

「は、はい」

美穂里がドアを開けると岡谷がドアを閉めて、後ろ手でドアチェーンをかけたが2人は気付かなかった。

ワンルールの美穂里の部屋は綺麗に整理整頓されていたが家具などに不自然な傷があるのがわかった。

小さなテーブルを挟んで男と岡谷が対峙し美穂里が横に座ると、岡谷が単刀直入に切り出した。

「美穂里、体調が悪そうに見えないが出勤する気は無いのか？」

「あんたに何が判るんだ。こいつが体調が悪いと言えば体調が悪いんだよ」

「すまないが君に聞いているんじゃないんだ。美穂里、どうしたい？ 美穂里の口からはつきり聞きたいんだ」

「私は……仕事に行きたいです。でも……」

美穂里の声は小さく聞きづらく何かに怯えるようにしている。

岡谷が美穂里の目を真っ直ぐに見てもう一度だけ確認する。

「仕事に行きたいんだな？」

「は、はい」

力なく頷いて美穂里が答えると男が声を荒げた。

「ふざけるな！」

言うが早いか男が拳を振り上げると美穂里は両手で頭を押えて何かに耐えるように身を丸めて目を瞑った。

しかし、男の拳は美穂里に届かなかった。

美穂里が恐る恐る目を開けると岡谷が片膝立ちになり、岡谷の右拳が男の鳩尾辺りにクリーンヒットしているのが見えた。

「悪い悪い、古武道をしていた時の癖だな。殴られるかと思ったんだ、急所はちゃんと外してあるからな」

「う、うう……パパにも殴られた事が無いのに」

「ほう、そんなガキが女には手を上げるんだな」

「俺の女に何をしようが俺の勝手だろう」

「本当にガキだな。仕方が無いトコトン俺とやりあう気なら地獄の果てまで付き合ってやる」

そう言う岡谷が立ち上がり携帯を取り出して電話をし始める。

男は両手で腹を押えるようにして蹲ったままだった。

「ユーカか？ 今すぐ美穂里のタイムカードを押すんだ。押したか？ チーフには少し遅れると伝えてくれ」

携帯を切ると岡谷が冷たく言い放った。

「これで今から美穂里は勤務時間内だ。上司である俺の管轄下になる、お前の好きな様にはさせない」

すると男が岡谷の隙をみて岡谷に向ってくる。

テーブル越しに岡谷が前蹴りを繰り出すと男が歯を食い縛り崩れ落ちた。

美穂里はただ怯えながら見ている事しか出来ないでいた。

「懲りない奴だな、古武道をしていたと言ただろう。今度はもろに入ったな、次は無いと思えよ」

「ば、パパに言いつけてやる！ ぼ、僕のパパは議員をしているんだ。お前なんか島に居られないようにしてやる」

「やってみろよ、地獄の果てまで付き合うつて言っただろう」

男の胸倉を岡谷が掴みあげるとガタガタと男が震え始めた。

「苦しいか？ それとも痛いかな？ 殴られた事がないのならなおさ

らだな。お前の体にも痛みを叩き込んでやる」

「ち、チーフ」

岡谷が凄むと美穂里が怯えながら声をかけてきた。

「美穂里、仕事に行くぞ」

「は、はい」

男を放すと逃げ出すように玄関に向かい、慌てているのか手が震えているのか間誤付いてドアチェーン外せないでいる。

岡谷が美穂里をつれて玄関に行く、そして力の限り岡谷がドアに拳を打ち付ける。

すると男は頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。

「た、助けて……」

ドアを開けると男が転がるように飛び出した。

「わ、忘れ物だよ」

美穂里が手に男の携帯を持っていた、それを岡谷が取って男に向ってゆつくりと歩き出す。

「おい、忘れ物だぞ」

「く、来るな！」

男が怯えながら振り返り足を階段から踏み外して転げ落ちた。

踊り場の壁に衝突して、男がうめき声を上げながら体を丸くしている。

「あのな、慌てるからだ。俺が悪いんじゃないからな、これからお前の親に用がある。案内しろ」

岡谷が静かに言うと言は頷くだけだった。

車の後部座席に美穂里を乗せ、男を掴みあげて助手席に放り込んで男の自宅に向かった。

男の案内で自宅に向う、島では比較的大きな家の居間に通された。居間には上等な大きな木のテーブルがあり男の横には恰幅の良い父親が座っている。

岡谷は美穂里と並んで座り父親の顔を見ていると、父親が開口一番

に吼えた。

「大事な息子になんて事をしてくれたんだ。貴様、ただじゃ済まさないぞ」

「その怪我は息子さんが勝手に階段から落ちた時の傷ですよ」

「本当なのか？」

父親が男に聞くと小さく頷いた。

「まあ、息子さんが大事な部下の彼女にした事に比べればそんな傷はかすり傷ですよ」

「ウチの息子に限って……脅迫するつもりか？ 金が目的だな、警察を呼んでやる」

「どうぞ、ご自由に。困るのはそちらだと思いますが」

「な、何を？」

「議員の息子がDVをしていたなんてゴシップ記事や噂話なんて島の人は好きですからね。なんなら今から病院に行って診断書と医師の所見でも貰ってきてても良いんですよ」

そう岡谷が言うと父親は黙ってしまった、美穂里は驚いて岡谷の顔を見るが岡谷の目は真っ直ぐに父親を捕らえていた。

「それとも、私が警察を呼びましょうか？ 八重山警察には顔見知りの方が居ますから」

叩き込むように岡谷が名刺入れから数枚の名刺を取り出してテーブルに置いた。

美穂里が覗き込むと沖縄県八重山警察署と書かれた名刺だった。

すると父親が苦虫を噛み潰すように重い口を開いた。

「金輪際そちらのお嬢さんとは係わらないようにする。それでいいんだな」

「美穂里、このままこの関係を続けたいか？」

岡谷が優しく聞くと美穂里が首を横に振った。

「それで結構です。万が一、今後何かあれば警察に突き出します。その時は覚悟を決めて置いてください。こちらは既に覚悟が出来ますので」

「ち、チーフ。覚悟ってそれじゃチーフに迷惑が……」

美穂里が泣き出しそうな顔で岡谷の顔を見上げた。

「あのな、他に頼れる所があるのか？ 何かあれば俺が何とかしてやる、良いな」

美穂里が今度は大きく頷いた。

「それでね、チーフが私の携帯にアドレスを登録してくれたの。直ぐに連絡できるようにって一番最初の場所に、だからこれは私のお守りで宝物なの」

「そうだよな、あらからしばらくは携帯のアドレス帳を開けてにやけてたもんね」

「酷いよユーカ。だって凄く嬉しかったんだもん。誰かに頼れるって、見ていてもらえるんだって」

「ミポの所はちよつと複雑だね、両親とは疎遠になっているからね」
「疎遠って……」

私が少し驚くとユーカさんが笑い飛ばした。

「チーフだってそうでしょ。血が繋がらない子どもが居たりね」

ミポさんもDVの被害者だったなんて信じられなかった。

それに石垣島ではそれが日常茶飯事で離婚の理由のトップを占めているって言われたの。

確かに夏実さんも前の人とは……

そして、パパがミポさんを助けてくれたって、それも体を張って。

そんな事はパパからは想像も付かなかった。

だって仕事は真面目だけど家ではだらしないし、古武道をしていたなんて信じられないんだもん。

「チーフは優しいからね」

「でもね、優しさは強さだと思うよ。強くなきゃ優しく出来ないもん。それにあの時は怖かったのもあるけれどチーフの周到さに驚いちゃった。まるで詰め将棋みたいに相手を追い詰めていくんだもん」
「だけどさ、チーフはどちらかと言うと殴られちゃう方でしょ」

「そうかも。でも、一番怒らせたらいけない人だと思うよ」

「ええ、話が見えないよ。ユーカさん、ミポさん、教えてよ」

私が困った顔を見るとミポさんが話してくれたの。

「彼の家を後にした時にチーフが言ってたの『女を殴る男は屑だ、女に殴られる男は愚図だ』って」

「ええ、パパはそんな事無いよ。確かにだらしが無いけど……」

「チーフは凄く優しいけど、怒った時は凄く怖い人なんだよ。美緒ちゃんも学校の問題を解決してもらえたんでしょ」

「ユーカさん、そうだけど」

「良いな、美緒ちゃんは。命がけでチーフは守ってくれると思うよ」
そんな事を言われちゃった。

彼と別れた後でミポさんはアパートを引き払ってユーカさんと一緒に住み始めたんだって。

それと、ミポさんが私と同じ様に暗闇が大嫌いな理由が判った気がした。

多分、元彼の所為だと思う。

それにパパと出会ったばかりの時に『ニライ・カナイ』で言われた言葉を思い出していた。

普段は大人しいミポさんが声を荒げて私に言った言葉にはこう言う理由があっただって。

翌日は朝から浦内川をボートで上って軍艦岩まで行って、そこからジャングルの遊歩道みたいな所を歩きながらマリユウドの滝やカンピレーの滝を見に行ったんだ。

本当に凄く楽しい西表島だったんだけどミポさんの話が心に一番残っているかもしれないの。

私を命がけで守ってくれる、そんなパパを……

ミイラ取りがミイラになっちゃった。

ママ、本当にゴメンね。

嵐の前の静けさ

9月だと言うのに石垣島は暑かった。

残暑なんてもんじゃなくて夏真っ盛り……

で夜はクーラー無しじゃ寝れないんだよ。

それに最近パワーが出ないって言うか、調子があまり良くないの食欲もないしさ。

「最近、だらけ過ぎじゃないのか？」

「うつ、言い返す言葉も無いよ。だって、体がだるいんだよん」

「そりゃそうだろ、飯もろくに食べないでアイスばかり食べているからだ」

「だって、食べたくないんだよん。パパは何でそんなに元気なのさ」

「伊達に20年も石垣に住んでいる訳じゃないんだ。体が慣れたと
いうか島に馴染んでいるんだよ。美緒は完全に夏バテだな、ちゃんと食事を摂らないと体を壊すぞ」

パパに言われなくても判ってますよーだ。

でも仕方が無いじゃんパパの料理が美味しくない訳が無いんだけど、食欲が無くって料理を目の前にと食べたくなくなっちゃうんだよん。

「仕方の無い奴だな」

「……ぶう」

パパがキッチンで夕食の準備をし始めた。

トントンと何かを包丁で叩いている小気味の良い音が聞こえて来る。

うーん、今日の夕ご飯は何なんだろう？ 食べられるかな？

少しだけ気になってパパに聞いてみたの。

「パパ、今日のご飯はな〜に？」

「チャーハンと温かい麺にサラダだ」

「……」

私は絶句した……

あれ程食欲が無いと言ったのに……チャーハンに温かい麺って……

本気で凹んだ……

パパは美緒の事をどう思っているんだろう。

美緒の体は心配じゃないのかなあ？

そんな事を考えながらむくれてテーブルに頬杖を付いているとパパが料理を運んできた。

「美緒の体が心配だからだ」

「へえ？」

目の前に出されたお皿には綺麗なピンク色のご飯のなかに黄色と緑がちりばめられたチャーハンが盛られているんだよ。

「パパ、こんなチャーハン見たこと無いよ」

「オリジナルに近いからな」

一口頬張ると……す、酸っぱい？

「う、梅干のチャーハンだ！ サッパリしてて美味しい！」

そして、井に目を移すにゆめんみたいに見える。

なんだか良い匂いがする、汁も凄く澄んでいてそして口をつけると

……

「柚子？ なんだか柑橘系の香り、もしかしてシークワサー？」

そんでね、具は焼き茄子とかマコモダケとか湯剥きしたトマトと……

……？

何だこれ？

不思議な物が入っているのそれだけ天ぷらにされているんだけど、

食べるとオクラみたいにネットリしているんだけど何かの蕾の様にしか見えないの。

「パパ、これは何の天ぷらなの？」

「ドラゴンフルーツの蕾だよ」

「ど、ドラゴンフルーツ？ サボテンのお化けみたくなって赤い実でキウイフルーツみたいな味の微妙な奴？」

「の蕾だよ、この時期限定で出回るんだ」

「初めて食べたけど美味しいね」

それでサラダはね豚肉の冷やシャブが乗っててピリ辛の胡麻ダレがかかって……

「そんなに慌てて食べると胃袋がびっくりするぞ」

パパの声は遅すぎだよ……

梅干の酸味で食欲が湧き出して、にゅうめんで体が温まってきた、ピリ辛のサラダで汗が噴出した。

「く、苦しい……お腹がパンパンだ……」

堪らずテーブルの横にゴロンと横になると、パパは食べ終わるといつものように食器を片付け始めた。

「私が……」

「今日は片付けは良いから少し休んでいろ」

パパが食事を作ってくれる時は私が片付け当番になっているのに、今日は大目に見てくれるみたい。

でも、実際のところ今すぐに動けるかと言えば絶対に苦しすぎて動けなかった。

「ねえ、パパ。今年は台風って来ないの？」

「そうだな、今年は少ないな。それに暑くないしな」

「……これで暑くないの？」

思わず閉口したくなった、これで暑くない方なの？

確かにニユースでは内地の記録的な猛暑が連日報道されているけどさ。

なんで今年は台風が少ないんだろう、そんな事を考えているとパパが教えてくれた。

「異常気象の所為だろうエルニーニョだのラニーニャだの。それに内地が猛暑の時は大体沖縄は冷夏なんだよ。そして内地が暖冬の時、沖縄は寒くなる傾向がある。もしかしたら今年はでっかい台風が来るかもしれないぞ」

「そんな大きな台風が来たら大変じゃん」

「5年前に来た13号は30数年ぶりの大型台風で、ベランダの窓

ガラスが吹き飛んだけどな」

「……………」

私は口をあんぐりと開けたまま度肝を抜かれてしまい、思わずベランダのサッシに目をやった。

金網が入っている窓ガラスが吹き飛ぶことなんて考えられなかった。

「そんなに凄いな」

「最大瞬間風速は100を超えていたって話だ。石垣島での観測では67メートルだったけどな」

「風速って秒速でしょ」

「時速にしたら300キロ越えだな。新幹線より速いな」

「嘘……でも、パパは良く覚えているね」

「まあな、人生の中でも最悪の夏だったからな」

「最悪って？」

「海で置き引きにあって、バツイチになって、車を盗まれて事故を起こされて。まあ、色々と遭ったんだよ。バツイチになったのは俺の責任が大きいけどな」

私はそれ以上話を突っ込む事が出来なかった。

それにしても静かだったいつもの様に近況報告をしても『楽しそうね』の一言で……

これが嵐の前の静けさだったなんて気付く事さえ出来ずに。

嵐の幕開け

「ぷつ！　ち、チーフ。何ですか？　その格好はハロウィンにはまだ早いですよ」

「ええ！　チーフ大丈夫ですか？　オーナー！　チーフが大怪我をして」

由梨香は腹を抱えて大笑いをして。

美穂里は慌てふためいてオーナーを呼び出す始末だった。

俺が『ニライ・カナイ』に出勤しただけで。

まあ、この有様なら仕方が無いが……

それは昨晚の事だった。

『瑚南』での仕事を終えていつもの様に自転車で帰路に着く。

そしていつもの様にかんりの速度でUプラザヨシノの横を通り過ぎて市役所通りに入る、するとココストアーセンター通り店の対面にマイクロバスが停まっていた。

仕事中に尚斗が石垣島で映画かドラマのロケを行っていると聞いていた、そのロケバスかな？

などと思いマイクロバスの横をすり抜けようとした。

するとマイクロバスの前方の死角から髪の毛の長い女が突然飛び出してきた。

咄嗟に右にハンドルを切りながらブレーキをかけるが間に合わない。髪の毛の長い女と交差する瞬間、自分でも信じられないが自転車を放り出してアスファルト目掛けてダイブしていた。

バランスを崩しながら、驚いて固まっている彼女の目の前で頭を庇うように左腕から転がり落ちる。

かなりの速度だったので勢い良くアスファルトの上を転がり、背中に激しい痛みを感じて何とか止まった。

縁石か何かにぶつかったのだろう。

「痛っ！」

堪らずに顔を上げると対向車線に倒れている自転車の車輪の上をボロボロのワゴン車がかなりの速度で走りぬけた。

自転車は上下に激しく揺れて見るも無残な姿になっていた。

溜息を付き体を起こそうとすると体中から痛みが走った。

すると不意に頭の上から野太い男の声がある。

「大丈夫かね？ 君」

顔をしかめながら視線を向けるとそこには薄いブルーの夏服を着た、いかにも沖縄の人といった感じのがつしりとした体格の警察官が立っていた。

当りを見渡すと人だかりが出来ている、そして赤色回転灯を点けたパトカーが直ぐ近くに止まっていた。

恐らく飲酒運転を捕まえる為に美崎町界隈を巡回していたのだろう。

「大丈夫ですよ、怪我也たいした事ないし」

「いや、しかしだね。一応病院に行ってから事情説明を……」

若い警察官が怪訝そうな顔で俺を見下ろしていた、不思議に思い自分の体を見渡す。

左腕はアスファルトで擦り剥いて血まみれ、右ひじも血が滲んでいる。

そして額に手を当てるとヌルつとしたものが手に付いた。

掌には真っ赤な血が付いている、舌打ちをするが後の祭りだ。

頭を保護したつもりだが怪我をしてしまっていた。

警察官が怪訝そうな顔をするのも無理は無い、血まみれの男が目の前で蠢いているのだから。

仕方が無く警察官の指示に従うしかなさそうだが、ふと飛び出してきた女の方を見ると生真面目そうな眼鏡をかけた男と何かを話し込んでいた。

救急車は丁重に辞退してパトカーに乘せられて病院に向かい救急で処置をしてもらい、八重山警察署で事情説明をする。

警察署には女と話し込んでいた生真面目そうな眼鏡をかけた男が事情説明をしに来ていた。

単なる自転車の自爆事故でこんな事になり自分自身に呆れ返っていると美緒の声がした。

「パパ！　パパ……」

「ただいまかな？」

美緒の顔が見る見るクシャクシャになり泣きながら飛びついてきた。無理も無いか目の前には包帯でミイラの様になっている俺がいるのだから。

トラブルにあつて帰るのが遅くなりそうなので美緒の事を野崎に連絡して頼んだのが間違이었다。

まあ、どの道この怪我では隠しようがないのだが、野崎を見ると申し訳なさそうに顔の前で両手を当てている。

「美緒、怪我はたいした事が無いんだ。心配するほどの事じゃない自転車で転んだだけだから」

「でも……」

何とか美緒を宥め賺せて簡単な事情説明と連絡先だけを告げて、あまり長居はしたくない警察署を後にする。

翌朝、派手に巻かれた包帯を解こうとすると美緒がカンカンに怒り出して朝から説教を喰らった。

仕方なく派手な包帯姿で出勤する羽目になり由梨香には笑われて美穂里には驚かれてしまったのだ。

仕事着に着替えてランチの準備に入る。

両腕の怪我はシャツを着てしまえば見えなくなるが、頭の派手に巻かれた包帯だけはどうしても無かった。

仕方なく包帯を巻いたままホールに出ると野崎が腕を組んで細く笑っていた。

「何が可笑的なんだ？」

「ふふふ、自転車で転んで大怪我が。らしいわね」

「悪かったな、あそこで相手に怪我でもさせてみる自転車とはいえ賠償責任もんなんだぞ」

「で、その相手はどこの誰だったの？」

「知らないな、実際は自爆だからな」

ランチを難なくこなして、休憩&賄いの時間になり。

いつもの様に店内の清掃を始める。

そしていつもの様に由梨香と美穂里は仲良くお喋りをしながら作業をしていた。

「あんなに怪我をしているのに、チーフって普通に仕事ができるんだ」

「でも、痛くないのかな」

「痛くないことはないが、我慢できないほどの痛みじゃないな。それに今までだって色々な仕事をしてきたからな、怪我をしなかったことなんて無いよ。だからそれなりに考えれば普通に仕事は出来るもんさ」

「そんな事を言うのは多分チーフだけです。ねえ、ミポ」

「うん、私もそう思う。普通なら休むよね」

そんなお喋りをしていると入り口の自動ドアが開く音が聞こえた。

「もう、ユーカはまた切り忘れたでしょ」

美穂里が珍しく由梨香に意見して入り口に向う。

しばらくすると見覚えのある女性を従えてロボットの様にぎこちなく俺と由梨香に向ってきた。

「あのだ、美穂里。今はクローズだぞ」

俺が美穂里に声をかけても美穂里は口をパクパクさせるだけだった。

「もう、美穂里はしょうがないな。あのう、すみません。ランチタイムは……ってどこかで見た事が」

すると美穂里が由梨香の腕を掴み由梨香の耳元で何かを囁いた。

「や、やっぱり、本物なんだ」

「何が本物なんだ。早くお引取り願え」

「ち、チーフ」

「岡谷隆文さんですよ。昨夜は大変失礼しました」

由梨香が俺を呼ぶのを遮るように見覚えのある女性が頭を深々と下げた。

「ああ、昨日の夜の。怪我は無かったですか？　こちらこそ申し訳ありませんでした。スピードを出しすぎまして」

「いえ、私は怪我はしませんでしたから。でも」

「僕ですか。ただのかすり傷ですよ、見習いみたいな看護師が大袈裟に包帯を巻いただけですから。それにただの自爆事故ですよ」

由梨香と美穂里に目をやると信じられないという顔で俺の顔を見上げている。

不思議に思い怪訝そうな顔を見ると2人同時に目を瞑り横に首を振った。

何が信じられないんだ？

確かに綺麗な女の人だと思うぞ、眼鏡を掛けてはいるが澄んだ大きな瞳で鼻筋が通っていて少しかゆるいウェーブがかかった長い髪で。

美人で言えばトップクラスに入るかもしれないな。

そんな事を考えていると野崎が事務所から現れた。

「お客様なの？　あら、あなたってもしかして柴崎ルイさんじゃないの？」

「誰だそれ、野崎の知り合いだったのか？」

どこかで聞いた事がある名前だったが、直ぐには判らなかった。

「えっ、えええええ！　チーフ、本当に判らないんですか？」

「信じられないけど、チーフはテレビ見ないから……」

「はあ？　岡谷。お前この人が誰か判らないのか？」

「昨日の夜、俺がチャリでぶつかりそうになった女の人だろ」

「……」

由梨香、美穂里、そして野崎までも酸素不足の金魚になってしまった。

訳の判らないまま俺は野崎に首根っこを掴まれ、彼女は由梨香と美穂里に丁重に案内されて店の一番景色の良い席に座らせた。

「本当に岡谷は判らないのか？ たしかドラマのロケで石垣に来て
いるんですよね」

「はい。新作ドラマのロケ撮りです」

「冷たいハイビスカスティーです。どうぞ」

美穂里と由梨香が手分けして水とハイビスカスティーを運んでテーブルに置いた。

そして野崎のロケと言うキーワードで頭の中に彼女の情報が綺麗に羅列された。

「ロケ？ ああ、女優さんかどおりで綺麗だと思った。たしか離島の看護婦さんや飛行機の整備士さん役をやっていた、たしか映画の主題歌なんかもたしかK O U っ て名前で出している」

「で、そこまで知っていて顔が判らないと。お前は本当に馬鹿だな」
「馬鹿言うな、テレビからの情報じゃなくネットからの情報だから
顔と名前が一致しないだけだ」

「チーフ、こんな時にこんな事を聞くのは変なんだけど今もテレビ
無いんですか？」

「無いぞ」

「それじゃ、美緒ちゃんもテレビを見ないと」

「そう言えばあいつテレビって言わないな」

すると彼女までもが溜息を付いた。

全員の視線が俺に集まった。

「なんだ、テレビを見ないと悪者なのか？ ネットの方が情報は多い
だろうが。それに駄々漏れの情報をただ見聞きするテレビより自
分に必要な情報だけを手にする方が賢いと思うが」

「す、凄い、合理的な考え方ですね」

柴崎さんが妙に感心しきりだった。

由梨香、美穂里、野崎の3人は彼女と正反対の反応をして呆れかえ

っていた。

「可哀想に今時の中学生にテレビも見せないなんて」

「野崎、マジで殴って良いか？　まるで俺が美緒を虐待しているみたいな言い方だな。今度ふざけた事を抜かしてみろ女だからって情け容赦なく殴り飛ばすからな」

「わ、悪かったわよ。もう2度と変な事は言わないから。ごめんなさい」

俺が急に立ち上がると由梨香と美穂里に緊張が走り顔を強張らせた。野崎が俺の逆鱗に触れそうになったのが判ったのだろつ。

彼女だけが訳も判らずキョトンとしていた。

「で、その女優の柴崎さんが僕に何の用ですか？　謝りに来たのならそれはお門違いかな。むしろ謝らなければならぬのは僕の方ですから」

「怪我をされていたので心配で」

「そうですか、怪我はたいした事は無いですよ。この通り仕事も普通に通にしていますから。外でマネージャーさんが待っているのですよ。これでお引取り願いますか？」

「申し訳御座いませんでした。お仕事中にお邪魔して、失礼しました」

そう言うとお出されたハイビスカスティーも飲まずに彼女は『ニライ・カナイ』を後にした。

「テル！　そこでコソコソしているな！　腹が減った賄だ！」

「は、はい！　今すぐに」

「由梨香、美穂里。入り口に100キロくらい塩を撒いておけ」

「えっ、はい！！」

「嵐の幕開けだなこりゃ」

そう言い残して野崎は音も立てずに事務所に消えていった。

これが嵐の幕開け

一悶着あつた休憩&賄いの時間も終わり、夜の営業が始まる。

俺はいつに無く愛想良く仕事をこなしていく、普段より忙しかったがあつという間に感じられた。

「はあゝ 今夜は凄く長く感じるんですけど」

「俺には短く感じたけどな」

テルが調理場から疲れた顔をだして嘆いていた。

「本当に判っているんですか？ チーフがいつも以上に愛想良く仕事をしている時って、実はいつも以上に機嫌が悪い時なんですよ」

「そんな事はテルに言われなくても判っているよ」

「判つててやっているんですか？ 黒すぎですチーフ」

「お客に当たる訳にいかないだろうが。それなら愛想良くしたほうが良いだろう」

「マジで黒すぎる。可哀想に由梨香と美穂里は緊張しっぱなしで失敗するし」

「俺は一言もそれに対して何も言わなかったぞ」

「言ったら確実に彼女達は確実に泣きますよ」

由梨香と美穂里を見るとクローズしてノーゲストになったテーブルに倒れこむように突っ伏していた。

少しやりすぎたな、反省しながらもどうするか思案すると直ぐに答えが導き出された。

「お疲れさん。気分転換にカラオケにでも行つて来い、カンパしてやるから」

「本当ですか？ ユーカ、ミボ、どうする？」

「「行きまーす！」」

由梨香と美穂里が飛び起きて目を爛々と輝かせていた。

元凶の野崎に声を掛けると事務所から手だけを出してその手には福沢諭吉が2枚見えた。

「うひょ！ これなら居酒屋＆カラオケが出来る！ あざーす！」

「レッツ ラッ ゴー」

「行ってきます」

3人が嬉しそうに店を飛び出して行った。

俺も野崎に声を掛けて家路に就いた。

マンションの駐車場に着くと直ぐに携帯が鳴る。

「なんだ、お前か。遅いんだよお前はいつもいつも、まあ良いさありがとうな。あいつは変わりないよ」

変らない受け答えをして携帯を切り階段を上がる。

玄関の前まで来ると楽しそうな話し声が聞こえるが構わずドアを開けた。

「ただいま」

「お帰りなさい、パパ。あのねお客さんが」

美緒の言葉が尻すばみになっていく。

部屋を覗くと彼女が居て軽く会釈してきた。

柴崎ルイは一体……

美緒に目を合わせると僅かだが瞳が揺れた。

「美緒、食事はどうしたんだ？」

「あのね、ルイさんが作ってくれたんだ。凄く美味しいんだよ、パパの料理が一番だけどね」

「そうか、それじゃシャワーでも浴びるか」

素っ気無い俺の態度に美緒は益々瞳を揺らせる、俺からしてみれば美緒の態度の方が不思議だった。

いつもなら女の人を俺を訪ねて来ようものなら根掘り葉掘り詮索して、やきもきして八つ当たりをしたりするのに綺麗な女優さんが訪ねて来たのにあの態度だ。

まあ、有名な女優さんだからなのかそれとも…… どちらでも俺には関係ない。

シャワーで全てを洗い流してしまった。

パパには内緒なんだけど柴崎ルイさんは実はママのお友達なの。

たまたま、本当にたまたま石垣島でロケがあつて、ロケの方が殆ど終わって石垣島に居る私の様子を見る為に訪ねて来てくれたんだ。

そんなルイさんが昨日の夜にパパと出会ってたつて言うかなんだか変な感じだなあ。

だって、ルイさんは本当はママに言われて私の様子を見に来たんだもん。

パパは普段と変わらない感じがするんだけど、いつもより穏やかつていうか少し冷めたような感じがするの。

でね、ルイさんはパパに『ギャランティーの為なら何でもするんだな』つて言われて少し雰囲気が変わつて遅いからつて宿泊先のホテルに帰つちやつたの。

でもこれが嵐の始まりだったなんてその時は気付きもしなかったの。

だって、次の日の夜……

私は学校から帰つてきて課題を済ませて簡単に掃除をしてご飯を食べて、パパの帰りを待つてたの。

リビングにはテレビがあるんだけど映らないんだ。

スイッチが壊れているだけだから美緒が見るようなら直すけどつてパパが言つてくれたんだけど東京に居た時もあまり見なかったし、石垣島じゃ4局しか映らないんだよ。

そのうちの2局が日本放送協会なんて信じられる？

でね、パパが石垣島に来た時にはその2局しか映らなかつたんだつて。

「あつ、パパが帰つてきた……あれ？ どうして？」

パパとルイさんが仲良く話をしながら帰つて来たの。

「おかえりなさい」

「ただいま。美緒、すまないがしばらく彼女と一緒に寝起きしてく

れないか？ 彼女がここに居た方が仕事上都合が良いんだよ」

「えっ？ ルイさんと一緒に暮らすって事なの？」

「まあ、そうだな。彼女がOFFの数日間だけだな」

「私は話し相手が出来て嬉しいけど、パパは本当に構わないの？」

「問題ないだろ」

なんだか狐に抓まれたってこう言う事を言うんだろなって思ったの。

だってそうでしょ。

昨日の夜までは敬遠し合っていたのに急に仲良くなってるんだもん。不思議に思ってた寝る前にルイさんに聞いてみたの。

「ねえ、ルイさん。パパと何かあったの？ 凄く仲良くなっているよね」

「あのね。今日、お店に働かせてくれてってオーナーさんに直談判に行ったの。もちろんノーギャラでよ、私の我が儘を押し通すんだから。そうしたらすんなりOKしてくれたの不思議でしょ」

「それはね多分、野崎さんがパパをやり込め様としたんだと思う。パパと野崎さんは子ども同士みたいなトコあるから」

「そうなんだ、でも美緒ちゃんのパパは全く動じて無かったよ。私がノーギャラで数日間働かせてくださって頭を下げると、笑顔でそんな覚悟が出来ているんなら良いんじゃないかって」

「ふうん、でも何でお金を貰わないの？」

「だってムカつくじゃない。ギャラの為なら何でもするって言われたんだよ。でもね、美緒ちゃんのパパと一緒に仕事をして気が変わったのギャラなんて要らない、本気モードで美緒ちゃんのパパ岡谷さんにアタックする」

「えっ！」

「何でそんなに驚いた顔をするの？ 岡谷さんは今フリーなんですよ？ それとも恋人が居るの？」

何を言われているのか一瞬判らなくなった、確かにパパには恋人なんて影すら見えないし好きな人が居るなんてパパからも誰からも聞

いたことが無い。
でもなんでルイさんが……
もしかしたら私がグズグズしているから……
そう考えたら辻褄が合った。
でも、ルイさんはギヤラなんて要らないって……
本当に本気なんだお金なんて関係なくパパの事を、心の奥がザワザワと波立ち始めていた。

次の日の朝は凄くいい匂いで目が覚めたの。
私起きるとルイさんは私のベッドに居なかった。

「おはよー」

「おはよう、美緒ちゃん。見てみて凄いフレンチトーストでしょ」
ルイさんが飛びつきりの笑顔でお皿に乗ったフレンチトーストを私の前に差し出した。

そのフレンチトースト？ は私が知っているフレンチトーストじゃなかった。

食パンを一斤まるまる耳を切った様な大きさの真四角で綺麗にこんがり焼き上げられている。

「パパさんに教えてもらいながら作ったんだよ」

「パパさん？」

「そう、だって私が隆史さんとか岡谷君って美緒ちゃんのパパを呼んだらどう思う？」

「凄く嫌だ……」

「でしょ。美緒ちゃんのパパだからパパさんで職場ではチーフって呼ぶ事にしたの。焼き立てだよ一緒に食べよう、朝ごはん」
「う、うん」

パパの顔を見ると美緒を見る時と同じ優しい瞳でルイさんを見ている。

すると心のザワザワが大きくなった。
そんな自分が嫌でテーブルに目をやるとマグカップが3つ並んで、

パパ特製のカフェオーレが美味しそうな湯気を立てていた。

「冷めないうちに食べよう」

「そうだね」

ルイさんに言われてナイフを入れる。

表面はカリカリに焼けているのにはフワフワのフレンチトーストで、シナモンシュガーとメイプルシロップが絶妙なハーモニーでルイさんと夢中になって食べちゃった。

学校に行く時にルイさんとパパが見送ってくれたんだけど、並んで立っている姿が淒く似合ってたてきゅんってしちゃった。

学校に着いたら今日も2人仲良く仕事をするんだろうなって思った途端に体が淒く重くなった。

「おはよー、美緒」

「おは、泉美」

「うわあ、朝から暗！」

親友の泉美が朝から喧嘩を売ってきた、でも買う元気も無い。

そこにいつも元気ななっちゃんこと菜月が大騒ぎしながら現れた。

「ねえ、ねえ、知ってる？ 柴崎ルイがロケで石垣島に来てるんだって」

「知ってるも何も無いよ。パパと一緒に仕事に行っただもん」
すると、なっちゃんが大声を上げそうになるのを寸でのところで、いつも冷静な朋ちゃんがなっちゃんの口を塞いで止めた。

「美緒、ルイに会ってみたいんだけど」

「パパに聞いてみるね。今日は早く帰ってくる日だから」

口を塞がれたなっちゃんと驚きのあまり声の出ない泉美がウンウンと首を縦に振った。

「で、ルイとパパが仲良くしているから美緒は落ち込んでいると」

「悔しいけど、ビンゴ！」

相変わらず頭の回転が速い朋ちゃんだった。

口を塞がれたなっちゃんと驚きのあまり声の出ない泉美が納得して

ポンと手を打った。

そんな訳で学校帰りに皆を引き連れて帰ると、ルイさんは大喜びして特製のフレンチトーストを焼いてくれたの。

ルイさんも3人とも至極ご満悦で1人ずつツーショットで楽しそうに記念撮影までしていた。

もちろん、この事は3人に堅く口止めたことは言うまでも無いんだけど、殆どノーメイクで髪を1つに纏めてメガネを掛けているルイさんは極上のメガネ美人にしか見えないんだよね。

それに、シンプルって言うかはつきり言う土地味なワンピースしか着ないの。

イメージと違いすぎて誰にも判らない思う。

その夜はパパとルイさんと私でルイさんが作ってくれたご飯を食べてゆっくりしていたら。

ちよつと散歩に行ってくるってパパとルイさんの2人でどこかに行っちゃったの。

ど、どうしよう……

でも子どもの私が出歩いて良い時間じゃないし留守番しているしかないみたい。

それに私が口出して良い事じゃないよね。

パパが誰と恋愛しようがそれはパパの自由なんだし、私が何の為にココに居るのかを考えたら尚更だよな。

体中から力が抜けて部屋のベッドに倒れこむと涙が零れ落ちた。

何で涙が出るんだろう、何でこんなに胸がキュンってするんだろう。

誰かが優しく髪の毛を撫でてくれている。パパなのかな……

「あれ？ 私、寝ちゃったんだ」

「起こしちゃったみたい、ゴメンね」

髪の毛を撫でてくれていたのはルイさんだった。

凄く優しい瞳で私を見ていてくれる、それはまるでパパみたいに。

「ルイさん、聞いて良い？ どこに行ってたの？」

「うん？ お散歩だよ。でもパパさんて凄いね色んな事を知っていて、聞いた事に対して殆ど即答してくれる。判らない事があれば知らない間に調べて教えてくれるんだよ」

「そうなんだ、パパは物知りさんで誰にでも優しいからね」

「直ぐ近所なのに凄く素敵な所に連れて行ってもらったの。緩やかな階段状のただの護岸の筈なのに満月の光りが波間にキラキラと輝いてて、波が寄せては返す音がして風はサラサラと頬を撫でて凄くロマンチックな場所だったよ」

「そうなんだ、私はまだ中学生だからそんな場所には縁が無いかなあ」

心が大きく揺れるけど笑顔で強がるしか出来なかった。

「パパさんて色んな仕事をしてたんだね。ケーキ屋さんに局の道具、それに18金とかのジュエリーの製造に自動車のエンジンの組み立て。石垣島では色んなホテルでサービスの仕事をしてバーを立ち上げたりして、イタリアンの調理にコンビニのスタッフに居酒屋の店長&調理でしょ。凄いよねだから『ニライ・カナイ』じゃあんなにオールマイティに仕事が出来るんだね。サービスしてキッチンに入って、注文があればカクテルまで作って。あのお店にはベーシックな料理やカクテルもあるけれどパパさんの創作料理やオリジナルカクテルなんかがいっぱいあって」

「そうなんだ」

「あ、ゴメンね。私ったら凄くパパさんとお喋りが楽しかったから。明日も学校だもんね、電気消そうね。おやすみ」

「うん、おやすみ」

ルイさんが電気を消して私の隣に横になる。

私は…… なんてそんなに嬉しそうな顔で話すの？

パパの事は本当に本気なの？

私は仕事をしている時のパパを知らない。

心がザワザワしてモヤモヤして涙が零れた、でも泣いているのをルイさんに知られたくない。

私は唇を噛み締めて目を瞑って押し殺すように泣くしか出来なかった。

嵐らもん、大嵐なんらもん

翌朝は何度もルイさんやパパに呼ばれたけれど寝坊した振りをして時間ギリギリで朝ごはんも食べずにマンションを飛び出した。

泣き腫らした顔を見られたくなかったんだもん。

2人に心配を掛けたくなかった、特にパパには何もかも見透かされてしまいそうで怖かったの。

学校に着くなり自分の机に突っ伏して周りの声は一切無視してシャットダウンした。

こんな日、本当は学校をサボるのが一番なんだけど担任の金子先生とパパはメールで通じている。

私がサボったり授業をボイコットすれば直ぐにパパに判ってしまうの。

真面目に？ 放課後になるまで私は殻に閉じこもった。

今日さえ我慢すれば明日は土曜日だから……

その夜、元気の無い私を見てパパは心配そうだったけど、テストが近いから学校の勉強が大変なだけってパパに初めて嘘を付いた。

「これから出かけるけど大丈夫なのか？ 少し遅くなるかもしれないが」

「大丈夫だよ。ルイさんが待つてるよ、いつてらっしゃい」

「何かあれば必ず電話しろよ」

相変わらず心配性だな美緒の事になるとパパは。

そんな事を考えると少しだけ気持ち軽くなるけど、ルイさんがいつもと違う素敵なワンピースを着て髪の毛を綺麗にセットして笑顔で私に向かいサムズアップすると一気に沈み込んだ。

パパは普段着と変らないけど501に黒いカットソーを着てシャツの変わりに落ち着いた感じのジャケットを着ている。

2人の格好はこれからデートに向うカップルそのものだった。

何度も眠ろうと思ったけど出来なかった、こんな気持ちは初めてだった落ち着かないって言うのが一番近いかもしれないけど言いようが無い気持ちなの。

部屋でベッドの上でゴロゴロしたり、パパの部屋でパソコンを開くけど全然面白くない。

仕方なく適当にパパの持っているライトノベルを数冊持って部屋で読む事にしたんだけど、同じ所を何度も何度も繰り返し読んでいて前に進んで行かないの。

溜息についてベッドに倒れこんじゃった。

「なんでこんなにチム、ワサワサ……」

玄関が開く音がして私は慌てて起き上がってライトノベルを読んでる振りをした。

すると僅かにルイさんの声が聞こえてくる。

「お願い、キスして欲しいな」

「あのな」

「私じゃ駄目なの？」

「しょうがないな……」

「……ありがとう」

その声を聞いた瞬間に極寒のマイナスの世界に包まれ私は凍りついた。

すると少しだけ呂律が回っていないルイさんが部屋に入ってきた。

「あれれ？ 美緒ちゃんまだ起きてたんだ」

「うん。ルイさん、お酒を飲んでるの？」

「そう、かなり酔っ払い。パパさんに素敵な時間を貰っちゃった。

最初に行ったBARは内装が白で統一されていて照明が全て綺麗な青で海底に居るみたいな空間でね。カジュアルなだけで凄く落ち着けていい感じなの。でね2軒目が凄いいんだよ、これぞBARの中
のBARって言えば良いかなお酒が壁一面に並んでて大人の遊び場
って感じでね」

「でも、ルイさんなら内地でもっとおしゃれな所に飲みに行くんで

しょ」

「打ち上げとか付き合いでならね。プライベートではあまり無いかな。忙しいのもあるけど一緒に行く人なんていないもの」

「ええ、本当なの？」

「だからこそ、本気なの。デート楽しかったな、パパさんは凄く大人で素敵で優しくって。凄く聞き上手で嬉しくって嬉しくって色んなお酒飲んじやった」

「パパとどんな話をしたの？」

「内緒。大人のお喋りだもん、パパさんと2人っきりの。うふふ、それにキスしてもらっ……」

ルイさんが力尽きてベッドに倒れこんで可愛いらしい寝息を立てている。

私の心はもう波立っていない、ざわつく風さえも凍り付いてしまう絶対零度の世界で不思議なくらい静かだった。

翌日は土曜日で学校はお休み。

パパとルイさんは私を起こしもせずに仕事に行っちゃった。

お昼ごろに起き出すけど凄く静かで私だけがこの世界に取り残されたみたいだった。

リビングに座り込んでボーとしていたの。

「ルイさんとパパが恋人同士になったら……私はお役ゴメンだね……」

……東京に帰って……嫌……嫌だよ」

凍り付いていたモノが一気に解けた。

静かな部屋に私の泣き叫ぶ声だけが響き渡っている。

自分自身の泣き叫ぶ声を聞き更に泣き叫びながら助けを求めて携帯を握り締めた。

泉美となつちゃんと朋ちゃんの3人が息を切らして来てくれたけど私は泣き叫んだままだった。

「まるで美緒は台風みたいだね」

「たいふう？ いじゅみ、意味わからいよー」

「怒った風が吹いたと思ったら涙の雨が土砂降りで、台風はね強い風と強い雨が交互にやってきて荒れ狂うの」

「嵐らもん、大嵐なんらもん。胸がキュンって締め付けられて、苦しくってどうしようもなくって……私は子どもで……ルイさんは大人の女の人で……」

なつちゃんは心配そうな顔をして何も言わずに見守ってくれる。

一方、朋ちゃんは私と泉美のやり取りをしっかりと見てた。

「焼きもち焼いてるの？ ルイさんとパパに？」

「やちもち？」

「そう、ルイさんとパパが仲が良いから美緒は焼きもちを焼いてるの。ルイさんにパパを取られちゃいそうだから」

朋ちゃんに言われて気付いたのこれが焼きもちなんだってルイさんに嫉妬しているんだって。

「らつて、キスしてたもん」

「見たの？」

「うっん……」

「馬鹿みたい、見ても無いのに」

「だってキスしてってルイさんがパパに」

「それって聞いただけでしょ。口と口だけがキスなの？ 違うでしょ」

朋ちゃんは大人ぼいんじやなく本当に大人だった。

朋ちゃんに諭されると荒れ狂っていた心が静かになっていく。

泉美となつちゃんも驚いた顔をして朋ちゃんを見ている。

「それにさあ、本当の子どもか判らない美緒と何で一緒に暮らしてるの？ 彼女を作る気がパパにあるのなら美緒は邪魔なだけじゃない」

「それは……」

本当の友達だからこそ言える朋ちゃんの問いに私は答えられなかった。

成り行き？

私が強引に押しかけてきたから？

でも嫌なら内地に突き返せば良いだけの事じゃないの？

それじゃ、何でパパは私と暮らしてくれているの？

嵐は収まったけれど、今度は謎が深まった。

「その答えはパパに直接聞くしかないかもね」

「そうだね」

「ああ、また大人みたいな事を言っちゃった。いつもママに怒られてるのに『子どもは子どもらしくしなさい』って」

朋ちゃんの言葉に私やなっちゃんと泉美に笑顔が戻った。

「凄いね朋ちゃんは、大人っぽいんじゃなくて大人なんだね」

「うーん、ほら、うちってニイニイやネエネエが居るからかな。恋

バナとかしていると耳がダンボになっちゃんうんだよね」

「うわあ、耳がダンボなんて今時あまり使わないよ」

「酷いよ、美緒！ そんな言い方したら大人じゃなくておばさんみたいじゃん」

「うふふ、おばさんって」

「あああ、ナツまでそんなこと言うんだ」

珍しく大人しいなっちゃんが朋ちゃんに突っ込んで、そんな2人を泉美が宥めてるの。

「まあまあ、美緒の嵐も少し落ち着いたみたいだし」

「台風の目だったりして」

「台風の目ってなあに？ 朋ちゃん。聞いた事はあるんだけど」

「台風の中心にあつて、風も雨も殆ど止んで青空が見えたりするんだよ」

「台風の目を過ぎるとどうなるの？」

「風が逆向きに吹いて、もの凄い吹き返しの暴風雨になるんだよ」

「……無理」

これ以上は耐えられる自信が無かった。

パパとルイさんが仲良しになるのは良いけれど、それ以上はゴメンけど無理だな。

私が首を突っ込める事じゃないんだけどさ。

そんな事を考えているとパパが彼女を作らずに私と暮らしている理由が謎のままだった。

朋ちゃんもパパに聞くしかないって言うけれど聞ける訳無いじゃんそんな事！

「どっちだろね」

「えっ？ 何が？」

「美緒のパパだよ。一生独身でいるつもりか、もしかすると……」

「もしかすると？」

「心に決めた人がいるかだよ。一度結婚して嫌になってしまったか忘れられない人がいるとか。謎が謎を呼ぶ」

「ああ、朋ちゃん。面白がって言っているでしょ」

でも、朋ちゃんの言っている通りだと思う。

パパには聞けないけど一番知りたいことも知れない。

夕方まで3人は私の側に居てくれたの、私がいつも通りになると遅くなるといけないからって。

1人になって冷静に考えても答えなんか見つかるはずも無く。

パパ達が帰ってくる時間になっていた。

「そろそろ、帰ってくるなあ。パパとルイさん。はあ」

溜息が出ちゃう、台風の目を抜けると吹き返しの暴風雨が……すると、玄関のドアが開く音がした。

「ただいま、疲れた」

「おかえり、パパ」

あれ？ パパだけ？ 部屋から慌てて飛び出すと玄関にはパパしか居なかった。

「パパ、ルイさんは？」

「帰ったぞ、本当は今日までOFFだったけど急用が入ったって」

「ええ、帰っちゃったの？ 私に何も言わずに？」

「向こうに着いたら連絡するって行ってたぞ」

「そ、そうなんだ」

パパは疲れた表情をしていた、そりゃそうだよね仕事場でも家でもルイさんに付きっ切りだったんだもんね。

どこにしたのかは判らないけどキスまでしちゃってさ……

でも吹き返しの暴風雨が荒れ狂うことなく嵐は消滅してしまった。

夜遅くに携帯にルイさんから電話が掛かってきたの。

「ゴメンね、美緒ちゃん。急用が出来ちゃって」

「う、ううん。仕事なら仕方が無いよね」

「あのね、美緒ちゃん。実は仕事じゃないんだ、パパさんには嘘付いちゃった」

「えっ？」

「パパさんに振られちゃって悔しくって逃げ出したの。甘えても泣いても直球で勝負しても完璧で鉄壁のガードは崩せなかった。流石に強引な力技に持ち込む訳にもいかないしね」

「ち、力技？」

ルイさんの言っている意味が判らない訳じゃないけど真っ赤になちやった。

「うふふ、冗談。色々話しているうちにパパさんの中には大切な人が居るのが判ったの」

「パパの大切な人？ そんな人知らないし聞いた事ないよ。誰なの？」

「悔しいから言えない。それに負けたくないし」

「負けたくないって、ルイさん？」

「本気だって言ったでしょ、パパさんの事。まだ諦めた訳じゃないんだから。酷いと思わない美緒ちゃん？」

「何が酷いの？」

「本気でキスしてって言ったのにおでこにおやすみのチューだよ、まるで私が子どもみたいじゃない」

「そ、そうなんだ」

あれはおでこにチューだったんだ。

なんだか凄くほっとして気が抜けちゃった。

「ああ、美緒ちゃん。今、笑ったでしょ」

「笑ってないよ、パパがおでこにチューなんて想像つかないんだもん」

「今度はちゃんとキスしてもらうんだから」

「うふふ、頑張ってるね。応援してるから」

「複雑だなあ、美緒ちゃんに応援されるのって。だって美緒ちゃんはパパさんの事大好きなんですよ」

「うん！ 私、パパの事が大好き！」

ルイさんが電話してくれたお陰で今までモヤモヤ・イライラしていた物が嘘の様に消えちゃったの。

その代わりルイさんはいつ爆発するかわからない时限爆弾を2つ置いて行くんだよ。

1つはパパの中に居る大切な人、ルイさんは誰だか知っているけどルイさんの性格から絶対に誰にも教えないと思う。

もう1つは当のルイさん自身、パパに振られたって言っているのに諦めないって……

はあ、ルイさんの性格じゃ絶対に諦めないよね。

そんな何事も諦めない性格だからこそルイさんはトップクラスの女優さんでアーティストなんだもんね。

一難去ってまた一難なのかなあ……

本物の嵐が

なんだか変なの、石垣島の天気もそうなんだけど。

一難さつてまた一難どころじゃなくて……

晴れてるのになんだかいつもと空の感じが違うつて言うか、どう表現したら良いのか判らないんだけど。

そう、妙に空気に透明感があつて太陽の光りが眩しいのつて言うたら変だよな。

空気に色なんか無いんだし太陽の光りが眩しいのは当たり前的事だもんねでも、そんな感じなの。

夏なのに秋の空が混じつてる感じなのかなあ。

そして、パパの様子も……

落ち着かないつて言うかピリピリしているつて言うか、美緒に対してはいつも通りに接してくれるんだけどさ。

パパに直接聞いても『何がだ？』つて顔されちゃった。

美緒を見縊ってもらっちゃ困るよ、これでも東京に居る時は行動派だったんだから色々。

美緒が初めて石垣島に来て『ニライ・カナイ』に行つた時間に行けばミポさんもユーカさんもテルさんも居るはずだよな、野崎さんは別として。

そんな訳で、自転車で『ニライ・カナイ』に来ちゃった。

「うわあ、の、野崎さん」

「美緒ちゃん、私の顔を見てそんなに驚く事無いんじゃない？ 酷くない？」

「ちよつと、驚いただけですよ。お久しぶりです、野崎さん」

「いらつしゃい、遊びに来たの？」

「はい！」

自動ドアの前でお店の中を覗いてたら野崎さんに見つかっちゃった

の。

野崎さんには見つからないようにしたかったのに、だってまたパパと子どもみたいな喧嘩するでしょ。

そんな事を考えてると案の定、野崎さんは……

「岡谷！ 愛しい愛しい美緒ちゃんが会いに来てくれたぞ」

「バーカ、毎日顔を合せてるんだ。美緒は由梨香と美穂里に会いにきたんだよ。本当に野崎は馬鹿だなそんな事も判らないのか」

「くっう！ 馬鹿馬鹿言うな。馬鹿言う方が馬鹿なんだ」

「本当に馬鹿だな、ガキじゃあるまいし」

野崎さんが地団駄を踏んでいるとユーカさんとミポさんが笑顔で手招きしてくれた。

「美緒ちゃん、いらっしやい」

「えへへ、久しぶり」

「西表島に一緒に行つて以来だよ」

「うん」

そんな事を話しているとテルさんがキッチンから顔を出したの。

「うひょー！ 愛しき美緒ちゃんだ。俺に会いに来てくれたんだ」

「バーカ、テルはあっちと一緒だな」

ユーカさんが指差す方を見るとパパと野崎さんが未だに馬鹿を連呼していた。

「良いんだ、良いんだ。どうせ俺なんか馬鹿だし愚図だし……」

「テルさん？ どうしたの？」

「ああ、良いの良いの。美緒ちゃん、馬鹿は放つて置くのが一番なんだから」

「あのね、美緒ちゃん。この前、ルイさんが来てたでしょ。でね、テルが舞い上がっちゃって必死になつてルイさんに話しかけるんだけど全然相手にされなくて落ち込んでるの」

うな垂れながら窓際のソファーにトボトボとテルさんが歩いていくと、ミポさんがテルさんが落ち込んでいる理由を教えてくれたの。

「そうなんだ、でもルイさんは本気みたいだったよパパの事、諦め

ないからって言ってたもん」

「ま・じ・ですか……なんでチーフばかり……」

テルさんが燃え尽きた瞬間だった。

でも今日はルイさんの事を聞きに来たんじゃないんだもん。

テルさんには悪いけど今は放置しておくね。

「あのね、今日はパパの事を聞きに来たの。最近パパに変わった事無い？」

「チーフに変わった事？ ミポはなにか気付いた？」

「そう言えば時々外を気にしてる時があるよね」

「そう言われればそうかも」

「やっぱり、周りを気にしているのか」

「どうしたの？」

「うん、普段どおりに見えるんだけど落ち着きが無いって言うか、とにかくなんか変なの」

「台風が近づいて来てるからじゃないの？」

「ええ、子どもじゃあるまいし台風が近づいて来ただけでワクワクする大人が居るわけ無いじゃん」

「居るじゃん！」

ユーカさんとミポさんがパパを指差した。

そしてソファで倒れ込むように死んでいるテルさんまでがパパを指差していた。

「岡谷！ またお前にお客さんだ。今日は千客万来だな」

すると野崎さんの少し荒い声が聞こえた。

皆の視線が声の方に来る、そこには一見したら観光客にしか見えないのだけど何処と無く怪しげなキャップを目深にかぶった男の人が立っていた。

携帯で電話をしていたパパがレストランの一番奥の隅の席に案内して座り込んだ。

朋ちゃんに怒られるかもしれないけれど、その場に居た全員の耳が

ダンボになつて息を潜めたの。

「あんたか、俺達の周りをコソコソ嗅ぎ回っていたのは」

「実はこんなモノがあるんですが」

美緒達が居る場所からじゃ良く見えないけれど写真の様なモノを男の人がパパの前に出したの。

「こんな物を、どうしろと」

「大人の対応をしましょうよ。 お金で話が付くのなら安いもんでしょ」

「で、いくらで買えと？」

「判つた、今直ぐに準備させるから」

男の人が掌を開いてパパの前に突き出すと直ぐにパパはどこかに電話をし始めたの、男は帽子の陰から見える爬虫類みたいな目で警戒しながら周りを見渡していたの。

しばらくするとお店の前に一台の乗用車が止まって数人の男の人が降りてきたの。

野崎さんに案内されなが店に入ってくると、パパと話していた男の人の顔色が変わり慌ててパパの前にある写真の様な物を持って逃げ出そうとしたの。

「動くな！」

野崎さんに案内されてた男の人が声を上げた瞬間、パパが写真の様な物を取り上げると逃げ出そうとした男が躓いたように転んだの。でね、取り押さえられてつれて行かれちゃったの。

「終わった！」

「終わったね」

一番初めに声を上げたのはユーカさんとミポさんだった。

「おい、テル。いつまで死んだ振りしてるんだ。 賄いの時間だぞ」「ういす！」

パパに声を掛けられたテルさんがソファから飛び起きてキッチンに入行って、パパと野崎さんを見るとハイタッチを交わしてるんだよ。

私だけが意味が判らなくて……

賄いをご馳走になりながら皆が説明してくれたの。

ルイさんが石垣島に来てロケ中も誰かに見られているような気がして、ロケが終わってパパと出会ってからそれが確信になってパパが知り合いの刑事さんに相談してたんだって。

少し調べてもらったら中々尻尾を出さない強請り・集りを専門にしている人だったらしいの。

それで、警察の方と連絡を取り合って犯人を誘き出して予定通り今日の現行犯逮捕になったんだって。

「そんな、じゃあ何でパパはあんなに落ち着かなかったの？」

「決まってるじゃん、美緒ちゃんが心配だったの。ルイさんが帰ってからもチーフの周りを犯人がウロウロしてたみたいだから」

「もう、ユーカさんてば教えてくれれば良いのに」

「チーフがそんな事許すと思う？　ね、ミポ」

「うん、絶対に許さないよね。美緒ちゃんを不安にさせるだけだもんね」

「それじゃ、今日は全部お芝居だったの？」

「私の『千客万来』が合言葉だったの。美緒ちゃんがお店に来たのは想定外だったけれど。由梨香と美穂里が事務所に一番近い席に誘導して、岡谷は犯人が逃げるのに時間がかかる一番奥に連れて行き警察を呼ぶ」

「で、俺が何かあった時のサポート役だったんだ」

「もう、野崎さんとテルさんまで。本当に心臓が口から飛び出すくらい驚いたんだから」

「仕方が無いだろ、美緒が店に来るなんて思っても見なかったんだから」

「だって、パパの様子が変だったから心配で」

「本当に岡谷は美緒ちゃんが絡んでくると形無しだな」

「あのな、冷静で居られる方がおかしいだろうが」

「まあ、それもそうか。愛しい愛しい美緒ちゃんだもんな」

「そう言う事にしておけば丸く収まるんだろ」

だからパパはルイさんが帰った日あんなに疲れた顔をしてたんだ。そんな事も知らずにルイさんとパパにやきもきしてた自分が少し恥ずかしくなっちゃた。

まだまだ私が子どもなんだって事だよ、それに比べパパとルイさんは大人で凄いと思うよ堂々とデートしちゃうんだもん。

それに『ニライ・カナイ』の皆のチームワークの良さに一番驚かされたかもしれない。

本当に信頼し合わないとあんな事できないもんね。

変な天気はパパに聞いたら台風の所為だって教えてくれたの。

台風が来る前はこんな天気になる事が多いんだって。

夕焼けがやけに赤くなったりトンボがたくさん飛び交ったり。

沖縄の周りには3つの台風が発生しててそのうちの1つが発達しながら先島諸島に近づいてきてるんだってパパが教えてくれたの。

「先島諸島ってどこの事なの？」

「美緒には聞きなれない言葉かな。沖縄本島より南の宮古島から八重山までを先島って呼ばれているんだよ」

「へえ、そうなんだ。じゃ、南西諸島は？」

「厳密には種子島と屋久島から八重山までかな、でも沖縄本島から八重山までを言う事の方が多いかもな」

台風が接近するにつれて天気が悪くなってきたの、雨が降ったり止んだりしながら風が段々強くなってきた。泉美が教えてくれた通りだった。

それでね、学校は暴風雨警報が出ると休校になるの。授業中でも警報が出たら学校は終わりなんだって。

地域によって学校独自で決められてるんだってパパが教えてくれたんだよ。

今回は午後に警報が発令されて学校が早く終わったの。

パパが迎えに来てくれたんだよ『ニライ・カナイ』は昨日の内に台

風対策したんだって、飛ばされそうな物は全部店内に入れてガラス窓にはネットを張って飛んできたものでガラスが割れないようにするんだって。

でね、少し遠回りしてパパとお店に見回りに行っちゃった。

「殆どのお店が閉まつてるんだね」

「そうだな、早めにスーパーに行かないと物が無くなるな」

「ええ、品切れになっちゃうの？」

「当たり前だろ、在庫には限りがあるんだし商品は入荷しないんだぞ」

「あつそうか、船で運ばれて来るんだ」

離島故の定めだよってパパは言ってた、八重山の中心の石垣島でさえこれなんだから他の離島はもっと大変なんだろうな。

小さな船で運ぶんだもんね、台風が通過しても波が高くて小さな船が出られなければ何日も食料すら入って来ないんだよ。

それと、不思議な物を見つけたの閉まっているお店のシャッターを鉄の柱で押えてシャッターが飛ばされない様にしているの。

「美緒は気付かなかったのか？　お店の前に浅い四角い穴が開いているのに」

「ああ、知ってる。何度も躓いて転びそうになったんだよ、何でもんな所に四角い穴なんてあるんだろうって思ってた」

「台風対策の為だよ、沖縄は台風銀座と呼ばれるくらい台風の通り道だからな」

台風対策って言えば台風が近づくにつれて島中がなんだか賑やかになるんだよね。

金槌で釘を打つ音があちらこちらから聞こえて、屋根にブルーシートを張っている人とか雨戸を調べている人とかが居てなんだかお祭りの前みたいなんだよね。

お店の見回りをしてから帰り道のスーパーに寄ったら凄い人なの、パパが言ってたみたいに物が無くなるのが判る気がした。

観光客みたいな人達も居るんだけど直ぐに地元の人じゃないのが判

るんだ。

だって顔つきが違っただもん、観光客は強張った顔つきで必死に買い物してるのに島の人は楽しそうにこれからピクニックに行くみたいに買い物してるんだよ。

経験の違いなんだろうね、毎年嫌でも台風が来るんだから。

パパも有り得ないくらい沢山買い物をするんだよ、備えあれば憂い無しなんだって。

夕方になるともの凄い風と雨になってきて、マンションの窓からみると石垣の街が霞んで見えるくらいなの。

パパに凄いいねって言ったらまだまだこれからだよって余裕で言われちゃった。

そうだよねパパは石垣島に20年間も居るんだもんね。

パパの部屋はよっぽどの事が無いと風がまともに当たらないから平気なんだって。

Tの字に近い構造のマンションで横の棒と縦の棒が交わってる所に部屋があるからなんだって。

それでも少しだけ怖いな風の音は凄いいし、時々電気がチカチカしていつ停電になってもおかしく無いと思うもん。

そんな中でもパパは定期的にパソコンで台風情報を逐一チェックしているの。

美緒にもちゃんと判るように教えてくれるんだよ。

「今回の台風は島の西側を通過するから風が今以上に強くなるぞ」

「どうして？」

「風の向きと進行方向が一致するからだよ」

「あつ、判った。風の速さに移動の速さが加わるからだ」

「そうだ。ここに高気圧が在るからこの高気圧にそって台風は移動するんだ」

「それじゃ、高気圧の張り出し方で変わってくるの？」

「そうだよ、今回は迷走しないけど移動のスピードが遅いから抜け

るまでに時間がかかるだろうな」

パパの説明は凄く判りやすかったのパソコンの画面を見ながら教えてくれて、パパが居なくても次からは大体の状況は判る事が出来そうなんだもん。

外が暗くなってきたてパパが時計を見てそろそろ限界かなって、携帯を取り出したの多分だけどユーカさんとミポさんに連絡を取ってるんだと思う。

「美緒、ユーカ達を迎えに行くけどお前は どうする？」

「行く！ 停電になって独りは嫌だもん」

「そうだったな」

「ああ、笑ったでしょ。子どもだって思ってるんでしょ」

「あのな、美緒は俺の子どもだろうが」

「うん！」

えへへ、パパに言われて一番嬉しい事を言われちゃった。

意気揚々とユーカさんとミポさんを迎えに行くのについて行くって言ったのは良いけど、マンションの玄関を出た瞬間に後悔しちゃった。

部屋に居ると判らなかったけれど外はもの凄い事になってたの。

電線が唸りを上げてて、雨は横殴りなんて物じゃなくって。

道路沿いの駐車場に置いてあるぱの車の所までに行くのが大変なんだから。

何とか階段を下りて駐車場に行こうとするんだけど、中庭みたいな駐車場と道路の間がちょうどトンネルみたいになっててそこをもの凄い風が吹き抜けてるの。

風は絶えず強く吹いてるわけじゃなくて不規則なリズムで強弱があつて弱くなったと思つて飛び出したら。

突然、強い風が吹いてきて体ごと飛ばされそうになったの、そんな私をパパが小脇に抱えるようにして助手席のドアを開けて放り込むんだよ。

「うひゃ、凄いなこりゃ」

「もう、パパってば私は猫じゃないんだよ」

「飛んで行きたいか？」

「ふう〜 それは嫌だけど」

そんな事を言ってる間にもパパのミニパジェは風で大揺れしてるの。

「大丈夫なのパパ？」

「大丈夫だよ。何度もこの車で台風を経験しているんだから」

そう言っただけでいつも通りに車を出したの。

信じられないでしょ車を運転している時も普段と変ないんだよ。

パパには怖い物が無いのかなあ……

走る車の窓の外ではいろんな物が吹き飛ばされて、街路樹も所々折れて道路を塞いでいるの。

パパの顔を見ると……

うわあ、目がキラキラしてる……

もしかしてワクワクしているの？

「パパ。もしかして凄く楽しくってワクワクしてる？」

「おう！」

満面の笑顔でサムズアップして答えてくれたけど、私は腰が抜けそうだった。

だって目の前に台風が来ただけでワクワクしてる子どもの様な大人がここに居るんだよ。

ユーカさんやミポさんとテルさんが言う事は本当だった、信じられないけど認めざるを得ないよ。

そんな事を考えているとユーカさんとミポさんのアパートが見えてきて、車を停めるといきなりパパが私を抱っこするように膝の上に引っ張り上げたの。

「パパ！ 何をするの？」

「暴れるな、あいつらが車に乗れないだろうが」

すると、アパートの影からユーカさんとミポさんが車に走り込んできたの、ドアを開けてシートを倒して後ろの席に転がり込むように。そっか、こうしないと私が邪魔で乗れないんだ、私が外に……無理

……。

パパのミニパジェは3ドアだったんだって思ったけど恥ずかしいし、いきなり抱きかかえるから私は真っ赤になってパパに噛み付いたの。「美緒は女の子なんだからね！　パパの馬鹿！」

「馬鹿なのは今判った事じゃないだろ」

「もう、馬鹿……」

パパの意地悪、優しい顔で頭を撫でられたら何も言えなくなっちゃうじゃんか。

パパが私を助手席に座らせるとゆっくり車を出した。

「うふふ、チーフはつばを心得てるなあ」

「ユーカさんてば、パパの場合は自然体って言うか天然だよ。だから色々誤解されたり言い寄られたりするんだよ」

すると突然、ミポさんが後ろの席から身を乗り出して運転席と助手席の間から頭を突き出した。

「み、ミポ？」

「頭、撫でれ」

「はいはい」

パパが笑いながらミポさんの頭を優しく撫でると子猫の様に頭を振りながらミポさんは席に戻って安心しきった様な顔をしている。

「うわあ、ミポだけずるい。私も撫でれ！」

「はいはい」

「あがが……」

ユーカさんがミポさんと同じ様に頭を出すとパパが大きな掌を広げて、ボールを掴むようにユーカさんの頭を力を込めて掴んだ。

すると涙目になりながらユーカさんは席に戻って頭を押さえていた。

「うう、またチーフとミポにしか判らないオタ会話なんだから」

「ええ、アニメか何かなの？　ユーカさん」

「多分、そうだと思う」

マンションに戻るとすっかりユーカさんは機嫌を直してパパが買ってきたお菓子を美味しそうに食べていた。

何度も電気が消えそうになったけど停電する事は無かったの。
パパ曰くこの辺りは滅多な事じゃない限り停電しないんだって、それも20年分の経験なんだろうなあ。

パパは独りきりの時も独りで台風や色々な事を経験してきている。そして多分だけど他にも辛い事や大変な事があっても独りつきりで乗り越えて来たんだろうなだって、メールのやり取りを時々するくらいでパパの携帯って殆ど鳴らないんだよ。

パパは実家にも月に一度か二度電話するだけだって言ってたし。

その晩は台風の事なんて忘れちゃうくらい楽しくユーカさんとミボさんの3人でお喋りをしたんだ。

パパは相変わらずネットの人になっていたけどね。

次の日の朝はもの凄い風の音で目が覚めたの。

台風の目には入らなかったけれど中心の直ぐ近くが通り過ぎる所だったんだってパパが教えてくれたの。

窓から見える街は薄暗くってこれが沖縄の台風なんだって思い知らされたの、でもパパはいつもと変わらないで凄く落ち着いているのこれも慣れなのかなあ。

お昼ご飯をパパが作ってくれて皆で食べているとパパがとんでもない事を言い出したの。

「暇だな、ドライブにでも行くか？」

「はあ？ パパ本気で言ってるの？ 本物の嵐が来てるんだよ」

「台風には本物も偽者もあるか台風は台風だよ」

そんな事をパパは笑いながら言うんだよ。

台風の暴風雨の中をドライブ……なんて。

あれ？

私が小さかった頃にママに聞いたことがある。

ちょうど東京に台風が来て停電しちゃって、私がママに抱っこされ

て泣いている時に……

「凄い風だね、うふふ」

「ママ、何が可笑しいの？」

「昔ね、凄い台風に遭った事があるの。でね、今日みたいに停電になっただけ」

「怖かった？」

「全然、怖くなかったの。だって一緒に居てくれた人がドライブに行こうって言うんだよ、可笑しいでしょ」

「それでどうしたの？」

「車に乗って真っ暗な台風の中をドライブしたの、凄く面白かったの。隣で目を輝かせ車を運転している人を見たら、この人は台風でも楽しんじゃうんだって。そうしたら何だか台風が凄く楽しい物に思えてね」

「本当に怖くなかった？」

「うん、この人が隣に居ればどんな事も怖くない気がしたんだよ」

「その人はどこにいるの？」

「南の遠い遠い島に居るよ」

あれはパパの事なんじゃ……

ママはあの時、凄く優しい瞳だったそれじゃ、ママは……パパの事を？

嵐の過ぎ去った後

台風が通り過ぎて、週末に久しぶりにパパと海に来ていた。空も海も凄く澄んで綺麗だったんだ。

「パパ、なんだか海の中が凄く綺麗だったね」

「台風のお陰かな」

「ええ、なんで台風のお陰なの？」

「台風が少ない年は表層の海水の温度が高温になり珊瑚の白化現象が顕著に現れるんだ」

「珊瑚の白化現象？」

「そう、珊瑚が白くなって長引くと死んでしまうんだ高温の為に。」

台風が通過する事で海が荒れ表層の温かくなった海水と深層の冷たい海水を混ぜてくれる、その事により表層の海水温が高温になるのを防いでいるんだよ」

「それじゃ、台風が来ないと困るんだ」

「そうだな、台風は時に甚大な被害をもたらすから来ない方が良いと言う人がいる。でも、台風は自然のバランスを保つ為に必要不可欠なものなんだよ。それに珊瑚が死んでしまうのには他の原因が大きいんだけどね」

それを聞いて私は改めて自然の大切さをパパから教わったの。

開発による赤土の流失が珊瑚を殺している事や地球温暖化の問題。

それに石垣島では下水が殆ど整備されていないので生活排水は海に流れ込んでいる事。

そしてここ数年で開発が進み裏の方や北部でも沢山の住宅が建ち海が汚れてきている事。

それは20年間住み続けているパパだから感じる事が出来るんだと思う。

「島の人やナイチャーに観光客。全ての人が少しでも自然の大切さを考えれば島はいつまでも綺麗であり続けるのにな」

パパの言葉が凄く重くって心をしめつけた。

「私にも出来るかなあ？」

「出来るさ、簡単だよ。ゴミを持ち帰る、それだけで島のビーチは綺麗になる。まあ漂着ゴミは仕方が無いとしてもだ」

「一人一人なんだね」

「そうだ、もうひと潜りしようか？」

「うん！」

今日はパパの仕事姿を見に来ているの。

それは私の一言から始まった事なんだけど……

色んな事が駆け抜けた後で、私は1つだけ気になる事が出来たの。

それは、パパの仕事を見た事が無い事。ルイさんが知っていて私が知らない事。

どうしても見てみたくなって久しぶりに海に来た夜にパパに思い切って言うてみたの。

「パパ、パパがお仕事している所を見てみたいんだけど」

「来れば良いじゃないか」

「へえ？」

覚悟を決めて思い切って聞いたのに美緒は何を変な事を言っているんだみたいな、不思議そうな顔をして答えたんだよ。

「行つて良いの？」

「何を訳の判らない事を言っているんだ？ 来れば良いだろ」

「だって邪魔じゃない？」

「今度、飯でも食べに来たら良いだろ。友達でも誘つて」

「う、うん」

返事はしたもののどうしたら良いのか戸惑ってしまった。

瑞穂さんトコの『マッドティーパーティー』に遊びに行くのとは違うんだよ『ニライ・カナイ』はカフェ&レストランで……

そんな事を考えていると顔を上げると目の前にパパの顔があった。

「うわぁ！」

「そんなに驚く事は無いだろ。難しそうな顔をしてるからじっくり見てやるうと」

「パパの馬鹿！ 美緒はまだ中学生なんだよ、レストランなんかに行けるわけ無いじゃんか」

そこでパパが何かに気付いたみたいな顔をしたの。でね。

「そうだな、それじゃ美緒の友達3人に予定を聞いてくれ。週末に予約を入れておいてやるから食事しに来なさい」

「え、判った」

泉美と朋ちゃんになっちゃんに次の日に聞いてみたら、しばらく固まった後で大喜びしてたの。

それで、週末の日曜日の6時にパパが予約を入れてくれてタクシーで『ニライ・カナイ』に向ったの。

もちろんタクシー代もパパ持ちだよ。

「この格好変じやないかな」

「大丈夫だよ、パパは畏まらないで普段着で来なさいって言ってたもん」

泉美が着慣れないワンピースを指で抓んで少し困った様な顔をしている。

「イズは気にしすぎだよ」

「朋は良いよね、普段からオシャレだもんね」

「普段着だよ、これが」

朋ちゃんの言うとおり私のバースデーパーティーの時と同じ様な服装を朋ちゃんはしているの。

「ナツはどうしたの？」

「なっちゃんは既に乙女の世界みたい」

眼鏡っ子のなっちゃんもあまり見たことの無いワンピース姿で、外の景色をぼんやりと眺めてる。

私の格好はいつもの501にTシャツを着て……

内緒でパパのシャツを借りてきちゃった。だって少し小さいからってあまり着ないんだよ。

半袖のシャツで葉っぱがいっぱいプリントされていて凄く可愛いの色も派手でなく薄い黄緑や黄色で良い感じなのに、可哀想でしょ。

『ニライ・カナイ』の入り口で深呼吸をしてレッツゴー！

「いらつしやいませ、ご予約の大羽様ですね。こちらへどうぞ」

「は、はい」

野崎さんが変な言い方かも知れないけれど真面目な笑顔で席まで案内してくれたの。

なんだか凄く緊張しちゃった。

案内された窓際の席に着くと直ぐにミポさんがお水を持って来てくれて、その後にユーカさんが飲み物のオーダーを取りに来ただけど……

「いらつしやいませ、お料理の方は承っております。お飲み物の方はいかがなさいますしょう？」

「ゆ、ユーカさん、今日はどうしたの？　なんだか緊張しちゃうよ」

「うふふ、あのね。チーフがいつも通りに対応しなさいって、中学生でも大人でも関係なくお客様なのだからって。それに美緒ちゃんはいいつも通りの仕事中のチーフが見たいんでしょ」

「うん！」

ユーカさんに言われて改めて気付いたの。

パパは私を中学生の美緒としてではなく1人の美緒として見てくれている事に。

そして普段から美緒の年齢を意識していないから私が中学生なんだって言った時に気付いたんだと思う。

「今日のお料理はイタリアンの簡単なコースになっていて、アンティパスト、プリモ・ピアット、セコンド・ピアット、ドルチェになってて」

「メイン料理は何になっているの？」

「今日はコンビネーションプラだから」

「コンビネーションプラ？」

「コンビネーションプレートの略でお肉とお魚みたいに2種類の料

理が楽しめるんだよ」

聞きなれない言葉と緊張で何を頼んで良いのか判らずに、飲み物も頼まずに4人とも静かになってしまった。

私自信もどうやってこの緊張を解いて良いのか判らずに押し黙ってしまったの。

「いらつしやいませ、ご気分はいかがかな？」

「ぱ、パパ！」

声を掛けられて顔を上げると優しいいつもの笑顔でパパが立っていたの。

でね、赤いジュースを持って来てくれたんだよ。

「今日は美緒がホストなんだぞ、ホストがそんなに緊張してどうするんだ？」

「ホスト？」

「泉美ちゃんに菜月ちゃんと朋美ちゃんを招待したんだろ、彼女達は招待されたゲストで美緒が招待したホストだよ。ジュースでも飲んでいつもの美緒に戻りなさい」

そう言われて、少し背の高い足つきのグラスに入っている赤いジュースに口をつけたの。

「美味しい、これオレンジジュースだ」

「これってブラッドオレンジですか？」

「朋美ちゃんは凄いね。正解だよ、ストレート果汁100パーセントの有機ブラッドオレンジのジュースだよ」

「うわあ、凄い。濃縮還元じゃないんですね」

「うちではできるだけフレッシュな物をお客様に提供したいからね。料理をお出してよろしいかな？」

「うん、じゃない。はい、お願いします」

パパが美緒の頭をクシュって撫でてからキッチンに向かって何かを合図しているの。

すると直ぐにテルさんがチンって呼び鈴をならすとそれにあわせてユーカさんやミポさんが動き出すんだよ。

「本当に美味しいね、美緒」

「そうそう、初めて飲んだよ。こんな美味しいジュース」

「美緒のパパって凄いね、このジュースだけで皆の緊張を解いちゃったね」

知らない間に皆が笑顔になっていた。

パパは相変わらずレストランの中をゆっくりだけどの確に動いている。

そして料理を運んで来てくれたの。

「アンティパスト、前菜になります。今日は島タコのカルパチヨになります」

前菜もその後のパスタも凄く美味しいの。

判りやすく簡単な説明もしてくれるんだよ、プリモ・ピアットは第一のお皿って言う意味でフランス料理で言うスープになるんだって。

メインのセコンド・ピアットはイベリコ豚のステーキと軟骨ソーキのカツレツ風でね有機野菜を使ったサラダも一緒に出てきて凄く美味しそうなんだよ。

「ん！ 美味しい。このカツレツのソース」

「本当だ」

さすが朋ちゃんは大人数を感じだった。

なっちゃんも相変わらず殆ど喋らずに乙女の世界まい進中だった。

パパに何のソースか聞いたらバルサミコって言うイタリアのお酢を使ったソースなんだって、カツレツなのにサッパリ食べられて軟骨ソーキが凄く柔らかいの。

前菜もパスタもメイン料理もそんなに多く感じないのに凄く満足感があるの。

店内の黒板には本日のお勧めが書いてあるんだけど沖縄の食材が沢山使われていて、基本はイタリアンなんだけど沖縄料理もあるんだよ、少しイタリアンにアレンジされているけど。

食後のドルチェは4人とも違う物が運ばれてきたんだ。

ティラミスにパンナコッタやカタラーナ、それにズツパ・インクレーゼ。ティラミスは定番中の定番だね、パンナコッタも知らない人はいないと思うな。

カタラーナはクリームブリュレの原型と言われてて見た目はクリームブリュレんだけどプリンアイスって感じで、凄く美味しいんだよ。

ズツパインクレーゼはスポンジにたっぷりシロップがしみこんでてふわふわのメレンゲやカスタードクリームがたっぷり使われたケーキなの。

なんだか料理に夢中になっているみたいけどちゃんとパパの仕事ぶりも見てるんだよ。

見てると言うか見せられているって感じがな、私達のテーブルには必ずパパが料理を運んで来てくれるし。

私達が食べている時はキッチンに入ってテルさんのヘルプをしているのが見えるの。

少ししたらレストランの中が落ち着いてきて、デザートを食べているとパパがユーカさんに呼ばれているの。

なんだかカクテルの注文に入ったみたい。

パパは色んなお酒が置いてあるワゴンの所に行ってカクテルを作り始めたの。

私が気付くと泉美もなっちゃんも朋ちゃんもパパの姿に釘付けになってるんだよ。

スタンドカラーの真っ白なシャツに黒いズボンに黒いサロンを巻いて、髪の毛を後ろに綺麗に流して少し緊張した顔つきで。

パパがシェーカーにお酒を手際よく注いでから氷を入れてからシェーカーを振りだしたの。

キン、キン、キン、キンって凄く澄んだ金属音に近い音がして、シェーカーとグラスをトレイに乗せてお客の席に行きグラスに綺麗なカクテルを注いでるの。

「格好良い！」

「ふわぁ〜！」

「素敵！」

泉美・なっちゃん・朋ちゃんまで声を上げて乙女の顔になってるんだよ。

実は私も見蕩れちゃったんだけど、だってあんな真面目で格好良いパパを見たことなかったんだもん。

それにカクテルを頼んだ女のお客さんもカクテルじゃなくてパパの顔を見てるんだよ。

「美緒のパパって凄いね」

「そうそう、出来る男って感じかな」

「王子さまみたい……」

「そうかな、いつもはだらしないからなあ」

「ああ、美緒。照れてるでしょ」

「そ、そんな事ないよ」

実は泉美に言われたことが図星だったの、なんだか嬉しい様な恥ずかしい様な感じがしたんだもん。

パパが褒められると私まで褒められている気がする。

「ルイさんが本気になる訳だ」

「うっ、それは言わないで」

「そうだよ、嵐の過ぎ去った後だもんね」

「うん！」

台風が海や空を綺麗にしてくれるように、心の嵐が過ぎた後には綺麗な気持ちがいっぱいなんだもん。

SS・嵐はいずこ

石垣島も暑さがだいぶ和らいでパパに言わせると短い秋なんだってでも、私に言わせればまだまだ暑いんだよ。

夜と朝方はだいぶ涼しくなってきたとは思っただけど、太陽はまだまだ元氣100倍って感じなんだもん。

そんな週末に私はユーカさんとミポさんのアパートの泊りがけで遊びに来ているの。

ユーカさんとミポさんのアパートは2DKで一部屋ずつ使っているんだけど部屋の真ん中にある襖を挟むようにベッドが置いてあるの。何でも、寝る時は襖を開けてお喋りしながら寝るんだって。でね、2人の部屋は両極端って言うか……

ユーカさんの部屋はシンプル・イズ・ベストって感じで凄くすっきりしていてユーカさんの人となりを表しているんだけど、ミポさんの部屋は……

壁一面に本棚があって綺麗にコミックやライトノベルやDVDが……まさしく壮観って感じで、後はパソコンデスクがおいてあって綺麗なだけ。

所々にフィギュアが置かれてて。

これで部屋が汚ければ確実にネルシャツを着てケミカルウォッシュのジーンズにシャッインした眼鏡を掛けた小太りの男の人が現れそうなの……なんて失礼だよな。

「ミポはアニオタだからね」

「ユーカさん、身も蓋もない事を」

「だって、しょうがないじゃん。事実なんだもん」

そんな事を言われてもミポさんはどこ吹く風だった。

でも、夏休みに西表で聞いた話とは少しかけ離れているような気がするんだけど。

「良いんだよ、チーフだってカミングアウトしているし。私だって隠すきなんて毛頭無いから」

「えっ、まさかと思うけど……」

「そのまさかなの、美緒ちゃん」

パパ、あなたはいつたい何て事をしたんですか？

この物静かで可愛らしい女の子を悪の道に引きずり込んでアニオタ＆秋葉系にしてしまったとは……

信じられない……

「本当にミポは人の影響を受けやすいよね」

「でも、今は自分で歩いて行けるよ。暗い所と雷は怖いけど」

「まあ、チーフのお陰でミポは日の当たる所に出てこられたんだもんね」

「それって……」

「実はあれからしばらくしてミポの元彼は傷害事件を起こして問題になったの。1歩間違ったらミポだったのかもしれないしね」

「もう平気だよ、ちゃんと人を見る目を養っているからね」

ミポさんの言葉に胸を撫で下ろしたの、パパの影響ばかりじゃなくてちゃんと自分の目を信じているんだよね。

凄いと思う2人とも大人なんだ。

「チーフ教の教祖のくせに」

「良いじゃん、私の勝手でしょ」

それを聞いた瞬間、ユーカさんが出してくれたジュースを吹き出しそうになった。

「げほ、げほ、げほ、苦しい……」

「大丈夫？ 美緒ちゃん。ユーカが変な事を言うからだよ。チーフは私にとって憧れの人なの」

「まあ、仕方が無いって言えば仕方が無いよね。ミポにとっては白馬に乗った王子様みたいなもんだもんね」

「いつかチーフみたいな素敵な人を探すから良いでしょ。ユーカなんてこの間、彼氏に振られたばかりのクセして」

「あうつ、それは言わないで約束でしょ」

「変な事ばかりユーカが言うからでしょ」

2人のやり取りを見ていて私は笑い出しちゃったの。

だって凄く仲が良いのが判るんだもん言いたい事を言い合ってるんだよ、本当に信頼し合ってる証拠だもんね。

「ああ、美緒ちゃんに笑われた」

「ユーカの所為じゃん」

「本当に仲が良いんだね」

「まあね、大親友だし」

「そうだね」

それからいっぱい色々な話をしたんだよ。

でも一番気になるのはミポさんがアニメやコミックに嵌った理由かな。

聞いてみて少し驚いちゃった。

「西表ではこの話はしなかったんだけど。実はミポはしばらくチーフと一緒に暮らしてたの」

「ええ！ パパと一緒に……」

「やっぱり、驚くよね。だから話せなかったの。要らぬ誤解を避けたかったから」

ユーカさんとミポさんが一緒にアパートで暮らし始めるまでの2ヶ月くらいパパと一緒にだったんだって。

急なことでアパートを引き払うにも荷物を運び出す所が無くて、仕方なく身の回りの物だけを持ち出してパパがマンションに連れてきたんだって。

それでしばらく相手の出方を伺う為に仕事も休んで、パパのマンションから一步も外に出ないで居たんだって。

私がもしミポさんの立場だったら怖くて外なんて歩けないと思った。

「で、チーフの家にあるコミックやライトノベルを読んで、パソコンでアニメを見続けたらオタクの出来上がりって訳」

「でも、それだけじゃオタクにはならないんじゃない？」

「チーフだって、冬場にするのが無くて嵌ったって言ってたからね。それに元々ミポは夢見る少女だからじゃないのかな」

「良いでしょ、ちゃんと現実も見えます。だからチーフ見たいな人を探すって言うてるでしょ」

「ええ、それってパパじゃ駄目って事なの？」

「違うよ、チーフには心に決めた人がきつと居るんだよ」

2人が話してくれたんだけど私が石垣島に来る前から、時々寂しそうな哀しそうな目で海を見ている時があるって。

それは私も薄々感じていた事だったから驚いちゃったんだ。

「私は元々ワンルームに住んでいたんだけど狭くって引越を考えていたの。でね、チーフにミポと一緒に住んだらどうだって言われてチーフに保障人になってもらってこのアパートでミポと一緒に暮らし始めたんだ」

「最初は喧嘩ばかりしてたけどね、でも喧嘩と仲直りを繰り返しながら2人はお互いの事を知ってより仲良くなったんだよね」

「そうだね」

それから、ミポさんの部屋で色々な事を教えてもらったの。

もちろんユーカさんも一緒にね、ちょこつとだけユーカさんは嫌がってたけど。

だって私の知らないパパの事を知るチャンスじゃんね。

特にミポさんはパパの影響を凄く受けてるし、それにパパがどんなアニメなんかを見ていたか知りたいしね。

でも、意外とパパが見ていたアニメって普通だったよ。

もつと凄いの見てたのかと思ったらミポさんに怒られちゃった。

「チーフはそんなオタク塗れの人じゃありません！」

って、ミポさんが真面目に怒ってる顔を始めてみたかも。

それくらいパパの事を思ってるし知ってるって事だよ。

でも、最近は凄いなだね『初音ミク』ってソフトは歌を作って歌わすことができるんだよ。

そんで凄いのはCDまで発売されてるんだよ、それもベストアルバムだよ。

しばらく、頭から抜けなかったんだよ……

「ミツク、ミツクにしてやんよ」

「ミツク、ミツクにしてあげる」

カルチャーショックだったなあ、おそるべしだね。

アニソンもいっぱい聞かせてもらえたし、パパが見ていたアニメも中々面白かったな。

今度、お家で見せてもらおうと。

なんで隠して

石垣島にミーニシ（新北風）が吹きはじめ、サシバが南へ向う経由地として沢山やって来て。

そして再び旅立ち南へ渡っていく。

石垣島に短い秋が訪れ日中もだいぶ涼しくなり朝夕は……

「パパ！ 海に行こう！」

「はあ？ もう10月だぞ」

「ええ、まだ10月だよ。それにこんなに暖かいじゃん」

「いや、水はもう冷たいからな」

「ああ、嫌なだけでしょ。美緒と出掛けるのが面倒になったんでしょ」

美緒が俺の顔を恨めしそうに見上げている。

面倒な訳じゃなく10月になったら泳ぎに行かないだけなのだが、美緒には今の気候で泳ぎに行かないのが納得できないらしい。

石垣島に来た当時は10月だろうが正月だろうが晴れて気温が上がれば泳ぎに行っていた。

しかし、数年経つと体が石垣島の気候に馴染んできて水が冷たく感じる様になるのだ。

それに、言いたくはないが40も当に過ぎてるしな。

「美緒と出掛けるのが嫌な訳ないだろうが、長らく住んでいると体が島人になるんだよ」

「嘘だあ、そんな話は信じられないもん」

「強い日差しから肌を守る為に毛が濃くなってきたぞ」

「パパのどこが毛深いのさあ、20年も住んでるくせに」

「この辺かな、それでも濃くなったんだ」

「嘘つき、ツルツルのクセに美緒のほうが毛、毛深いって、パパの馬鹿！ 何を女の子に言わせるのよ！」

手の甲を抓んで美緒に見せるが、独りノリツツコミをして真っ赤に

なりながら疑いの眼で俺を睨んでいる。

仕方なく代替案を考えてるが殆どとは言えないが島の中で遊べる所には連れて行った筈だった。

「なあ、海じゃなく他に行きたい所か行って見たい所は無いか？」

「うーん、海以外なんて石垣じゃ遊ぶトコなんて無いじゃん、あつ！」

眉間にしわを寄せ、目を見開き、そして目を細めて笑って俺の顔を見ている。

それは、真帆が何か好からぬ事を思いついた時の顔そのものだった。

「それじゃ、美味しい……」

「ママが働いていた所を見てみたい！」

先手必勝と食い物で釣ろうとしたが美緒が満面の笑顔で放った言葉に見事に打ち碎かれた。

そんな訳で美緒を連れてマンションから車で15分も掛からない名蔵湾沿いにあるヴィラフサキリゾートに来ていた。街の西側を抜けて海岸線沿いに車を走らせていると珊瑚の石積みの上に白壁と沖縄独特の赤瓦を使った塀が見えてくる。

塀に沿って竜舌蘭が綺麗に植栽されていて少し大きな赤瓦の建物が見えてきた。

ホテルの前にある駐車場に車を停めてとりあえず少し大きな赤瓦の建物の中に入りロビーに向う。

近頃は宿泊客以外に対する不審者対策がどこのホテルでも強化されている、それは昔もあつたが今ほど煩くなかったのが実情だ。

無駄なトラブルを避けるためにフロントに向かい知り合いを呼び出してもらう事にした。

「こんにちは。私、岡谷と申しますが。料飲課の渡部 わたへまこと 良さんはいらっしゃいますか？」

「こんにちは、渡部ですね。しばらくお待ちください」

笑顔でフロントスタッフに聞くと快く確認の電話を入れてくれてい

た。

「大変申し訳御座いせん、渡部は本日14時からの出勤になっていますが」

「そうですか、ホテル内で待たせてもらって良いですか？ 渡部が出勤しましたらココに連絡をもらえると有り難いのですが」

腕時計で時間を確認するとお昼前で渡部の出勤時間までには時間がある。

フロントのスタッフに『ニライ・カナイ』の名刺を渡した、個人的な名刺も持つてはいたが職場の名刺の方が身元がはっきりすると思いい職場の名刺を選んだのだ。

スタッフは名刺を受け取り一度こちらを伺ってから笑顔で了承してくれた。

これで一先ず館内をブラブラしていても安心な筈だ。

フロントの奥にレストランがありそのレストランが当時のメインダイニングだった。

「このレストランがそうなの？」

「そうだよ、昔はセリーナと言う名前のレストランだったけどな」

「なあ、パパ。ワタベマコトって男の人なのか？」

「あんな、渡部は真正正銘の男だ。俺の周りは女ばかりだと思っっているだろう」

「うん、だってその通りじゃん」

流石に言い返せなかった、『ニライ・カナイ』のテルが男扱いされていないのが不憫に思ったが今はどうでも良い事だと思いビーチに向かう為に歩き出した。

ロビーを抜けて左右にある自動ドアの左側の方から外に出るとコンビニや屋台居酒屋が見える。

海の方角に歩き始めると海に向う遊歩道があった。

右手に見えるバーベキュー会場へとは向わず、ビーチに向うと目の前が開けて海に突き出ている栈橋が見えてくると美緒が駆け出した。
「うわあ、綺麗だね」

「昔はこの栈橋の上がバーベキュー会場だったんだぞ」

「凄い！ 凄い！」

美緒がはしゃぎ回る度にアイスブルーのチュニックワンピースがヒラヒラと風に揺れていた。

「転ぶなよ」

「そんな子どもじゃないもん！」

栈橋の先端にある一本傘の日除けの下まで走り手すりから身を乗り出して海を見ている。

嬉しそうに目を細めて俺に微笑み返してくれるその姿は、あの頃の真帆を見ているようだった。

「似過ぎなくらい似ているな……」

「何が似ているの？」

「なんでもないよ」

「綺麗な海だね」

「でも、名蔵湾だからな」

「もう、何で素直に綺麗だなんて言えないかな」

「それじゃ、東京に居て高層ビルを高い凄いのと思うか？ それと同じだよ」

「そっか、いつも側にあるとそれが普通に思えちゃうんだ」

「人も景色もな」

「今日のパパは少し変なんだ」

美緒の言うとおりと言うよりも美緒とフサキに居るからだとは言えなかった。

それは口から出してしまったら夢から覚めてしまいそうで、もう少しだけ夢を見て居たいという自分の願望だった。

ビーチを少しだけ歩いて、屋外プールとBBQテラス夏至南風カーチバイの間にあるプールサイドバーに向った。

バーは上から見るとカウンターが八角形になっていて真ん中に柱があり横から見ると傘を差したような形になっている

「パパ、早く早く。喉が渴いたよ」

「そんなに急がなくても逃げやしないよ」

美緒が木で作られたベンチに腰を掛けて足をブラブラさせながら、カウンターに肘を付いてバーやその向こうに見えるBBQテラスを眺めていた。

美緒は未成年で俺は運転があるのでアルコールは飲めないのだが、2人ともジュースを飲めば良ものをノンアルコールカクテルを頼んで飲んでいた。

「雰囲気なの雰囲気、せっかく生まれて初めてバーに来たんだから」

「そうなのか？」

「そう言うもんでしょ」

バーのスタッフの女の子と他愛の無い会話をしているとバーの電話が鳴りスタッフの女の子が対応している。

そして俺と美緒の方を伺うように見て声を掛けてきた。

「あの失礼ですが、岡谷様ですか？」

「ええ、そうですけど」

「渡部係長が出勤したとの事ですが」

「そうですか、それじゃ『ゆんたく』の前でと伝えてもらえますか？」

「はい、畏まりました」

恐らくホテル内で時間を潰せる場所と言えばプールサイドバーくらいだと思いここに電話してきたのだろう。

会計を済ませてBBQテラスを通り抜けて『ゆんたく』に向った。

「パパ、凄くオシャレで可愛いバーだったね。あんなバーを誰が考えるんだろうね」

「美緒の隣を歩いてるだろ」

「ええ！　パパが考えたの？」

「考えて、大まかな設計図を書いて作ってもらって立ち上げたのは俺だぞ」

「なんで隠してたの？」

「別に言うほどのもんじゃないだろ。それにあそこでそんな話をしたら自慢しているみたいで嫌だろ」

「ええ？ 自慢できる事じゃない」

「いいや、木っ端恥ずかしい」

『ゆんたく』に近づくと入り口の前で黒っぱいアロハに黒いスラックスに革靴姿のヒョロっとしているが精悍そうな男性スタッフが笑顔で立っていた。

「久しぶり、渡部。なんだか呼び出して悪いな」

「いいえ、こちらこそ。珍しいですね、岡谷さんがフサキに来るなんてって？」

「どうした渡部？ 鳩が豆鉄砲食らってるぞ」

渡部が美緒の顔を見て思わず息を吞んで美緒の顔に釘付けになっている、美緒はそんな渡部に驚いて俺の背に隠れるようにしてシャツの裾を掴んでいる。

「お、岡谷さん、その子って……まさか……」

「ああ、あいつの娘だよ。ちょっと事情があって俺が預かってるんだ」

「大羽の娘さん？ 滅茶苦茶似てますね」

「瓜二つだろ。美緒、挨拶ぐらい自分でしろよ」

「うん。はじめまして大羽美緒です、パパ、この人が渡部さん？」

「パパあ？ お、岡谷さん預かってるって」

渡部が久しぶりに会ったのに二度目の鳩豆になっている。

「事情があってって言っただろう、深くは聞かないでくれ長くなるから」

「相変わらず、無茶苦茶ですね岡谷さんは」

「マコちゃんには言われたくないよ」

「マコちゃんは勘弁してくださいよ」

お互い笑いあって少しだけ渡部に案内を頼んだ、案内と言っても昔

のセリーナの店内を見せてもらっただけなのだが。

店内は完全にリニューアルされて昔の面影は殆ど残っていないかった。昔は入り口の直ぐ横にキャッシュヤーがありその後ろにドリンクカウンターがあつて、そこで真帆にドリンク出しの仕事を教えていた事を美緒に教えてると美緒は始終キョロキョロとしてフンフンと納得顔をしていた。

「岡谷さん、これからどうするんですか？」

「そうだな、たまにはフサキで飯でも食うか、美緒何が食べたい？」

「BBQかそれとも寿司にするか？」

「お寿司！」

お寿司の言葉を聞いて美緒が大喜びで飛び上がった。

そう言えば俺自身がナマモノが駄目なので居酒屋に行った時くらいしか美緒に刺身や寿司を食べさせてやれなかった事に気づいた。

まあ、それに対して美緒は何も言わなかったが居酒屋に行くと必ずオーダーしていたので好物の1つなんだろう。

「ゆんたくのカウンターを2人で予約頼めるかな。久しぶりに力二さんにも会いたいしな」

「当然会って行かないと怒られますよ、岡谷さん。カウンター予約しておきますね18時で良いですか？」

「そうだな、頼むよ。後からな」

「はい」

仕事のある渡部をあまり連れまわす訳に行かず予約だけを頼んで、ホテルの中を美緒とブラブラする。

「赤瓦のコテージタイプの部屋なんだね」

「そうだな、ここが人気なのはそんな所にあるのかもな」

「可愛らしいし、石垣島で泊るならこんなホテルが良いな」

「さあて、未だ時間が有るけどどうするかな」

美緒の顔を見ながら言うときらきらと輝く瞳で俺を見上げている。

こんな時、真帆ならもっと色んな楽しい事をしたい・知りたいっていう瞳だった。

「真帆が住んでいた所でも見に行くか？」

「本当に？　行く！　早く行こう！」

「そんなに急かすなよ、逃げやしないよ」

「パパ、早く！　早く！」

美緒が俺の腕を掴んで走り出す。

その顔は……胸の中で何かが動いた。

ホテルから市内に戻る。

緑の芝生が広がる児童公園と真喜良小学校の間を抜けて、真喜良団地と新川団地の前を通り過ぎると右手に小さな商店だが大抵の島の人が知っている唐真商店の脇の路地に車を進めると右手に水色のアパートが見えた。

「あそこがフサキの寮だったんだよ、今はどうか知らないけどな」

「パパも最初はおそこに居たの？」

「そうだ、8ヶ月くらいかな」

「それじゃ、ママも？」

「真帆は寮が嫌だと言って友達とルームシェアをしてアパートに居たんだよ」

「そのアパートはどこにあるの？」

「この近くだよ」

車を突き当たりの防波堤の横に停めて、車から降りて防波堤の上に飛び乗った。

「待つてよ、美緒も」

「ほら」

「うん」

手を差し出し美緒の手を掴んで一気に防波堤の上まで引き上げて、防波堤の上を街の方向に歩き出した。

「パパ、どこに行くの？」

「真帆が住んでいたアパートを見たいんだろ」

「う、うん」

少しだけ歩いて平屋建てのコンクリート家の上から見える、奥の一軒のアパートの2階の窓を指差した。

今も誰かが暮らしているのだろう窓は閉められていたがカーテンが掛けられているのが見て取れた。

「あそこの2階の窓が見える部屋がそうだよ」

「うわぁ、窓から海が見えるアパートにママは住んでいたんだ」

「そう、友達とね」

「ふうん」

美緒は感心しきりだった。

「なぁ、パパ。ママとこの辺で遊んだりしたの？」

「さぁ、どうだったかな。海に行く時に迎えには行っただけだな。この辺のビーチでは寮の奴等と良く遊んだぞ。花火をしたりお喋りしたり」

「ゆんたくしてたんだ」

「相談を持ち掛けられたりもしたかな」

思わぬところで思い出の蓋を開けてしまった。

カシャカシャとスライド映写機の画像が変わるように思い出が次から次へと止め処なく溢れ出した。

時間を潰す為に近くのココで飲み物を買って、新川漁港に向かい防波堤から美緒と2人で海を眺めている。

新川漁港も埋め立てられて綺麗に整備されている。

フサキもリニューアルして外観以外は殆ど変わってしまった。

島が変わっていくように俺自身も歳を重ねて娘かも知れない美緒と2人で海を見ている。

もう、あの頃には戻れない事は判りきっている。

それでもどこかに変わらないでいて欲しいと思う願いと変わらない想いが俺の中にあり心を締め付けた。

「パパ、そろそろ行こう」

「そうだな、そんな時間かな」

美緒は何かを感じたのか少し早い俺の顔を見ながら声を掛けてき

た。

フサキに戻るとホテルの中の雰囲気と言うか空気が変わっていた。ロビーに入るなり視線を感じ、フロントバックから見知った顔が覗いている。

軽く会釈をして挨拶をすると笑いながら指を差されてしまった。

『ゆんたく』ではカニさんが今か今かと首を長くして待っていたらしい……

「お久しぶりです、カニさん」

「あいあい、来たさー。デージ チュラサン！ ハツシエ 大羽そつくりねえ」

「カニさん、美緒が怖がってますから」

少し小太りで板前姿のカニさんが昔から変わらない優しい瞳で目を細めながら笑っている。

「パパ、この人がカニさんなの？」

「苗字は宮城さんだよ。力と言う漢字に漢数字の二と書いて『かつじ』と読むんだ。だから」

「カニさんだ！」

「美緒ちゃんは何が好きなのかな？」

「お寿司！」

「まだまだ、美緒は子どもだな」

「ぶうーパパ酷いよ……そ、そうだよねここホテルだもんね。ちょっとはしたないかな」

カニさんに聞かれた美緒が子どもの様に片手を高々と上げて顔をクシャクシャにして答え。

自分で気付いて赤くなって小さくなっていた。

「ふふふ、気にするな。まだ他のお客さんは居ないから」

「恥ずかしいよ」

「岡谷、今日は良い鮪が入ってるぞ」

「こいつが食べたい物を食べたいだけ食わせてやってください」

「相変わらずだな、岡谷は」

「石垣にいる間は俺の娘ですからね、当然でしょ」

「さあ、美緒ちゃん。何から食べる？」

「鮪も食べたいし、石垣牛のおすしも食べたなあ」

「よし、じゃんじゃん握るからね」

「うん！」

カニさんが場の空気を変えてくれて美緒は直ぐにご機嫌になって色々注文し始めた。

鮪や近海魚の刺身、鮪の握り&石垣牛の握り、シャコガイや島の海や山の食材のオンパレードだ。

カニさんが美緒の前に料理を置くと片っ端から平らげていく、このちっこい体の何処に入っていくのだろう。

そんな事を考えながらノンアルコールビールを飲みながら特注のチヤンプルーを摘んでいると渡部が声を掛けながらチケットを2枚差し出してきた。

「岡谷さん。美緒ちゃんとは是非これに来て下さいよ」

「なあ、渡部。お前、目が笑っているぞ。何を企んでいるんだ？」

「玉ちゃん達も会いたいと思うんですよね」

「あいな、それはどっちにだ？」

「もちろん2人ですよ、2人」

そのチケットはこの時期に毎年行われている八重山で行われる泡盛カクテルのコンペティションのチケットだった。

美緒がチケットを覗き込んで嬉しそうに声を上げた。

「行きたい！　じゃない行く！」

「決まりですね、お待ちしています」

「はあ、仕方が無いか……」

何を隠れているかなあ

10月の最後の週末、渋々出掛ける為に着替えをしようとしていた。事の発端は……

俺が海に行くのを嫌がり……

フサキへ、そして渡部からこの2枚のチケットをか。

とどのつまり俺が元か……

溜息を付きながら何を着ようか考えを巡らせていた。

渡部の不敵な笑いは何かを企んでいる、そして玉の名を出すと言う事は玉も絡めると言う事を暗示していた。

あいつ等は一体何を企んでいるんだ？

そして、ここにも好からぬ事を企んでいる奴が1人。

襖の隙間から俺の部屋と言うより俺が何を着るのか伺っている。

こいつの考えは至極簡単に判ってしまう。

俺と同じ格好、つまりペアルックに近い服を着て出掛けようと企んでいるに違いが無かった。

ここは先手必勝と行かせてもらう事にした。

501を穿いて靴下をつけて、いつもの革ポーチをベルトにぶら下げる。

そして徐にTシャツを脱いで襖に近づくとコソコソと部屋に戻る音がする。

居間の押入れのブラインドを上げてタンクトップとロンTを取り出して、部屋に戻り小物を持って風呂場に籠って美緒に声を掛けた。

「準備は出来たか？ 行くぞー！」

「うわあ、ちよ、ちよつと待って、ずるいよ」

「何がずるいんだ？」

「なんでもない。今、着替えるから」

準備を整えて風呂場のドアを開けると美緒が部屋から飛び出してきた。

501を穿いてグレーのロンTの上に生成りの見た感じはコットンリネンの半袖シャツに見えるワンピースを着ている。

恐らく501の腰には俺と同じ革ポーチをぶら下げているんだろう。そして人の顔を怪訝そうに見ている美緒の顔に近づけると少し赤くなつて後ろに仰け反つた。

「どうしたんだ？ 美緒」

「な、何でもないよ」

「行くぞ」

「うん、パパはズルい」

「何か言つたか？」

「別に」

俺の格好は501に皮ポーチ、タンクトップの上にグレーのハイネツクのロンTを着ている。

ロンTが少し厚手なのでこの時期にちょうど良いと思つてのチョイスだった。

そしてロンTの上に蝶のシルエットが切り抜かれているサージカルステンレスの四角いプレートに、yururuさんの碧いグラスをつけた革のチョーカーをしていた。

「何で今日は髪の毛セットしているの？ それに眼鏡までして」

「気分かな」

「やつぱりズルい」

ちよつとやり過ぎたかな美緒がそれっきり何も言わなくなつてしまった。

美緒としてはお揃いで出掛けたかったのだろうが今日は場所が場所だけにそれだけは避けたかった。

車で会場に向かう八重山カクテルコンペティションは大抵ここホテル日航八重山のバンケットホールで行われている。

開場時間より少し早めにホテルに到着してしまった。

まあ、マンションから車で数分で着く距離なので先手必勝で出てし

まったのが要因なのだろう。

フロントロビーに入りフロントの手前の通路を左手に進むと直ぐに案内看板が立てられていた。

八重山の間に近づくともバンケットホールの壁際にボードが設置されて写真が沢山……

「うわぁ、パパ見て。今までの参加者の写真だつて。それに奥には歴代の受賞者の写真と名前が出てるみたいだよって、パパ？」

思わずボードの陰に身を寄せてしまった。

あいつ等の企みはこれだったのか？

それともまだ何か。そんな事を考えていると後ろから聞き覚えのある声がした。

「何を隠れてるかなあ、この人は？ そんなデッカイのが隠れる訳ないでしょ。見えてるって」

「玉、久しぶりだな」

「ういゝす」

腰の辺りで手を振る相変わらずの挨拶で。

紺色のスーツを着て髪の毛をオールバックにした玉がにやけた笑顔で小さく手を振っていた。

「で、岡谷さん。噂の娘さんはどこ？」

「娘なんてここに居ないぞ、秋香達は」

「違うでしょ、そっちじゃなくて渡部さんが言ってた美緒ちゃんは何処？」

「美緒！ 呼んでるぞ」

「はい！」

美緒が俺に呼ばれて嬉しそうに栗毛色のウェーブの掛かった髪を靡かせて、ワンピースを揺らしながら駆け寄ってきて小首を傾げて俺の顔と玉の顔を見ていた。

「はぁ？ この子が美緒ちゃん？ 有り得ない！ こんな可愛らしい子が岡谷さんの娘なんて絶対に有り得ないでしょ」

「酷いよ……私はパパの子どもなのに……うええええん」

俺が目配せすると美緒が突然しゃがみ込んで泣き始めた。

「玉、お前は酷いな。人の娘が泣くような事を言うか？」

「ええ、俺なの？ まさかやあ」

「ああ、玉さんが女の子を泣かせてる」

俺と美緒の後ろから渡部良ことマコちゃんの声がする、美緒が更に声を上げて泣き始める。

「マコちゃんさん、この人が意地悪な事言うよ」

「玉さん、酷いな本当に」

「ゴメン、本当にゴメンね」

周りで準備や設営しているスタッフの視線が集まり始め、玉が慌てて美緒に頭を下げた。

渡部も感づいているし頃合だなと思い美緒に声を掛ける。

「美緒、タマゴに自己紹介」

「はい、大羽美緒。15歳です」

美緒が満面の笑顔で手を上げながら玉に自己紹介をすると玉の体から力が抜けてうな垂れた。

「ああ、もう。あんたはこの人の娘に決定！ ユクサーやあ、何処までそっくりかな、もう」

「パパ、この人は誰？」

「こいつは玉置タマゴって言うて」

「こらこら、そこのおっさん。タマゴは名前じゃないから。正憲ってちゃんとした名前があるから」

「それじゃ、玉置正憲さんは何でタマゴなの？」

「名前と顔を見れば判るだろ」

玉の顔をじっと見つめていた美緒が噴出して笑い出した、ツボに嵌ったのか美緒の笑い声が通路に響き腹を抱えて美緒はしゃがみ込んでいる。

「はいはい、どうせゆで卵顔ですよ。あんた笑い過ぎ、あっちにおっさんの写真が沢山あるから見てきなさい」

「へえ？ パパの写真？ 本当に？」

「うわ、パパね。そうそうパパの写真が沢山あるからね」

俺の写真の言葉にピタリと笑うのを止めて玉の顔を見上げると、小走りでボードの方に向っていった。

玉の奴がしてやったり顔で俺を見ている、昔は騙された時点でそのまま拗ねていたのに歳を取るにつけて切り替えしが早くなってきたのに驚いた。

「写真の展示があるのは偶然じゃなさそうだな」

「あはは、岡谷さんがたまたまフサキに来ただけで、来なくてもこっちからチケットを持っていこうと思ってたから」

「そうそう、岡谷さんが娘みたいな女の子と回ってるって噂はかなり有名だからね」

「これで終わりって事はなさそうだな、楽しみにしているよ。後かな」

玉と渡部に片手で挨拶をして写真がたくさん展示されているボードを穴が開くほど見ている美緒の側に向うと美緒がひとり言をブツブツと呟いていた。

「ここにも、ここにも写ってる。ここにも!」

「今流行のツイッターか美緒は」

「うわあ、第4回特別賞……第7回銅賞受賞?って3位って事なの?」

「ほら、始まるから会場に入るぞ」

「パパ、待つてよ。何回ぐらい出てたの?」

「さあな、数えた事が無いから判らないな。銅賞を獲ったのが最後かな」

会場に入りしばらくするとコンペが式次第によってスタートした。選手入場に来賓挨拶や審査員の紹介があり競技説明があり競技が始まる。

制限時間5分以内に八重山で造られた泡盛をベースに使ったカクテルを5杯仕上げて、ネーミング、色彩、味覚、テクニカルなどの6項目で腕を競い合う。

ショートカクテルとロングカクテルに別れ、毎年ショート・ロング合わせて20名弱の出場者が2人ずつ舞台の上の特設カウンターでカクテルを仕上げていく。

そして最優秀グランプリ受賞者が沖縄本島で開催されるカクテルコンペの出場権を手にすることが出来るのだ。

「凄いね、パパ。みんな格好良いし素敵だな。中には緊張してる人も居るけど」

「そうだな、職場でシェーカーを振るのと舞台の上で振るのでは全く別物だからな。バリバリにシェーカーを振っている人がここでは緊張のあまり失敗する人もいるくらいだからな」

「パパも緊張した？」

「俺か？ 緊張はしないな。最初の頃は順番をくじ引きで決めていて、1番を引いた時も緊張しなかったぞ」

「信じられない、パパが緊張する時ってどんな時なの？」

「好きな女の子の前でなら緊張するぞ」

「バーカ」

そんな話をしながら会場内を見渡すと見覚えのある顔があちらこちらに、それも見事なくらい女性の姿ばかりで笑顔を向けたり手を振っている。

こんなに石垣島に居たのかと思えるくらいだった。

すると渡部と玉の不敵な笑顔が頭に浮かんできた。

2人の顔を一刀両断にして対策を巡らす。

周りの反応に一喜一憂なんてしている余裕は無いはずだ。

まかり間違えば美緒にまで嫌われて四面楚歌なんて真っ平ゴメンだし考えたくも無い。

先手必勝一点突破在るのみ。

最悪の場合は逃げるが勝ちだ、この場で撃沈なんてそれこそ有り得ない話だった。

この後の事を考えている間にも選手達の競い合いは続いている。美緒の顔を見ると舞台上でシェーカーを振る姿に釘付けになってい

た。

ボトルを持ちデモンストレーションしながらシェーカーに材料を入れ、心地よい音を立てながらシェーカーを振りグラスに注ぐ。

青や赤、オレンジにグリーンやグラデーションを効かせたカクテルが次々に仕上がっていく。

美緒は羨望の眼差しで瞳を輝かせている。

それはまるで……

一度開いてしまった思い出の蓋は中々閉めることが出来ないでいた。

「ねえ、パパ」

「ん？ なんだ」

「パパが考えたカクテルの名前は何ていう名前なの？」

「何だったかな、特別賞が夏至南風で銅賞が酔夏だったかな。夏至南風が八重泉のグリーンボトルがベースでココナッツリキュールとバナナリキュールにグレナデンシロップとレモンでカクテルグラスにクラッシュアイスを入れたロックスタイルで」

「グレナデンって何？」

「赤い色の石榴のシロップだよ」

「スイカは？」

「酔う夏と書いてスイカ、味はスイカそのものかな、塩をグラスの淵につけたスノースタイルでスイカと同じ赤と緑色のカクテルだよ」
「他にはどんなカクテルを創った事があるの？」

「今は規定すれすれかも知らないけど、レモンを絞り入れると青から紫に色が変わるカクテルを創った事があるかな」

「ええ、凄い。どうしたら色が変わるの？」

「赤いハイビスカスの色素を泡盛に溶け込ませると作る事が出来るんだ」

そこまで勢いに任せて美緒に話してしまい気付いた時には後の祭りだった。

「そのカクテルの名前は？」

「何だったかな、昔の事だから」

曖昧に誤魔化せる筈が無く、昔の恋人の名前を付けたとも言えず苦し紛れに脚色と言う嘘を付いてしまった。

「まほ……らばだったかな？」

「まほらば？　どんな意味なの？　方言？　外国の言葉？」

「日本語だよ、素晴らしい場所とか心休まる場所って意味なんだ。漢字で書くと真の秀でた場と書いて真秀場だよ」

「なんだ、ママの名前かと思っちゃった。パパはそんな気障な事しないもんね」

「判らないぞ、昔は気障だったかも知れないだろ人は変わるものだから」

「パパには変って欲しくないなあ」

「もう、変ってるかもな」

「うっ、今日のパパはちよつと嫌い。ちよつとだけだよ」

そしてコンペが終わると交流会が開かれる、交流会ではコンペで披露されたカクテルの試飲が出来るようになっていて出場者が一斉にシェーカーを振り見に来ている人達に振舞われる。

味見程度だが気になった参加者の前には人だかりが出来て出場者と話し込む人までいる。

コンペが終わったと同時に交流会に向けて裏方のスタッフや会場の中に居た人間が動き出す。

俺は車で美緒は未成年でカクテルは飲めずスタンバイされていた円卓のオードブルを摘みながら、美緒と2人で一列に並びながら一斉にシェーカーを振っている出場選手を眺めていた。

「岡谷さん、お久しぶりです」

「お、小山か。元気だったか」

「はい」

「岡谷さん、元気してました？」

「元気だったぞ」

見知った顔が次々に現れ声を掛けてきて直ぐに俺と美緒が居る円卓が囲まれてしまう。

美緒はキョトンとした顔をして恥ずかしそうに俺の少し後ろに隠れるように立っていた。

先手必勝一点突破を狙いチャンスをつかがっていると一瞬だけ皆の視線が美緒に集まる、これを逃せば一気に決壊したダムの様に怒涛の質問攻めに遭う事は見るよりも明らかだ。

「こいつは俺の娘の大羽美緒だよ。事情があつて今一緒に住んでいるんだ」

「ええ、やっぱり一緒に住んでいるんだ」

「東京から独りで石垣島に俺を訪ねて来てしまったんだから仕方が無いだろ」

「東京から？ それじゃお母さんは……」

「誰なのか？ ご想像にお任せします」

「係長、渡部君に昔の彼女のお嬢さんって聞いたんだけど」

何故か理由までは判らないし他にも俺と同じ役職の同僚は居たにも拘らず、俺の事を主任や係長と昔の役職で呼ぶ元スタッフは凄く多かった。

「まあ、当たらずも遠からずだな。俺が娘だと思っっているんだからそれでOKなんだよ」

「うわぁ、相変わらず岡谷係長は凄いんだ」

すると、美緒は困惑した表情で俺に話しかけてきた。

「パパ、この女の人達は……」

「俺がホテルに居た頃のスタッフだよ。殆どアルバイトの子だけだね」

順に苗字だけを教えていく、小山・渡辺・三橋・宮里…… 何処のホテルで一緒に働いていたのかはこの際端折らせてもらう。

「うわぁ、パパって呼ばれているんだ。それじゃ美緒さんも岡谷係長の事をお父さんだっと思っているのね」

「うん、だって石垣島に居る間は全力で守ってくれてるって言うてく

れたんだもん」

「良いな、私も岡谷係長みたいなパパが欲しいな」

「あのな、パパよりも皆も良い歳なんだから相手がいない奴は早く探した方が良いんじゃないのか？」

「うわあ、酷いなもう」

数人が非難の声を上げてそれ以外は笑っている。

笑って誤魔化しているのか相手が居て余裕なのかは定かじゃないが。

「今日は俺達がメインじゃないだろ。そろそろ表彰式が始まるぞ」

「うわあ、まだあのイケメンのカクテル飲んでないよ」

「何ならタマゴなら紹介してやるぞ」

「」「無理！」「」

「」「圏外」「」

舞台の近くで聞き耳を立てている玉に聞こえるように言うとあまりの言い様に顔を引き攣らせている。

まあ、後からフォローを入れとく事にしよう。

すると、俺が結婚していた事を知っている小山が冗談半分で俺に聞いてきた。

「そんな事を言う岡谷さんはもう結婚はしないんですか？」

「再婚か考えた事が無いな」

「ああ、もしかして美緒ちゃんのママ狙いかな？」

「あのな、美緒の母親とは10年以上会った事が無いんだぞ。それこそ俺の事なんて圏外だろう」

「それじゃ、他に誰か居るとか？」

「もし、また結婚するような事があれば直ぐに教えてやるよ。はいはい、俺の事はココまで」

メルアドや携帯番号を教えあつて、プチ同窓会は無事終了した。

美緒を見ると普段と変わりなく見える。

それが相手が誰であろうと自分の事を娘だと紹介する事が判っている為なのか、俺が再婚なんて考えていないと言った為なのかは判らなかつた。

玉と渡部には後から連絡するからとだけ告げて、表彰式の終わった会場を後にした。

隠し事なんて

石垣島も年末が近づいてくると少しずつ慌しくなってくるみたい。12月になると街中では東京ほどじゃないけどクリスマスソングが聞こえるようになるんだけどね。

これが、嫌になるほど似合わないって言うか場違いな感じが否めないんだよね。

だって、晴れたらTシャツで十分なんだよ。

少し動いただけで汗をかくし。

それと驚いた事があるの。

それはね石垣島と言うより八重山には色々なお祭りがあって全部を見ようと思うと大変なんだけど、パパが言う所の秋には『とうばらーま大会』って言う無形文化遺産にも指定されている謡の大きなお祭りや、600年の伝統があつて10日間近く行われる竹富島で最大の『種子取祭』って言う重要無形民族文化財に指定されているお祭りがあるの。

そのどちらもパパに聞いたら見た事が無いって言うんだよ、20年も石垣島に住んでいるのに信じられないでしょ。

でね、少し問い詰めたら『祭りを全部見ようと思ったらどれだけ休みを取れば良いんだ？ それに俺の都合ばかりで休みを取るわけにもいかないし、偶々機会が無かっただけで興味が無い訳じゃないって』って言われて。

そうかもって思っけどさ。

そうしたら事細かく『とうばらーま』と『種子取祭』の説明をしてくれたの。

『とうばらーま』は八重山で一番愛され続けている民謡の中でも最高峰の叙情歌なんだって。

でね、大会では歌詞部門と歌唱部門に分かれていて歌詞は事前に審査があつて歌唱部門がメインで大会が行われて出場者は10代から

60代と年代の幅が広がって、予備審査を受けた人が歌唱力を競い合うんだって。

『種子取祭』は10日間も行われるお祭りなんだけど7・8日目が最大のイベントになってて、奉納芸能と世乞いが行なわれるんだって。

奉納芸能が終わると世乞い（ユークイ）が行なわれて、島の司を先頭に道唄と呼ばれる豊作を祈る唄を唄いながら、家を訪れて庭先で踊り家の中でまた唄って神聖な行事にもかかわらず観光客・見物人も一緒に唄って踊らせてもらえるんだって。

それが朝方まで竹富中の家々を回るんだって。

本当にパパは何でも知っているし即答してくれるんだけど、そんなパパでも見た事が無い物の方が多いって言うんだよ信じられないでしょ。

それとカクテルコンペは凄く楽しかったし面白いというか凄いの一言なんだけど、パパには全く自覚が無いというか自分の事をなにも判ってないの。

だって、パパは髪の毛をバシって決めると凄く格好良いんだよ。

それに眼鏡なんか掛けられたら私だってドキッってしちゃうんだから。

美味しい料理やカクテルが作れて優しくって、娘の私が言うのもなんだけど結構いけると思うの。

それに周りにはあんなに女の人がいっぱい居てさ、なんとも思わないのになって言うかニブ過ぎだよな。

それともあんまり考えたくないけど女の人に興味が無いとか。

「そんな事は無いと思うけど。今まで付き合ってきた彼女の事は聞いた事があるし写真を見せてもらったんでしょ」

「そうだけだよ」

実は今日はクリスマスパーティーの準備で瑞穂さんトコの『マッドティーパーティー』に来ていて、瑞穂さんに話を聞いてもらってた

んだ。

瑞穂さんは絶対にパパのそう言うことを知っているとと思うんだけど絶対に教えてくれないの。

理由は判らないんだけど私がいるからかなあなんて考えちゃったりするんだ。

だって、私はパパと呼んでいるしパパも娘だって皆に紹介してくれるけど血が繋がっているかって言えばそれはノーに近いんだし。

彼女が欲しいんだったら私なんか邪魔なだけだと思うんだ。本当にもう再婚する気無いのかなあ。

「その服が岡谷からの少し早いクリスマスプレゼントなんですよ」

「ええ、何で判ったの？ 瑞穂さん」

「凄くご機嫌だし、ずっと気にしてるのが見えみえだよ」

「えへへ、これだけじゃなくて安いからって他にもいっぱい買ってもらっちゃったんだ」

今日の格好はAラインの青と白のボーダーの可愛いニットワンピースにレギンスみたいなスキニージーンズにこげ茶色のショートタイプのフリンジブーツなんだ。

これ以外にもね、胸元に可愛いリボンとレースが着いてるグリーンの綺麗なペイズリー柄のシフォンワンピースとか、ゆるかわワンピースやスカートなんかも買ってもらったの。

でも、東京では絶対に着なかった洋服が多いかも。

「いつも以上に嬉しそうだね、美緒ちゃんの洋服って自分で選んだの？」

「うんと、パパがネットでこれはどうだって候補を挙げてから私がチョイスかな」

「うわあ、あいつが女の子の洋服を選んでる姿なんて気色悪くって想像できないぞ」

「ええ、でもパパって可愛い革製品とかたくさん持ってるじゃん」

「そうか、そう言うところを考慮するとセンスは良いほうかも」

「それじゃ、岡谷には何をあげるの？」

「うーん、中々難しくって。東京の友達に頼んであるんだ。それは見てのお楽しみだよ」

「そうか、美緒ちゃんからなら何でも喜ぶと思うな」

準備が大体整った所で泉美となつちゃんと朋ちゃんがお店に来てクリスマスパーティーが始まったの。

クリスマスって言うけど外は涼しい位で雪なんて絶対に降らないし、パーティーも私の誕生日パーティーとそんなに変わらないんだけどね。今回はパパに頼んでケーキを作ってもらったの。

私も秋香さんや茉冬さんみたいにパパにこんなケーキが良いってお願いしちゃった。

私のリクエストは大人って感じのケーキなんだ。

それでパパが作ってくれたのはラズベリームースのチョコレートケーキなの。

ココア生地のスポンジに甘酸っぱいラズベリームースがサンドされててビターチョコレートでコーティングされてるんだよ。

それと定番のブッシュドノエルでね、バニラビーンズが使われてて甘くって蕩けそうなんだ。

それと、瑞穂さんが一ヶ月前に準備してくれたイタリアでクリスマスと言えばパネトーネなんだけど、これもまた甘すぎないで絶品なんだよ。

凄く楽しくお喋りしてプレゼント交換は瑞穂さんも加わってくれてあつという間に時間が経っちゃって、楽しい時間って信じられないくらい早く過ぎちゃうんだよね。

泉美達を見送ってから私は片付けを手伝ってるの。

だって態々パーティーを開いて貰ったんだもん、少しはパパがお金を払ってると思うけど採算度外視してるんだと思うんだよね。

だから、せめてお手伝いはしないとね。

「美緒ちゃんはお正月はどうするの？ 東京のお爺ちゃんやお婆ちゃんのトコに帰るの？」

「うっん、島に居るよ。東京はつまらないもん」

「そっか、そうだ美緒ちゃんは受験生なんだよね。どうするの？」

「高校には行くけど……」

瑞穂さんに即答できないのが悔しかった。

私は島の高校に行きたいけど、これだけはパパじゃなくってママに相談しないとね。

「三者面談もあつたんでしょ。確か1月の末には願書も出さないといけないし」

「うん、先生はこの高校にもいけるからって太鼓判を押してくれるんだけどね」

「そうか、問題はお母さんに委ねられてるんだ」

「うん」

「美緒ちゃんの希望が通るといいね。もう直ぐお正月か、岡谷の誕生日もあるしね」

「えっ！ パパって1月生まれだったの？」

「あれ？ 聞いてないの？ 2日だよ」

「どうしよう……」

クリスマスパーティーやパパへのプレゼントを考えるだけで精一杯だったのに、知らなかったじゃなくて聞かなかった私の所為なんだろうけど、パパの誕生日がお正月の2日だったなんて信じられなかった。

だってあと1週間くらいしかないんだよ。

今からじゃ絶対にプレゼントなんて無理だもん。

いつその事……

私とママの事を……

そんな事が頭に中を過ぎると瑞穂さんの溜息が聞こえた。

「はあゝ あのね美緒ちゃん。これだけは言っておくね、岡谷はそんな顔をした美緒ちゃんからのプレゼントなんて絶対に喜ばないよ。どんな事情があるにせよ秘密にしておかないといけない事を美緒ちゃんから聞かされてもショックなだけだよ」

「隠し事なんて何も……」

「女はミステリアスなものなの。秘密の1つや2つ持っていて当然なんだから、本当に愛すべき人の前じゃなければ丸裸になっただら駄目よ」

「もう、今日の瑞穂さんはエッチ過ぎです。そんな瑞穂さんは丸裸になるくらい好きな人居るんですか？」

「うふふ、秘密。女はミステリアスの方が魅力が増すの」

時々、瑞穂さんには驚かされる。

それはまるで私とママの事情を知っているんじゃないかと思うの。でも、それは有り得ない事のはず。

だってパパだって知っている筈無いんだもん。

それでも飛びつきの爆弾が投下されてしまった。

パパの誕生日&お正月まであと1週間なんだよ、本当にどうしよう。そんな事を考えてたけどお正月はそれこそ大変な大騒ぎになっちゃうの。

何を隠してるかなあ

今年は私にとって忘れられない年になった、それは石垣島に来て島でパパと出会った事で。色々とあったけれど。

コンクリートジャングルで色を失いかけていたのに日本の南西の端っこの島に来て。

島の花や海に空、そして南国特有の木々の緑や燦々と降り注ぐ陽光の様に極彩色豊かなだっと思えるようになった。

そんな一年が終わろうとしている。

それなのに私の周りはざわついていた。

事の始まりはクリスマス後だった。

冬休みに入った途端に泉美やなっちゃんに朋ちゃんから立て続けに電話が来てそれは三者三様の言い方だけど内容は同じ物だった。

「美緒！ て、テレビでルイさんが大変だよ」

「美緒、る、ルイさんが……」

「美緒。あれは本当なの？ ルイさんってパパラブじゃなかったの？」

今、テレビをつけてワイドショーを見れば柴崎ルイの事で一色だった。

『ルイ熱愛発覚！ 新人男優の葛城光一とお忍びデート!!』

『柴崎ルイ お相手は映画で共演の新人・葛城光一!!』

なんでもツーショットの写真を撮られて週刊誌からワイドショーからまでこの話題で持ちきりになっているって泉美が教えてくれたの。ネットでもこの情報は直ぐに流れてパパは知っているはずなのに何も言わないの。

ルイさんの事をなんとも思っていないのかな、それはそれでなんだか微妙な気持ちなんだけどさ。

乙女心は複雑怪奇なものなのだ。

「ばーか、単純明快だ」

「うっ、パパが馬鹿って言った。美緒のこと馬鹿って言った！」

私がルイさんの事を聞いた瞬間に返って来た言葉がこれだった、酷くない『ばーか』だよ。

絶対に漢字じゃなくて平仮名の『ばか』だよ。

「あんな、このツーショット写真を見て変だと思わないか？」

「えっ？ 何が変なのさ」

「これは何処から出てきた瞬間にフラッシュを浴びせられて撮られた写真だぞ。その証拠にルイは眩しそうにしているのに隣の男はそうじゃない。それに映画の公開前って言うのが胡散臭い」

「そう言われてみればそうかもしれないけど。ルイさんに連絡してみようかな」

「止めとくんだな、今はそれどころじゃないだろ」

そうパパに言われてパソコンを覗くと『柴崎ルイ、雲隠れ？ 海外脱出か？』の文字が見える、なんだパパも気になるんじゃない。

「ちよつと出掛けてくる」

「ええ、何処に行くの？ 美緒も行く」

パパの後を追いかけて車に飛び乗ってついて行くと、パパが向った先は市内の電気屋さんだった。

電気屋さんで何を買うんだろうと思ったらテレビ売り場でテレビを見ているの。

お家のテレビを修理すれば良いじゃん、それともアナログ放送が終わるから新しいテレビでも買うのかな？

どうせ見ないくせに、美緒だって今更テレビが見たいなんて思わないもん。

パパは店員さんと何かを話しながらリモコンでチャンネルを変えている。

するとルイさんが映ったの、それも成田空港ってテロップに書いて

ある。

動く歩道を足早に搭乗ゲートに向うルイさんにマイクとカメラが向けられてるけど、ルイさんは帽子を深く被って俯きながら無言で搭乗ゲートに行ってしまった。

「ノーコメント……」

とかなんとかリポーターが言ってたけど。

それを見たパパは「少し考えます」って店員さんに言うと店から出ちゃったの、まさかだよな。

「パパ、もしかしてあれだけを見に来たの？」

「面白い物を久しぶりに見せてもらったよ」

「面白いものなんて、酷いよ！ ルイさんはママの友達で私にとっても大切な人なのに」

「そんな美緒にも判らないのか？ 流石だな」

本当にムカついた。

久しぶりにマジでぶっ飛ばしてやろうかって思ったけど、パパの言葉がどこかに引っかかってパパを睨み付けるだけに留まらせた。

そんな事があって私はちよっとパパに腹を立てたまま今に至ってるの。

今って言うのは大晦日なんだけど『ニライ・カナイ』でカウントダウンのイベントがあるからって、私も招待されてディナータイムが終わってからイベントの準備を少しだけお手伝いしてたの。

「美緒ちゃん、テレビ見た？ ルイさん大変な事になってるね」

「うち、テレビ無いし」

「うわあ、ゴメン。って、ご機嫌斜めだねチーフと喧嘩でもしたの？」

「あのね、ユーカさん聞いてよ。パパって酷いんだよ」

先日あった事を話すとユーカさんは驚いてたけどミポさんはニヤリと不敵な微笑をしてたの。

「あのね、ミポ。あんたのその笑いは怖い！ 前から言おうと思っ

てけど今年最後だから言わせてもらっよ」

「チーフは何も判らずにそんな事言う人じゃない。きっと何か確信があるからそんな事を言うんだよ、美緒ちゃん。チーフの事を信じられないのかなあ」

「そうじゃないけど、それなら教えてくれてもいいじゃん」

「確信はあるけど確認したわけじゃないからじゃないのかな」

「どう言う意味なんだろう。確信はあるのに確認していないからって…」

…

「そっか。多分ルイさんとは今は連絡が取りたくっても取れないかもしれないんだ。」

でも、気になるな。ルイさんは今頃どこの国に居るんだろう、成田に居たって事はやっぱりハワイなのかな？

ハワイは安直過ぎるかなりポーターがいっぱい居そうだもんね。

『ニライ・カナイ』のイベントはお客さんと一緒にカウントダウンして年越しそばを食べる、こんな言い方はいけないと思うけど何処にでもあるイベントだった。

毎年の恒例行事で毎年訪れる常連さんも居るんだって、パパはいつも通りなんら変わりなく笑顔で仕事してたの。

元旦はゆっくりとしようって言っていたのに……

パパの携帯が鳴ってパパの声が部屋まで聞こえてきたの。

「はあ？ 何処だった？ 判ったからそこを動くな。良いか絶対に動くなよ」

「もう！ 今何時なの？」

枕元に置いてある携帯を手にとるとそこが限界だったみたい、だって元旦の朝8時過ぎなんだよ。

年末から溜め込んでいたパパへの怒りが爆発寸前だった。

ぶっ飛ばすにしてもとりあえず着替えだよね。

女の子は何をするにしても身だしなみだからね。

501にパーカーを着て部屋を飛び出すとパパの部屋から何かをぶ

つけるような大きな音がしたの。

「元旦早々、うる……パパ、どうしたの？」

「っう！ 出てくる。直ぐに戻るから」

パパが501を穿いてシャツを羽織ったままボタンも閉めずに足先を押えているの。

でね、顔を歪めたまま慌てて出て行こうとするの。

私の爆発寸前の怒りなんて吹き飛んじやった。

だって足先をどこかにぶつける程に慌ててるパパなんて一度も見たことが無いんだもん。

「だ、大丈夫なの？」

「なんでもない」

「私も行く」

パパの車に乗り込んだ瞬間にまるで私が隣に乗っていないかのように、パパが車をもの凄い勢いでバックさせてタイヤを鳴らしながら急発進したの。

いつも私が隣に乗っている時はこんなに荒い運転はしないはずなのに今日は違うの。

一時停止もそこそこに4号線をつっ切って産業道路に向って、今度は車を街の東に向けてもの凄い勢いで走らせてるの。

お正月の早朝で車が殆ど走ってないのを良い事に、法定速度なんて完全に無視して八重山警察署の目の前を走り抜けるんだよ。

「パパ、捕まっちゃうよ」

「心配ない、初詣の警備で忙しいからな」

「そう言う問題じゃないでしょ」

「掴まってるよ、飛ばすぞ」

飛ばすって……

私が助手席のドアにしがみ付くとパパが更にアクセルを踏み込んだ。

「気分が悪い」

「それじゃ、お前は車に居ろ」

「行くもん！」

着いた所は石垣島空港の駐車場だったの。

パパが急いで車から降りると大股でそれも凄い速さで歩き始めたの、私なんか走って着いていくので精一杯なくらいなんだから。

多分、私が『待ってよ』って言っても『車に居ろ』って言われるか一瞥されるだけだと思う。

それにそんな事を言える雰囲気じゃないって言えば良いのかな、パパの顔は真剣そのもので歩きながら何かを探しているの。

こんなパパの顔を見るのは初めてでちよつと怖かった。

だってそれはまるで狩人か漁師が獲物を狙う視線と同じだったの。

ANKの出発ターミナルに入るなりパパは辺りを見渡して直ぐに隣の到着ロビーに向ったの。

元旦のそれも朝一便の時間だからそれほど人は居なかったけどそれでも少ない方じゃなかった。

すると、突然パパが名前を叫んだんだよ。

「凜子！」

到着ロビーにパパの声が響き渡りロビーに居た人達の視線がいつべんにパパと私に集中したの。

それを見たパパは到着ロビーを駆け出すように突っ切ってJTAの出発ターミナルに向ったの。

JTAの出発ターミナルにはお土産屋さんが結構あってや軽食を食べられる所なんかがあるからANKより人がたくさん居るんだけどパパはそんな事にお構いなく名前を叫んだの。

「凜子！ 何処に居る！」

「凜子！」

次の瞬間、私は自分の目を疑ったの。

突然、猫耳ニット帽を目深に被って緩々のカーキ色のAラインのワンピースにレギンスで薄茶のフリンジのモカシンショートブーツ姿で黒いストールを肩に巻いた女の人が……

パパの首に抱き付いて。

き、キスをしてるんだよ。

それもチュッなんて軽いもんじゃなくって……
な、何が起きてるの？

突然の事に周りがざわつき始めるけど直ぐに静かになった。

静かになったんじゃないかって私の周りからの雑音が一切消えたんだって気づいた。

不思議な事に少し離れていているから普段なら聞こえるはずの無いパパとその女の人の会話しか聞こえてこない。

「ご、ゴメンなさい」

「謝るくらいならするな」

女の人が我に返りパパから離れようとするとパパから女の人にキスをしたの。

すると女の人の体が震え出してパパにしがみ付いて涙が零れ落ちたの。

「今は泣くな。良いね」

「うん」

「話は後だ。ここは人目につきすぎる」

「うん」

「行こう」

「荷物が……」

パパと女の人の視線が搭乗口の前にあるベンチに置いてある荷物に向いたの、そこで私は彼女が誰か気付いたの。

周りの騒然とした音が一気に溢れ出す。

指笛を鳴らす人、驚きの声を上げる人達。

当然だよ空港で男と女が突然抱き合ってキスをしたんだもん。

映画やドラマじゃあるまいし有り得ないもんね。

すると、本当に一瞬なんだけどパパの空気が変わったの、なんて言えは良いんだろう一言で表すならそれは殺気だった。

それもハンパ無いくらいの。

周りを一瞥した瞬間に　パパ達を見ていた人が気まずそうに何事も

無かったかの様に振舞っている。

私も女の人の名前を言いそうになったのにパパに切り捨てられてしまったの。

それは本当に瞬く間だったけど、パパの本当を少しだけ垣間見た気がしたの。

そして西表島でのミボさんの言葉が頭を過ぎった『一番怒らせてはいけない人』パパの未だ知らない闇の部分なのかもしれないと思ったんだ。

でも、直ぐにパパはいつものパパに戻って私を見て荷物を持ってくられて目で合図したんだよ。

車に乗っても彼女は始終俯いたままだった。

「何を隠してるのかな？　パパは」

「何が言いたいんだ？　美緒は？」

「パパは底が知れないって事。いつもはだらしないくせに時々ビシッて決めてさ」

「誰にでもONとOFFはあるだろう。美緒にだって誰にでも裏表があるように」

そう言われて私は正直ドキッとした。

パパはまるで何かを知っているかの様に鋭い事を言う事がある。

多分それはパパの直感がそうさせるんじゃないかと思う『見てないようでちゃんと見ててくれる』そんなミボさんの言葉が蘇ってきた。

雲隠れしているのに

空港からの帰り道は行きとは違いいつものパパの運転だった。乗っている人を気遣うゆつくりとした優しいくらい安全運転。マンションについても彼女は車から降りようとせずに俯いて動こうとしなかった。

パパが車から降りて助手席のドアを開けて中を覗き込んだ。

「行くぞ」

「やっぱり駄目」

「あのな、今更他に行く当てでもあるのか？」

そう言われて彼女は小さく首を振ってパパに手を引かれて渋々車から降りたの。

パパ？ 私は放置ですか？ 自分でシートを動かして彼女が持ってきた四角い箱の様な荷物を持ちながら、頭を垂れながらパパに手を引かれて行く彼女の後を歩いて階段をあがった。

パパが鍵を開けて部屋に入り彼女の手を引いたまま自分の部屋に向ったの。

すると彼女の瞳から涙が溢れて……

再びパパに抱きついたんだよ、その拍子に2人はパパのベッドに倒れこんで。

「パパさん！ 私！ 私は……」

まるで火がついたように泣く赤ん坊みたいに、パパに抱きつきながらルイさんは泣き叫んでいるの。

そんなルイさんをパパは子どもをあやす様に優しく抱きしめていた。説明なんて必要ないよね。

石垣島でミイラ取りがミイラになっちゃった柴崎ルイさんが彼女だったんだ。

でも、何で石垣島に？

で、何でパパなの？

うわわあ、何でき、キスなんか……
頭がパニックになるよ。

しばらくして落ち着いてきたルイさんをベッドの脇に座らせてパパが一息ついた。

「さて、これからどうするかな。な、美緒」

「わ、私に聞かれても困るよ。でも、どうしてルイさんが石垣島に居るの？ 海外に行ったんじゃないの？」

「あ、あれは影武者って言うかそっくりさんなの」

「へえ？ 影武者？ そっくり？ じゃ、パパは……ええ！」

新年早々雄叫びを上げてしまつて慌てて自分で口を手で塞いだのだつてそうでしょパパは電気屋のテレビに映るルイさんを見ただけであれがルイさんじゃないって判つたつて事だよ。
どんだけ見てないようで見ているつて言つても有り得ないしょ。

それから事の次第をルイさんが話してくれたの。
恋愛騒動は殆どが映画の宣伝の為だったんだつて。

ルイさんに事前に何も無くあの写真を撮られて素っ破抜かれる形になり、事後承諾と言う事務所の強引なやり方にルイさんが怒つて抗議したんだけどどうする事も出来なかつたんだつて。

それでルイさんは仕事をボイコットして自宅マンションに籠つただけ、事務所側はそんな事を公表するわけにも行かず苦肉の策で影武者を使つて海外へ雲隠れと言う形でどうにか体面を取り繕ったんだつて。

でね、監視役のマネージャーの目を盗んでマンションを抜け出してとりあえず那覇まで飛んで。

素泊まりで一泊して1便で石垣島に来たんだつて。

「雲隠れしているのに、あんな人が大勢居る所で盛大に抱き合つてキスまでしちゃつて」

「美緒ちゃんには悪いと思つただけ、パパさんが私の名前を叫んで探しているのを見たら……つい、ゴメンね」

「な、何で私に謝るの？ もう良いよ済んじゃった事だもん。で、パパは何でルイさんの本名を知っているの？ プロフィールでも一切公表されていないし、私ですら教えてもらってないのにつて、そうかデートした時に」

「私は教えてないよ誰にも」

「はあ？ じゃパパは何で知ってるの？」

「不確定で曖昧なネットの情報と彼女が教えたメルアドから、あの場でルイの名前を叫ぶわけにもいかないだろうが」

メルアド？ ルイさんの？ えつと確か…… * * * * no - apple * * * @つて、りんごじゃないつて事なの？

それでりんご？

パパの頭の中が一度で良いから見てみたい。

「普通の味噌が詰まってるだけだぞ。開けて見たいなんて考えるなよ」

「パパのスケベ！ な、何を読んでるのよ？ 心？ 頭の中？」

「あんな、美緒は判りやすいんだよ」

そんなくだらない事をパパと言い合っているとルイさんが少しだけ笑顔になった。

「やっぱり、石垣島に来てよかった。美緒ちゃんもパパさんもいつもどおりでホツとできる」

「もう、美緒じゃなくてパパさんに会いに来たんでしょ。パパさんもね」

「なんで俺もなんだ？」

「パパからキスしたくせに、それにあんなに……」

「あんなに？ なんだ」

「馬鹿！ まだキスもした事が無い女の子にそんな事言わせる気なの？」

「ほ、ほう。美緒はファーストキスもまだだと」

「変な事をメモるな！」

なんだか嫌な元旦だな新年早々これじゃこの先の一年が……

なんだか聞きたい事があつたはずなのに今更聞けなくなつちやつた。なんだかまたパパに有耶無耶にされた気がしてならないんだけど。色んな事を考えて怒つたらお腹が空いちやつた。

今日はパパの作ったお雑煮を食べて御節をパパと2人でゆっくりお喋りしながら食べるはずだったのに。

「飯にするか、凧子も何も食べてないんだろ」

「うん！ 私もパパさんに食べてもらおうと御節を頑張つて作ってきたの」

「あのお。一応、私もいるのに！」

ルイさんもと凧子さん、だつてパパがそう呼べつて直ぐになんて無理だよつて言つたらパパに怒られちゃつた。

もしもルイが島に居る事がばれた時の事を考えて見なさいつて、そうだねパパは絶対に守ろうとするけど限度があるもんね。

その凧子さんが作つてきた御節が凄いの三段重でね、田作り・黒豆・数の子でしょ紅白かまぼこ・伊達巻・栗金団に昆布巻きでしょ、それから鰯の照り焼きにエビの甘辛煮に紅白なますと煮しめ。

殆ど凧子さんの手作りなんだつて。

それ以外にも美味しい凧子さんならではの料理が綺麗に詰められているんだよ。

何でもマンションに籠つたのはいいけどすることが無くて御節を作つてたんだつて。

でも、おかしいでしょ。お重を抱えてあのルイさんが脱げ出してきたんだよ。

それとパパが大きなお皿にパパ特製のおせち料理を盛り付けて運んでくれたの。

時間が無くて沢山は作れないけどつて栗金団に黒豆になますでしょ昆布巻きに出し巻き卵にお豆腐？

パパのママとパパは四国の愛媛県の人で御節はこうやって大きなお皿に盛つて出てくるんだつて所変わればなんだね。

でも、パパが作ってくれたお雑煮は普通に東京で食べてたのと同じだったよ。

澄まし汁にお豆腐と鶏肉と小松菜が入ってるやつ。

「いただ……明けましておめでとう御座います」

「そうだな、おめでとう」

「ゴメンね、私の所為で元旦から慌しくさせて、今年も宜しくね。おめでとう」

「うわぁ、美味しい！」

凜子さんの御節は完璧で絶品なの、でねパパの御節はと……

このお豆腐が群を抜いて美味しい、素朴で優しい味がしてパパがパパのママから教わったんだってパパのママってどんな人なんだろう。多分、素朴で優しい人なんだろうな。だって料理は人となりを表すでしょ。

パパの料理は凄く優しい味がするし凜子さんの料理は完璧なんだよ。役作りと同じで何事にも完璧を求めている。

「パパさん、このお豆腐の炊き方を教えて。絶対に覚えたい」

「簡単だよ、豆腐を少量の油で焦げ目が着くくらい焼いて、そこにだし汁と醤油に味醂で味付けをしてあとは好みで砂糖で甘さを調節するだけだから」

「それだけなの？ そんなにシンプルなのにこんなに美味しいんだ」

「美緒もそろそろ覚えたほうがいいぞ。料理は手を掛ければ美味しくなるってもんじゃないんだ。これは単純で簡単だけどシンプルな方が難しいんだよ」

凜子さんはパパに言われたレシピをパパのパソコンの近くに置いてあったコピー用紙にメモをしていた。

「明日は私がお雑煮を作るね」

「凜子さんはいつまで島にいるの？」

「美緒、野暮な事を聞くな。凜子が居ただけ居れば良い、この島はそう言う島だろ」

「そうだね、石垣島だもんね」

「パパさん、あのお願いがあるんだけど。元日から無茶なお願いは判っているんだけど……」

凜子さんのお願いは本当に無茶なお願いだった。

でも不思議とパパなら何とかしてくれちゃいそうに思えるのは何でだろう。

パパは直ぐにどこかに電話をし始めたの。

「あけおめ、野崎」

「あんたね、いい歳こいてあけおめか？ ああん」

うわあ、野崎さんの初怒鳴り声がここまで聞こえてくる二日酔いで機嫌が悪いのかな？

「そこに居る美緒ちゃんにおめでとうって飲みすぎて機嫌が悪いからなつて」

「パパ、怖いよ。野崎さん怒ってるよ。ごめんなさいって」

私が縋るように言うとパパの眉毛がすんと下がったの……

もしかしてパパに火を点けちゃったかも。

パパの温度が氷点下を超えてマイナスの世界に急降下していくと携帯の向こうの野崎さんの温度も急激に……

「あけましておめでとう。野崎オーナーに二日酔いのところ大変申し訳ないが、元旦早々に退つ引きならない頼み事をしたいのだが」

「な、何をだ？ 退つ引きならないって引く事も退く事も出来ないって意味だぞ」

「そうだ、だから新年から飲み過ぎて二日酔いどころか酔っ払っている野崎オーナーに電話をしているのだが」

「わ、判った。何でも言う事を聞くから野崎オーナーと呼ぶのだけは止めてくれ。岡谷にオーナー呼ばわりされるほど恐ろしい物はないから」

一体、このパパは何者なんだろうと思う。

自分の勤め先のオーナーにオーナー呼ばわりだけは止めてくれ恐ろしいからって言わせちゃうんだよ。

直ぐに、野崎さんからの折り返しの電話が来てパパが受け答えをすると、パパがキッチンの戸棚から小さな重箱を持って来て凜子さんの御節を少しずつ詰め始めたの。

それから3人で車で出かけたのでココに寄ってパパが色紙とマジックを買ってきて、凜子さんにサインを書かせたの。

「パパ、サインなんてどうするの？」

「人に頼み事をする時は、こう言う物が入用なんだよ」

野崎さんと待ち合わせの場所は街中の大通り沿いにある美容院だったの。

OPENの看板は出てないんだけど元旦だから開いているはずが無いのにお店は開いてて、店内に入ると体格の良い清潔そうな真っ白なカッターシャツに黒いズボン姿の男の人とシンブルなグレーのニットワンピースに綺麗な紫色のロングカーディガンを羽織った野崎さんが居たの。

「もう、新年早々。野崎ちゃんの頼み事でも本当は嫌なんだから。で、どの子をカットすれば良いの？ チャッチャッと終わらせるわよ」

「チャッチャッじゃ困るんだが野崎？ 彼女んだけど宜しく頼めるかな」

パパがそう言うのと凜子さんが目深に被っていた猫耳ニット帽を取ったの。

するとオカマ言葉のおっさんが雄叫びを上げて……

「いやああああああ！ 柴崎ルイが目の前に居るのよ！ し、信じられないわ！」

「真樹ちゃん、声が響くし……抱きつくな！ このオカマ野郎！」

野崎さんが真樹ちゃんと呼ばれているオカマさんの胸倉を右手で掴んで左手で自分の米神を押えたの。

凜子さんが椅子に座ると真樹さんの独壇場だったの。

「もう、光栄すぎてドキドキもんよ。憧れの柴崎ルイさんの髪に触

れてカット出来るなんて。揃えるだけで良いのかしら?」

「パパさん? ショートボブは好き?」

「良いんじゃないか、ルイなら可愛いと思うぞ」

「それじゃ、バツサリとショートボブにして下さい」

「へえ、長くて綺麗な髪を切っちゃうの?」

「うん、だってパパさんも可愛いって言うし、また伸びるでしょ」

「野崎ちゃん、良いのかしら?」

「言われた通りにしろ」

「でも、あの男の人が可愛いからって。本当にあのルイさんの?」

「そうですね、超話題の恋愛騒動の渦中の柴崎ルイですよ。あの恋愛騒動は宣伝の為のでつち上げですけどね」

「そんな気はしてたのよね。ルイさんがあんな若造を相手にするなんて思わないものね。大ファンとしてホッとしたわ」

「だって私、パパさんラブなんだもん」

「……………」

真樹さんがルイさんの発言に凍り付いて、錆び付いたロボットの様に首を後ろに向けた。

「パパさんて、あの男の人よね。寝癖頭の冴えない若く見えるけどそれなりの年齢に見えるけど」

「確か、パパさんは43歳だよね」

「そうだ」

「野崎ちゃん、助けて頂戴よ。頭が変になりそうなの」

「元から真樹は変なんだ。早く言われたとおりにカットしろ!」

「寝癖の冴えないおっさんで悪かったな、代金は支払うからムースとスプレーを借りるぞ」

そうパパが言うのと座っていたソファから立ち上がり鏡の前に立ってムースで髪の毛を綺麗にセットしてスプレーで軽く乱れないように固めたの。

「これで満足かな? 代金は後からね」

それだけ言つと野崎さんと私の間に体を投げ出すようにソファに

体を沈めたの、パパの顔を見ると営業スマイルはして居るけど野崎さんと同じいやそれ以上に目が据わっている気がしたの。

すると野崎さんが溜息混じりに真樹さん声を掛けようとしたの。

でもそれよりも早く……

「の、野崎ちゃん。ま、まさかその方が野崎ちゃんをも凌ぐあのお方なの？」

「知らないからな、岡谷をマジにさせたら『ニライ・カナイ』ですら潰されるかも知れないんだ。島の小さなヘアースalonなんてそれこそ……」

「もう、嫌よ！ 目の前にはこんな可愛らしくて素敵な天使が居るのに、私の後ろには閻魔様と魔王 of 魔王が居るなんて。まさしく天国と地獄よ」

「嫌なら完璧に言われたとおりにカットする事ね、真樹なら出来るでしょ」

「Aye , Shortly !」

そこからの真樹さんはパーフェクトだった、体格が良いのに凄く繊細な動きでルイさんの髪をカットしていく見るうちに可愛らしい髪型に仕上がった。

「コンテスト以上に緊張したわ。命がけでカットしたんだから、これ以上は駄目よ私自信なくしちゃうから」

「パパさん、どうかな？」

「やっぱり、そのお方に聞くのね」

「似合ってるよ、可愛いなルイ」

パパがルイさんに言った瞬間、ルイさんはパパに抱きついて真樹さんはその場にしゃがみ込んでしまったの。

ちよつと可哀相だったかな、私もこれからはこのお店でカットしてもらおうと。

真樹さんは面白いし腕も確かだし、そうだ皆に教えちゃおうかな。そんな事を考えていると真樹さんがポツリと呟いたの。

「このルイさんの髪の手をお守りにいただけないかしらって無理よ

ね。ここに居る事自体誰にも言えないんだし。だからこそ野崎ちゃん
が私のトコに連れてきたんだもんね」

「その位、良いよなルイ」

「うん、でも売ったりしちゃ駄目だからね。それとこれはサインね」
ルイさんが真樹さんに渡した色紙にはルイさんの直筆で真樹さんへ
と書かれていた。

そしてパパが真樹さんに声を掛けた。

「記念写真を撮ろうか？ 騒ぎが納まったら色紙と写真は自由に店
内に飾ると良い」

「ええ、本当に良いの」

真樹さんとルイさんのツーショットに皆の写真を撮って後から渡す
事を約束して、ルイさんの手作りの御節をお詫びの印として渡すと
感極まった真紀さんが男泣き？ し始めてしまうの。

野崎さんにパパが後の事を頼んでお店を後にしたの。

「髪の毛が短くなって風が抜けて気持ち良い！」

「ルイじゃなくて凜子さん、ばれちゃうよ帽子、帽子」

「大丈夫だよ、だれもルイが石垣島に居るなんて思っていないから。
ばれるとしたらあの3人だな」

「うわあ、あけおめメールするのを忘れてた。ちゃんと言っておか
なきゃ」

慌てて泉美となっちゃんと朋ちゃん、それに瑞穂さんにあけおめメ
ールとルイさんの事を報告したの。

パパが教えてくれたんだけど、石垣島はお正月は大体天気が悪いん
だって。

でも今年はお日様がでてポカポカしてるの風は海風だから少しだけ
冷たく感じるけど、それがまた心地よくって。

「初詣でも行くか」

「行きたい、石垣島での初詣！」

「美緒も！」

車で富崎観音堂に行って参拝してきたんだよ。

観音堂までの道が途中から一方通行に規制されて、いっぱい出店があつて参拝客も沢山居るの石垣中からきたんじゃないかって言うくらい。

でもだれも凜子さんがルイだなんて気付かないの。

パパに言わせると人間は思い込みが激しい動物だからなつてメデアであれだけ海外って言っていたらこんな島に居るはずが無いって思ふものなんだって。

でね、翌日はパパの誕生日だったんだけどプレゼントの代わりに凜子さんと2人で美味しい料理を作つてね。

お家で盛大に誕生日パーティーをしたんだよ。

パパも凄く喜んでくれて凜子さんが用意してくれたワインも殆ど飲んじやつて。

私と凜子さんと片づけをしてシャワーを浴びて出てくると、パパはベッドの上で大の字になつてゐるの。

「パパ、そのままだと汗臭くなるよ」

「おう」

そう言つてフラフラとシャワーを浴びに行つたかと思つたあつという間に出てくるの、相変わらずのガラスの行水なんだから。

ゴロンと髪の毛も乾かさないうちにベッド倒れこんで。

「こんなだから寝癖が凄いんだよ」

「面倒臭い、ジェルで固めるから良いんだよ」

「もしかしてその為にジェルでなんて事ないよね」

「ピンポン！ 正解です」

「有り得ないんだから。ばーか」

私が仕方なくパパの髪の毛をタオルで拭いていると、襖の所に凜子さんがパパに借りたTシャツとスエット姿で枕を抱きしめて立っているの。

「へえ、凜子さん？ 何をしているの？ まさか……」

「今日はパパさんの隣が良いなって。シングルじゃ美緒ちゃんも大変でしょ」

「な、何を言っているのか判ってるの？」

「うん、いけないの？」

いけないの？ って言われてもあんな衝撃的なキスシーンを見せられた私としては素直に良いよなんていえる筈が無かった。

でも、凜子さんは大真面目に言ってるんだよね。

仕方なくパパに聞いてみたの。

「パパ？ 凜子さんが隣で寝て良いですかって言ってるけど」

「凜子が？ しょうがないな、おいで」

すると凜子さんが嬉しそうにパパの横に寝っ転がってパパに腕枕までしてもらって……

「ずるい！ 美緒も！」

こうなったらヤケクソで私もパパの横に寝っ転がったの。

「これが本当の川の字だにや……」

「にや？ パパ寝ちゃったの？」

「寝ちゃったみたいだね。お疲れ様、ありがとう」

凜子さんがそう言いながらパパの腕を下ろしてパパの顔を優しい瞳で見つめてた。

そうだよね仕事をしてお休みはこうして私達を連れまわして遊んでくれて、ちゃんと自分の時間も作って。

石垣島だからそんな事は造作も無いってパパが言っていたことがあるんだ、出勤時間も無いに等しいし何処に行くにも便利だからなつて。

「美緒ちゃんはこれからどうするの？」

突然、凜子さんに振られて言葉に詰まっちゃった。

パパは寝ているから聞こえないと思うけど。

「どうするって何をなの？ ルイさん」

「もつ、あまり時間が無いんでしょ。進学の事とかパパさんの事とか」

「戸惑っているのが本当だよ、凄く今が楽しいし幸せだし。でも……」

「そうか、そうだね。美緒ちゃんは今未成年だもんね。私が美緒ちゃん達の家庭の事に口を挟む事じゃない事は重々承知しているの、でもパパさんを悲しませないで欲しいな。だってパパさんは表でも私達を気遣ってくれて裏でもちゃんと守ってくれているんだよ」

「裏で？」

「そう、私が失踪してマネージャーや事務所が目の色変えて探さない訳がないでしょ。パパさんの所にも連絡があっても良いはずじゃない？ 私がパパさんとデートした事はマネージャーも知ってる事なんだから。その連絡が無いという事は」

「パパが連絡したって事？」

「多分ね、それもパパさんの性格なら半分脅しを掛けて」

「脅し？」

「そう、もし連れ戻そうとするなら恋愛騒動の真実を公表するって、そんな事になれば映画の興行収入自体に響きかねない。それと……私との事をリークするぞって」

「そんな事したらパパが」

「そう言う人でしょ、パパさんは違う？ 石垣島ですつと側にいた美緒ちゃんなら判るんじゃないの？」

ルイさんの言う事は良く判る、パパがどんな人なのかなんて身を以って知っている。

だけど、私だけの力じゃどうする事も出来なかった。

ルイさんに力無い返事をして寝返りを打って目を閉じた。

「ん？ ま……凜子か」

「もう、妬けちゃうな。でも、負けないんだから」

「ちゃんとした返事……」

「それ以上言ったら美緒ちゃんに全部話しちゃうから。パパさんの

胸の中に誰が居るのか」

「それだけは勘弁してくれ」

「それじゃ、これが最後だから。これだけで頑張れるから」

「しょうがない、甘えん坊だな」

その朝、何があつたのか私は夢の中だつたから気付く事すらなかったの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5993t/>

no rain... no rainbow...

2011年11月17日21時24分発行